

劇場版 僕のヒーローアカデミア×Fate Grand Order

小野屋陽一

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル通り。アンケートの要望にて、劇場版ヒロアカを書きます。こちらも気楽に読んでください。

目次

二人の英雄

第1話 1

第2話 6

第3話 11

第4話 17

第5話 23

第6話 31

第7話 39

第8話 49

第9話 59

第10話 67

第11話 75

HEROES RISING

第1話 80

第2話 87

第3話 92

第4話 97

第5話 105

第6話 112

第7話 120

第8話 126

第9話 130

第10話 139

第11話 144

第17話	第16話	第15話	第14話	第13話	第12話	第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話	WORLD HEROES MISSION	第14話	第13話	第12話
288	280	270	263	255	248	241	234	226	219	210	204	197	190	181	175	167		163	155	150

二人の英雄 第1話

side 三人称

白熱の期末試験が終わり、林間合宿を間近に控えた夏休みのある日

「ん、立希君！」

「んぐ……ふわあ……あ……」

「んふふ♪ようやく夢から覚めたようだね。ほら、見えて来たよ。」

雄英高校の夏制服姿で、立希は窓ガラスから景色を覗く。

「…あー……着いたんだ。ありがと、ダ・ヴィンチちゃん。起こしてくれて」

今、立希とダ・ヴィンチが乗っているのは小型ジェット機。そしてその飛行機は立希が見ている島―巨大な人工島へと向かっている。

「あそこが、一万人以上の科学者たちが住む、学術人工移動都市―通称『I・アイランド』さ！」

side 立希

時は数日前まで巻き戻る。夏休みに入り、自分と姉はカルデアに帰還し、ゆつくりと休みを満喫していた時だった…

「ちよつと出掛ける。」

「ん。どいに？」

夏休みの宿題が一区切りついた時、姉がそう言って来た。

「……焦凍君に呼ばれた」

「へえ……まあ行ってらっしゃい。デート楽しんで「ちやうわ!!」タコス!!」

軽く姉を茶化したら思いっきりボディブローを喰らった…そのま
ま姉は出掛け、自分は腹の痛みを我慢していると、ダ・ヴィンチちゃん
がやって来た

「ダ・ヴィンチちゃん参上！さあ、万物の成り立ちを話し合―おや？何
があつたんだい？立希君」

「ちよつと姉を茶化したら殴られた…まあいつもの事だよ…アダダ…」

「おやおや、立香ちゃんがお出掛け…二人に聞かせたかったけどまあ後ででもいいか!」

姉に殴られた所をさすりながら立ち上がる。

「それで、何か自分に用?」

「そう!正にその通りだよ!立希君は私が経営してる会社の事は知ってるよね?」

「勿論。CDFでしょ?」

『CDF (カルデア・ダヴィンチ・ファクトリー)』レオナルド・ダ・ヴィンチとロマーニ・アーキマンを含め総勢100程度の会社。主に戦闘衣装やサポートアイテムの製作・発注が基本だが、世界中度肝を抜く技術力があってかなりの大企業。ここカルデアを本部とし、世界各国に支部を設置している…余談だけどセキュリティはBBちゃんが遊び半分で作り上げ、尋常ではない強固さをもっている…

「それがどうしたの?」

「ふっふっふ…実はそのCDFの社長—つまり私宛に『I・アイランド』の招待ペアチケットが届いたのさ!!」

そして今に至る。

「—でだ!この『I・アイランド』は世界中の才能を集め“個性”の研究、ヒーローアイテムの発明等を行うための人工島!因みに島は移動可能!研究成果や科学者たちを敵から守るため。警備システムはタルタロスに匹敵する程の能力を兼ね備え—「ストップストップ。ダ・ヴィンチちゃん。頭が痛くなる…」おや、残念。」

状弁に語るダ・ヴィンチちゃんを何とか止めると

『まもなく、当機はI・アイランドへの着陸態勢へと入ります』

機内アナウンスが流れた。

「おっと、もう時間が来たようだ。立希君、ヒーローコスチュームの準備が出来てるかい?」

「当然だよ。楽しみだ。」

いよいよ到着。自分は期待に胸を膨らませる。

「ところで、立香ちゃんはよかったのかい？」

「あー、大丈夫。姉は別の手段で来るから。」

「そう言いながら、自分は準備をする。」

side 立香

「(…どうして…こうなったの?)」

私はチラリと横を見る。そこにいるのは――

「……………」

同じクラスメイトで、クラストップのイケメン……焦凍君がいる。

「…?立香、どうした?口元を抑えて…具合、悪いのか?」

「だ、大丈夫だよ!!(本当に…どうしてこうなったの!?)」

小型ジェット機に乗ってから、私は何度も同じセリフを心の中で叫んだ…

時は数日前まで遡る。夏休みに入って、カルデアに帰還し、のんびりと過ごしていた時だった。急に焦凍君から電話が来た。焦凍君と電話するのは職場体験以来…あの出来事が一瞬甦って顔が熱くなる。

『もしもし、立香』

「ひゃーはい!な、何かな?焦凍君!」

『?…今、大丈夫か?』

「う、うん。大丈夫だよ。実家でのんびりしてて…何か私に用?」

「ああ…大丈夫なら、今会いたいんだが…」

「っ!?(お、落ち着け私…オーケー…) う、うんいいよ!何処に行けばいいかな?」

「そうだな――」

そうして焦凍君が指定して来た場所に向かう。急いで向かうと既に彼がいた。

「お待たせ!待ったかな?」

「いや。俺も丁度来たばかりだ。すまねえな、夏休みで実家に戻ってたのに…」

「ううん。大丈夫だよ…えーと、で、私に何か用?」

「ああ…実は…『I・アイランド』の招待ペアチケットを親父からも

らってな―」

…という事で今に至る…いや、うん…即OKした過去の私よ、もう少し考えて行動しようよ…

「い、今更だけど、私も一緒によかったの？」

「ああ…本当なら親父が行く予定だったが、こういうのには興味無えからな。俺はその代理だ…それで職場体験の時、迷惑かけちゃったから…その謝罪もある…嫌だったか？」

少し困った顔になる焦凍君に私は首を振って否定。フォローする。

「ううん！全然！え、えと…職場体験の事は気にしてないというか忘れて欲しいというか…兎に角！誘ってくれてありがとう」

「…それなら良かった…」

ふう、と私は一息つく。大丈夫だ。別に私と焦凍君だけじゃない。後で合流するけど立希もダ・ヴィンチちゃんと一緒にI・アイランドに行くって言ってたし…けど…

「(こういうのも…いいかも…) フフツ楽しみだね。焦凍君」

「ああ」

『まもなく、当機はI・アイランドへの着陸態勢へと入ります』

「そろそろか…立香はヒーローコスチューム持ってきてるか？」

「勿論だよ。」

いよいよ到着。私は期待に胸を膨らませる…

side 三人称

I・アイランドの入場ゲートに、とある一団が現れる。その一団を率いている男の顔には大きな傷があった。その男は会場を見渡す。冷めた視線にはこれから楽しむという気配な微塵もなかった。男はどこかに連絡する。

「会場内に問題無く入れた…で、ブツはいつ届く？」

『15時に66ゲートで受け取ってくれ』

「了解した。」

そんな簡単な受け答えをし、通話を終わらせる。男が視線を向けたのは、I・アイランドの中央から島を守るようにそびえ立つ塔―『セ

ントラルタワー』を見て不気味に笑っていた……

第2話

side立希

『入国審査が完了しました。現在、I・アイランドでは様々な研究、開発の成果を展示した博覧会、Iエキスポのプレオープン中です。招待状をお持ちであれば、是非お立ち寄りください。』

「因みに私の発明品も展示してるのさー」

「え、そうなの？見たい。」

ヒーローコスチュームに着替え終えた自分はダ・ヴィンチちゃんと共に入国審査を終え、無事I・アイランドの中に足を踏み入れる。

「おおー」

思わず感嘆の声を漏らした。目前に広がる広大なエキスポ会場には、いろんな面白そうなアトラクションでいっぱいだった。一般公開前のプレオープンだけど、多くの来場者でにぎわっている。

「I・アイランドは“個性”の使用が自由。つまり“個性”を使ったアトラクションがとても多いのさ。用が終わったら君も是非行ってみるといい」

「言われなくても行くよ！絶対！……でも用事って何？」

「まあ社長として、ここのお偉いさんに挨拶しに行くだけさ……立希君も知ってるはず……多分」

ホテルに荷物を置き、ダ・ヴィンチちゃんと一緒に行く。そこは島の中央にそびえ立つ塔——『セントラルタワー』だった。ダ・ヴィンチちゃんが受付の人に何か手紙を渡すと、受付の人は電話をし、そして自分達を案内して、とある部屋の前まで辿り着く。

「—お互い考えたくないだろ。年齢のことは」

「—H A H A H A！同感だ！」

「（ん？何か聞いた事のあるアメリカンな笑い声が……）」

扉越しから聞こえた声に既視感を覚えた。けどそんな事は関係無くダ・ヴィンチちゃんは—

「やあやあ！ダ・ヴィンチちゃん参上！さあ、万物の成り立ちを話し合おうじゃないか！」

いつものように、盛大に部屋に入って行く。

『?!』

「ちよ、ダ・ヴィンチちゃん…ノックもなしに突撃しちゃ失礼でしょ…
「藤丸君!?!」え、何で緑谷君いるの?」

失礼すぎる態度のダ・ヴィンチちゃんに何か言おうとしたけど、普通ここにはいるはずのないクラスメイト、緑谷君がいて驚いた。

「藤丸少年!?!なぜ君がここに!?!」

「あ、オールマイトもいたのですか? まあいても不思議じゃないか…
「彼もマイトおじさまの生徒?」

オールマイト、緑谷君以外には、短髪にして眼鏡をかけ、あご髭を生やした男性と少しクセのある金髪のロングヘアーに眼鏡をかけた青緑色の瞳の美少女とふとましい体型の男性がいた。

「やあやあ、デヴィット・シールド。同じ職を持つ者としては光栄だよ。招待してくれて感謝するよ」

「あ、ああ…君は世界中の科学者の度肝を抜く技術力を持った大手企業—CDFの社長。『レオナルドの再来』と言われたレオナルド・ダ・ヴィンチか…こちらこそ会えて光栄だよ。招待に応えてくれてありがとう…君は…」

「…始めまして。雄英高校ヒーロー科1年、藤丸立希です。今回はダ・ヴィンチちゃん—CDFの社長のペアチケットの相手として一緒に来ました。」

「成程…藤丸少年の実家はCDFの本部だったな! それなら納得だ!

……つと、それより、会えて嬉しいよ、デイヴ」

「私もだ。オールマイト」

二人を見る限り、旧友に会えた…といった雰囲気だった。これはもしかしてお邪魔だった?

「おっと、忘れる所だった! 緑谷少年、紹介しよう! 私の親友、デヴィット・シールド—「知ってます! デヴィット・シールド博士! ノーベル個性賞受賞した『個性』研究のトップランナー! オールマイトのアメリカ時代の相棒で、オールマイトのヒーローコスチューム、ヤングエイジ、ブロンズエイジ、シルバーエイジ、そしてゴールドデンエ

イジ!!それら全てを制作した天才発明家!まさか本物に会えるだなんて、か、感激です!」

興奮しながら緑谷君は語る。そういやオールマイトファンだった。オールマイトに関わってる事なら何でも知ってる彼なら興奮するのも無理もない。

「あー:そういうやテレビで映ってましたね。」

「君達のテンションの差がスゴイね。」

ダ・ヴィンチちゃんが苦笑していた。まあこれがアニメとか漫画だったら自分も緑谷君みたいになる。デヴィットさんは緑谷君を見て苦笑している。金髪の女性は微笑んでいた。

「紹介の必要はないようだね。」

「あ、す、すみません!なんか…」

「ふふ、彼マイトおじさまのファンなの!」

「H A H A H A : : コホ : : : : コホ : : : :」

「: : オールマイトとは久しぶりの再会だ。すまないが、積もる話をさせてくれないか?」

そうデヴィットさんが言って来た。確かに、旧友との再会には自分達は邪魔になるか。

「あ、はい!」

「分かりました。」

「メリツサ、緑谷君と藤丸君にI・エキスポを案内してあげなさい。」

「分かったわ、パパ」

「なら私は: : この施設の研究所を見学でもしようかな?新しい発見を探しにね」

「ああ: : なら、サム、ダ・ヴィンチさんを案内してくれ」

「分かりました。さ、どうぞこちらへ」

「うむ♪では立希君、夕方、また会おう」

「了解。」

「いいんですか?」

「未来のヒーロー達とご一緒できるなんて光栄よ!行きましょう!」

ここでダ・ヴィンチちゃんと別れ、メリツサと呼ばれた金髪の美少

女が自分と緑谷君を案内してくれる。というかデヴィットさんの娘だったのか…

「改めまして、藤丸立希です。緑谷君と同じクラスメイトです。」

「メリッサ・シールドです。始めまして！将来有望なヒーローに出会えて光栄だわ！貴方はどんな「個性」持つてるの？」

「有名な偉人―『英霊召喚』し、使役するのが自分の「個性」です。」

「藤丸君にはお姉さんがいて、二人は同じ「個性」を持つてるんです」「そうなの!?!すごいわ！」

とても嬉しそうにして歩く中、自分は緑谷君に小声で話しかける。

「(緑谷君は何でオールナイトと一緒にいたの?もしかして同伴者?)」

「(え、えとそれはその…:ごめん藤丸君!この事は皆には内緒にして欲しいんだ!理由はその言えないけど…)」

と、小声ながらも早口で言ってくる…まあ学校でちよいちよいオールナイトは緑谷君に声かけてたし、多分気に入られているんだろうな…

「(まあ…分かったよ。言えない理由があるならしょうがない。)」

「(う、うん。)」

「あ、ところで君達の事は何て呼べばいいかしら?緑谷君?出久君?藤丸君?立希君?」

「(姉と合流するとして、多分自己紹介するから…混乱しないよう…)立希で良いですよ。」

「僕の事は…デクと呼んでください!」

「デク?変わったニックネームね…分かったわ!デク君!立希君!私の事はメリッサでいいから」

side 立香

ヒーローコスチュームに着替え終えて、無事入国審査が終わり、私と焦凍君はI・エキスポに入る。

「わあ…すごいね!」

「ああ」

私達の目前には様々な「個性」を使ったアトラクションで賑わっていた。この島では「個性」を自由に扱える。アトラクション然り、パレード然り、大盤振る舞いだった。

「人工島というより、なんか遊園地みたい……」

「けどスポンサードしてる企業が多いな……プロヒーローも大勢いる」

確かに、周囲には各国のプロヒーローがいて、ファンにサインをしていた。

「他にも最新アイテムの実演、サイン会もあるらしい……」

「流石I・エクスポだねえ……そう言えば夜には関係者を集めたパーティーもするんだよね……い、一応私は焦凍君の同伴者だし……」

「ああ。正装はしっかり持って来た……立香は大丈夫なのか？」

「勿論。ちゃんと持って来たよ。」

それから、他愛ない会話しながらホテルに荷物を置く。流石に一人部屋……うん。共同は無理、ダメ、ゼツタイ……という事で、自由行動になる。立希達とはそのパーティー会場で合流する予定。まだまだ時間はある。

「これからどうしようか？」

「どこか行ってえ場所は無えのか？」

「私？うーん……まだI・エクスポの事は全部把握してないから……」

そんな時、遠くから爆発音が響いた。

「！」

衝撃が来た方向を振り向くと、そこにはアトラクションがあり、大きな煙が舞っていた……

第3話

side 立希

自分と緑谷君はメリツサさんにI・エキスポ内を案内してもらっている。今は最新のヒーローアイテムを展示しているパビリオンに入り、見学をしていた。

「—すごいすぎる—」

「ここにあるのはほとんどパパが発明した特許を元に作られてるの！」

「へえ、すごいですね。」

展示物を使った体験コーナーを緑谷君と自分は体験し、十二分に楽しむ。

「ここにあるアイテムひとつひとつが、世界中のヒーロー達の活躍を手助けするの」

「お父さんのこと尊敬してるんですね」

「パパのような科学者になるのが夢だから」

「…僕もオールマイトのようになるためにもっと努力しなくちゃ……」

そんな会話をしていた時だった。

「楽しそうやね、デク君、藤丸君」

「うお!?!」

「う、麗日さん!?!どうしてここに?」

聞きなれた声に呼ばれ、振り向くと麗日さんがいた。ただいつもの笑顔とは違う、どこか平坦な笑顔だ。

「楽しそうやね」

「(二回言った…) 「コホン」!」

「あ、八百万さん」

「とっても楽しそうでしたわ」

「緑谷、聞いちゃった」

「恐るべし…耳郎さんの『イヤホンジャック』…」

更に八百万さん、耳郎さんも現れた。何故か3人の視線は何かやま

しい事がないか詮索するような視線だった。取り敢えず何かしらの誤解を解くため、3人にメリツサさんを紹介しつつ、カフェでお茶する事にした。

「ふう…何とかなった」

「そ、そうだね…」

少しぐったりする自分と緑谷君。なんやかんやでメリツサさんと仲良くなった女子3人。そして休憩していると

「お待たせしました。」

「え!?電気君!?!」

「オイラもいるぜ!」

「峰田君!?!」

ウエイター姿の電気君と峰田君が現れ、自分と緑谷君は驚く。話を聞くとエキスポの間だけバイトを募集していたらしく、応募してここに来たとの事。

「休み時間にエキスポ見学できるし、給料もらえるし、来場したかわいい女の子と素敵な出会いがあるかもしれないしな!」

相変わらずのぶれない峰田君だ。そして…

「(おい立希!あんな美女とどこで知り合ったんだよ!紹介してくれ!)」

「(いや無理だよ…)」

電気君もだ…

「彼らも雄英生?」

「そうです!」

「ヒーロー志望です!」

メリツサさんに話かけられた電気君と峰田君はカッコ付ける

「何、油を売っているんだ!!バイトを引き受けた以上、労働に励みたまえー!!」

「ギャアアア!!!」

「い、飯田君!?!」

そこに飯田君が登場。『エンジン』を使って猛ダツシユで峰田君と電気君に迫った。

「来てたん？」

「家はヒーロー一家だからね。I・エキスポから招待状をいただいたんだ。来たのは俺一人だが…」

「飯田さんもですか？ 私も父がI・エキスポのスポンサー企業の株を持つているものですから、招待状を頂きましたの。」

「で、ヤオモモの招待状が二枚余ってたから、厳選な抽選の結果…」

「ウチらが一緒に行くことになったわけなんよ！」

ブイと笑顔で耳郎さんと麗日さんが報告してくる。

「…そういや藤丸弟がいるなら藤丸姉もいるのか？」

「そういえば立香ちゃん抽選にいなかったね」

と、皆が自分を見てくる

「実家がこのI・エキスポに一枚噛んでたから、自分はペアチケットで社長と一緒に来た…で、姉も来るよ。というかもういる時間だし、別の方法で来てるから。」

「では藤丸さんも夜のパーティーに参加するのですね！でもどうやってここへ…」

「…まあ後で必ず分かるから。」

そんな時、遠くから爆発音が響いた。

『!!』

衝撃が来た方向を振り向くと、そこにはアトラクションがあり、大きな煙が舞っていた…

side 立香

「ーじやあ行ってくる」

「うん。頑張つてー」

爆発音をした所に行くと、そこは『ヴィラン・アタック』というアトラクションだった。それは敵を模したロボットを“個性”を使って次々と倒し、タイムを競うアトラクションだった。何となく面白そうだなと思い、焦凍君に「参加してみたら？」と提案したら乗ってくれた。私は直ぐに会場の観客席に座り、彼が来るまで待っていると…

『さあさあ！次のチャレンジャーは!!』

「うつしやあ！行くぜえ!!」

「え!?切島君?」

クラスメイトがI・エキスポにいて、しかも参加してる事に驚いた。切島君は体を『硬化』し、ロボットを殴り壊していく。

「オラアアア!!」

最後の敵に、盛大な大振りの拳を当て、土煙が舞った。

『クリアタイム、33秒!第8位です!』

「切島君!」

「!!」

更に私が座ってる席の近くから緑谷君が出てきて尚驚く。緑谷君以外に飯田君、麗日ちゃん、ヤオモモ、耳郎ちゃん、立希、あと知らない金髪の女性が現れる。

『さあ次なるチャレンジャーは!?』

『デク君!あれ!』

「か、かっちゃん!」

麗日ちゃんの指さしで会場のスタート地点を見ると、クラスメイトの爆豪君がいた。

「死ねえ!!」

スタート直後『個性』の『爆破』で縦横無尽に動き、圧倒的速さでロボットを撃破した

『これはすごい!クリアタイム、15秒!トップです!』

「ふん…「あれ?あそこにいるの緑谷じゃね?」…あ?」

「あはは…」

ここで切島君と爆豪君が緑谷君達に気付く。すると爆豪君は『爆破』で吹っ飛んで来て、険しい顔で緑谷君に吠える。

「何でここにいるんだあ!」

「切島さん達もエキスポへ招待受けたんですの?」

「いや、招待されたのは雄英体育祭で優勝した爆豪。俺はその付き添い。何?皆でアレ挑戦すんの?」

それから、強制的に緑谷君が挑戦。記録は16秒と二位という結果だった。相変わらずの身体能力…そして…

「(来た!)」

突如として会場内に『氷結』が現れる。『氷結』はフィールドごと口ポットを覆う。そう、スタート地点にいたのは白い息を小さく吐き出す焦凍君がいた。

『ひゃー!すごい!すごい!』

「(ひゃー!カッコイイー!)」

MCとほぼ同じ感情になった。

『記録は…14秒!現在トップです!!』

遂にトップが現れ、観客席は盛り上がる。私も焦凍君に拍手を送る。

「……………(フ)」

「!？」

一瞬…私の方を見て…笑った…?気のせい?

「てめえ!この半分野郎!」

「爆豪」

「いきなり出てきて俺スゲーアピールか、コラ!」「緑谷達も来てんのか」無視すんな!大体なんでテメーがここにいんだよ!」

「招待を受けた。親父の代理…立香を誘って来た」

『え!?!』

「(やべ…ここは姿を隠しー)」「立香ちゃんいたー!」見つかった……………」

「やっほー姉。」

「藤丸くんもいたのか!」

立希、飯田君は私見て普通に接してくる。問題は…

「え…え!?!」

「藤丸もしかして…」

「藤丸さん…!」

「ちや、ちやうねん!」

麗日ちゃん、耳郎ちゃん、ヤオモモから暖かい眼差しが来る。ちがう、決してそういう事じゃない…っ!

「彼女が立希のお姉さんなの?」

「…ええ、そうです。藤丸立香です…どちら様？」

「メリッサ・シールドです！貴方の弟さん達を案内してたの！よろしくねー！」

「はい…立香ちゃん轟君と来たの!」待って下さい。別にそういう事ではないのです」

「でも轟から誘われたんでしょ？」

「いや…まあ…そうなんだけど…そうじゃないの!」

「ではどういう事ですか？私、気になりますわ！」

女子メンバーからの眼力が強い…男子側も何か爆豪君絡みで騒がしい……

「雄英高校の生徒さんって楽しい人ばかりなのね♪」

メリッサさんが何か言ってたけど今は女子メンバーを落ち着かせるのに必死で聞こえなかった…

side 三人称

エキスポのメイン通りから外れた埠頭にある倉庫。顔に傷のある男の部下たちが船舶で運ばれてきた荷物を受け取る。それを確認した傷の男が携帯の向こうの相手に仕事を一つ終えた事を報告した時、ある情報が伝えられる。

「何？オールマイトが…狼狽えるな。それはこちらで対応する。」

そう言って電話を切り、傷の男は呟く…

「……この島にオールマイトが……」

第4話

side立香

『今日は18時で閉園になります。ご来園、ありがとうございました。』

皆と合流して、私達はいろんなパビリオンを観て回った。メリツサさんのガイドもあって十分に楽しめた。この後はレセプションパーティーがある。

「パーティーには団体行動で出席しよう！18時30分にセントラルタワーの7番ロビーに集合してくれ！」

「うん」

「わかった。」

私達はホテルに正装道具があるから持つてこなきゃならないし、それと焦凍君がエンデヴァーの代理で顔を出さないといけないから早めに別れた。

「……別に無理して俺と来なくてもいいぞ？」

「え？別に無理はしてないよ？ホテルに正装置いてるから持つて行かないといけないし……焦凍君こそ大丈夫？無理してない？……エンデヴァーの代理で来て……」

「……確かにアイツの代理とか、そういうのは嫌いだ……けど職場体験で、アイツのヒーロー活動を実際に見てNo.2の実力を知る事が出来た……俺はいつまでも子供じゃねえ、過去の出来事は絶対忘れない……けどそれを糧に、今の俺は変わる……」

そう、真剣な顔付きで言った。

「……そっか、フフ、変わったね、焦凍君。」

「そうか？」

「うん。入学した頃の焦凍君、正直目つき怖かったよ。」

「……そうか」

「でも今の焦凍君は……とてもいいよ。今の焦凍君のほうが、私は好きだなあ……」

「……………」

「……あ、ちよ、今の無し!!いや嘘じゃないけど!?友達としての好きで
す!ハイ!」

「……………ああ」

思わず感情深くなって口が滑った……………うう顔が熱い……………

この後、焦凍君の挨拶回りで大人の人に「彼女ですか?」と聞かれ
「と、友達です!」と答えるのが手一杯だった。

side 三人称

『拘束しました。警備は5人。プラン通りです。』

セントラルタワー内部の警備システムを総括しているコントロー
ルルームで、警備員達が拘束されていた。拘束したのは傷のある男の
部下たち。その内の一人がトランシーバーで連絡する。

「まだ警備システムは生きている。殺さずに軟禁しておけ」

『はい。これより作業に入ります』

その部下は傷のある男の指示に従う。

「順調だな…」

傷のある男は満足そうに笑いながらその顔に仮面をつけ、後ろに控
えている部下たちに言う

「こちらも動くぞ」

side 立希

「やあやあ、立希君。今日は楽しめたかい?」

「勿論だよ。ダ・ヴィンチちゃん。」

皆でパビリオンを見学し終えた後、メリツサさんが電気君と峰田君
にパーティーの招待状を渡し、労働が報われたと喜ぶ二人。そして飯
田君が18時30に集合と伝え、フルスロットルで走り去った。自分
も正装の準備で皆と別れ、ホテルに戻ると、既にダ・ヴィンチちゃん
が部屋いた。

「ダ・ヴィンチちゃんもどうだった?研究所を見学してきたんでしょ
?」

「勿論さ♪自分の発明品を眺めるのもいいけど、他の発明品をみるの

もまた格別さ！また新しい発見が出てきたよ♪今は…パーティーの準備だね！」

「うん。って言ってもこれに着替えるだけだしね…ダ・ヴィンチちゃんは？」

「私はこのままさ。私は、私が好きだ。この外観が好きだ。美しい…美しくあるように造ったのだから当然ではあるけれども…クフ♪」

「さすが、わざわざモナ・リザそのものの姿で現界しただけあるよ…」
ダ・ヴィンチちゃんと今日の出来事を話し合いしていると、待ち合わせの時間になり、急いで向かった。

side 三人称

セントラルタワー7番ロビーに、濃い赤色の正装に着替えた緑谷が慌てて来た

「ごめん！遅くなって…って、アレ？他の人達は？」

来ていたのはウエイター姿の峰田と上鳴。青色の正装を来た飯田。白正装の焦凍と黒正装の立希だけだった。

「まだ来ていない。団体行動をなんだと思ってるんだ！」

規律を重んじる飯田が憤慨していた時だ。

「ごめん！遅刻してもーたあ」

「おおー！」

可愛らしくも大胆なドレスに着替えた麗日が現れる。峰田と上鳴は興奮する。続けて八百万と後ろに隠れるように耳郎が連れ立ってやって来たのに焦凍達が気付く。八百万は大人っぽいエレガントなドレスに身を包つ。

「…申し訳ありません。耳郎さんが…」

「うう…ウチ、こういうカッコは…その、なんとゆうーか…」

可愛らしくもシックなドレス姿の耳郎は恥ずかしそうに言葉を濁す。

「Oh～イエス！イエス！」

それでも華やかな女子達を見た上鳴と峰田は更に興奮し、上鳴は耳

郎にビシツとサムズアップした。

「馬子にも衣装って奴だな！」

「女の殺し屋みてー……」

「ふん！」

「ギャアアアアアアアアア!!」

二人の感想に怒った耳郎は『イヤホンジャック』で二人に爆音を流し込む。

「黙れ」

「ナンだよ！俺は褒めたじゃねえか！」

「褒めてない」

「正装なんて初めてだ。八百万さんに借りただけ……」

「に、似合ってるよ。うん、すごく！」

「デク君たらお世辞なんか言わんでいいって！」

「麗日くん!?!」

麗日は緑谷に褒められ、どうしようもなくテンションがあがった時、自動ドアが開き、メリツサがやって来た。

「ヒョ〜〜！」

「デク君達まだここにいたの？パーティー始まってるわよ」

「真打登場だぜ！」

メガネを外し、華やかで大胆なドレス姿のメリツサは、峰田と上鳴のハートを直撃する。

「あれ？姉は？」

「あ、私で最後…遅れてごめん。」

「!」

最後に立香が来る。ホルターネックタイプの清楚なワンピース型ドレス。

「二でかー「耳郎さん」「了解」ギャアアア!!」

峰田と上鳴、立希の命で動いた耳郎に二度目の爆音を流される。立香のドレス姿は体の凹凸がハッキリわかるのだった。

「えーと…どうでしょうか……」

「……ああ…似合ってる」

「サイドテールにしたんだ。姉似合ってるじゃん」

「ありがと…というか立希、それ魔術礼装の『ロイヤルブランド』…」
「探すのが面倒だったから。ま、別に戦闘なんてあるわけないし、いいでしょ。」

「ヤベーよ！峰田！オレ、どーにかなつちまうよ、どーしよう!?!」
「どーにでもなれ…」

感涙する上鳴と峰田に、耳郎はあきれたのだった。

セントラルタワーのコントロールルームでは、警備員達を閉じ込められた男達の一人がメインコンピュータを操作し、タワー階数の警備システムが、次々とレッドシグナルへと変わっていく―

「―ご来場の皆様、I・エキスポのレセプションパーティーによるこそおいでいただきました」

その頃、セントラルタワー二階のレセプション会場には来賓客や関係者、招待されたプロヒーロー達でにぎわっていた。その中にはダ・ヴィンチ、オールマイト、デヴィットの姿もある。広い会場には豪華な料理が並び、ステージの大型モニターにはエキスポのロゴが映し出されている。

「乾杯の音頭とご挨拶は、来賓でお越しいただいたNo. 1ヒーロー、オールマイトさんをお願いします。皆様、盛大なる拍手を」

司会者がそう促し、観客は皆オールマイトに向けて拍手をする。

「デイヴ、聞いて無いぞ…」

「オールマイトが来ると知ったらそうなるさ」

「やれやれ…」

オールマイトは困ったような笑顔を浮かべ、デヴィットに助けを求めたが、あきらめろと言われんばかりの苦笑を返されるのだった。

「(立希君と立希ちゃん達はまだ来ないのかな…)」

そんなオールマイトを見ながら、ダ・ヴィンチはふと思っていた。

「…おい、本当にこの道で合ってるのか?」

「多分そうだと思うけど…」

渋々とパーティーの出席を決め、正装を着た爆豪と切島はどこかの

通路をうろうろ歩いていた。さつきから同じような道をぐるぐるとしていることを訝しんだ爆豪は前を歩く切島に言う

「多分だあ？」

「いやあ、実は携帯、部屋に忘れて連絡できなくてさあ」

悪気無く笑う切島に、爆豪はあきれたように顔をしかめた。

ステージに上がったオールマイト。グラスを片手にマイクの前に立つ

「ご紹介にあずかりました、オールマイトです。堅苦しい挨拶は——
そう演説を始めた時だった——

『I・アイランド管理システムよりお知らせします。警備システムによりI・エキスポエリアに爆発物が仕掛けられたという情報が入手しました。』

『!?!』

突如として大型モニターにエマージェンシーを知らせるマークが表示され、会場だけでなく、島全体に放送が流れるのだった。大型モニターの映像から、島全体に配備されている警備マシンが小さな兵隊のように動き回っているのが写る。

『今から10分後以降の外出者は、警告無く身柄を拘束されます。くれぐれも外出は控えて下さい。また、主な主要施設は警備システムによって、強制的に封鎖します。』

そしてセントラルタワー全体の防火シャッターが次々と閉じられ、出入り口を封鎖されたのだった。

第5話

sideダ・ヴェンチ

「(これは…大変な事になってしまったようだ。)」

突然の緊急放送。と同時にパーティー会場にライフルを持った敵が大勢入って来た。そして最後に堂々と仮面をつけた傷の男が現れた。おそらく首謀者…

「聞いたとおりだ。警備システムは俺達が掌握した。反抗しようなどと思うな。そんな事をしたら…警備マシンがこの島にいる善良な人々に牙を剥く事になる。」

『!?』

「(警備システムが仇になってしまったか…警備マシンは常に島全体を徘徊している。そして嚴重なシステムなこのタワーで管理している…敵は狡猾のようだ…)」

「やれ」

『なっ!?』

仮面をつけた傷の男がヘッドセットで何か指示した瞬間、床に埋め込めていた『セキュリティ用捕縛装置』が発動し、プロヒーロー全員を拘束してしまった。勿論、オールマイトもだ。

「いかー動くな! 一步でも動けば即座に住民を殺すぞ」…っ…Shit!

「いい子だ。」

敵は私含め、人質を取った。打つ手がないオールマイトを敵は蹴り倒し、愉快そうに笑っていた。

「全員、オールマイトを見習って、無駄な抵抗をやめるんだな」

ライフルを持った敵達は銃口を私達に向けてくる。私達はその場に伏せる。

「(さて、どうしたものか…敵達を倒す程度なら問題無いが、人質がある以上、無駄な行動は避けるべき……) 二人は大丈夫だろうか…」

私は静かに呟いた。

side 立希

大変な事が起きた。鋭児郎君と爆豪君に連絡が付かず、待っていると警報が鳴り響き、緊急放送が流れ、防火シャッターが次々と閉じられて入り口が塞がれた。

「携帯が圏外だ。情報関係は全て遮断されちゃったらしい」

「エレベーターも反応ないよ。」

「マジかよ……」

不安と焦りが来る中、メリッサさんが何か引つかかっているように考えていた

「爆発物が設置されただけで、警備システムが厳戒モードになるなんて……」

「ダ・ヴィンチちゃん曰く、タロタロス並の警備システムをI・アイランドは持つっているって聞いた……そんな警備システムを潜り抜けて爆発物を設置できる?」

「だね。仮に仕掛けられたとしても、ここまで厳戒態勢に入る……違和感あるよ」

自分と姉もメリッサさんの疑問に同感した。

「……飯田君、パーティー会場に行こう」

その時緑谷達はそう提案した

「何故だ?」

「会場にはオールマイトが来ているんだ」

「オールマイトが!?!」

「なんだ、それなら心配いらねーな」

皆安堵する。自分もだ。平和の象徴がここにいると知るだけで安心が生まれる。

「メリッサさん、どうにかパーティー会場まで行けませんか?」

「非常階段を使えば会場の近くに行けると思うけど……」

「案内、お願いします!」

そう言ってメリッサさんの案内で自分達は動く……

side 立香

—「敵がタワーを占拠、警備システムを掌握。この島の人々が全員人質に取られた。ヒーロー達も全員捕らわれている。危険だ。直ぐにここから逃げなさい」—

非常階段の踊り場で待機していた私達。会場を上から見下ろせる場所まで来た私達は会場内を見るとオールマイルト含めプロヒーロー達は拘束され、他の人達は銃口を向けられその場で座っていた。その中にはダ・ヴィンチちゃんもいた。直ぐに耳郎ちゃんの「個性」で事の大きさを知り、言葉を失った。まさかこんな事態になるなんて誰も思わなかった。

「…オールマイルトからのメッセージは受け取った。俺は雄英校教師であるオールマイルトの言葉に従い、ここから脱出することを提案する」
「飯田さんの意見に賛同しますわ」

飯田君、ヤオモモはここから逃げる事を提案して来た。私達はまだ学生。ヒーロー免許が無ければ敵と戦うわけには行かない…

「脱出して外にいるヒーローに助けを求めるのは…」

「脱出は困難だと思う。ここは敵犯罪者を収容するタルタロスと同じレベルの防災設計で建てられているから…」

「じゃあ助けが来るまで待つしかない…」「上鳴、それでいいわけ?」「どういう意味だよ?」

「助けに行こうと思わないの?」

「耳郎ちゃん?」

耳郎ちゃんが別意見を提案して来た。

「おいおい、オールマイルトまで捕まってるんだぞ!オイラ達だけで助けに行くなんて無理すぎだつての!」

峰田君が怯えながら答えた。上鳴君は答えにつまる。

「…俺らはヒーローを目指している。」

「焦凍君…でも保須市の事、忘れてるわけじゃないでしょ?」

「忘れてねえ…だからって何もしないでいいのか?」

「だけど……」

焦凍君の冷静で、でも熱さが滲んだ声色に私は言葉が詰まった…皆の顔を見れば分かる…救いたいという気持ち。けど「それでいいの

か」という葛藤で沈黙していた。

「……救きたい。」

緑谷君の呟きに、全員緑谷君を見る。

「デク君……」

「助けに行きたい。」

真剣な顔で、強い覚悟を持った顔で緑谷君は言った。けど、その言葉に峰田君は反感を持つ。

「敵と戦うのかよ!?!USJでコリてないのか!?!」

「違うよ。僕は考えてるんだ。敵と戦わず、オールマイトや皆を救ける方法を!」

「き、気持ちはわかるぜ。緑谷……けどそんな都合の良い事……いや、多分行けるよ。電気君」立希?」

「……何考えてるの?」

今まで黙っていた弟が急に話し出した。何か考えていた仕草をしていたけど……

「メリツサさん、このI・アイランドの警備システムはこのタワーの最上階に?」

「え、ええ。今は敵がシステムを掌握しているけど、認証プロテクトやパスワードは解除されてるはずだから………あ!」

「何が言いたいのかね?藤丸君?」

「つまり――」

立希は指先を天井に向けて、皆に言う。

「敵の監視を逃れて、最上階まで行ってそのシステムを元に戻せば……皆を救けられる」

『!!』

立希が言った事は不可能な事じゃなかった。この場にいる全員が協力すれば可能な作戦だ。

「成程……システムを則ったとしてもまだ敵達は警備システムの扱いに慣れていない」

「!戦いを回避してシステムを元に戻せますわ!」

焦凍君とヤオモモはどう動けるか頭の中で整理しだす。そして――

「これならイケるんじゃない?」

「だよーね!」

上鳴君と耳郎ちゃんも賛同する。

「ちよつと待ってくれ! 上には敵が沢山いる事を忘れていないかね!?!」

飯田君がそう言うけど、緑谷君は落ち着いた口調で言う。

「戦う必要は無いんだ。システムさえ戻せば後はオールマイトやプロヒーロー達が解放されて、形勢は一気に逆転するんだ…」

「緑谷君……」「デク君! 行こう!」 麗日くん!?!」

麗日ちゃんは自身を奮い立たせるように立ち上がった

「麗日さん!」

「私達に出来る事があるのに、何もしないでいるのは嫌だ! そんなのヒーローになるならない以前の問題だと思う!」

その言葉にほぼ全員が頷く。

「うん! 困っている人達を助けよう。人として当たり前な事をしよう!」

「緑谷、俺も行くぜ」

「自分の力で何か出来るなら。」

「ウチも」

「轟君! 藤丸君!」

「響香ちゃん!」

笑顔になる緑谷君達に飯田君は毅然と言った。

「これ以上、無理だと判断したら引き返す。その条件なら……俺も行く!」

「飯田君!」

「そういう事であれば、私も」

「よっしや、俺も!」

「八百万さん!」

「上鳴君!」

「え……あ……あ……あ……あ……! も……! わかったよ! 行けばいいだろおおお!!」

「峰田君！」

涙を流しながらも峰田君も行く事にした。

「ありがとう！峰田君！」

「一丁やっつてやろうぜ！峰田！」

「姉は？」

「皆が行くのに私は行かないなんて無いよ……勿論行く。」

「立香ちゃん！」

当然私もだ。

「メリツサさんはどうする？」

「私は……」

メリツサさんは緑谷君に近づく

「メリツサさんはここで待って下さいー」私も行くわ！！」

真剣は顔できつぱりと言ったメリツサさんに、緑谷君は驚き、心配する。

「で、でもメリツサさんには『個性』が……」

「この中に警備システムの設定変更できる人はいる……？」

「あ……」

一番大事な役目を忘れていた事に上鳴君が気付いた。

「私はアカデミーの学生。役に立てると思う。最上階に行くまでは足手まといにしかならないけど……私にも皆を守らせて……お願い」

「メリツサさん……」

考え込んでいた緑谷君だったが、メリツサさんの真剣は想いを感じて顔を上げる。

「……分かりました。行きましょう。皆を救けに！」

真剣な緑谷君の後ろで皆が頷く。向けられた同志のような笑顔に、メリツサさんは……

「……ええー！」

顔を綻ばせ、直ぐに表情を引き締めそう答えた。

「私も頑張らないと……」

私も気を引き締める。

sideダ・ヴィンチ

『「ダ・ヴィンチちゃん！」』

「おや、ようやく交信出来たようだね。無事で何よりだよ、立希君」
♪」

身動き取れなくなり、これからどうしようかと思考を巡らせてると、私を『召喚』しているマスターこと、立希君とコンタクト取れる事が出来た。魔力を辿る辺り…この部屋の上にいるみたいだ。

『取り敢えず、自分も姉も無事だよ。そっちは？』

「(うむ。完全に人質として全く動けないよ。いや、動く事は可能さ。今直ぐにでも霊体になって逃げる事は出来るが…私がない事に気付かれる可能性は高い。)」

『だろうね…だから…今から自分は皆と最上階に行つて警備システムを奪還してくる。』

「(へえ…成程、それが今の最善の策だろう…うむ、頑張つて私を、私達を救つてみたまえ。応援してるよ。マスター…いや、ヒーロー」
♪」

『うん！絶対助ける!!』

気合十分の返答。彼は、そして彼女は本当に成長し、強くなった…おつとそうだ。

「(それよりも気を付けたまえ。敵はデヴィット・シールドと彼の助手を会場の外へ連れて行つた。彼らの救出も頼んだよ)」

『了解！それじゃあ…行つてきますー！』

「うむ…行つてらっしゃい…」

彼らの救いが来るまで、私は静かに待つ…

side三人称

「おまたせ。緑谷君は？」

「まだ会場が見渡せる場所にいる。ダ・ヴィンチちゃんと交信出来た？」

「ん。無事に。これからする事を教えて、喝入れてもらった…ああ、後、デヴィットさんと助手さんが敵と一緒にどこかに連れていかれ

たつて」

「パパが!? どうして…」

「有名な技術者だから…システム関連で何か彼の力が必要…とか？」

「だとしたら早く助けねえと…」

「お待ちせ皆！」

「よし、全員集まったな…」

非常階段にて、緑谷を筆頭に、飯田、轟、立希、上鳴、峰田、麗日、八百万、耳郎、立香が行動を開始する。

「行くぞ！」

『おう！』

作戦開始の密かな鬨の声があがった。

第6話

side立希

警備システム奪還の為、自分達は非常階段を使って上へ上る。各フロアが封鎖されてるからこれが唯一の道だ。

「メリッサさん、最上階は？」

「ハッ……ハッ……200階よ」

「マジかよ!？」

「そんなに昇るのかよ!？」

「敵と出くわすよりマシですわ」

休む事なく、自分達は駆け上る。日頃訓練してるから疲労は少ないが……メリッサさんが遅れ始めている。

「メリッサさん、ウチの『個性』使おうか？」

「もしくは担ぐ?」

そんなメリッサさんに麗日さんと姉が声を掛けるが、メリッサは首を横に振る。

「ありがとう……でも大丈夫!」

そう言って駆け上がる。60……70……と順調に上がったけど……80階に差し掛かった時、シャッターが下りていた。

「どうする……壊すか？」

「そんな事したら警備システムが反応して敵に気付かれるわ!」

「ならこつちから行けばいいんじゃないの?」

峰田君が手を伸ばしたのは今自分達がいるフロアへと続く非常用ドアだった。

「ちよ、ストップ!!」

「ダメ!」

慌てて止めようとしたけど、間に合わない。峰田君がドアを開ける。絶対敵に気付かれた……

「他に上に行く方法は？」

「反対側に同じ構造の非常階段があるわ!」

「急ぐぞ!」

非常ドアを開けたせいで敵に気付かれた可能性が高い。急いで移動していると、通路の隔壁が奥から次々と閉じられていく

「轟君―」

「ああ―」

飯田君の呼びかけに反応し、焦凍君が前方に『氷結』を放ち、閉じる隔壁を止め、その隙間に飯田君が飛び出し、『エンジン』で加速した回し蹴りで前方に見えた扉を破壊する。

「この中へ―」

「ここは…」

中へ入ると…そこは部屋を埋め尽くす程の様々な植物が生えた高い空間だった。

『植物プラント』よ。『個性』の影響を受けた植物を研究…！』

「待って！アレ―！」

耳郎さんが指さす方向にあったのはエレベーター。けどそのエレベーターは動いていた。階数を示す画面にはどんどん自分達がいる80階へと近づいていた。

「敵が追ってきたんじゃ…」

「隠れてやり過ぎそう―！」

直ぐに茂みの中に身を隠す。そして数秒後にエレベーターの到着音が響いた。自分達は息を潜める…

「ガキはこの中にいるらしい」

「面倒な所に入りやがって…」

敵は二人。冷静な口調の低身長男性と、イラついた態度を取るのっぽの男性だった。ゆつくりと自分達が隠れている茂みに近づく。

「っ…来るな…」

息を止め、唯々通り過ぎる事を願う。さっきから心臓の鼓動が早い。冷や汗が出てくる…

「見つけたぞクソガキども!!」

「っ…見つかった…」

もう戦うしかない…と行動に移ろうとした時―

「ああ？今、何だったテメー―！」

「落ち着け爆豪…」

「(爆豪君と鋭児郎君!?)」

そこにいたのは連絡がつかなかった爆豪君と鋭児郎君だった。さっきの言葉は二人を見ての発言だったようだ…だけど爆豪君は敵と知らずにガン飛ばし。それを宥め、心配そうに顔をしかめる鋭児郎君だった。

「お前ら、ここで何をしている」

「そんなの俺が聞きてえくらい——「まあまあ！ここは俺に任せろ！な？」ちっ…」

「あのー俺ら道に迷ってしまつて…レセプション会場つてどこに行けば…」

「(道に迷つて何で80階まで来るの!?)」

内心ツツコミをするが、鋭児郎君の言い分に敵二人が納得するわけが…

「見え透いた嘘ついてんじゃねえぞ!!」

次の瞬間、のっぽの男性の右手が巨大化し、〃個性〃を鋭児郎君に向けて放つた！

「鋭児郎君!!」

自分はたまらず茂みから身を出す…と同時に自分の横から『氷壁』が出現した

『!?!』

「この〃個性〃は…」

「轟!?!と立希!?!何でここに…」

鋭児郎君の前に『氷壁』が現れ、敵の〃個性〃を防ぐ。けど氷壁は振動に揺れ始める。敵の攻撃はまだ終わって無かった。

「ちっ…俺達で時間を稼ぐー上に行く道を探せ!!」

そう自分達に言いながら、焦凍君は屈み、自分達が立っている所から『氷柱』を生み出し、上へと持ち上げる。

「轟君ー!」

「君は!?!」

「いいから行け!」

緑谷君と飯田君は焦凍君の思惑に勘付き、声を掛けるが、焦凍君は叫ぶ

「焦凍君！」

「ここを片付けたらすぐに行く！」

「っ…」

上にある通路まで『氷柱』が伸び、自分達は飛び移る。自分達は下にいる焦凍君、爆豪君、鋭児郎君を見る。既に敵二人との戦闘態勢へと入っている。氷壁には拳大の穴が次々と現れ、そこから敵の姿が現れる。低身長敵が雄叫びを上げると体が大きくなり、獣のように荒々しい姿へと変わる。焦凍君の『氷結』に物ともせず、爆豪君の『爆破』を受けても平気だった。そして――

「鋭児郎君!!」

獣の姿となった敵の拳から爆豪を庇う様に鋭児郎君が受けた。けどその剛腕に吹き飛んで壁に突き当たったのが見えた

「っ「藤丸君待って!!危ない!!」でも…」

直ぐに飛び降りて加勢しようとしたけど緑谷君に止められる。その時――

「立希！アンタは先に行け！」

「姉!?!」

「藤丸さん!?!」

「立香ちゃん!?!」

自分の代わりに姉が飛び降りて行った…

side 立香

このままだと危ない。切島君が壁に吹き飛ばされたと同時にそう感じた私は考えるよりも先に体が動いた。

「立希！アンタは先に行け！」

「姉!?!」

そうやって私は飛び降りる。今ここで動かないで何がヒーローだ！

「来て！『アサシン』」

「―あいよお！…っっておお!?いきなり空中かいマスター?」

「個性」 『英霊召喚』で私は燕青を呼ぶ。

「いいから!着地任せた!!」

「よしきたあ」

燕青に指示を送る。私を横抱きにし、空中で体を回転しながら着地。衝撃を緩和し、無事に降りた。

「燕青は切島君の救出に行つて!」

「ん。いいよおマスター。だがお前さんは大丈夫なのかい?」

「これでも自衛出来る術はあるから!」

そう言つて私は爆豪君と焦凍君の所に向かう。

「何だ!?このアマあ!」

「っ!?立香!!何でここに…!」

「私も加勢しに来たの!!」

「邪魔だ!!」

敵ののっぽが私に「個性」を放ってきた。さっきのガラスのような波動が来る!!

「っ!!」

私は跳び、身をねじらせ、波動を躲す。少しドレスの裾が破れたけど問題無く、二人の所に辿り着いた。

「藤丸…てめえ…」

「足手まといになるつもりは無いよ…!」

「てめえら…」

「!」

私、爆豪君、焦凍君は背中を合わせる。前方には敵がいる。

「お前ら、ただのガキじゃねーな?」

「何者だ!」

「答えるか、このクソ敵が!」

「名乗るほどの者じゃねえ」

「貴方達に名乗る価値なんて無いよ!」

敵二人の問いに私達は身構える。

姉の言葉に従って、自分達は先へと進む。峰田君のファインプレーによって、上へと行ける非常はしごを使って120階へと進む事が出来た。

「なんかラッキーじゃね？100階超えてからシャッターが開きつばなしなんて」

「ウチらの事見失ったとか？」

「多分違うよ……誘い込まれてる……」

「藤丸君の言う通りかもしれない。」

「ええ…そうですわ」

「ああ……」

険しい顔で頷いてくる緑谷君達。しかし他に道はないから行くしかない。そして130階。最上階への通ridoのフロアには大量の警備マシンがウヨウヨいた。

「なんて数なん……」

「やはり相手は閉じ込めるのではなく、捕らえる事に方針を変えたか」「きつと僕達が雄英生である事を知ったんだと思う。」

「ああ、なら予定通りプランAで行こう！上鳴君！」

「うっし！俺もやってやるぜ！」

作戦開始。八百万さんが『創造』で『絶縁シート』を作り、自分達を覆うと同時に飯田君がフロアのドアを蹴破り、『エンジン』をふかしながら電気君掴んで警備マシンがある場所へと放り投げ、絶縁シートの中へ避難する

「くらえ!! 『無差別放電130万ボルト』 オオオオ!!」

電気君の『放電』が警備マシンを襲う。しかし警備マシンは体を小さくし、その場で一時停止した

「防御された!?!」

「だったら…… 『200万ボルト』 オオオオ!!」

電気君は出力を上げた。雷のように眩い光が放たれる。

「馬鹿! そんな事したら…… 『ウエーイ』 アホになっちゃうだろ……」

電気君は『個性』を使い過ぎるとショートしてしまい、思考が低下

してしまうのだった…でもこれで警備マシンは行動不能に…

【ピピピ!!】

「ウエ!?」

『!?』

警備マシンが再起動した。そして電気君の近くにいた数体の警備マシンがワイヤーで拘束する。

「頑丈すぎんだろ!?」

「仕方が無い!皆!プランBだ!」

「はい!」

直ぐに次の行動へと移す。また八百万さんが『創造』する。『発煙筒型通信妨害機』。それらを皆で警備マシン達に投げる。

「これで通信を妨害できますわ!」

煙が舞い、警備マシンの動作が鈍くなる。

「峰田君!」

「上鳴を返せ!!ハーレムが待ってんだ!!」

峰田君は『もぎもぎ』を投げ、混乱している警備マシンがそれにくつつき動きを止め、警備マシンを柵のようにし、次々と警備マシン達を堰き止める。

「どーだ!…:…:!?」

止めた…:…:と思つたら他の警備マシンが跳躍し、乗り越えて来た。

「しつけえくく!」

「なら…:八百万さん!長い棒を創造して欲しい!」

「分かりましたわ!」

八百万さんに『長さ2mの棒』を『創造』してもらい、自分は構える。

「クーフーリン直伝の槍術!!はっ!!」

接近して来た警備マシンに向けて突きを放ち、通路から落とす。跳躍してくる警備マシンも—

「せいやっ!!」

フルスイングで打ち飛ばす!

「いいぞ!藤丸君!!行くぞ!緑谷君!」

「うん！」

緑谷君、飯田君が前へ走り出る。緑谷君はジャケットを脱ぎ捨て、右袖をまくった。すると手首に付いていたサポートアイテムを軌道させる

『SMASH!!』

「うわ!? すげえっ!」

緑谷君の拳の威力により、警備マシンが次々に軽々と吹き飛んだ。普段の『身体強化』以上の威力だ。あのサポートアイテムの効果? でもおかげで電気君を拘束していた警備マシンも吹き飛び、飯田君が救出する事が出来た。

「耳郎さん! 警備マシンは?」

「左から!」

「よし! なら右だ!」

飯田君は電気君を背負い、自分達は警備マシンが少ない道へ走り出す。

「デク君何その腕! すごいやん!」

「うん! メリッサさん、ばっちりです!」

「持ってきたのね!」

　　どうやらメリッサさんがデク君に渡してたアイテムのようだ。

「(よし…この調子なら行ける!) ……姉、大丈夫かな…」

　　姉の事で少し不安になったけど、今自分が出来る事をするのが最善の手だ……

第7話

side 立香

敵は二人、獣に変装した敵と両手を巨大化したのっぽの敵…

「(出し惜しみする余裕なんて無い…だから) 手を貸して! 『キャスター』!」

「戦闘か。なるべくは避けたい行為だが、仕方あるまい」

キャスター、『諸葛孔明—エルメロイ二世—』。メガネとスーツ姿の男性を呼び出す。三国時代に謳われた天才軍師だ。こっちの戦闘能力は十分に高い。なら私は徹底的に二人のサポートに徹する!

「また増えやがった!」

「これ以上好き勝手やらせるか!!」

のっぽの敵からまたガラスのような波動が私達に放たれる。

「!」

それと同時に爆豪君は『爆破』で空中に跳び、焦凍君は足元を『氷結』で滑り、私と諸葛孔明は横ステップで回避する。そのまま爆豪君と焦凍君は敵二人に立ち向かう。

「一気呵成に滅ぼしてくれよう。やるぞ、マスター!」

「うん! 『スキル』使用!」

「ふむ、ではこうしよう」

私含め、二人に『軍師の忠言』、『軍師の指揮』のスキル使用。これで攻防力を上げる。二人の動きがさつきより俊敏になる。敵の攻撃に臆することなく、逆に敵が攻めあぐねている。

「ハッハー!」

「な、何だこいつら…っ」

「凍れ!!」

「さつきより動きが早い…っ…っ…ダメエらの仕業か!」

そう言って敵二人が私と諸葛孔明を睨んでくる。

「つまらん連中だな。他にやる事ないのか?」

「ダメエ!!」

「先に潰す!!」

「っ！藤丸！」

「立香！」

先生の挑発で敵2人が私を睨んで来た

「ちよ、孔明先生！煽らないで！」

「計略だ。さっさと動け。来るぞ」

「っ」

獣姿の敵から剛腕が来る。孔明先生からのスキルで身体強化されてるから動きがよく見える。勿論、獣姿の敵の背後から同時攻撃をするのっぽの敵も動きも見えた。

「死ねえ!!」

「嫌…だっ！」

ラリアット。上半身を反らし、躲す。上半身を反らした勢いでバク転し、バックステップ。するとガラスのような波動が私を通りすぎる。

「あつぶあ…」

「無視すんじゃねえ!!」

「うるせえ！黙ってる！」

「オラア!!」

獣姿の敵に追いついた爆豪君は連続で『爆破』を浴びせる。敵も爆豪君を標的に変え、間髪入れず攻撃し、息もつかせぬ攻防が続く。

「ちい…なら俺が「させえねえ!!」!!シヤア！」

遠くではのっぽの敵と焦凍君が必至に戦う。足元を『氷結』させてのっぽの敵から来る波動を避けながら、敵めがけて『氷結』を出す。だけどその氷は丸く削られ防がれる。

「成程…奴の見えない攻撃が分かった」

「ホント？孔明先生」

「空間に穴を空けてるわけではない。削り、抉っている。氷が丸く削られているのが証拠だ。」

そう先生が説くと、爆豪君と焦凍君は理解する。

「成程な…」

「そういう事か…っ！」

「さすが先生…」

「つまらんな…おいその金髪の少年。さつさとその獣を倒せ。」

「うっせえ！スーツ野郎!!いつまでもテメーらにかまってるねえんだよ!!」

そう言つて爆豪君は掌で『爆破』を起こし高く跳ぶ。両腕をクロスし敵めがけて急回転しながら突撃していく

「先生!」

「分かっている」

『榴弾砲・着弾（ハウザー・インパクト）!!』

『鑑識眼』により更に威力が底上げされた大爆発が獣姿の敵を襲う。直撃を受けた敵はボロボロになって倒れる。

「よくも!」

「(マズイ!) 先生! 『宝具』!!」

「物理で殴るだけが戦いじゃない…これで大軍師の究極陣地『石兵八陣（かえらずのじん）』!」

宝具発動。孔明先生が羽扇を仰ぐと同時、のつぽの敵の頭上から孔明先生が自軍の敗走が決まった際に仕掛けておいた伝説上の陣形、『三国志演義』における力の一端。巨岩で構成された『奇門遁甲陣』が降り注がれる。

「―破つてみせるがいい」

「な、何だこれは…!?う、動け…っ」

敵は宝具によって呪いが付与されスタンする。これで爆豪君に攻撃しようとした動作を防ぐことが出来た。そして―

「爆豪君! 焦凍君!」

「くたばれえ!」

「終わりだ!!」

「ガア!!」

敵に爆豪君は『爆破』を浴びせ吹き飛ばし、宙に浮いた敵を焦凍君が『氷結』で拘束した。

「最上に近い勝利だが…戦う前に勝つくらいでなければな」
「な、何とか勝てた…」

戦闘終了。緊張が解けて、その場に座る。

「立香！無事か？」

「うん。ヘーキ…それよりも切島君が…燕青！」

「いやーびつくりした。」

「いやあこの少年の体が壁に喰い込んで取り出すの大変だったよお
く」

奥から切島君を支えながら燕青がやって来た。見た所無事のように
だ。

「切島！」

「取り敢えず怪我無くてよかった。」

「というか…切島君が『個性』解けば簡単に取り出せたんじゃない？」

「あつそつか」

私がそう指摘すると、二人は納得する声を出す。

「…アホか」

「ええ…」

何か抜けてるなあ……

「…あんがとよ……」

「(あ、デレた)」

「んだよ、らしくねえ！気にすんな！」

「してねえわ！」

いつもの調子に戻る爆豪君と切島君。

「先生もお疲れ様。」

「そうか。無事を祈るとしよう」

一息付いて、孔明先生だけを帰らせた。魔力が消費され、少し疲労
感が来るけど我慢する。

「マスター、俺はどうする？」

「まだもう少しいて。」

「あいよお」

「よし、緑谷達を追うぞ」

「命令すんな！」

「轟、藤丸、詳しく教えてくれ！」

私達は走り始める。そう言えば二人はワケも大して分からないまま巻き込まれてたか……そんな時

【ピピピピ！】

『！』

前方から機械音。プラントの壁から押し出されるように、大量の警備マシンが現れる。

「奴ら……本気になったようだな……」

「（ここから正念場……立希達は上手く行ってるか……）」

兎に角目の前に集中して突破しないと……っ！

side立希

耳郎さんに周囲の音を確認してもらいながら上へと上がる。そしてたどり着いたのはI・アイランドの頭脳とも言えるサーバールーム……

【ピピピピ！】

『！』

サーバールームに入った途端、大量の警備マシンが現れる。

「くっ………罨か！」

「突破しよう！飯田君！」

「待って！……このサーバーに被害が出たら、警備システムにも影響が……」

メリッサさんが慌てて止めに入る。確かにさっきの緑谷君の超パワーで暴れたら被害が出る……別の方法を考えるが通路を埋め尽くす程警備マシンがゆっくりと来る……

「警備マシンは私達が食い止めますわ！」

八百万さんは屈み、背中から武器を創造しだす。八百万さんを始め飯田君、峰田君、麗日さんが構える。

「緑谷君！メリッサさんを連れて別のルートを探すんだ！」

「メリッサさん、お願いしますー！」

駆け出し始める緑谷君と後を追うメリッサさん。

「お茶子さんも一緒に来て！」

「え、でも！」

何か閃いたメリッサさんが麗日さん呼び止める。警備マシンを食い止めようと気合入れていた。

「頼む！麗日くん！」

飯田君の喝で麗日さんも先に行く。メリッサさんの思考は分からない：けど麗日さんが必要なら彼女を守ったほうがいい…

「飯田君！自分も先に行く!!」

「！…ああ！…ここは任せてくれ!!」

少し遅れて自分も走る。

「藤丸君！」

「自分も行くよ！」

「ありがとう！立希君！」

メリッサさんの案内で180階まで駆け上がる。そして緑谷君が扉を破壊した場所は屋上だった。

「ここは…」

「風力発電システムよ。」

上を見上げると大量に風力発電のプロペラが設置されていた。

「どうしてここに…」

「タワー内は警備マシンが待ち構えているはず…だからここから一気に上層部へ向かうの！ホラあそこに非常口がある！」

「あんなところまで…」

「成程、麗日さんの『個性』で浮かして一気に飛ぶ…という事だね？メリッサさん。」

「…ええ…」

毅然とした顔の下で胸に置かれた拳を振るわせながらも頷くメリッサさん…それを見た麗日さんは覚悟を受け入れる。

「うん！任せて！メリッサさん、デク君に捕まって！」

「それなら…自分は麗日さんの邪魔が入らないよう、警備するよ」

麗日さんはメリッサさんと、メリッサさんを背負った緑谷君に触れ、『無重力』にし、浮かす。

「いっけー！」

ゆつくりと、エレベーターの柱に沿うように上昇していく緑谷君とメリツサさん。順調…という時だ。

【ピピピピ！】

「！」

少し離れた所から警備マシンが大量に来た。

「っ…飯田君―麗日さんは『個性』に集中！自分が食い止める！」藤丸君!？」

八百万さんに創造してもらった棒を構え、警備マシンの軍勢に特攻する。

「ハアツ!!」

警備マシン一体に突きを放ち、棒を喰い込ませる。

「どっせい!!」

そのまま他の警備マシンを薙ぎ払う。重心が棒の先端に偏ったため威力充分だ。

「数が…多い…っ!」

何とか警備マシンを棒で叩き壊し続けるが…

【ピピピ！】

「っ!!」

遂に、数体の警備マシンが麗日さんの方に行ってしまう。戻ろうにも自分の周囲に警備マシンが囲み、行く手を阻んでくる。

「邪魔っ…麗日さん!!」

「麗日さん!」

「『個性』を解除して逃げて!」

「できひん!そんなことしたら、皆救けなくなる!」

個性無しで戦うつもりだ。自分の周りにいる警備マシンをなぎ倒して麗日さんの所に戻りたいけど…数が多すぎる!」

「早く…早く!!」

警備マシンが一齐に麗日さんに襲い掛かる…

「(っ)で出すしかない!」来てく「死ねええ!!」!爆豪君!」

『個性』発動させようとした時、麗日さんに襲い掛かって来た警備マシンの横から爆豪君が『爆破』した。

「かつちゃん!？」

「という事は――「何やってんのバカ弟!」「殴り合いと行こうかあ」姉
!燕青!」

「怪我はねーか、麗日!」

「大丈夫か! 那月希!!」

「轟君! 切島君!」

爆豪君に続いて姉と燕青、焦凍君に鋭見郎君と駆け付けて来た。

「よかった無事で…今麗日さんがメリツサさんと緑谷君を浮かして最
上階に向かつてる!」

「ああ、見えていた!ここでこいつらを足止めするぞ!」

「うん!」

「あいよお!」

「俺に命令すんじゃないぞ!」

「でもコンビネーションはいいんだよな!」

「誰が!」

一気に形勢逆転。『氷結』、『英霊召喚』、『硬化』に『爆破』。大量に
いた警備マシンは次々と破壊される。

「うわああああ!!」

「!緑谷君!!メリツサさん!!」

上空に浮いていた二人が強風で煽られた。マズイ!自分は見渡す。

視界に焦凍君、爆豪君、そしてプロペラ。

「焦凍君! 『炎』の準備! 爆豪君! プロペラを緑谷君達の方に破壊
!」

「っ! 分かった!」

「命令すんじゃないぞ!!」

「行くよ!!」

「くたばれえ!!」

そう言い返されながらも、自分が振るった棒の先端に爆豪君は乗っ
て、プロペラの根元まで蹴り跳び、『爆破』でプロペラの角度を変える。
「行け!」

それと同時に焦凍君がそのプロペラに向けて『炎』を放ち、熱風を

緑谷とメリツサさんに向け、一気に上昇させる。

「よしー！」

その後壁に激突しそうなる緑谷君だが、持ち前の『身体強化』した拳で壁を破壊し、無事最上階へと入る。

「(まだ終わらない…) 麗日さん！まだ浮かせられる!？」

「大…丈夫！」

「じゃあ自分を浮かせてくれない!?姉！」

「何?…オツケー！燕青!!手伝って！」

「よし来た」

「いいよ！」

麗日さんは自分を『無重力』で浮かしてもらおう。そして—

「行ってこい!!」

「うおっと！」

軽くなった自分、そんな自分の腕を姉が掴んで投げ、投げた所には跳躍して空中にいた青燕が—

「ハッ！」

「んぐ！」

—自分に掌底を放ち、加速して急上昇。緑谷君が破壊した所に行く。

「やめて！」

「っ！」

前を向くと緑谷君が落ちそうになり、敵の一人がメリツサさんを殴り飛ばしていた。更に追い打ちを…

「止めろお!!」

『SMASH』!!」

「なっ—ぐべらら!？」

持っていた棒で敵を殴る。更に復帰した緑谷君の拳も来て、敵は気絶する。

「デク君…立希君…！」

「無事で？」

「腕を…すみません…守れなくて…」

腕から血を流すメリッサさんにハンカチで手当てする緑谷君。

「ありがとうございます?」

凜と微笑んでくるメリッサさん。改めて、彼女は強い心の持ち主だなと思う。

「行こう緑谷君。メリッサさん。」

「ええ…皆を助けに!」

「うん!」

自分達は立ち止まらない。

第8話

side立希

「来たぞー！」

「撃て撃て！撃ちまくれ!!」

最上階に近づくと、敵が多くいる。ライフルで連射してくる。
「っ！」

「メリッサさん下がって!!」

自分はメリッサさんの前に立ち、棒を高速回転させて銃弾を弾いて防ぐ。

『SMASH!!』

「ぐあ!!」

その隙に緑谷君が特攻して敵を倒してもらう。

「ふう……もうこの棒は使えない……か」

銃弾を弾いたおかげでボロボロだ。仕方がないから捨てる

「着いた！」

そして遂に、200階へと足を踏み入れる。でも目的の場所に近づくほど危険も大きくなる。自分達は周囲を確認しながら慎重に移動する。

「制御ルームは？」

「中央エレベーターの前よ」

一気に通路の角まで走り、周囲を見渡すと……どこかへの入り口が開いていた。そこにいたのは――

「パパ……？」

「え、デヴィットさん？」

「本当だ……！」

その場所は保管室と書かれていた。その部屋で懸命にコンソールを操作しているデヴィットさんと助手さんがいた。

「何でここに……」

「もしかして敵に脅されて何かをさせられている……とか？」

「だったら救けないと！」

自分達は直ぐに保管室へ向かった…

とんでもない事を…自分、緑谷君、そしてメリツサさんは聞いた。

「パパ……どういう事……」

「メ、メリツサ……!」

「お嬢さん、どうしてここに……」

信じられない面持ちで自分達をみるデヴィットさんと助手さん。それは自分達も同様に息を飲む。

—「プラン通りですね。敵達も上手くやっているみたいです。」—

—「ああ、ありがとう。彼らを手配してくれた君のおかげだ」—
大きなアタツシユケースを取り出して会話した二人だった。

「この事件……パパが仕組んだの?」

「……そうだ……」

「なっ?」

この事件の犯人がデヴィットさんだという事に自分と緑谷君は驚愕。メリツサさんは信じられないという顔だった。

「なんで……どうして!!」

「博士は……奪われたものを取り返しただけです!この画期的な発明品を!!」

アタツシユケースを抱えた助手さんが力説して来た。アタツシユケースに入っている発明品は……『個性』を増幅させる装置』だった。薬品とは違い、人体に影響を与えずに『個性』を増幅させることが出来る……けど超人社会においてこの研究は恐れられ、各国政府に圧力が掛けられ研究そのものが凍結されたのだった……その研究はデヴィットさんにとって使命のように大切なものだった。どうにかして取り返したい……それがこの結果だった。

「っ……その研究を取り返す為にわざわざ敵を呼んでこんな大事にさせたのか!!」

「そんな……嘘でしょ……パパ!!」

「……嘘ではない」

「こんなのおかしいわ……」

「メリツサさん……」

「私の知ってるパパは、絶対そんなことしない！なのに……どうして……どうして……」

メリツサさんの悲しみと怒りが混じった声で叫ぶ。デヴィットさんは苦しげに顔を歪める。

「……オールマイトの為だ」

「……」

「お前たちは知らないだろうが……彼の『個性』は消えかかっている……」

「えっ!？」

「!!」

突然の真実に自分は驚いた。二人も目を見開いていた。デヴィットさんはその装置を使い、全盛期の力を持ったオールマイトに戻したいという願いだった。

「(デヴィットさんは親友の為に……平和の象徴を守る為に……その研究に力を尽くしていた……けど……) 違う……それは間違ってる!!」

「藤丸君……」

「立希君……」

自分は否定する。そんな自分にデヴィットさんは睨んで来た。

「煩い!!子供が!私のこの気持ちを理解できるわけがない!!」

「ええ!出来ない!でもそれはアンタも同じだ!オールマイトがその装置を知って使ってくれると思ってるのか!?!平和の象徴がそんな装置一つで復活するなんて無理だ!!何よりっ!……オールマイトが悲しいでしょ……デヴィットさんはオールマイトの気持ちを理解してるんですか……?」

「藤丸君……」

「っ……頼む……オールマイトにこの装置を渡させてくれ!!もう作り直している時間はないんだ!その後でなら!私はどんな罰でも……受ける覚悟を——命がけだった……」……っ!」

デヴィットさんの言葉を遮ったメリツサさん。その顔には怒りが籠っていた。そしてハンカチで隠していた傷を見せる。

「捕らわれた人達を救けようと、デク君やクラスメイトの皆が!ここ

に来るまでどんな目にあつたと思ってるの!？」

「…うど、どういう…事だ?」

「(ん?)」

何故かデヴィットさんは困惑していた。

「敵は…『偽物』…全ては芝居のはず…」

そう言つて助手さんを見る。助手さんは…顔を反らし—

「まさか—「もちろん芝居をしてたぜ。『偽物の敵』という芝居をな」
なつ…ガツ!？」

「藤丸君!!」

背後から声が聞こえた。振り向くと同時に体に衝撃が走る。

「っ!？」

壁に激突したと思つたら今度は体が動かない。反射的に閉じた目を開くと、自分の体に『鉄』が巻き疲れ、壁と同化していた。

「何……が……「デク君!!」!」

「ぐっ……!!」

奥を見ると緑谷君も今の自分と同じ状態になっていた。背後から現れた敵は二人。機械の付いたメガネをかけた男性と、仮面をつけ傷のついた男性。鉄扉に触れると生物のように手すり動いていた。

「(敵の「個性」は…『金属操作』!くそっ首に巻き付いて…」

「…っ」

「少し大人しくしている。サム、装置は?」

「こ、こんに…」

「サム!？」

デヴィットさんの助手さんは装置が入つてあるアタツシユケースを敵に渡した。

「まさか……最初から敵に装置を渡すつもりで……!!」

「だ、騙したのはあなたですよ……長年貴方に仕えていたというのに……せめてお金ぐらい貰わないと…割に合わない…」

「(騙されていたのはデヴィットさんもだったのか!!そして…本当の敵はアイツ!!)」

「約束の謝礼だ」

「ぐあ!!？」

『!!』

仮面の敵は助手さんの肩を銃で撃った。そのままアタツシユケースだけを持つ。

「サムさん!!」

「な、なぜ……約束が違う!!」

「約束? 忘れたなあ」

愉快そうに敵は助手さんに銃口を向けて笑っていた。その声にザワザワと怒りがこみ上げる。

「(助手さんの計画もまた…敵に利用されていた……っ……) ヴィ……ラン……っ!!」

「ぐ……そ……お……!!」

自分と緑谷君はもがく。だけどそう簡単に解けない。『英霊召喚』しようにも鉄筋が首に巻き付いて声が中々発せない……

「謝礼はコレだ」

『!!』

躊躇せずに敵は助手さんを撃った……だけどその銃弾は……

「ぐっ!!」

「パパ!!」

デヴィットさんに当たった。助手さんを庇ったのだった。凶弾にデヴィットさんは倒れ、メリツサさんが叫ぶ

「に、逃げろ……」

「パパ! 「来るな!!」 ああっ!!」

「メリツサ!」

「(メリツサさん!!) く……そ……っ!!」

デヴィットさんに駆け寄るメリツサさんを敵は銃の底で殴り飛ばす。早く拘束を解かないと!!これ以上怪我人を出すわけにはいかな
い!!

「今更ヒーロー気取りか…無駄だな。どんな理由があろうとお前は悪事に手を染めた。俺達が偽物だろうが本物だろうがお前の犯した罪は消えない。敵の闇落ちていく一方さ……ま、今のお前は俺の下でそ

の装置を量産することぐらいだ……連れてけ」

「はい」

メガネをかけてた敵に指示をだし、デヴィットさんを連行しようとして動いた。

「返して……」

「ん？」

「(メリッサさん!）」

「パパを……返して……!!」

這いずりながらも叫んだ。恐怖で震える体を叱咤して……けど敵は下衆な笑みで銃口をメリッサさんに……

「そうだな……博士の未練は……断ち切っておかないとな!!」

「やゝめゝろゝおゝおー!!」

「っ……『ランサー』 あああ!!」

side 三人称

『SMASH』!!」

「ちいー」

渾身の力で緑谷は鉄の拘束を外し、弾丸のように真っ直ぐ敵に向かう。仮面の敵は緑谷を見て舌打ちをし、〃個性〃で『鉄壁』を精製し防御する。

「―夏の魔物がっ、目を覚ましたのですっ!ってままま、マスター!?!そのお姿は何事でした!?!」

立希は『召喚』にてランサー、『玉藻の前(水着)』を呼び出す。普段のキヤスター姿ではなく、麦わら帽子をかぶり水着に白Tシャツを着て、折りたたんだパラソルを装備した狐娘となっている。

「(説明後で!拘束解いて!）」

「あいあいさー!コンコンっとー!」

札を数枚取り出し、那月希を拘束していた鉄棒を断ち切り、拘束を外す。立希はそのままメリッサの所へ行く。

「メリッサさん!デヴィットさんは緑谷君に任せて自分達は皆を!!」

「でも……デク君は……藤丸君の言う通り!!ここは僕が!!」……っ!

立希、緑谷君の声でメリッサは立ち上がり、急いでここを出る。

「逃がすな！」

「玉藻！『宝具』!!」

「了かー」「ジャツジメントの時間だぜ☆」なっ!？」

仮面の敵の指示で自分達を捕えようとしてきた敵。だけどそれよりも早く立希は玉藻に命令する。

「言い逃れは聞きませんわ。浮気移り気デートに遅刻、狐は丸つとお見通し。いざ受けやがれ、『日除傘寵愛一神』！」

「ギャアアアアア!!」

玉藻の宝具によって、敵は玉藻の蹴りを何度も食らい、最後の飛び蹴りが放った爆風で吹っ飛び気絶する。その間に立希とメリッサは保管室から出る。

「見ていて下さいました、マスター？つていない!?!もーっ！玉藻ちゃんペントハウス戻りますう〜！」「それ止めて！後でござ褒美あげるから緑谷君のサポートをして!!」ななな、なんとお!!まさにい？さまー？ばけいしよんっ!」

立希の言葉でテンションが上がる玉藻。そのまま緑谷に加勢し、仮面の敵を足止めする。

「ちっ…役立たずが…」「ここは行かせない!」「参りま〜す♪」調子に乗るな!!」

「んんよー」

「やっと着いた…!」

二人が敵を足止めしている内に、立希とメリッサは廊下を走り、遂に目的地にたどり着く。制御ルームにある警備システムをメリッサは素早く、正確にキーボードを操作し再設定する。すると非常事態を現していたモニターが次々と正常に戻っていく。

「よし…いける!」

「これで…システムが正常に…っ!?!」

「メリッサさん?どうしー【警告!警告!】一体何!?!」

【登録されていない者がシステム操作中。ただちに中止!ただちに中止せよ!】

「そんな…敵が使用者権限を変えたの!？」

「ここまで来て追いついた。緑色になりつつあった画面が再び赤色に変わっていく」

「どうしよう…今の私の技術で直すことは…「大丈夫」立希君…」

「さっき外部から接続する場所見つけた。なら…『ムーンキャンサー』」

3体目の『召喚』。少し立希はぐらつく

「—はあく〜い呼ばれて飛び出てBBちゃんです♪っておやあく〜センパイ大丈夫ですか〜？魔力消費ですう？」

ムーンキャンサー、『BB』を呼び出す。袖付きの黒いマントを着用した紫の長髪女性。ムーンセルの管理下から外れて暴走した上級A Iだ。

「ちよつと今3体同時『召喚』してるから…BBちゃん、この警備システムを再設定して欲しいんだけど…出来る？」

「んふふ♪BBちゃんはなんでもできる、ラスボス系後輩なのです♡見ていてくださいね？センパイ♪」

BBはそう言って外部から接続する場所に指を触れると光の粒子となり消える。

「え!?!あの女性は何処に—【こつこでえーす!】ええ!?!」

メリッサはモニターにBBが写っている状態に驚く。

【さあさあセンパイ♪やっちゃってもいいですかあ〜?】

「まあ…程々に…『宝具』許可」

【行きますよ、セ・ン・パ・イ】

BBはムーンセルの力を引き出し、無敵のナース姿に変わる。

【BB〜チャンネル!これはいけません!ですがご安心を。BBちゃんにお任せです!絶対回復、『C・C・C・C・C・C』（カースド・キューピッド・クレンザー）!ふふっ。お注射、痛かったですか?】

そのまま自分の領域である虚数空間から悪性情報を引き出し、周囲のチャンネル（共通認識）をカオスなものに上書き。システムの『核』にBBが取り出した巨大注射器を突き刺し液体注入。爆発する映像が出る。

【システムオールグリーン♪】

「やった！すごいわ！」

「ふう…」

非常事態の文字が消え、次々とシステムが正常に戻る。そして遂にタワー内の照明が復帰し、閉じられていた防火シャッターも隔壁も開く。

「やった！」

「流石です！」

「ちつ、警備システムを戻したのか！」

保管室にも明かりが付き、憎々しげに仮面の敵は立ち上がり、緑谷と玉藻に『鉄柱』の雨を降り注がせ、その場から逃げる様に移動する。

「I・アイランドの警備システムは通常モードになりましたー♪皆さん安心してお休みなさいませ♪」

島内全域に徘徊していた警備マシン達が次々に正常に戻り、撤収していく。通信妨害も無くなりネットも通信も使えるようになる。

「携帯つながるぞ！」

「爆弾見つけたようだな。」

島内にいる人達は一安心する…

「てかこの画面に映ってる女性誰だ？」

「何か可愛くね？」

「この島のイメージキャラクターとか？」

side 立香

「!?何だ…」

風力発電エリアにて、突然大量の警備マシンは停止する。

「止まった……?」

「多分…立希達が警備システムを戻したんだよ……はあ…はあ…」

「そろそろマスターが疲弊してるし、俺は退散するとするかねえ…そいじゃあ」

「うん…ありがとう……燕青……ふう……」

ギリギリだった。数に押され崖ギリギリまで追い詰められた。

「大分息が上がってるな…大丈夫か立香？」

「消費が激しいからね…後、召喚は一回分だけ残ってるから…大丈夫。」

と言っても実は令呪を一画使用。『私達を本気で守れ』と指示し、大量の警備マシンを燕青がほぼ一人で対応してもらっていた。少しでも、皆を休ませてまだあるだろう戦いに備えてもらうために…召喚しても微量ずつ魔力が消費されるから少しでも残すため燕青を退却させる。

「でもデク君達がやってくれたんだよ！」

「だな！」

「おーい！麗日くん！皆ー!!」

「飯田君！無事だったんだ！」

ここで飯田君達と合流。お互い戦闘して衣装がボロボロ…

「緑谷君達がやってくれたんだな！」

「ギリギリだった…ウチらさっきまで警備マシンに捕まって…」

「マジかよ…でもよお…」

「まだ終わってねえぞ…クソ敵どもをまだ倒してねえ!!」

「ああ…行こう。」

「うん！」

私達は最上階へと急ぐ…

第9話

side 三人称

「オラア！」

「な、なんでいきなり!？」

「どうなって…「大人しくしろ!」ガツ!？」

レセプション会場に照明がついたあと、直ぐにプロヒーロー達の拘束がとけ、動揺した敵達を包囲する。

「(やり遂げてくれたか!皆!)」

オールマイトも拘束を解かれ、自由に動けるようになる。

「ちい!なら観客を人質に—「レオナルドパンチ!」ぐぼお!？」

「む!?!君は藤丸少年と一緒にいた社長さん!」

オールマイトの近くにいた敵を巨大な機械拳を繰り出し殴り飛ばすダ・ヴィンチ。

「さあ行きたまえ平和の象徴!ここは他のプロヒーローに任せたまえ」

「ああ!」

オールマイトは急いで駆け出す。最上階へと続く廊下を走っていると電話が来る。相手はメリッサだった

「どうしたメリッサ!」

『マイトおじさま!パパが敵に連れ去られて、デク君が後を追って…今立希君と一緒にヘリポートの方に!』

「もう大丈夫!私が行く!!」

その顔は険しい覚悟に満ちていた。

side 立希

BBちゃんに警備システムを任せ、自分とメリッサさんは急いで緑谷君の下へと急ぐ。彼は今ヘリポートの場所で仮面の敵と戦っている。システムを回復させた後、モニターで各フロアを確認。そこには痛そうに腕を抑えながらも必死に敵の跡を追う緑谷君。そしてデヴィットさんを担ぎ、装置が入ったアタッシュケースを持ってヘリコ

プターを使って脱出しようとする仮面の敵が写っていた。

「マスター……」

「玉藻……無事でよかった……」

「敵さん逃してしまいました……そしてあの少年。ものすごい速さで追って途中で別れてしまい……玉藻シヨックです」

「うん……でも足止めしてくれてありがとう。後はゆっくり休んで」

「分かりました……ではでは、次は泳ぎに参りましょう、マスター♪」

そう言つて玉藻を退却させる。一気に魔力消費の披露が来て、膝を付く。

「立希君！」

「大丈夫です……はやく……行かないと！」

「ええ……」

メリツサさんに支えてもらいながら緑谷君と敵がいるヘリポートへたどり着く。

「デク君！」

「緑谷君！」

ヘリポートに辿り着く。既に敵を乗せたヘリコプターが上昇していた。けどそのヘリコプターに緑谷君がヘリコプターの足に必至にしがみ付いていた。そして……

「ああ!!」

「!!」

遂に緑谷君がヘリコプターから手を離し落下してしまった。落下した衝撃でクレーターのようになりポートが凹み、体を打ち付けた緑谷君が倒れる。

「う……うう……くそ……っ……ちくしょう……!!」

「デク君！」

「緑谷君……くそっ」

既に届かないぐらいヘリコプターは空へと上昇している……もう何も出来ない……

「返せ！博士を返せ！くそおお!!」

上半身を起こし、緑谷君は絶叫した。怒りと悔しさが来る……その時

だ

「こういう時こそ笑え！緑谷少年!!」

「!!」

「もう大丈夫！何故って!?私が来た!!」

その声に、自分達は歓喜に満ちた。世界で一番頼もしい声。そしてその姿。タワーの外からヘリコプターより上空に、弾丸のように飛ぶ人影が現れた!

「オールマイト!!」

「マイトおじさま!」

そこにはいつも見る、筋骨隆々とした巨体のNo. 1ヒーロー、オールマイトの姿があった!オールマイトはヘリコプターに向かって拳を放ち、急降下。オールマイトの拳はヘリコプターを貫通し、爆発する。炎上しながら墜落した。

「パパ……パパ!」

「う……メ、メリツサ……」

「もう大丈夫だ」

炎の中からデヴィットさんを抱えたオールマイトが現れる。自分達はオールマイトの所へ駆け寄った。メリツサさんは涙を浮かべ微笑む。自分は一息つく

「よく頑張った緑谷少年。藤丸少年。」

「オールマイト……私は……」

デヴィットさんが改まったような口を開く……だが

「ガッ!」

「!?!」

突然『鉄柱』が飛び出し、オールマイトを吹き飛ばす。

「オールマイト!」

緑谷君はオールマイトの所に駆け寄る。そして今度は次々と自分達に何本も『鉄柱』が降り注ぐ

「ガハッ!」

「パパ!!」

「博士!」

「メリツサさん危ない!!」

そんな中、デヴィットさんに大量の鉄のコードが巻き付き、連れ去られた。自分は追いかけようとしたメリツサさんを止める。今度は足元が揺れ、轟音とともに割れる。

「一体何が…?!」

金属がすごい勢いで形を変えていく。床下にあったパイプ、ヘリコプターの残骸も、そしてデヴィットさんも何もかも飲み込まれる。

「サムめ…：オールマイトは “個性” が減退して、往年の力は無くなつたとか言つてたくせに…：！」

「敵…っ!!その頭に付いてる装置は!!」

うねる金属の中央に立っていたのは仮面の敵だった。けど敵は仮面を外し、代わりに後頭部にフックのようなものが固定するようになっていた。そう、デヴィットさんが開発した『個性増幅装置』だった!

「あいつ…：博士のー!」

『TEXAS SMASH!!』

「往生際が悪いな!!」

渾身の力で拳を打ち込むオールマイト。だけどそれは敵の『金属操作』で作られた『鉄壁』に防がれる。

「何?!ぐっ!!」

「オールマイト!!」

敵が手を振りかざすと次々と『鉄柱』が現れ降り注がれる。その衝撃でタワーの上部が壊れ始まる。

「メリツサさん!一旦下がって!」

「え、ええー!」

メキメキと金属音が響く。無理やり鉄板など捲りあがり、敵の元へと引き寄せられ、敵の姿を象る。

「さすがデヴィット・シールドの作品だ! “個性” が活性化していくのが分かる!!ハハハハハハハハ!!いいぞ!これはいい装置だ!!」

「こ、これがデイヴの」

「博士の…」

「デヴィットさんが作った…」

「装置の力…」

自分達は呆然と眩く。壊れるタワーを喰らいつくす異形の塔。強大すぎる力に足が竦む…

「さて…オールマイトをぶつ倒すデモンストレーションと行こうか!!」

高慢な宣言をした敵。金属を操りオールマイトを攻撃する。

「ぐうう!!」

「ハハハハハハハ!!」

敵が指を弾く仕草するだけで大量の『鉄柱』が簡単に降り注がれる。オールマイトは押し負けそのまま床へと埋め込まれ続ける。

「きやあああ!」

「うわああ!!」

「メリツサさん!藤丸君!」

うねる鉄柱に蹂躪され、床が隆起し、自分とメリツサさんは空中に投げ出される。緑谷君が飛んで来て、抱えてもらい何とかなった。

「ありがとう緑谷君…でもオールマイトが…」

「オールマイト……!」

オールマイトを見ると、『鉄柱』を必死に押さえていた。苦しそうに咳込み、体から蒸気が出ていた…

「オールマイト……押されている……デヴィットさんが言ってたように本当に衰えて……」

「マイトおじさま……」

「っ……」

「ゲホッ……クツ!!」

「ハハハハハハハ!!さっさと潰れちまえ!!」

息つく間もなく『鉄柱』の雨が降り注ぐ。とどめをさしに来たのか更に多くの『鉄柱』をオールマイトに向ける

「オールマイト!!」

「マイトおじさま!!」

このままだとマズイ…そう感じた自分は『令呪』を使う―

「くたばりやがれえ!!」

「かつちゃん!」

「爆豪君!」

—前に上空から連続で『爆破』をする爆豪君が現れた。

side 立香

「くたばりやがれえ!!」

「っ……行け!!」

「やつと…着いた!」

最上階、ヘリポートに到着するや否や爆豪君は真っ直ぐ敵に飛び『爆破』を放って、焦凍君は『氷結』でオールマイトに向かっていた『鉄柱』を凍らせて動きを止める。

「ちい!……あんなクソだせえラスボスに何やられてんだよ!え!?
オールマイトオ!」

「爆豪少年……!」

「今の内に…敵を…」

「焦凍君無理しないで!!霜が…」

爆豪君の連続の『爆破』は敵の『鉄壁』によって防がれた。攻撃を防がれた事で腕に激痛が走って舌打ちしている。焦凍君も連続で『氷結』を放って体の右側が霜で覆われていた。左の『炎』で体温調節しているけど消えそうにない…

「姉!」

「皆!」

「俺達もいるぜ!!」

「切島君!皆!」

緑谷君と立希、そしてメリツサさんは自分達の元へと来る。全員ここに集まり少し安堵する。私の後ろにはヤオモモを支える飯田君、上鳴君を支える麗日ちゃんと耳郎ちゃん、峰田君、そして切島君がいる。

「金属の塊は俺達が引き受けます!」

「八百万くん!ここを頼む!」

「はい!」

切島君と飯田君が前に出る。ヤオモモは残ったメンバーの前に『盾』を創造し守る。

「(ここが最後の戦い…なら!) 力を貸して! 『ライダー』!」

「—マリーよ。さあ、一緒に、ヴィヴ・ラ・フランス!」

三人目を呼ぶ。ライダーの『マリー・アントワネット』。フランス革命期に消えた王妃。ヴェルサイユの華と謳われた少女。白色の衣装に身を包んだ銀髪の少女が現れる。召喚で体が少しふらついた。

「(魔力消費が…) つ」

「姉、無理しないで…!」

立希に支えながらも、私は前を見る。

「大丈夫…:マリーちゃん…:皆を救って!」

「まっかせて〜!」

そう言つてマリーちゃんは魔弾を『鉄柱』に降り注ぎ破壊する。

「オラア!!」

「せいっ!!」

前に出た切島君と飯田君も二人で力を合わせて『鉄柱』を砕く。私含めて、皆限界を超えている…:それでも私達は動く。何故なら皆を救いたいから!

『オールマイト!!』

「教え子たちにこうも発破かけられては…:限界だと、なんだのと言つてられないな…:限界を超えて更に向こうへ!!」

私達の奮闘にオールマイトは筋肉を躍動させ。押さえていた『鉄柱』を一撃で壊し、敵へ飛びあがった!

「そう!! プルスウルトラだ!!」

『!!』

「小賢しい!!」

凍っていた鉄柱が砕かれ再び『鉄柱』がオールマイトを襲う。だけどオールマイトはそれを纏めて砕く。間髪入れずやってくる『鉄柱』もオールマイトは粉碎し突き進む。

『CAROLINA SMASH』!!」

腕をクロスさせ、突撃。激しい音と共に大量の『鉄柱』が砕け、衝

撃波が広がる。

「うわー！」

「観念しろー！敵よ!!」

勝てる。私はそう感じた。オールマイトが敵の目の前まで迫った

：

「観念しろ？そりやお前だ。オールマイト!!」

『!?』

だけどオールマイトの体にワイヤーが絡みつき、そしてオールマイトの体を握り潰した。

「ぐっ……ぐぐ……ぐ……があああああ!!!」

オールマイトの絶叫が響く……

第10話

side 三人称

「ようやくニヤケ面がとれたか」

「Noooooo!!」

『オールマイト!!』

オールマイトが吐血した。何とか救けたいと緑谷は動く。

「オールマイーツ!!」

「デク君!」

しかし満身創痍の体に激痛が走り思わず蹲ってしまふ。メリツサが慌てて駆け寄る。

「くそがあああ!!」

「ちい!」

「マリーちゃー」「うわおー!」「うわ!!」

オールマイトのピンチに気付く爆豪、轟だが襲ってくる『鉄柱』の対処するのが精一杯。マリー・アントワネットも立香達に襲い掛かる『鉄柱』から守るので動けない。

「(BBちゃん来れる!?)」

『ええ〜こわーい♪それに警備システムを前に戻すのに結構時間かかって〜♪—BB〜ちゃんねる〜! in エキスポ〜♪』

「(ああもう! BBちゃんらしいよ!!)」

立希も動きたいが動けなかった。

『オールマイトオ!!』

「ぐうう……」

怒りのままワイヤーを引きちぎろうとするオールマイトに敵は正面から『鉄柱』を激突させる。ワイヤーに四肢を引きちぎられそうになり、もがくオールマイトを四角く大きい『鉄塊』が左右から挟み打つ。

「死ねえ!!」

『!!』

愕然と目を見開く皆の前で敵は『鉄塊』を作り出しオールマイトを

襲う。

「さらばだ！オールマイト!!」

その言葉と同時に地面から鋭い『鉄柱』が何本も瞬時に伸び、オールマイトを閉じ込めている『鉄塊』を貫いた。

「マイトおじさまああ!!」

メリツサの悲痛な叫びが響く。誰もが愕然と目を見開く……そんな中誰かがその塊に向かって飛び出した。巨大な塊に臆することなく立ち向かっていく小さな体――

『DETROIT SMASH』!!」

――緑谷出久だった。

side 立希

彼だけ、緑谷君だけが諦めないで動いていた。USJの時でも、緑谷君は誰よりも早く動いて、敵と対峙していた。

「(そうだ……まだ……まだ終わってない!)」

緑谷君が動いてくれたおかげで『鉄塊』の中からオールマイトを救出する事が出来た。そして――

「――行くぞー!」

「はいー!」

緑谷君とオールマイト。二人が再び敵に立ち向かう!!

「姉!」

「分かってるー!これが最後!!マリーちゃん!『宝具』用意!」

「ええ!行きましよう!マスター!――さんざめく花のように、陽のようー!」

隣にいた姉もまだあきらめてない。マリー・アントワネットに指示をする。そして自分も『令呪』を使用。

『令呪を持って命ずる――自分の前に現れる!レオナルド・ダ・ヴィンチ』!!」

「――ようやく、私の出番だね♪マスター!戦闘結果は分かっているよ、数式のようなモノさ!」

令呪によって自分の目の前にダ・ヴィンチちゃんが現れる。戦闘準備

備万端で左手には籠手に右手には杖を備えている。

「くたばりぞこないとガキ共が……ゴミの分際で往生際が悪イんだよ!!」

敵も今までよりも強大な力を使ってくる。『鉄柱』と『鉄塊』が降り注いでくる。

「そりゃ、てめえだろうがあ!!」

「ダ・ヴィンチちゃん!自分達も!」

「盛大に行こうか!」

爆豪君が叫びながら散弾に振ってくる『鉄塊』に向かって両手の最大限の『爆破』を浴びせ破壊。ダ・ヴィンチちゃんも自分の指示で杖から大量のレーザーが複雑に絡み合った航跡を描きながら『鉄塊』を崩す。

「オールマイト!行ってください!!」

「ありがとう爆豪少年!藤丸少年!!」

爆炎とレーザーの中を掻い潜るようにオールマイトが豪速で通り過ぎる。

「邪魔だああ!!」

そして緑谷君も脇目もふらず駆け抜ける。敵はすかさず『鉄柱』が矢のように襲い掛かる。

「させねえ!!」

焦凍君が『氷壁』を緑谷君の前に放ち防御する。

「緑谷君!そのまま真っ直ぐ!!」

「行け!」

「咲き誇るのよ、踊り続けるの!いきますわよ『百合の王冠に栄光あれ(ギロチン・ブレイカー)』!」

栄光のフランス王権を象徴した宝具。ガラスの馬を召喚し、薔薇の花吹雪と共に駆け抜ける。ガラスの馬に姉とマリー・アントワネットが乗り、焦凍君が放った『氷壁』を路として走り、全ての『鉄柱』を打ち破る。

「行って!緑谷君!」

「ありがとう!!二人共!!」

突き進む緑谷君とオールマイト。

side立香

「ウガアアアアア!!!」

激昂する敵。更に『鉄柱』と『鉄塊』が降り注がれる。

「マリーちゃん!まだいける!?!」

「キラキラ、キラキラ、輝くの!」

ガラスの馬は加速する。だけどこれ以上は『宝具』が保たない—

『反応強化』!!」

「!!」

と思った時、ガラスの馬が再び輝き始まり、さつきより威力が上がる。

「立希?」

「丁度『礼装』とマリー・アントワネットの『宝具』が相性良かった!!

姉!行っけええ!!」

「マリーちゃん!!」

「みんな大好き!ありがとう!ヴィヴ・ラ・フランス!」

ガラスの馬は駆け巡り、緑谷君とオールマイトに襲い掛かる『鉄柱』

と『鉄塊』を崩す

「藤丸さん!ありがとう!」

「感謝する!藤丸少女!!」

「は……い!」

二人の姿が遠くに行く。そして丁度『宝具』の効果が消え、皆がいる所に戻る。

「っ……」

「立香!」

「姉!」

「もう……限界……」

丁度魔力が底ついた。マリーちゃんに挨拶出来ないまま消えてしまふ。視界がぼやける—

side 立希

「ぐぐぐおおおお!!!」

姉の心配をしていると敵が動いた。力を振り絞るように両腕を高く上げると、沢山の鉄片が猛スピードで一つに集まっていく。

「何…あれ…」

敵の塔の上に集まったのは、とてつもなく巨大な『金属の集合体』それを緑谷君とオールマイトにぶつけるつもりだ！

「させない!!ダ・ヴィンチちゃん『スキル』発動と同時に『宝具』発動!!」

「およそ私は万能なのさ!そして本気を出せかい?よろしい、そのオーダーに応えましょう!」

『『必至』!』

『天賦の叡智』で宝具威力強化。『星の開拓者』で貫通付与。そして『礼装』で必中を付与させる。

「東方の三博士、北欧の大神、知恵の果实…我が叡智、我が万能は、あらゆる叡智を凌駕する。『万能の人（ウオモ・ウニヴェルサーレ）』!」

左手の籠手にエネルギーを溜め、巨大なエネルギー弾を『金属の集合体』に向けて撃ち放つ!!

「行つけえええ!!!」

対象を瞬時に解析し、自らの最大攻撃をその対象に合わせて調整して放つ宝具。『金属の集合体』と『宝具』がぶつかると同時にコスモノヴァアと言わんばかりの大爆発が起こる。

「ぐ…ぐぐ…ぐ…ぐ…つ!!」

『金属の集合体』で押し返そうとする敵だが、『宝具』の威力を殺す事は出来ず—

「私を倒すものは、私を超える万能だけだよ。きみはちよーつと足りなかったね」

「ガハ!!!?」

オーバークワークなのか、敵の後頭部に付いていた『個性増幅装置』が異常動作を起こし、『金属の集合体』はひび割れ、轟音と立て大きく崩

れ落ちる。

「はぁー……はぁー……もう……無理……」

「立希！」

「おやおや、魔力切れかい？仕方がない」

自分も魔力が無くなる。『宝具』を撃ち終えたダ・ヴィンチちゃんは消え、多分BBちゃんも強制退却してるはず……だけど道は作る事が出来た……っ！

「おおおおお!!!」

『金属の集合体』が崩れ落ちる中、緑谷君とオールマイトが敵に向かつて真っ直ぐ走る。そして信念の込められた拳と共に、二人の魂の叫びが合わさって凄まじいパワーが宿った拳を敵へと叩き込んだ!!

「『DOUBLE DETROIT SMASH』!!!」

side 三人称

「おおおおお!!!」

緑谷とオールマイトは敵に拳を食らわせる。

「う……うう……」

その時、コードで捕らわれたままのデヴィットが意識を取り戻す。

「っ……」

メリッサは息を飲む

「いけえええ!!」

麗日の必死の応援。

「オールマイト!!」

八百万と耳郎も続く

「緑谷!!」

「緑谷君！」

「ウエーイ」

切島、峰田、飯田、そして上鳴も必死に叫ぶ

「ぶちかませえっ!!」

爆豪と焦凍も声を張り上げ

「決めろおおお!!!」

立香と立希も大声を上げる。皆の想いを受け、二人は再び拳を構える。

「更にー！」

「向こうへー！」

「プルスウルトラアアアアアア!!!」

「ぐうううううう!!!」

敵は金属で身を守るが、二人の拳はその程度で防ぐことは出来なかったー

「おおおおお!!!」

「アアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

二人の拳は容赦なく敵を打ち砕く。凄まじい威力に閃光が漏れ爆発する。主を失った金属の塔は幻のように一瞬で崩れ落ちる…

「う……………」

デヴィットは朦朧する意識の中、わずかに目を開けた。見えたのは若きオールマイトの姿ー

「ー」

瞬きをする。拳を振り上げ、飛んでいたのは緑谷出久ー

「ーああ、ヒーローだ……………」

デヴィットは小さなその姿を、じつと目に焼き付けた……………

side 立香

「やったんだ…敵をやっつけたんだ!!」

崩れていく金属タワーを見て、ようやくじんわりと伝わった勝利に、峰田君の心からの叫びに、皆に笑顔が戻る。

「勝て…た……………」

「やった…よ……………姉……………」

私も立希もお互い疲弊して背中を合わせてその場に座り込む。勝利を喜びたいけど、疲労で動く事も出来ない。

「緑谷…君……………は?」

「えっ……………と……………あー……………遠くで……………メリッサさんと……………話してる……………多分……………オールマイトも……………デヴィットさんの……………ところ……………ろ

「……………」

「…立希？」

ドサリという音と共に立希の声が聞こえなくなった。後ろを見れば寝息を立てている…

「(あ……私……も……眠気……が……)」

安心したのか、私にも――

side 三人称

「―彼らは、誰よりもヒーローとして輝ける可能性を秘めている。」

「ああ……私にも見えるよ、トシ……あの場にいる全員が……君と同じ光が………」

全てが終わり、デヴィットとオールマイトは安堵する。長い夜が、ようやく眠りににつき、太陽が目覚め、I・アイランドに光りが差し込む……

第11話

side 立希

一夜明けて、I・アイランドの中にある湖の側のテラスに、自分を含め、Aクラス全員集まっていた。そして目の間には美味しそうな肉、野菜が鉄板グリルの上で焼かれている。そして――

「さあ！食べなさい！」

『いったただつきまーす!!』

オールマイトの合図で全員声をあげる。

「あー美味しー!!」

「うめえ〜！」

昨夜の事件で、今日予定されていたエキスポ一般公開は延期。そして自分達がシステム復旧の為に敵と戦ったことは公表しない事になった。自分達の将来の為とかで…で、その代わりにこうして戦闘の疲れを労う事と、イベント延期の代わりにバーベキューを皆で開催する事になった。

「H A H A H A！このバーベキューは私とー」

「ーこのダ・ヴィンチちゃんの奢りだからジャンジャン食べて行ってくれ！お腹いっぱい食べてくれると嬉しいかな？」

『誰ー！ー！ー！?!?!?』

「立希君と立香ちゃんのヒーローコスチュームを提供したCDF社長！レオナルド・ダ・ヴィンチさー！改めまして、よろしく。」

「社長ってマジかよ!!」

「H A H A H A!!社長の粋な計らいだ！さあ！食べなさい少年少女達ー！」

『ありがとうございまーす！』

「うんまー！」

飛ぶように鉄板から消えていく肉たち。そして飛ぶように鉄板に肉と野菜がジャンジャン置かれる…よく見たら中々の高級肉が串に刺さってる…

「通りで美味いわけだ…うめえ…」

「立希よく食うな!!てか喰い過ぎじゃね!？」

電気君が自分の隣にある皿の山を指摘して来た。だってお腹空いてるし…

side 立香

「ううくん!美味しいね!梅雨ちゃん!」

「ええ、青空を見ながらだと余計美味しくなる気がするわね!」

「仲いいなあ…」

私の近くで麗日さんと梅雨ちゃんがお互いに「あくん」と肉を楽しくそうに食べさせ合っている。

「バーベキューなんて初めてですけど、中々いいものですわね!お肉もお野菜もとても美味しいですわ!」

「うん。そうだね。」

私もヤオモモに習って食べる。それはもう…食べ終えた皿と串が大量に積み重なる程…それもお互い同じぐらいの高さ。

「無限……」

「そんなに腹減ってたのか」

そんな私達を見て、驚いている常闇君と焦凍君。

「ええ、昨日ずいぶん脂質を使い果たしてしまいましたので補給しないと……あら、このラム肉イケますわ!」

「私も…昨日の魔力を補充しないと…というか今も消費してるから…あ、このソーセージ美味しい…」

私もヤオモモも美味しく食べる。

side 三人称

バーベキューで盛り上がる中、峰田は嘆く

「ちくしよ〜両手いっぱい肉祭りくらいやらせろよ〜オイラの『美女でハーレム』の夢が無くなったんだから!」

「仕方ないでしょ。無免許で戦ったこの公表するわけにいかないんだから」

耳郎は呆れた顔をする。

「いくら人救けのためといえ、真相を明かすわけには行かない！」

「でもまあ…『ハーレム』ってならあそこに一人、なってる奴がいるぜ
〜」

「あゝあゝ？」

上鳴が指さす方向を峰田は見る。そこには――

「はいマ・ス・ター♡あーん♪」

「あーん…これご褒美になってるの？」

「クフー♪当然ですう〜良妻たるもの、殿方に『あ〜ん』させるのは夢
のシチュエーション！マスターといえど、今だけは対等に。一人の女
性として、エスコートしてくださいますか？」

「……はいはい…戦いご苦労様です…」

「ギター！ナデナデターイム!!あ、意外とコレええやん。鼻血でそ…」

立希に玉藻（水着）が料理を食べさせ、撫でられている。更に――

「セ・ン・パ〜イ♪そ〜んな『撫でポ』で魅了されちゃってる女狐なん
かより私にも構ってくださいさ〜い♪」

「んぐ!?BBちゃん!？」

BB（水着）も乱入。褐色かつ、ビキニで迫るため立希もタジタ
ジ。今回の戦闘の労いとして、立希は『レオナルド・ダ・ヴィンチ』、
『玉藻の前』、『BB』を召喚していたのだった。

「ふむ、ここは私も入った方が面白そうかな？」

更にニヤニヤしながらやってくるダ・ヴィンチ。

「いやダ・ヴィンチちゃん!?アンタ元男―ぢぐじょくくく!!!あんな
に頑張ったのにくくく!!」峰田君!!」

立希に美女三人（一人元男）が寄り添ってる所を見た峰田は号泣
しながら走り去る――

side 立香

「何やってんだか、あのバカ弟…」

肉を食べながら、立希の様子を遠くで眺め、ため息をつく。

「まあまあ、マスター。男とは、『英雄色を好む』と言うじゃないの♪」

「ええ…アイツが英雄になるわけじゃないじゃん…というか意味が違うで

しよ…」

隣で優雅に紅茶を飲んでいるマリーちゃんにツッコむ。私も今回の戦いで頑張った『燕青』、『諸葛孔明』、『マリー・アントワネット』を召喚してバーベキューを振舞う。というか孔明先生スーツ姿で暑くない？

「藤丸さん？その女性は一体どなたですか？」

「なんか回りに薔薇咲いてね？」

「マリーちゃんの事？」

『マリーちゃん？』

「マリー・アントワネット」

「ヴィヴ・ラ・フランス♪」

『お姫様ー!?!』

何か全員が叫ぶの久しぶりに見るなあ…

「ハプスブルク家の系譜にあたるフランス王妃!!十八世紀、ルイ十六世の妃。億貴婦人。欧州世界の『高貴による支配』を象徴する存在ですわ!」

そして久しぶりに博識のヤオモモも見るなあ…

「アレか!『パンが無いのであれば菓子を食べればいい』って言ったた…」

「そんな事私は言っていないわ。誰かが言っただけを私が言った事になったのよ…」

「しかも実際は『ワインを飲むのにパンがないので、あの夫人の言葉に倣ってブリオッシュを御供にしたら意外に美味しかった』だし、全然違うよね」

「何かスゲー事聞いたぜオイ…」

「じゃあ夏なのにスーツ着てるあの男性は誰!?!」

「フン…」

麗日ちゃんに指さされた孔明先生は無視して肉を食べている。

「先生だよ。諸葛孔明先生」

『三国志ーー!!』

「三国時代に謳われた天才軍師!!お会いできて光栄ですわ!!」

驚き連発すぎない？

「じゃあ何か声が爆豪君に似てるお兄さんは!？」

「おやあ、俺を知ってるかい?」

「燕青。」

『……………誰?』

「あらら…中国四大奇書「水滸伝」に登場する天巧星を背負いし男ですわ。架空の存在ですが中国拳法の流派のひとつ『燕青拳』の開祖と言われています」おおく嬢ちゃん、詳しいねえ、嬉しいこったあ」

「いやヤオモモ博識すぎ…マイナーでしょ最後の人…」

改めてヤオモモの博識の凄さを知った。

それから、事件の件は…デヴィットさんは自分がした事を全て話した。今は重症で入院し、治療中。治り次第、取り調べ始まるという。その間はずつとメリツサさんが看病してるとか…

「—ふう……………疲れた…焦凍君もお疲れ様」

「ああ。立香もな…」

既に私と焦凍君はI・アイランドを出て、小型ジェット機に乗っている。他の皆も既に出て行ってるはずだ。

「…どんなスゴイ功績を持った人でも…簡単に悪に染まっちゃうんだね…」

「…ああ…けど俺達はヒーローになるには、こういった哀しい事件に遭う…………それをどう解決するかは、ヒーローとして頑張らなきゃ行けねえよな…」

「うん…………ふう、あー止め止め!こんな悲しい気分は終わり!こうして無事に皆救けたし、皆無事だった!」

「立香…」

「無事解決したからもう過去の事は振り返らない!それに、私達は過去より未来の方が大事でしょ!だって私達は…ヒーロー何だから!」
「…………ふっ…そうだな」

二羽の鳥が空へと羽ばたく。輝く夕日の空へ—
未来へ—

HEROES RISING

第1話

side 三人称

夜。凍えた山の中。街明かりが遠く見える山間道路を爆走する装甲車。その装甲車には敵連合が運転しており、それをヒーロー達が追走していた。

「『プロミネンスバーン』!!」

「くそ、ここまでか!!」

しかし敵連合はエンデヴァーから放たれた炎によって装甲車ごと鎮圧。装甲車は崖から落下する。敵連合は全員トウワイスの『複製』。炎によって掻き消された

「待ちくたびれたぜ…ナイン」

装甲車が落下した地点からだいぶ離れた場所にて、数人集まっていた。ナインと呼ばれた人物は振り返り、街明かりを見下ろす。

「―実験は成功した。」

ナインの言葉に、集っていた人物達は不敵に笑うのだった…

那歩島。そこは本州から遠く離れた離島。一年を通して冬とは無関係な気候と気温をもつ島。その島には今日も大勢の島民や観光客が海水浴などを楽しんでいる。

「ねえねえ、オレらと一緒に遊ぼうよ♪」

「ぼーよ♪ぼーよ♪」

暑ければ人は開放的になる。近くの海の家にて、二人組の男が二人組の女の子に声を掛ける―所謂ナンパだ。

「結構です!」

「そんな事言わずにやー!」

女性二人の迷惑顔にも気付かず追いかけようとする男二人。その時

「あだあ!?!」

男二人は盛大にこけた。二人の足には黒いゴムボールのようなも

のがくつついていた。

「なんだこれ!？」

「と、取れねえ!？」

「お怪我はありませんか？お嬢さん」

「!」

男達がじたばたともがく中、これ見よがしに女の子二人の前に現れたのは峰田だった。黒いゴムボールのようなものは峰田の“個性”『もぎもぎ』。峰田は爽やかな笑顔を見せる

「(さあ感謝しろ！ナンパ野郎から助けたこのオイラを!!)」

「ありがとう!」

「助かりました!」

女の子二人は峰田に駆け寄る—

「いえ、今のは俺ではなくて…」

「えーと、自分じゃなくですね…」

—のではなく、素通りし、峰田と行動していた尾白、そして立希に感謝するのだった。

「ヒーローですか!?!強そうな尻尾…ステキ♪」

「颯爽と現れて助けてくれる…カツコイイ♪」

「ええと…」

「下ー!視線下アー!!」

勘違いされ、恥ずかしそうに戸惑う尾白と立希。峰田は悔しきで憤慨するのだった…

場所は変わり、那歩島の上空。日の光が燦々と照らされる中、人影があつた…

「…あ、っづ………」

その人物の正体は立香。普段の姿とは異なり、小さい翼の生えた黒髪に赤い瞳。腰あたりから白くカーブかかった翼が生え、右手に白い槍、左手に盾が装備されている。立香は『ワルキューレ・オルトリンデ』と『降霊』し、上空から街を偵察しているのだった

「フード被ってもキツイ…」

『立香、応答どうぞ』

「はい。こちら立香。どうぞ」

『鈴木のおじいさんが健康診断のため病院へと送り届けて欲しいとどうぞ』

「了解。これから行きます」

八百万からの通信にて、立香は目的地に向かう。着地地点に降りるとそこには一人の老人がおり、拜んでいた

「おお…天女様じゃ…遂にワシにも迎えが来たのかのお…」

「え、いや確かに迎えに来ましたけどそういう意味の迎えじゃないですよ!?病院までです!」

「おお、そうじゃったそうじゃった。よろしくたのむのお」

「はい。いつでもお任せください」

立香は老人を抱え、島の病院へと飛び立つ。

那歩島。この小さな島で、雄英高校ヒーロー科1年A組の生徒22名はヒーロー活動をしているのだった……

side 立希

雪が降り始めた頃。HRにて相澤先生から伝えられた。

「ヒーロー活動推奨プロジェクト…お前らの勤務地ははるか南にある『那歩島』だ。駐在していたプロヒーローが高齢で引退。後任が来るまでの間、お前らが代理でヒーロー活動を行う。」

『ものすごくヒーローっぽいキターっ!!』

自分達は立ちあがって叫んだ。今の現代社会は元・No1ヒーロー、オールマイトの引退を気に敵連合が活発に動き出した。平和の象徴の穴を埋めようと必死にヒーロー達は動く。その一環として、『次世代のヒーロー育成』という提案が出され、自分達1年A組が参加する事になったのだ。

「ていうかもうヒーローじゃん!」

「テンションウエイ!」

三奈の言葉に電気君が呼応する。

「やる気みなぎるぜ!」

鋭児郎君も強く拳を握りしめる。

「最後まで聞け」

と、ここで相澤先生が威圧し、一瞬で静寂。もうここまでがお約束感ある…

「このプロジェクトは規定により俺達教師やプロヒーローのバックアップは一切無い。当然、何かあった場合、責任はお前らが負う事になる。その事を肝に銘じ、ヒーローとしてあるべき行動をしろ。いいな?」

『はい!』

期間は一ヶ月。廃業していた元旅館を借り上げ事務所として、ヒーロー活動の拠点にする。自分含め、皆やる気満々だ。

「姉、楽しみだね」

「ん。そうだね。」

全員がヒーローとして、仕事に向き合う…

「あ、つづい…」

「同感だね…」

「オイラは暑さに屈しねえ!」

…という事で、現在自分は尾白君と峰田君と共にビーチ内をパトロール中。広い砂浜に大勢の観光客に島民。色々と大変だ。さっきのナンパもその一つ。

「(この高気温での戦闘衣装―極地用カルデア服はキツイ…) 他の皆はどう?」

「さつき砂糖と梅雨ちゃんが海に溺れそうになってた子供を助けてたよ。まあ…砂糖の顔を見て泣きじやくってたけど…」

「きつと顔が怖かったんだろ?…そして峰田君はまだ怒ってるの?そろそろ機嫌直って欲しいんだけど…」

「うるせえー! オイラの勝利を横取りしやがってえー!!」

さつきの女の子二人からの感謝を貰えなかった峰田君。もはや血涙を流す程だ…

「俺も藤丸も峰田が助けたって訂正して、ちゃんと感謝されたからいいだろ…」

「そうじゃねーんだよおお!! 確かに感謝されたけどよお…対応が違

かったじやねえか!!」

「…まあ確かに訂正して、峰田君にお礼言つてたけど…」「ありがとうございました。」って言われただけで去っていったね。うん

「お前ら二人には『ステキ』とか『カッコイイ』って言われたけどオイラには何も言われてねえんだよおお!!」

「どないせえっちゆうねん…」「(おい、マスター聞こえてるかあ…?)」聞こえてるよ、ロビン。」

丁度、自分の「個性」『英霊召喚』で呼んで偵察させていたアーチャー、『ロビンフッド』から連絡が来た。

「何か異状は?」

「(特に無し。ただまあ上空にいる嬢ちゃん暑さで辛そうな顔してたぜ)」

「姉かあ…まあ仕方がないね。この炎天下だし…引き続き偵察よろしく」

「(了解……ところでちよいちよいナンパされて困るんだけど—)」

これ以上は無駄話になるから強制終了。知らん。態々水着姿で動いてる自己責任だ。

「藤丸が召喚した人からの連絡?」

「ん。特に異常無しだった。後は…」「イヤッホウウウウウウウウウウウツ!!」来た来た」

海の方を見れば、それはとてつもない大きな波。その波の上に一人の人影。歓喜と共にその波を乗り、跳躍。そして、勢いよく自分の前に着地する。

「どわあ!?!」

「ひい!?!」

その勢いに尾白君は驚き、そして峰田君は目の前にサーファーが突き刺さり、体を硬直させる。対して、自分はその人物のはしやぎつぷりに慣れ、いつもの様に接する。

「サモさん。どう?海の警備は大丈夫?」

「おうマスター!問題ねえぜ!さつきみてえな波で溺れそうになつたやつらがチラホラいたがささっと助けておいたぜ!それじゃ、もつ

かいビッグウエーブに挑戦してみるか！」

もう一人呼んでいたライダー。『モードレッド（水着）』。スーパーウルトラサーファー モードレッド・ビキニスタイル。通称サモさんはそう言っただけでまた海へと行く。彼女の豪快な行動に二人はただ唾然するしかなかった

「す、すごい人…呼んでたんだな…」

「アレはちよつと開放し過ぎな所があるんだけどね…さ、引き続き頑張ろう。ほら峰田君。女性の水着見てないで行くよ」

「オイラは…オイラはああああ!!」

峰田君の声が響く。

side 立香

『解除』。今日の仕事終了…ふう

「炎天下の中、お疲れ様ですわ。立香」

夕方になって、事務所への依頼が落ち着いた。私含め、引つ切り無しで働いてた面々がぐったりしている。

「疲れたな…」

「労働基準法プルスウルトラしてるし…」

砂糖君と上鳴君がぼやく。私もそれに同感だ。冷たい麦茶で補給する。

「ヤオモモ、これが毎日続くと皆の疲労がたまるんじゃない？」

「ですが…ヒーロー活動は信頼が大事。着実にこなし、島の皆様からの信頼を得なければ…」

「八百万くんの言う通り！」

ヤオモモと話していると飯田君がきっぱり言う。

「事件に細かいも大きいもない。迷子、捜し物、道案内…どれもヒーローにとつて立派な仕事だ。」

その意見に反対する人はいない。確かにヒーロー活動するにあたっては信頼が大いに大事だ。

「はい…ここに来て一度もヒーロー活動してない奴がいるんですけど…」

「あ、あ？…わざと事務所に残ってんだよ。お前らが出払ってる時に敵が出たらどうすんだ、あ!？」

「この島に敵いねーだろ」

峰田君に指摘された爆豪君は威嚇し、それを宥める切島君。

「姉お疲れー…ずっと空飛んで暑くなかった？」

「暑くないわけではないでしょ。今日も高齢者の人達を運んで飛んでの繰り返しだった。そっちは？」

「ロビンとサモさん呼んでパトロール。黒服は暑い。というか熱い」

その後、島民たちを引き連れて来た村長さんがやってきて、差し入れを持ってきてくれた。他にも今日助けてくれたお礼としてこれまた大量の差し入れが運ばれる。

「これからもよろしくね」

『はい！』

今日の夕食は豪華になった。

第2話

side 三人称

本島のとある場所：

「結局、積荷はどこに行つたんでしょう？」

今は使われてない資材置き場のプレハブ小屋にて、死柄木含む敵連合はあの夜の装甲車と積荷の件を話していた。今回の輸送の件はAFOの右腕とも言えるドクターから荷物の運送を頼まれたのだった。「そもそも積荷の中身は何だったわけ？」

「ドクター曰く『知る必要はない』そうだ」

「何だそりゃ？」

「ますます気になりますねえ」

トガヒミコ含め、死柄木以外の敵達は荷物の事に興味を持つが…

「兎に角忘れる。いいな」

それを死柄木が無理矢理止めさせ、何処かへ出歩くのだった…

「—ようやく、見つけた…」

「ぐうっ！…うっ！…うう！…うう！…！」

本島の都市部、交差点にて…ナインが軽トラックを運転していた男性を車から引きずりだしていた。

「殺しはしない。だが—」

「な…なにを……」

ナインはその男性の頭を掴み「個性」を使うと、得体のしれないエネルギーが男性から漂い始め、ナインに吸収されるのだった。

「—「個性」をもらう」

「あ、ああああ、ああああ……」

何かを吸収された男性は項垂れ、その場で気絶する。ナインは吸収し終わると、再び「個性」を使った。腕を振り下ろすと同時、都市に巨大な雷が降り注がれる。その衝撃と威力にビルが倒壊し、いたるところに火の手があがる。その光景を嬉々として、ナインと共にいた仲間達が見ていた。

「ついに手に入れたか」

「これで…実現する」

「私達の望む…新世界が…」

3人はナインを神の様に見ていたときだった。

「グッ」

「ナイン!」

突然、ナインは蹲った。ナインの体にはヒビが広がっていた。

「……! B型が不足している……」

ナインは「個性」で原因を見つけ、結論付けた。その言葉に仲間達はショックを受ける。

「何…」

「ここまで来たのに振り出しかよ、クソが!」

「いいえ! まだ策はあるわ」

ナインの仲間の一人がスマホをナインに見せた。そのスマホは先の男性が持っていたスマホだった。

『お父さん、お仕事頑張って!』

『こつちの事は心配しなくてもいいよ。—』

スマホに流れる動画には二人の子供が映し出されていた。それを見たナインは呟く

「……そうだった…… “個性” は……遺伝する……」

動画に移されていた子供二人は……那歩島にいるのだった…

side 立希

「—結局、イタズラだったの?」

「うん…そんな感じだったのかな?」

朝。自分は緑谷君の話を聞いていた。理由は昨夜、緑谷君と爆豪君がどこかに行っていたところを見たからだ。そしてそれほど時間をかけずに戻って来たから問題は無いと思ったけど、気になったから訊いてみた…内容は男の子が「敵を見た」と訴えてきて、その場所に行ったら女の子が「個性」で『幻の敵』を出して爆豪君と戦闘して…爆豪君に怒られるのだった。

「爆豪君相手によく挑んだね……恐かっただろうに…」

「流石にやりすぎだったから僕が何とか止めたけど…あの子二人、姉弟らしい。」

男の子は活真、女の子が真幌という名前。

「(ま、見かけたら軽く挨拶でもしておこ……)」

今日も自分達のヒーロー事務所は朝から忙しくなる。

side 立香

朝から大忙し。今日も私は島上空を飛ぶ。ついさつき島民の鈴木さんを家まで送り届けた。

「お待たせしました」

「この歳で空を飛べるなんていいねえ…またお願いね」

「はい。いつでも呼んでください」

何か私…体のいいタクシーになってるような…なってない？

「お互い、頑張ろう！」

「うん！」

「(ん?)」

近くで、緑谷君の声が聞こえた。そしてもう一人。子供の声。見ると走り去る子供の姿があった。

「(もしかして、今朝、緑谷君が言ってた子の一人?)」

今朝ふと耳に入った緑谷君と立希の話を私は聞いていた。確か名前前は活真君…

「あ、藤丸さん。パトロール中？」

「ううん。今鈴木さんを家まで送り終えたところ。」

緑谷君と話していると、鈴木さんが来た。収穫したばかりの野菜を持ってきてくれたのだった。その時

「優しくあげてね」

「?」

「あのコン家ね、母親を早く亡くして、父親は年中出稼ぎ…姉の真幌ちゃんと二人きりで暮らしてるんだよ。もちろんあたしら近所の者も面倒をみてるよ。けど、あの年で親がいないってのは寂しいだろうから。」

と、鈴木さんが教えて来た。どうやらすれ違った所を見られてたらしい。

「…分かりました。今度見かけたら、話かけてみます」

「頼んだよお」

姉弟の家庭事情を知った後、私はいつものように島の上空をパトロールしに行く。

side 三人称

島の漁港に、一隻のフェリーがやって来た。だが、そのフェリーは止まることなく、猛スピードで防波堤を破壊したのだった。突然の事に漁師たちは啞然とする。

「防波堤が…」

「なんでフェリーが…」

「おい…なんかヤベエぞ…」

暴走するフェリーは躊躇することなく更にスピードをあげ、漁港へと向かう。

「おいおいおいおい!!」

「うわあああ!!」

「逃げろおおおお!!」

逃げだす漁師たちをあとにフェリーが勢いよく突っ込み、大きな音と波を立てながら岸壁に座礁した。そして―

「キメラ、マミー、スライス、邪魔されたくない。陽動を頼む。」

フェリーから降りてきたのは…ナイン達だった。

「やり方は?」

「好きにしている」

「承知」

「あいよ」

「わかってるわ」

ナインの仲間…キメラは葉巻を啣えながら了承。マミーは頷き、スライスも答える。3人はそれぞれ三方に飛散する。

「なに……どういこと……」

「ヴィ…敵だ…あれ、きつと敵だ…!」

漁港を見下ろせる公園にいた女の子と男の子―真幌と活真は目の前で起こった光景に信じられなかった…

side 立香

「!今の音は何!?!」

島の上空まで響いた衝撃音。何か巨大な質量同時がぶつかった音だ。音が聞こえた方を『双眼鏡』で見れば、そこにはフェリーが防波堤を壊し、漁港に突撃していた。直ぐに事務所に連絡する

「こちら立香!ヤオモモ!聞こえる!?!漁港に異常事態発生!」

『はい!こちらヤオーブツ』

「!?!」

通信が途中でキレた。スイッチを押しても反応がない。スマホを使おうと画面を見ると…

「圏外…っ!?!」

そう画面に映し出されていた。その時再び轟音。出所は漁港と商店街と浜辺。

「っ…兎に角動くしかない!」

私は漁港へと向かった。

第3話

side 三人称

少し時間が遡り、商店街にて、峰田、青山、葉隠がヒーロー活動を終えた時、近くで爆発音が響いた。

「!?なんだ!」

あわてて現場に向かうと、そこには悲鳴を上げながら逃げてくる島民たち。そして逃げる島民たちの後ろには敵—マミーが歩いていた。

「ヒーロー! ヴィ、敵だあ!」

「マジで敵じゃねーか!」

「唐突すぎるね!」

「ほほう……こんな辺境にヒーローが三人も……」

マミーも峰田達の存在に気付き、攻撃を開始する。マミーは「個性」『木乃伊化(ミイラ)』で自身に纏っている包帯を勢いよく無数に飛ばす。包帯は周囲にあった車、自販機などに絡みつくとミイラへと変化する。

「な、何とかしなくちゃ!」

「青山、ヘソビームだ!」

「ネビルレーザーだから!」

青山達は怖気づきつつも応戦。青山は『ネビルレーザー』を撃ち続け、峰田は『もぎもぎ』を投げミイラの動きを封じる。だがしかし、ミイラの数が多すぎる。

「葉隠! 事務所への連絡は!」

「電話繋がらない…旗が立ってないよ!」

連絡しようと試みた葉隠だが、スマホ画面には圏外と写されていた。

「クソ! どうすりゃいいんだ!」

迫りくるピンチに峰田が叫ぶ。その間にもミイラが襲い掛かる…

「―成敗(ブレイク)!」

「!!!」

その時、巨大な手裏剣が青山、峰田、葉隠の前を横切り、襲い掛かっ

てきたミイラ達を斬り飛ばすのだった。

「何奴！」

「バケーション兼パトロール中でしたが…戦闘開始！」

「だ、誰!？」

近くの電信柱の上に降りたつたのは、黒帽子を深く被った、ノースリーブの服を着た少年――

「サーヴァント、アサシン。風魔小太郎。主殿の指示の元、助太刀致す!!」

――服を勢いよく脱ぎ捨て、忍び装束と変わる。アサシン、『風魔小太郎』。苦無を構え、マミーを睨む。

「藤丸姉弟のどつちかが呼んだ奴か！」

「頼もしいね☆」

「ありがとう！」

「……一人増えた程度で、何も変わり無い！」

風魔が参戦し、戦闘は激しくなる……

side 立香

「藤丸さん！」

「緑谷君！漁港にフェリーが激突！連絡しようにも繋がらない！」

漁港の方に飛んでいる時、緑谷君と合流し、そのまま私達は漁港へと向かう。

「さつき真幌ちゃんから電話来たけど途切れて…やっぱり敵が…っ」

「まづいかも…」

私達は直ぐに漁港にたどり着く。活気がありながらもどかだった場所が見るも無残な事になっていた。そしてそこには――

「その敵！船を壊すのは止めなさい!!」

「あら…可愛いヒーロー達ね…」

敵――女性が髪を針のように変化させ、雨の様に降り注がせ、漁船や小型ボートを破壊し尽くしていた。

「それ以上の悪行は許さない…っ！」

緑谷君と私は戦闘態勢に移る。

「(敵の「個性」は…髪を刃物にする…) 何しにこの島に来たの!？」
「私の名はスライス。ここに来た理由は…答えるわけ無いわ!!」
「っ!」

敵―スライスが指先に仕込んでいた刃で私と緑谷君に斬り掛かって来た。私は直ぐに前に移動し、装備していた盾で防ぐ。

「藤丸さん!」

「大丈夫!!ハッ!!」

「!」

防ぎ終え、今度は私が前進し白の槍で反撃。突きを放つがスライスは髪を『刃物』と化し弾き、距離を置いた。

「へえ…中々やるじゃない…」

「緑谷君!…ここには真幌ちゃん達はいない!急いで探して!」

「っ…分かった。ここは任せた!!」

槍と盾を構えながら、私は緑谷君を行かせる。スライスは…私を見て笑みを浮かべていた。まるでそんな事しても意味が無いと言っているようだった。

「抵抗は無駄!今すぐ降伏して!」

「ふふ…冗談…行くわよお!!」

「(説得は皆無!!) 来て!『ランサー』!」

ここで私は敵を抑える!

side 立希

いきなり轟音が響いたと思いきや、敵が来た。ビーチにて、人々が逃げまどっている中、敵―狼の顔を持ったキメラのような姿の人物が海の家を破壊しながらやって来た。破壊音と衝撃から途轍もなく力を持つていると分かった。

「(敵!事務所連絡…) !繋がらない…!?!」

連絡しようとスマホを使ったが、圏外と写し出された。姉に通信しても、繋がらなかった。

「フロップピー!テンタコル!皆の避難を最優先に!」

「わかってる!」

「ケロ！」

尾白君が敵に向かいながら梅雨さんと障子君に指示を飛ばす。自分も動かないと!!

「今日呼んでてよかった…行くよ！マルタさん！」

「ヤルってんなら！とことんヤルわよ！」

今日もビーチは一段と多くの人がいたから2人—ルーラー、『マルタ（水着）』とアサシン、『風魔小太郎』を召喚していた。マルタさんを敵に向かわせる。

「（主殿！）」

風魔から連絡が来た。

「風魔緊急事態—こっち来れる!？」

「（報告。商店街にて敵発見！敵は包帯で作られた軍にて侵略中。それを金髪の少年、紫の少年、見えない人物が応戦中です！）」

「つ…敵は一人じゃない…分かった。風魔はその3人と応戦！宝具は使っていないけど使うと退却しちゃうからタイミング考えて！こっちも敵がいるからそっちに行けないけど…何とかする！」

「（御意！）」

『『尾空旋舞』!!』

「はっ！弱えな！」

キメラに特攻した尾白君。尻尾を旋回させて放つ打撃だが、キメラはそれを簡単に受け止め容赦なく上空へぶん投げる。

「くっ—『尾白！』常闇！」

「常闇君！」

その時、上空にて『黒影（ダークシャドウ）』を纏った常闇君が尾白君を受け止め、下ろしてくれる。

『『黒影（ダークシャドウ）』!!』

『あいよ！』

「ふん！」

『黒影（ダークシャドウ）』とキメラがぶつかるが、キメラの力が強く、『黒影（ダークシャドウ）』は常闇君の元まで後退してしまう。その時の風圧で吹き飛びそうになるが、何とか耐える。

「常闇君！事務所に戻って応援を！」

自分は常闇にそう言う

「藤丸弟！しかし！」「藤丸の言う通りだ！ここは俺達が持ちこたえてみせる！」っ…分かった！」

尾白君も賛同し、常闇君は事務所へと飛翔する。

「マギ！行くぞ!!」

残った尾白君、マルタさんと共にキメラに立ち向かう。

「了解！マルタさん！」

「マルタ、拳を解禁します！」

「ヒーローにしては若いな」

自分達の後ろにはまだ避難が終わってない人達でいっぱいだ。梅雨さんと障子君の避難誘導が終わるまで自分達が時間稼ぎをする！

第4話

side 三人称

敵が来た時、事務所に真幌から電話が来たが、直ぐに通話が途絶える。その電話に出ていた爆豪と緑谷。爆豪は昨夜の悪戯の続きだと思いい、真に受けずに対応。緑谷は直ぐに事務所から出て行く。それから少し時間が経過した時、麗日がスマホを見て気付く。

「あれ？携帯が圏外になっとる！」

その声で事務所にいたメンバーが自身のスマホを見て圏外だと知る。

「どうなってるんだ？」

各々首を傾げる。その時、爆豪はさっきの真幌からの電話を思い出す。

「(まさか…)」

爆豪が眉をひそめた時、バイクに乗った島民が切羽詰まった声で叫んで来た。

「大変だあー！ヴィ、敵が出た!!」

「敵が!？」

全員がその島民に駆け寄る。

「商店街で暴れ回ってる！ヒーロー達が戦ってくれてるけど…！」

そして上空から常闇が戻ってくる。

「報告！海岸に敵が出現！」

「何だと…!？」

「浜辺にも敵出現！尾白達が防戦！応援を請う！」

「んだと!？」

「…！立香も危ないですわ！通信が途切れる前に『漁港』と言っておりましたわ！」

常闇、八百万の報告に皆驚く。そんな中、飯田は全員に指示をする。「ここに居るもの四班に分け対応する！爆豪君、切島君、上鳴君は商店街へ敵を迎撃！八百万くん、耳郎くん、芦戸くんは商店街にいる島民の救助と避難を！轟君、砂糖君、瀬呂君、常闇君は俺と一緒に浜辺に

！麗日くんと口田君は漁港に行き藤丸くんの援護を！」

皆の顔には非常事態への覚悟が浮かんでいた。

「雄英高校ヒーロー科1年A組！出動！」

『おうー！』

その想いを胸に、全員が事務所を飛び出す。

商店街。迫りくるマミーの『木乃伊化』に操られる木乃伊化達相手に峰田、青山、葉隠、そして風魔が応戦し、じりじりと村役場の前まで後退させられていた。役場には多くの住民が避難しているため、これ以上は後ろへ行く事が出来ない。

「も、もう…お腹…限界…」

ここで腹痛に耐えながら『ネビルレーザー』を発射していた青山が崩れるように蹲る。

「オイラの頭皮も限界だあ…！」

青山の隣で峰田も『もぎもぎ』をもぎり過ぎ、頭から血を流していた。そんな限界な二人に容赦なくミイラ達が襲い掛かる。

「峰田君！青山君！」

「させない！アタック！」

そこへ風魔が割り込むように青山と峰田の前へと乱入。鎖鎌でミイラ一体を切り落とし、更に――

「発破！」

苦無を地面に突き立て、ミイラが立っている場所を爆破し、撃退する。その隙に葉隠れは青山と峰田の元に向かう。

「ありがとう！忍者さん！今の内に二人を中へ！」はい！」

「うう…すまねえ…」

「メル…シィー…」

風魔の指示に葉隠は青山と峰田を担ぎ、役場の入り口前まで避難させる。マミーはゆっくり役場へと向かう。道中にある車、販売機などを『木乃伊化（ミイラ）』でミイラにしながら…大量にミイラが風魔を取り囲む

「この数相手に貴様一人で立ち向かうのか？」

「ふっ…この程度の相手、忍びとて苦ではない…そして誰が一人で立

ち向かうと言った？」

「何―「はっは―！雑魚共が！よつてたかつてんじやねえ!!」―！」
突如、数体のミイラが爆散。爆発の煙の中から現れたのは爆豪だった。

「オラー！烈怒頼雄斗！参上！」

「同じく、チャージズマ参上！」

更に、爆豪の後ろから、『硬化』した切島が襲い掛かるミイラを吹っ飛ばしながら、その近くでポインターを使つてのピンポイント『放電』でミイラを撃退する上鳴の二人が現れる。

「仲間か…！」

マミーは包帯を操りながら忌々しげに呟く。そして3人だけではなく、役場の後ろの道から八百万、耳郎、芦戸がやって来る。

「皆さん！」

「ヤオモモ！皆！」

「無事!？」

安堵する葉隠。耳郎達はぐったりした青山と峰田を支える。

「時間稼ぎ…貴様と戦いながらもこちらに来る足音が聞こえてた故…間に合つてよかった」

風魔は苦無を構えながらそう呟く

「この忍者っぽい人は誰だ!？」

「風魔小太郎。主殿―藤丸立希の指示の元、助太刀致す」

「立希が呼んだ人物か！そりゃ心強え！」

「はっ！足引つ張んじやねーぞ!!」

爆豪、上鳴、切島、風魔が動き、次々とミイラを撃退していく。

「さすが風魔一族であり、第五代目頭目。北条早雲の後継者氏綱に仕えた人物ですわ……っ！私達は島民の皆さんの避難と救援を！」

「うん！」

「わかった！」

その間に八百万、耳郎、葉隠が役場に避難した人達を誘導するため駆け出す。ミラーはそうはさせないと八百万達に大量のミイラを襲い掛かせようと操る。

「せいっ！させない！」

それを風魔が察知し、苦無を使った乱舞により、ミイラは斬り崩れる。

『徹甲弾機関銃』!!」

その間にも次々とミイラを撃退する爆豪。その爆豪の背後からミイラが襲い掛かる。

「オラア!!」

それを察知した切島は飛び蹴りで撃退

「そこだあ！」

隙を伺っていたミラーが動く。爆豪を助けに動いた切島の腕に包帯を巻き付ける

「しまっ「何してんだあ！」わりー」

引つ張られる切島。だが爆豪が『爆破』で引きちぎる切島は謝罪しようとした時、先程爆豪がちぎった包帯の先が爆豪の腕に素早く巻き付いたのを見た。

「ダツ……この……！」

「爆豪！」

包帯に巻き付かれ爆豪が持ち上げられる。引きはがそうと暴れる爆豪だが、包帯はすばやく巻き付く。

「この……くそ……どわあ!!」

上鳴が『放電』で助けようとしたが、襲い掛かってきたミイラに邪魔され、避けるのが精いっぱいだった。

「なんだんだこりゃ……！」

マミーが見上げる前で、爆豪の全身に包帯が巻き付く。その光景をみた切島は冷や汗をかきながら言いこぼす。

「包帯に巻き付かれたものは拙者の意のままに動く。生物に効果は無いが、お前が身に付いている物質……プロテクターや衣服は拙者の想いのままとなる。」

「爆豪！」

「おわっ！」

完全に包帯が巻き付かれた爆豪はミイラとなり、マミーに操られ、

切島と上鳴を襲いかかる。とつさに二人は避け、ミイラ爆豪の拳が地面を大きく抉る。

「っ！遅かったか！」

風魔もミイラ爆豪の前に現れる。先まで八百万たちの避難を妨害してくるミイラ達を迎撃していたのだった。爆豪が包帯に巻き込まれているところを視認し、助けに行こうにもミイラに妨害され、動く事が出来なかった。

「仲間同士で潰し合うがいい」

マミーはほくそ笑む。

side立希

浜辺にて自分、マルタさん、尾白君でキメラに対抗する。

「女の癖に…やるじゃねえか!!」

「甘く見るなっつての!!」

「(『幻想強化』してるのに互角!?)」

現在、マルタさんとキメラがお互い両拳をつかんで拮抗状態となる。自分はサポートでマルタさんを強化しているが…まるで戦況が変わらず、戦慄していた。

「そろそろ強化状態が解除される…っ」「おお!!」…尾白君！

尾白君が腕と尾を使い、キメラへと接近する。

「ああ…!?!邪魔すんじゃねえ!!」

「ぐっ！」

「きやつ！」

キメラは力を込め、マルタさんを放り投げ、そのまま尾白君の方を向き、容赦ない力で弾き飛ばす。

「尾白君！マルタさん！」

「ガハ！」

「きい…たあ！」

尾白君は砂浜に激しくバウンドし、不時着。自分はちようどマルタさんが放り投げられた場所にいたため背中から受け止める。

「マルタさん大丈夫!?!」

「ええ、問題無いわ…いいわ。ノツてきたわよ…っ！」

マルタさんは瞬時にスキル『天性の肉体（海）』で回復し、自分の前に立つ。まだまだ動けるマルタさんは不敵な笑みを浮かべながら拳を構える。

「藤丸！尾白を頼む！『オクトブロー』!!」

「障子君!?!」

後ろから障子君が『複製腕』を大量に生やし、キメラに向かっていった。自分は直ぐに止めようと動いたが遅かった。

「そのなり、お前…」

「ガッ…」

キメラは障子君が攻撃を繰り返す前に、片手で顔をつかみ上げた

「…相当虐められた口だろ…両親を恨まれるなかつたかあ!?!」

「う…ぐぐ…」

キメラの顔には怒りが浮かんでいた。そして障子君の顔をつかんでいる指に力を込めていた。マズイ!

「マルタさん!」

「鋭くいくのね!わかってるわ!!」

自分はマルタさんに指示を飛ばし、キメラに向かわせる。と、その時—

「おおお!!せりゃあ!!」

キメラの後方から流れるような砂煙が舞い、近づいてくる。

「飯田君!」

『エンジン』を加速させた飯田君だった。そのスピードのまま、キメラの顔面に強烈な蹴りを浴びせる。

「ぐっ…」

不意打ちだったため、キメラは体勢を崩す。その隙に、飯田君は障子君を掻つ攫い後退。だがこれで終わりじゃない。タイミング良く、マルタさんがキメラの懐に入った。しかも飯田君の蹴りで体勢が崩れたため、隙が生まれる。

「スキル発動!!」

「こうしなくちや分からないようね…ハレルヤ!!」

ここ逃すわけにはいかない。自分は『水辺の聖女』を発動させ強化。マルタさんの拳はキメラを捕えた！

「ツー!？」

ズドンという重低音が響く。入った!と自分は思った。

「まだ…終わらねえぞおおおおお!!!」

「なっ!？」

キメラが吠えた。その余波でマルタさんが吹き飛び、自分は再度マルタさんを受け止める。

「鈍ってるわね…：情けない…：…」

「マルタさん…お疲れ、今は休んで」

自分はマルタさんを退却させる。ビーチにいた人達の避難誘導の為、ここまでずつとキメラと近接戦闘させていた。回復させていたとはいえ、さっきの攻撃で終わりだ。魔力が消費され、疲労が一気に来る。

「立希!…ここは俺らに任せろ!」

「尾白達を頼む!」

「!」

刹那、キメラの足元に『氷結』が放たれた。氷結の根元には手を翳した焦凍君、キメラを『テープ』で拘束しながら走ってくる瀬呂君が来た。

「今だ!常闇君!砂糖君!」

「行け!」

「おおおっ!『シュガーラッシュ』!!」

間髪入れず、飯田君の指示で上空から砂糖君を抱えた常闇君がキメラへと急降下。糖分接種で強化した砂糖君が雄叫びを上げながら向かっていく。

「凶に乗るなあ!!」

「なっ!？」

だがキメラは一気に『テープ』と『氷結』を引きちぎり、砕き、破壊する。そのまま向かってくる砂糖君に向けて拳を振るう。

「ぐっ—あああああ!!」

「砂糖君!!」

砂糖君は咄嗟に防御したが、吹っ飛ばされ、岩礁に直撃。

「砂糖くーっ」

「立希！無理するな！」

自分は駆け寄ろうとしたとき、膝を付いてしまう。魔力消費が激しく、体力低下をしてしまった。この感じは…風魔の魔力消費だ！商店街の方でもギリギリだったか…っ

「立希ちゃん、ここは下がりましたよ。後は飯田ちゃん達が…」

「ごめん…皆…」

梅雨さんに肩を貸してもらい、下がる。悔しいけど、ここは飯田君達に任せて自分が出る事―避難誘導をするしかない…

「おいおい…ガキばっかとはいえ、ヒーロー増えすぎだろ」

後退しているとき、カメラの音が聞こえ、自分は息を飲んだ

第5話

side 三人称

「お姉ちゃん！ヒーローに敵の事知らせなきゃ！」
「携帯通じないんだから、しようがないじゃない！」

敵を漁港近くの公園から見た真幌と活真は敵が来た事を連絡しようとしたが島にある電波塔が壊され、通話が途切れてしまう。そのため2人は避難する。真幌は弟の活真の安全を一番に考え、家へと帰る。その時だった。家が大きな音を立てながら崩壊。

「きゃああー！」

「うあああー！」

爆風が2人を襲い、転んでしまう。それでも何とか起き上がり、目の前の状況を理解する。

「家が…！」

一瞬にして無くなった我が家を見て呆然としてみると、崩壊した家の中から人影が現れる。

「見つけたぞ。B型の細胞活性。」

「っ!?!」

その人物はナイン。瞳を光らせ、*「個性」* 『サーチ』を使い、ナインは活真を捉える。

「少年、君の*「個性」*を奪う」

そう言ってナインは真幌と活真にゆっくり近づく

「こ、来ないで！」

真幌は個性を使い『幻獣』をナインに見せるが、掻き消される。

「幻なのはわかっている」

「お姉ちゃん！」

「っ」

2人はもうダメだと思った時だった。

「!?!」

「……………」

真幌と活真は浮遊感を持った。2人がハッと目を見開くと

「二人共！助けに来たよ！」

「デク！」

「デク兄ちゃん！」

ナインの前に出て、二人を掻っ攫ったのは緑谷だった。『フルカウル』で跳躍し、そのまま近くの森へと逃げ込む。

「早くここから離れて」

「う、うん！」

森へと着地した緑谷はそのまま真幌と活真を逃げる様に指示する。そして、その二人を追おうとしているナインの前に立ち、追跡させないように阻止する。

「―退け」

「退くわけないだろ！」

「―邪魔をするなら殺す」

「っ」

ナインが動き出す

side 立香

漁港にて、私はスライスと対峙する。

「―はあっ!!」

「そんな弱い突きでこの髪が斬れるとでもっ!!」

ワルキューレに憑依している私は白い槍を構え、突きを放つ。スライスは「個性」で髪を『鋭利』にし、私の持つ槍を完全に防ぐ。

「私だけ集中していいの？」

「―痛みは一瞬です」

「!・ちい…!」

私とスライスの真上から蒼炎を纏った槍が降ってくる。流石の威力にスライスは私を後ろに押し、その勢いで後退して回避する。

「邪魔ね！食らいなさい！」

後退しながらもスライスは髪を『針』に変化させ飛ばしてくる。

「はあ…」

しかし、その髪は先程上空から攻撃してきた槍の一振りで掻き消さ

れる。

「ありがとう。ブリュンヒルデ」

「ありがとうだなんて…マスター、優しくしないでください…優しくされると、私、困ってしまいます…」

私はランサー『ブリュンヒルデ』を召喚した。北欧の大神オーディンの娘、戦乙女ワルキューレの1人。巨大な槍を携え、鎧姿の紫水晶の瞳を持つ女戦士。

「厄介ね…貴女が呼んだその女性は…!!」

「来るよ！応戦！」

「ご命令を、マスター。私はあなたに従います」

私とブリュンヒルデは再度、スライスと対峙する。スライスは自身の髪を『刃物』にし、斬り掛かる。私はそれを数か所肌の表面を掠りつつ盾で防ぎ、槍で軌道を反らす。

「はあっ！」

「っ!？」

スライスの攻撃が終わると同時、私は槍と盾を振るい払い、背中の翼を展開。白く発光させる。似的な閃光弾。一瞬だけスライスの動きが止まった。そこに

「痛くしないようにしますから…できれば、じつとしててくださいね」

「くっ!!」

ブリュンヒルデが特攻し、槍を振るい、掌から蒼炎を放つ。スライスは仕込み武器で槍の軌道を反らし、降り注ぐ蒼炎を髪で防ぐ。スライスの髪がほんの数センチ、燃え短くなった。

「ちっ…髪を燃やすなんて…女の敵ね…」

「髪なんて、直ぐに伸びるんだから。ここで散髪していかない？」

軽く挑発しつつも槍を構える。スライスは忌々しげに私を睨んでくる。そして—

「…ここでやられたら計画に支障がでるわ…残念だけど勝負はお預けよ!!」

そう言つてスライスは逃げようと動いた。

「逃がすわけ…っ!!」

当然見過ごすわけにはいかない。直ぐに私は動いたが…一瞬スライズの方が早く、彼女が取り出し、地面に叩きつけたものから勢いよく煙が舞い広がる。

「(煙玉…っ!?) ケホッ！ブリュンヒルデ！」

「はい…」

ブリュンヒルデに槍を大きく振るってもらい、煙を消してもらおう。しかし既にスライズの姿が無かった。

「(逃がした…けど彼女が言っていた計画って…?) お疲れ様。ブリュンヒルデ」

「ええ…では—」

一旦ブリュンヒルデを退却させる。魔力消費で少しふらつきただ、まだ動ける。取り敢えず状況が知りたい。でも連絡手段は絶たれ、通信が出来ない…事務所に一旦戻るべきか考えていた時

「立香ちゃん！無事!？」

「藤丸さん！」

「！麗日ちゃん…口田君…」

ようやく応援が来た…けど、ちよつと遅かった。

「敵は!？」

「逃げた…何か計画があつて、この島に来たらしいよ…流石にその計画の内容は分からなかったけど…今の状況は？」

「僕達全員で対応中…ここ以外だと浜辺と商店街に敵がいて、島民たちを避難させてる！」

口田君に教えてもらい、整理する。

「なら…私達も動かないと…近くなら浜辺に行つて避難の手伝いを…！」

「!!」

麗日ちゃんと口田君と話していると、突如として島の奥の方から、『ゴデフォルメされた緑谷君のバルーン』が現れた。

時を遡る。砂浜、漁港にて戦闘が激しくなっている頃、村役場近くでは、ミイラ化した爆豪が切島、上鳴、風魔に襲いかかっていた。爆豪の容赦ない攻撃に、3人は避けるので精いっぱいだ。

「やめろー爆豪ー！」

切島が声をかけるが聞こえていないように爆豪は切島に襲い掛かる。

「くっ！危ない！」

爆豪の攻撃を風魔が苦無を使い、軌道を反らす。爆豪の腕は地面を抉る。

「うおっ！助かりましたあー！」

「完全に操られている…どうするよー！」

「どうするってっ…！」

困惑する上鳴と切島。その時、隙をついたマミーが切島、上鳴、風魔に包帯を巻きつける。

「しまったー！」

「くそっ！」

「くっ…不覚…！」

「選べ。ここまま拙者の傀儡となるか…仲間に倒されるか…それともこのミイラ達の餌食となるか…！」

「っ…！」

包帯で身動きが出来ない切島、上鳴、風魔の周囲にミイラ達が配置される。切島と上鳴が唇を噛み締めた時、風魔だけは笑っていた。マミーはその風魔を見て訝しげる

「何が可笑しい！」

「ふっ…前に主が言っていた。敵の前で笑う時は…勝利を確信している時だと！」

刹那、包帯で拘束されていた風魔が大木へと変化―変わり身の術だ。

「なっ―「では切り札を―！」」

マミーから少し離れた場所にて、風魔は印を結び、『宝具』を発動させる。そして現れるは大群の風魔の部下。風魔とその部下たちは特

攻。マミーを中心に円を描く様に走り出す。

「すなわちここは阿鼻叫喚。大炎熱地獄——不滅の混沌旅団（イモータル・カオス・ブリゲイド）!!」

「なっ!?!」

「うおおお?!?!」

炎の竜巻が発生。それにより切島と上鳴を拘束していた包帯は焼き千切れ、周囲にいたミイラ達は竜巻の起こす風で吹き飛ばされ、炎によって焼き尽くされる。

「ではここまで……皆様……主を、任せた……—」

ここで、魔力を使い切った風魔が消える。

「くっ……よくも拙者のミイラ達を……しかし厄介者は消えた」

炎の竜巻の中、マミーはミイラを使い、自身を守っていた。炎の竜巻が消えると自身を守っていたミイラは焼き消える。しかし風魔が消えた事をマミーは安堵した。

「な・め・て・ん・じゃ……ねええええ!!」

「?!…な、にい…?!」

その直後、ミイラ化した爆豪の右側が膨らみ、爆発。爆豪を繋いでいた包帯は焼き斬れていた。先ほどの『宝具』によって爆豪に巻き付いていた包帯は大半を焼き削り、尚且つ爆豪が自身の右腕の籠手を自ら爆破させ、拘束を解いた。これにマミーは動揺する。

「爆豪!」

「オラアアアア!!」

「っ—」

距離を取ろうと後退するマミー。しかし爆豪は瞬時に『爆破』で距離を詰める。マミーは時間を稼ごうにもミイラの大半は風魔の『宝具』によって焼き尽くされ、何も出来なかった。

「このっ「たっぷり溜めておいたぜ。爆線マックスだ!!」」

向かってくる爆豪にマミーは装備していた刀を降り抜く。だが爆豪は寸前で急旋回し回避し、マミーの顔面をつかんで近くの建物の壁に激突させる。そして『爆破』の元になる汗を溜めた左腕の籠手のピンに指をかけ、引き抜く。

「死ねえええ!!」

「」

大爆発。壁が吹き飛び、大爆発を浴びたマミーは遠くで気絶する。炎で焼け落ちたミイラ達は元の自販機や車などに戻った。マミーを倒し、見下ろす爆豪に切島と上鳴が駆け寄る。

「おお！流石爆豪！」

「建物への被害も最小限かよ……」

敵一人をようやく鎮圧する事が出来た後、八百万と耳郎が来て、島の避難を終えた事を知らせる。それを聞いた爆豪は速攻で飛び出す。

「どこ行くの、爆豪!？」

「救援は任せた！」

驚く耳郎にそう答え、更に『爆破』で加速する。

「残りの敵をブツ潰す！」

爆豪が飛び出した暫くした後、緑谷の姿を象ったバルーンが現れる。

side 立香

突然、緑谷君の姿を象ったバルーンが現れた。私含め、麗日ちゃんと口田君も驚く。

「何……あれ……」

「デク……君?」

誰かの個性……?けどアレはピンチだという事が分かる。なぜなら、その緑谷君のバルーンは、血を流している姿だった……なら

「行くしかない!」

「ウチも行く!」

「僕も!」

私達は直ぐにバルーンが現れた所まで行く事にする。麗日ちゃんが自身と口田君を『無重力』で浮かし、軽量化。その二人を私は掴み、飛翔する。

第6話

side 立希

飯田君達が何とか敵の攻撃を市民を守るように防ぎ、自分らが避難誘導していた時、緑谷君の姿に似たバルーンが見えた。

「緑谷君…っ!?(けどあの緑谷君バルーンの顔…流血してる!つまり…) 梅雨さん!」

「ええ、緑谷ちゃんが危ないわ!!」

隣にいる梅雨さんも自分と同じ考えだ。お互い頷く。

「ここは俺らに任せて!援護に行ってくれ!!」

「頼んだぞ!」

「わかったわ!」

『『投影:カーミラ』!』

—風になりましたよう?—

砂糖君、障子君に避難誘導を任せ、自分と梅雨さんで緑谷君がいるであろう場所に向かう。自分は『カーミラ(水着)』と憑依。銀の髪と赤い瞳へと変わり、そして道路上に『鋼鉄の処女』を改造した赤い高級スポーツカーを召喚して飛び乗る。

「飛ばすよ梅雨さん!!」

「梅雨ちゃんと呼んで!」

助手席に梅雨さんに乗せ、加速させる。

side 三人称

真幌と活真をナインから逃がすため、緑谷は敵対する。しかしナインの複数の「個性」によって重傷を負ってしまう。

「で、デク…」

「デク兄ちゃん……」

「に、逃げて…」

土手の上に逃げていた二人が緑谷に近づく。緑谷は二人をかばうようにボロボロの体を奮い立たせなんとか立ち上がろうとするが、ナインは容赦なく緑谷に『爪弾』を放ち、貫く。

「は、早く…行くんだ…っ」

貫かれたところから血が流れ、服に滲む。

「イヤ…イヤ…イヤ…!!!誰かデクを…デクを守って…!!!」

おびえる事しか出来ない真幌は「個性」『幻覚』で『巨大な緑谷の幻』を出し、声の限りに叫んだ時だった。

「―死いねえ!!!」

『!』

ものすごいスピードで爆豪がナインに向かい、『爆破』を放つ。

「爆発の“個性”…」

ナインは『空気の壁』で防ぎ、不適な姿である爆豪を見据える。

「かつちゃん…」

「見つけたぜ、クソ敵!!」

爆豪はそのままナインと戦闘。ナインからくる『爪弾』を躲しながら『爆破』を放つが、『空気の壁』で防がれる。それでも爆豪は持ち前の反射神経で距離を詰め、ナインの懐に入るが…

「が!?!」

ナインの背後から新たな「個性」『使い魔』が現れる。大きく裂けた獠猛な古代の鯨と思わせる使い魔が爆豪を地に伏せさせる。

「(アバラア…持ってかれたあ…っ)」

痛みにくらえながらも爆豪は『爆破』を放ち、何とか使い魔から逃れる。

「クソデク!!」

「!」

「『デトロイトスマツ―』」

爆炎の奥から、ナインの頭上めがけて緑谷が拳を振り下ろす―

「無駄だ」

―前に、ナインは「個性」を振るう。上空から突如『雷雲』が現れ、巨大な雷が緑谷と爆豪を襲い貫いた

「っ―」

巨大な雷は那歩島全域の電気システムをショートさせ、島全体が暗くなった。

「さて…」

「ひっ…」

ナインはおびえる真幌と活真に近づく…が、ナインの足に緑谷と爆豪が残った僅かな力で掴み、阻止する。

「……………行かせ……………ない……………」

「ま、まだ勝負は……………終わって……………」

「本当にヒーローというものは……………」

ナインはあきれたように『空気の壁』の衝撃はで二人を吹き飛ばす。そのまま止めをさそうと動いた瞬間――

「うっ！うぐぐぐぐぐ……………」

突如として、ナインは体に衝撃が走り、うずくまる。

「ナイン！」

そこにスライスが現れ、ナインに駆け寄る

「しよ、少年を……………」

「ええ、わかっ！」

スライスはナインの指示で活真に近づこうとした時、群れをなしたカラスがスライスとナインを覆う。

『カラス達よ！そのまま敵二人を覆うのです！』

「今！」

その隙に上空から口田、麗日、立香が降り立つ。口田が『生き物ボイス』でカラスを操り、ナイン達を妨害している内に立香は真幌と活真を保護し、飛び立つ。

「安心して、味方だから……………そっちはよろしく！」

「任せて！」

「ケロォ！」

立香がそう言うと同時に、麗日は『無重力』で気絶している緑谷と爆豪を浮かし、蛙吹が『舌』で巻き付け駆け出す。

「早く乗って！」

蛙吹達が集まる場所に立希が車に乗って待っていた。ここに来る前に、立希達と立香達が合流し、どう動くか事前に作戦を立てていたのだった。全員が飛び乗ると同時にトップスピードで逃げる。十分

に距離が空いたところでカラス達は去っていく。

「追え！あの少年をなんとかしてよ……！」

「ナイン、彼らはこの島を出られない。今は、体を癒すべきよ」

スライスはナインをなだめ、上空に信号弾を放つ。砂浜にいたキメラはそれを見ると、飯田たちに攻撃を止める。

「ここまでか……フツ……命拾いしたなあ、ガキども」

鼻で笑って立ち去っていくキメラ。轟は追いかけてしようとするが、飯田に止められる。

「行くな、罨かもしれない。これだけの人数でも仕留められなかった相手に単独行動は危険だ。」

「だが……くそっ……」

悔しそうな轟に飯田は冷静に告げた。

「今は島民の安否の確認。それもヒーローの務めだ」

気付けば、太陽は海のかなたに沈み、纏わりつくような夜がやってきていた。

side 立希

サトウキビ精製工場。そこに自分達は島民たちを避難させた。敵の一人が放った雷が原因で工場は停電中だけど、電気君が『個性』で発電し、何とか明かりが灯っている。八百万さんも『創造』で『防災グッズ』を出して何とかなんているけど……時間の問題だ。

「どんどん作るから……どんどん島民達に提供して……」

そんな中、自分達は島民達に炊き出しを提供していた。青山君、葉隠さん、飯田君が料理を運び、自分、砂糖君、梅雨さん、口田君、三奈。そして自分と姉が召喚した英霊二人で料理する。

「ありがとね、エミヤ。紅閻魔。」

「気にするな。マスターを支えるのが我々の使命だ」

「そうでち。もっと豪華で多く作るでちよ！」

姉はアーチャー、『エミヤ』、自分はセイバー、『紅閻魔』を呼ぶ。料理のエキスパートによって、瀬呂君が運び出してくれた野菜や調味料らはすべて美味しそうな料理へと変貌する。

「食材が豊富な島でよかったわ。そして藤丸ちゃんらの呼んだ人達のおかげで大助かりだわ」

梅雨さんが自分らを見ながらそう言う。

「うん…そういえば捕まえた敵、どうしたの？」

野菜を切りながら三奈が思い出したかのように訊く

「確か、八百万さんが地価のボイラー室に閉じ込めたよ。尋問しても何も言わなかったようだけ…ど…」

「立希！」

自分が答えながら、完成した料理を皿にのせ、再び調理しようとした時、ぐらりと視界が歪む。倒れそうになったが、三奈に受け止められ、支えられる。

「マスター！大丈夫…じゃないでちね」

料理を一旦止めた紅閻魔が自分を見てそういう。自分は苦笑しながら話す。

「はは…3体召喚したし…『投影』で枯渴気味…でも今休んでる暇は…」

「ううん。休むべきだよ！梅雨ちゃん！私、立希を休憩室に運ぶから

！少しでも料理お願い！」

「ええ、分かったわ」

言葉を遮られ、自分は三奈に支えながら運ばれる。

「ごめん…」

「何言ってるの！立希頑張ってたじゃん！あの忍者さんのおかげで敵捕まえられたし、私も助けられたから。それにここで倒れたら次動けないでしょ？ね、だから今は休もう？」

「…うん。」

三奈にそういわれると、少し焦っていた自分がいたなと感じた。そうだ。自分だけが頑張ってるわけじゃない。皆で支えあって、この状況を打破するんだ。

「それじゃあ…お言葉に…甘えて…少し休むよ…少ししたら…紅閻魔さんも…いなくなるう…」

「ちよ、立希…!？」

緊張がほぐれると同時に疲労と眠気が来る…何か頭に柔らかい感覚があつたがもう気にする体力がない。

「あーもー…峰田じゃないんだから…まあ態とじゃないからいいけどさー…よつとー!」

三奈の何かつぶやいてる声と引きずられる感覚があつた事を最後に、自分は眠りについた。

side 立香

「はい。じゃあこれお願いね」

「おう。任せな」

私はヤオモモが作った防災グッズを瀬呂君に託し、治療室として扱っている休憩室へと向かう。道中、医療器具を運んでいる麗日ちゃんに会う。

「麗日ちゃん。手伝うよ」

「立香ちゃんありがと!立香ちゃんも治療室に?」

「まあね。(それに呼んどいてどうなったか気になるし)」

二人で治療室に入ると、出入口のところで焦凍君が氷枕を作っていた。

「轟君、デクくん達の容態は?」

そう麗日ちゃんが訊くと、焦凍君は少しだけ悲しそうに言う

「…まだ意識が戻らない」

「そっか…そっちはどう?アスクレピオス?」

「愚門だな。すでに終えている。」

エミヤ以外に、私はキヤスター、『アスクレピオス』を呼び、人手の少ない治療側を手伝っていた。アスクレピオスが治療したであろう島民達は皆落ち着いた顔つきで睡眠を取っていた。

「だがその二人の治療がまだだ。ここにはまともな医療器具がないのか?」

アスクレピオスがこの島にいる医者に聞く

「すまん…さきの敵の襲撃で壊れてしまった…わしらの『個性』では傷を塞ぐことぐらいじゃ…骨折はどうにもならん…」

「これ以上は本島の病院じゃないと…」

看護婦も申し訳なさそうに言う。

『宝具』を使えばその程度の骨折は治せるが…そうになるとマスター、お前が無事じゃなくなる。」

「…そうだとしても、二人を治す事が最優せ—」

「立香！無理すんな」

ふらりと、意識を手放しそうになった。後ろから焦凍君に支えてもらえなかったら倒れてた…

「立香ちゃん！」

「お前もふらふらじゃねえか…立希も倒れて芦戸に運ばれてたの見た。お前ら姉弟無茶し過ぎなんだよ…」

ゆっくり焦凍君に座らせてもらいながら言われる。これを見ていたアスクレピオスがため息を吐く

「…俺は帰らせてもらう。マスター、残り少ない魔力は回復に使え。それが医師である俺からの診断だ。」

「…うん…分かった…」

アスクレピオスが消えると一気に魔力が消費され、疲労感が来る…さつきから焦凍君に支えられてばかりだ…

「ごめんね、麗日ちゃん、焦凍君…クラスメイトが重症でちよつと不安になってた」

「ううん、大丈夫！デク君も爆豪君も絶対治るよ！」

「俺達皆で何とかすれば問題ねえ。だからお前も休め…麗日、少しこ任せた。立香を別の休憩室に運ぶ」

「え」

そう言つて焦凍君は…私を横抱き—お姫様抱つこで担ぐ。

「ひゃあ…」

麗日ちゃんが頬を染め私を見てくるけどそれは私もだ。さつきの疲労感がどつかいった。

「ちよ!?なんかデジャブなんだけど!?そこまでしなくてもいいよ!?肩を貸してくれるだけで…」

「…うんこの方が移動しやすだろ?それに重くねえしな。」

「か…勘弁してつかあさい…」

何を言っても無駄だと感じた私はそのまま焦凍君に運ばれてしま
う…道中ほほえましい視線を送られたのは気のせいだと信じたい…

第7話

side立希

三奈のおかげで大分体力と魔力を回復できた自分は、休憩室にて今後の行動についての会議に参加する。姉も姉で回復したらしいけど…なんか顔赤いけど大丈夫だろうか…

「まずは現状の報告を…」

委員長である飯田君が皆をまとめ、話会う。敵の襲撃からの戦闘、避難誘導、炊き出しと休みなく動き続けていた皆。さすがに疲労困憊していた。

「先ほど、『救難メッセージを発信するドローン』を『創造』し、本島へと発進させました。到着は早くて6時間…救助が来るのはさらに時間がかかりますわ…」

自分と同じように個性の使いすぎで倒れた八百万さんは寝ていた半身を起こしてそう言った。

「けどそれまで敵が待つてくれるとは思えない」

「今、我々がやるべき事最優先事項は島の人々を守り抜くこと…」

尾白君、飯田君が言い、

「どうやってだ？爆豪と緑谷をあそこまで痛めつけた敵だぞ」

「それに、ビーチで会敵したあの敵も強い。」

「漁港にいたあの女性もね…足止めだけでもいっばいだった。」

砂糖君と同意するように自分と姉は残りの敵2人の事を言う。

「戦うにしても、ヤオモモや上鳴…藤丸達は個性かなり使っちゃってるし…」

「私…と立希は大分回復したけど…『英霊召喚』までにはいかないかな…」

耳郎さんが心配そうに言う。姉が自分らの状態を言うけど…不安はぬぐい切れない。

「わかっているだけでも敵は3人いるわ。」

「一斉に襲われたらひとたまりもねーぞ」

梅雨さん、鋭児郎君が思案していた事を言う。

「せめて敵の目的が分かれば…」

飯田君が眉を深める。そんなときだった。

「敵が狙ってるのは…僕だよ」

『！』

いつの間にか部屋に真幌ちゃんと活真君が入って来て、活真君がそう言うてきた。突然の告白に自分らは活真君を見る。活真君が言うには、敵は『個性を奪う』と言ってきた。まるで…あの敵—オール・フォー・ワンみたいだけど、これで敵の目的が分かった。活真君を連れて逃げるといふ案が出たけど相手は敵。何をしだすかわからない。島民全員を人質するかもしれない。島民を殺すかもしれない…

「じゃあ、どーすりやいいんだよ…」

峰田君が困惑した声で呟く…

「僕を、敵に渡して」

「え…」

振り絞る声でそう言った活真君に、麗日さん含め、自分らは驚く。「殺さないって言うてきた。僕の個性なんか無くなってもいい…それで島の皆が救えるなら—」
「そんなのダメだ！」

部屋に入ってきたには、重症のはずの緑谷君だった。出入口のところに爆豪君もいた。

「デク君!？」

「緑谷君、平気なのか？」

「活真君の個性のおかげだよ」

麗日さんと飯田君が心配そうに尋ねると、緑谷君は笑みを浮かべながら答え、活真君の前に移動する。どうやら活真君の「個性」『細胞活性化』によって傷も骨折もすべて完治したのだった。緑谷君は活真君に感謝する。

「すごい「個性」だよ。活真君ありがとう。」

「デク兄ちゃん…」

「要するに、あのクソ敵どもをブツ殺せばいいだけのことだろうが！」

爆豪君がそう言い切る。

「必ず、君たちを守るよ」

「敵どもをぶつ潰す」

二人が活真君と真幌ちゃんを見ながらそう言う

「島の人たちも絶対に救ける！」

「絶対に勝つ！」

呼応するような声は、真幌ちゃん、活真君だけでなく自分らにも波及していく。

「爆豪、緑谷、その意見のつた」

「私も、島の人たちを守りたい」

焦凍君に麗日さん

「戦おう！」

「しゃーねーな。松田さん家の耕作機、直さなきやウエイだし」

飯田君、電気君。

「俺もやるぜ！」

「俺もだ」

「ウチも」

「もちろん！」

「俺も！」

「ああ」

「私も！」

「ケロ！」

「よっしゃ、やろうぜ！」

「うん、やろう！」

「やるしかないね☆」

「俺達はヒーローなんだ！」

「不可能だって乗り越えてみせる」

鋭児郎君、常闇君、耳郎さん、葉隠さん、瀬呂君、尾白君、三奈、梅雨さん、峰田君、口田君、青山君、砂糖君、障子君らが立ち上がり：「ここで倒れてる場合じゃないよね」

「絶対皆を守って、敵に勝つんだ！」

姉と自分も立ち上がる。さっきまでの張りつめるような空気は無くなる。皆から沸き上がってくる闘志。この熱意が伝わったのか、真

幌ちゃんも活真君は子供らしい笑顔が戻る。自分らは笑みを浮かべて見渡す。

「いつも言ってますもの」

八百万さんが飯田君の隣に立ち言う。飯田君も承知とばかりに拳を握る。

「さらに向こうへ！」

『プルスウルトラア!!』

皆で拳を突き上げる。そして緑谷君が意識を取り戻して直ぐに敵対策を練っていた作戦を自分らに言うのだった

side 立香

作戦の目的は分断と時間稼ぎ。敵の数は3人。作戦場所は島民達が住んでいる島と細い道で繋がれている、昔城があった山。後ろが断崖絶壁の城跡を拠点にして、敵の進行ルートを一つに絞る。

「どの敵を、どの場所に誘導させるの？」

私がそう聞くと、緑谷君は机に広げている地図に赤ペンで書き示す。地図上の予想進行ルート上には、滝、鍾乳洞、岩場に目印がつく。

「先制攻撃で敵を分断。それぞれの地形を利用して…」

「ヤツらを叩きのめす。」

緑谷君の言葉に爆豪君が続ける。島の人たちは断崖絶壁の洞窟に避難させ、真幌ちゃんと活真は私らで護衛。いざという時は脱出経路も確保する。

「なら次はどの敵にどう自分らが対応するか…だよな？」

立香がそう言うのと、皆は頷く。各々会敵した敵の個性を考察する。

「私が漁船で会敵した敵は…スライスって名乗ってた。個性は…自身の髪の毛を武器にした。針のように飛ばして、刃物みたいに鋭利性を持たせてた。」

「僕も見たよ。髪で船を壊していた」

私と緑谷君が言い、

「ビーチにいた敵は、狼の頭部に猛禽類の脚のような両腕、恐竜のような太い尾…まさにキメラのような姿だった。」

「しかも強い。マルタさんの拳で殴られてもピンピンしてた。尾白君の尻尾や砂糖君の拳を軽々と受け止めてたし…」

「後は…火い噴いてたな。しかも本気じゃねえ…俺よりも高熱な炎を出すかもしれないな…」

飯田君、立希、焦凍君が言い、

「個性を奪う個性、爪を飛ばす個性、空気の壁を作る個性、鮫と蛇をミックスした使い魔を使役する個性…後あ雷撃の個性…まだまだ個性持つてんだろぅがそいつが敵側のボスだ。俺がブツ潰す！」

爆豪君が怒り気味に言う。

「うむ…なら俺は滝のある場所でキメラに似た敵を誘導する事を提案する。高低差のある崖なら俺のレシプロで翻弄出来る。」

「なら俺もそこに行く。奴の炎を俺の氷で防ぐ。」

飯田君、焦凍君がキメラと戦うと言う。

「俺も戦うぜ！」

切島君も挙手して参加の意思を示す。『硬化』は攻守ともに便りになる。

「(なら…) 私もいいかな? 作戦がある…梅雨ちゃん、協力してくれない?。」

「ケロ。いいわよ。一緒に頑張りましょ」

私も対キメラ側に参戦する。前衛が3人もいるなら、私と梅雨ちゃんんで後衛サポートする。

「…俺は鍾乳洞…その闇は『黒影』を通常より強化可能だ…髪を操る敵を翻弄してみせる」

「なら、自分もそこに行く。けっこう多彩に使いそうだし、手数が多い自分が常闇君をフォローする。」

「そのフォローのフォローを私がする! 髪さえ溶かせばこつちのもんだ! 場所が暗いし飛び道具も当たりにくいはず!」

常闇君、立希、三奈ちゃんのスライスと戦うと言う。3人とも近中・遠距離の攻撃ができるメンバー。それに私よりも数多く憑依できる立希がいるなら多分大丈夫だ。

「個性複数持ちへの対応は?。」

焦凍君が訊くと緑谷君が答える

「僕とかつちゃんやんが戦ったとき、突然相手が苦しみだした。おそらく“個性”を使いすぎると、体に負担がかかるんだ。だから活真君の“個性”『細胞活性』を奪おうとしていた…」

「なるほど…消耗させるのか」

緑谷君は頷き、皆を見渡す。

「敵には、波状攻撃を仕掛けて個性を使わせる。個性を奪われるから接近戦はなるべくしない方向で。それで敵を倒せばよし。たとえば倒せなくても…」

作戦は夜のうちに速攻で決まり、始まる。皆で住民を城山の洞窟へと誘導。口田君は家畜、砂糖君は食材を運ぶ。各々敵を迎え撃つために準備をし、真幌ちゃんと活真君、皆で頂上から眼下を見下ろす。

「(夜が…明ける…)」

夜明け前の空が瞬く間にオレンジ色に明るくなっていく。

「…救援が来るまで持ちこたえれば…皆を守る」

敵の驚異的な強さを思ってるのか、真剣な表情の緑谷君。そしてその隣に揺るぎない自信を持って不敵な爆豪君が言う

「違い。絶対に勝つんだよ。」

穏やかな海と澄んだ淡いオレンジ色の空の間から輝かしい光が現れる。戦闘開始を告げるには美し過ぎる朝焼けだった。

「姉、皆を救って、勝とう。」

「ん。勝てば、皆救われる。」

立希も、私も。そして皆も覚悟を決める…

第8話

side三人称

「―目標に向かうぞ。王となる者に、小細工などいらぬ…」

目的の人物が城山にいる事がわかるナイン、キメラ、スライスは真つ直ぐ城山へと向かう。3人の行動を八百万が監視し、作戦ポイントに入ると直ぐに青山に指示を出す。

『Can't stop twinkling. Super nova』!!プルスウルトラ☆!!」

太陽に負けないほど光輝く『ネビルレーザー』をナイン達に撃ち放つ。最大出力のレーザーをナインは『空気の壁』を展開し防ぐが、連射されたレーザーがキメラ、スライスを襲う。二人は飛びのき左右に別れる。その瞬間を八百万は逃さない。

「別れた!残りの脂質すべてを使ったコレが…私の最後の―一撃ですわ!」

迷彩布で隠していた『創造』した二つの『大砲』で砲撃。着弾地点はスライス、キメラがいる地点だ。

「ふ…どこを狙っ…何!」

スライスの方に飛んだ砲弾は直撃せず、地面に着弾。外したと一瞬鼻で笑ったスライスだったが、砲撃された地面が崩落。前もって芦戸が『酸』で崩れやすいように細工していた場所だった。スライスは崩落に飲み込まれ穴の中へと消えていく。

「ちっ…」

キメラもまた、砲撃とレーザーにより崖に追い込まれ崖下へとジャンプし、落ちていく。八百万と青山の役目は敵の分断。作戦通りいったのだった。

「…第一段階…終了…」

「も…もれちゃった…」

side立希

「(来た!)」

「(ここで倒すぞ)」

「(うん!)」

鍾乳洞にて、自分、常闇君、三奈は待ち伏せていた。そして崩落が起き、見れば予定通り、スライスが落ちてきた。崩落した岩で一瞬埋もれるが個性の『鋭利な髪』で切り飛ばし復活していた。

「分断したところで…」

「(今!)」

スライスが鍾乳洞を見渡してる隙に三奈が『酸』で頭上にあるつらら型の石を溶かし矢のように落下させる。

「っ!そこ!!」

スライスは反応し直ぐに回避。暗く足場の悪い場所のはずなのに軽々動き、『刃に変化した髪』で切り防ぐ。更には『酸』を放っていた三奈に気付いて仕込みナイフを投げ放つ

「しくった!」

「(行くぞ!)」

「(『投影:—』)」

回避している三奈に追撃しようとするスライスの背後から自分、常闇君が不意打ちをする。

「(—ジャック・ザ・リッパー!)」

—解体の時間だよ—

「(『深淵闇軀』!)」

自分は白髪、紅の瞳と化し、ボロボロのローブを身に纏い、腰に装備されたナイフを抜き振るい、常闇君は『黒影』を身に纏い、八百万さんが『創造』した『鍵爪』で攻撃する。

「っ!味な真似を…っ!」

それでもスライスは自分達に気付きバックステップで回避する。

「おしい!」

「芦戸、あとはまかせろ。ここは俺…いや俺達の世界だ。」

「(ここで、貴女を解体します!)」

自分はナイフを逆手で持ち直し、常闇君は身構える。

「…小癩ね」

スライスは怯まず、むしろサデイスティックな愉悦な笑みを浮かばせる。毛先の刃が好戦的に逆立った

side立香

崖下。砲撃音が聞こえしばらく待つと、予定通りキメラが落ちてきた。

「よし、八百万の作戦通りだな」

「(こつちも予定通りいくぞ)」

「(うっし!)」

「(この後は水の中にいる梅雨ちゃんが動く…)」

焦凍君、飯田君、切島君、私は近くの茂みで身をひそめる。

「チツ…体よく分断されたか…」

こつちの目論見に気付いたようだけでももう遅い。滝つぼから『長い舌』がキメラの足元に伸び絡みつき水中へ引きずりこむ。

「うおっ—」

「ケロツ!」

「今だ!」

キメラが水中へ入ると、入れ替わるように梅雨ちゃんが地上へ上がる。そして飯田君の指示で焦凍君がキメラごと滝つぼを『氷結』で凍らせあつという間に飲み込む。

「よっし!」

「藤丸ちゃんの作戦通りね」

「プランAで終わればいいけど…」

切島君、梅雨ちゃんが喜ぶけど私は警戒する…それが正解だったのか、凍った水の中から衝撃音が響く。

「…いや、まだ終わってねえ…っ!」

「来るぞ!」

焦凍君、飯田君の言う通り、氷にひびが入り砕け、キメラが飛び出し着地する。

「冷てーじゃねーかよおい」

「また会ったな」

キメラに焦凍君はそう言う。キメラは私らをみて鼻で笑う
「ハッ、やめとけ。今日の俺は本気だぜ？」

葉巻をくわえ火をつけながらそう言うキメラ。

「奇遇だね。私達も今日は本気だよ。『降霊：エウリユアレ』」

——私に墮とされる覚悟、あるんでしょうね？——

私はエウリユアレと憑依し、紫の髪、瞳と化し、薔薇の装飾のついた黒のカチューシャ、純白の簡易的なひらひらドレスを身に着け金の弓矢をつがえる。

「俺らだって違う」

切島君が腕を『硬化』し構え

「島民が避難した今、全力でお前を止める！」

飯田君は『レシプロターボ』でふくらはぎの『エンジン』を起動。

「お前を止める」

焦凍君は右腕に『氷』を纏いはじめ。

「(プランBね)」

『擬態』で周囲の背景に溶け込む梅雨ちゃんが小声で言う。

「10分でケリをつけるぞ！」

『了解！』

飯田君の気合のみなぎる声に私達は呼応する。するとキメラは体を変化させる。服を破りながら腕から翼のようなものを生やす。

「上等だ」

キメラはにやりと笑った。

第9話

side 三人称

分断されたナイン達だが、ナインは一人になった事を意に介する様子もなく、活真がいるであろう城山の頂上へと進む。

「テープショット：トライデント!!」

「解除!」

その死角から瀬呂が『テープ』で貼り付けていた岩をナインめがけて振り下ろす。その近くでタイミングを計って麗日が『無重力』にしていた『岩』の重力を戻し勢いよくナインに落ちる。

「……………」

しかしそれでナインが止まるわけもなく、『爪弾』で粉碎し、そのまま瀬呂と麗日を『爪弾』で攻撃。二人はナインの攻撃を回避しながらも近づく事無く『岩』で攻撃し続ける。少しでもナインに『個性』を使わせる為に…

「クソ! 足止めすらできねえ!」

それでも、ナインの進行は止まらない。瀬呂が吠える。どんなに岩を放つても『爪弾』であしらわれる。麗日が『無重力』で大量に浮かせていた『岩』の雨を降らせても効果がなかった。それでも二人は諦めず、攻撃し続ける。

「もうすぐ本命だ!」

「う、うん!」

個性を使いすぎて吐き気を起こす麗日だが我慢し、瀬呂が言った本命へと、後方へ動く。

「瀬呂! 麗日! 準備出来てるぜ!」

そこには頭部に包帯を巻いた峰田が待っていた。峰田の後ろにはずらりと並んだ『大きな木の柵』で堰き止め、『もぎもぎ』で接合される大量の『巨大な岩』々だった。

「麗日頼む!」

「うううう…プルスツ、…………ウルトラアアアア!!!」

麗日は根性ですべての木の柵を『無重力』化し、上空へ投げ、堰き

止められた巨大な岩々の雪崩を起こす。ナインは『爪弾』で攻撃するが岩々は止まらず、ナインを飲み込む。そこに間髪入れずに峰田が『もぎもぎ』を大量に投げ込み、岩と岩がくつつき続け一つの岩山にするのだった。

「これが本命だ!!」

「よっしやー!」

「や、やった…う、おえええ…」

3人ともギリギリな状態。これで終わり…かに思えた。光の衝撃波と共に岩山が吹き飛び、その威力で3人も吹き飛ばされる。何とか態勢を整えようと青山、八百万も加わるがナインの『空気の壁』の衝撃波で倒れてしまう。

「遊びは終わりだ」

ナインは両手に『雷』を纏い、トドメをさそうと動いた時だ。

「うおおおおお!!!」

『爆破』で飛んできた爆豪が速攻でナインめがけて『爆破』。しかし『空気の壁』で防がれる。

「生きていたか…」

「寝言は寝て死ね!」

急遽爆豪が参戦。更に、後方から緑谷も『フルカウル』で飛び込み、ナインめがけて蹴りを放つ。

「セントルイススマッシュ!!」

それでも『空気の壁』に防がれ衝撃波で吹き飛ばされるが想定済みだったのか上空で爆豪が緑谷を掴む。

「『爆破式カタパルト』オオ!!」

そのまま『爆破』の高速回転で加速し勢いよく緑谷を再度ナインに向け投げ、緑谷は強力は蹴りを食らわす。ナインは『空気の壁』で防ぐが予想以上に威力が大きく弾く。

「なかなか…」

「ここから先は」

「ブツ殺す!」

ナインは自分に対して身構える緑谷、爆豪を見据え、二人もまたナ

インをきつく見返した。

side 立香

「ふっー」

私は宙に舞い、キメラめがけて矢を複数射続ける。

「さつきから無駄なんだよ!!」

キメラは巨大な手で矢を弾き、折る。

「おおおおお!!」

その隙に飯田君が凍る大地を高速で駆け渾身の蹴りを放つが、キメラはもう片方の手で受け止め、そのまま投げる。

『烈怒頑斗裂屠』!!」

続けて切島君が『硬化』した腕でキメラの腹部に殴る。

「ぜやあ!!」

「はっ!!」

切島君の攻撃と同時に飯田君は再び蹴り、私は矢を射る。

「ふん!!かゆいな」

それでも防がれる。片方ずつ腕で飯田君の蹴り、切島君の拳を受け止め。矢は噛んで防ぐ。

「ぐあ…っー」

そのまま切島君を掴み投げ岸壁にめり込む。

「ちい!!」

「くっー」

焦凍君に合わせるように再度矢を射る。焦凍君の放つ『炎』と一緒にキメラに放つ

「くどい!!」

でも翼のような手で起こされた風に簡単に吹き飛ばされる。

「おおお!!」

再び飯田君が背後から蹴りを放つが弾かれる。

「凍れ!!」

焦凍君が『氷結』を放ち、飯田君に攻撃しようとしたキメラの動きを阻む。キメラはその氷結を殴り壊す。

「……テメーら……無駄だと言ってるだろ!!」

「どうかな! (そろそろ……墮ちろ!)」

矢をつがえ、射る。まっすぐキメラの胸部を捉えるが、キメラの体毛が厚いのか刺さらず、矢は地面に落ちる。

「ふっ、分かっただろ? その程度の威力の矢が俺の体に刺さるわけ……っ!」

その時、キメラに異変が起きる。全身に何か痺れが襲ったのか、巨体の動きが悪くなり、キメラは膝を付く。これを見た私らは作戦がうまくいき、笑みを浮かべる。

「単調な攻撃を繰り返したのには意味がある。」

「俺の足、切島君手、そして藤丸くん、その矢には蛙吹くんが作った『毒性の粘液』が塗られていた。」

「梅雨ちゃんね。藤丸ちゃんの作戦通り。上手くいったわ」

焦凍君、飯田君が作戦の全貌を説く。近くの岩場に『擬態』していた梅雨ちゃんが姿を現す。腕には透明な液体が滴っていた。

「女……てめえ……っ!」

キメラは私を睨んできた。それに対し、私は不適な笑みで答える。

「昨日対峙したのを聞いて、貴方はその巨体の防御と攻撃に絶対の自信があった。つまり『単調な攻撃』なら『回避しないで受けて防御する』と考えた。脳筋の貴方の行動は全て分かってたよ。」

こうして説明するのも、梅雨ちゃんの毒をキメラの体に浸透させるためだ。

「観念しろよおっさん」

降伏を促す切島君。念のため、焦凍君がキメラの足元を『氷結』させ、私も矢をつがえる。

「……小賢しいマネしやがって」

そうキメラが呟いたときだった。キメラの体が膨張する。

『!!』

靴が壊れ、猛禽類のような足が現れる。そしてキメラの体全体も変化。獣の胴体、鳥類の手足、爬虫類の尻尾、そして頭部から生えた大きな角。まさに混合種(キメラ)だった。

「巨大化!?!」

「天喰先輩かよ!!」

飯田君と切島君がそう吐き捨てるように言ってる間に、キメラは動く。

「グガアアアアア!!!」

『!!』

キメラは咆哮すると、口の奥が光始める。

「皆俺の後ろへ!!」

「(やばい!)『解除』!『降霊:マシユ・キリエライト』!!」

—行きます!!—

焦凍君の『氷壁』を展開し、私は『マシユ・キリエライト(オルテナウス)』に憑依し大盾を装備し構える。と同時にキメラから高出力の炎が吐き出される。その炎は一瞬で氷壁を溶かし、水蒸気爆発が起きる。

「クソ!!」

「~~~~~!!!」

高出力の炎は今度私を捉える。大盾に炎が激突。アンカーボルトを地面に刺し、こらえる。

「っああ!!」

それでも数秒しか耐えられず、吹き飛ばされる。

「轟君!」

「藤丸ちゃん!!」

「一旦退くぞ!!」

飯田君が焦凍君を抱え走り、梅雨ちゃんが私を舌で空中キャッチしてもらい、切島君を先頭にしてその場を離れる。キメラの放たれた煉獄の炎が滝を溶かし、森を焼く。

「ありがと…梅雨ちゃん…っ」

「藤丸ちゃん!…ひどい火傷…」

岩場の物陰に隠れる私達。自分の手を見ると、微かに掌が赤くなっていた。

「大丈夫…この程度の火傷なら…それよりも…あの炎厄介すぎる…」

「このまま隠れていても意味がねえ…っ！」

煉獄の炎で破壊しつくすキメラを見ながら切島君はそう言う。

「(どうすれば…)」

考えた作戦が潰れた。ここからどうすればいい…っ

side 立希

「なにが俺達の世界よ！威勢のいい事言って！」

僅かな光しか差し込まない鍾乳洞での戦いは、若干スライスが有利になっていった。狭い空間で縦横無尽に伸びる『刃の髪』、そして柔軟な体勢から繰り出されるナイフ裁きに自分らは後手になってしまう。

「ぐっっ！」

ついに常闇君がスライスの攻撃にバランスを崩し倒れた。

「常闇君！…斬る!!」

「！」

自分は常闇君が倒れると同時に前に出る。憑依で強化された身体能力で素早く動きスライスの背後を取る。

「ぜやあ!!」

そのままナイフを持ったまま縦回転し、回転鋸状に斬り掛かる

「ぐっっ！」

スライスは『刃の髪』を複数展開し防ぐが威力がありバックステップで躲す。自分はそのまま特攻し、両手のナイフで交差するように斬る。

「やるわね！」

指先の仕込みナイフで弾かれるがそのまま追撃。小型ナイフに複数持ち換え、投げ放つ。

「しゃあ!!」

「ふっ!!」

スライスはそれを『針の髪』を放ち弾き落とす。自分とスライス。お互い一定の距離を置き、構える。

「厄介ね…けど貴方さえ倒せば後はなんてこと無いわ。」

「それは…どうかな!!」

自分は大きく跳躍し一回転。その勢いを利用して逆手で持ったナイフで斬り掛かる。

「勝ちを焦り過ぎたわね!!隙だらけよ!!」

スライスは自分を挟みこむように複数の『刃の髪』を伸ばしてくる。確かに自分は空中において身動きは出来ない…と思ったたら大間違いだ。

「ここだあ!!」

スキル、『霧夜の殺人』を発動。逆手で持っていたナイフで自分に襲いかかってくる『刃の髪』の軌道をすべて外し、回避する!!

「なっ!?」

これにはスライスは驚いていた。ここで自分を倒すつもりだったのだろう。

「今だ!」

「感謝する! 『深淵暗駆・夜宴』!!」

スライスの背後から体勢が整った常闇君が特攻。『黒影』の爪を左右に交差して斬り掛かる。

「っ—「させるっ…:かあ!!」づう!!」

スライスが常闇君に反撃しようとするが、自分はナイフを捨て、手でスライスの髪の一部を握り、引っ張る。刃状になってるため、掌部分が少し斬れるが、スライスの行動がワンテンポずらすことが出来た。常闇君の攻撃が直撃し、後ろに飛ぶ。

「三奈!」

「OK! 『アシッドショット』!!」

更に追撃。機会を窺っていた三奈がスライスに『酸』を放つ。スライスは酸を受け髪が溶け落ちる。

「一気に決める!」

「了解!」

常闇君は『黒影』を向かわせ、自分はナイフを投げ放つ。

「貴様らあああ!!」

「キャウン!」

髪を溶かされ怒り狂うスライス。『針の髪』を飛ばし、『黒影』を怯ませ、ナイフを弾き落とす。

「危ない！」

「っ！」

そのまま自分らに放ってくる。自分は常闇君を押しして左右に回避。三奈は『酸』で滑り距離を取りながら回避する…が、スライスの髪を溶かした三奈を、スライスは逃さなかった。

「ああ!!」

三奈の太ももに数本の『針の髪』が突き刺さる。

「三奈あ!!」

「芦戸!!」

激痛に三奈が足を滑らせ、落下。薄暗がりでもわかるほど、三奈の太ももと落下してぶつけた場所から血が流れる。

「三奈すっかり！今治すから!!」

自分は三奈の太ももに刺さっている『針の髪』を抜き、『外科手術』のスキルで治療する。

「う…うう…」

落下した時頭を打ち付けたのか気絶しかけている…敵の戦力は大分削ったから一時体勢を直して…

「あ…ああ…ああ…き、貴様あああっつ!!」

「常闇君!?ダメだ！落ち着いて!!」

「こ…これは…」

その時、常闇君が激昂した。傷つけられた三奈の姿に常闇君の心が敵の憎悪に揺さぶられ、制御していた『黒影』が暴走し始める。暴走する『黒影』を見たスライスは動きを止めた。

『許サネエゾオオオオ!!』

『黒影』はスライスにさつきまでとはケタ違いの威力の爪を振り下ろす。

「っ—」

その威力にスライスは回避するしか出来ないようだった。自分も追撃に加わろうとナイフを持った時…

「ナインの…邪魔だけは…させないっ!!」

「！」

スライスは『針の髪』を天井に放ち、崩落させる。暴走した『黒影』を天井の崩落で、自尊覚悟で止めに行った。

「(まずい!) くっ!」

自分は三奈を担ぎ、落ちてくる瓦礫から回避し、瓦礫が落ちてこないところに寝かせる。天井が崩壊と同時に、光が差し込まれた。

『アアアアああああ……』

光が弱点の『黒影』は悲しい悲鳴と共に弱体化し常闇君の中に戻る。
「常闇君っ!」

力を使い果たした常闇君は気絶。自分は落ちてくる瓦礫が降り注がれる前に動き、常闇君を担ぎ、三奈を寝かせたところまで運ぶ。

「(スライスは……)」

瓦礫が落ち終わるのを待ち、静かになった。周囲を見渡すと……落下した瓦礫に当たり、気絶したのか、倒れているスライスの姿が見えた。髪は『個性』で使えないほど短くなって……

「(何とか……勝てた……けど被害が大きい……) 待ってて、今治療系の英霊と憑依して治すから——」ううん……大……丈夫……だから……!」

二人を治療しようとした時、三奈に腕を掴まれ止められる。少し意識が回復したのか、自分を見て言ってきた。

「まだ……終わってない……から……敵が……まだいる……その力は……それに使っ……て……」

「でも……」

「さっきので……回復した……から……大丈夫っ! えへ……へ……!」

最後にそう微笑んで、三奈は寝息を立て始める。自分は二人を比較的安全なところに運び、スライスが空けた場所から地上に出る。

『投影：ワルキューレ・スルーズ』……絶対勝っ!」

自分は飛び立ち、次に戦う敵に向けて再度、覚悟を決める。

第10話

side 立香

滝の周りは火の海と化していた。理性を無くしたキメラがただ私達を殺すことしか頭になく、森を焼き払い続ける。

「ガアアアアア!!」

「っ!」

近づこうにも『高火力の火球』を放たれ動くことが出来ない。数発防ぐ事は出来るが盾で防ぐ度、火傷箇所が増える。他も皆も同様で、傷だらけだ。今は崖下に避難している。

「なんてパワーだ…」

「近づくとすらできないわ…」

悔しがる切島君に梅雨ちゃん。更に最悪な事が起こる。

「くっ、間もなくレシプロが終わる……!」

飯田君がふくらはぎの『エンジン』を見て焦燥を滲ませる。

「(考えろ…あの炎をどうにかすれば勝機がある…水系の英霊で…けど中途半端な冷たさで消せるものじゃ…)」皆…俺に…考えがある」焦凍君?」

その時、隣にいた焦凍君から案が出てきた。私と同じように必死で何か考えていたようだったけど…

「…皆、突破口を開いてくれ。俺が奴の懐に……」グガアアアアアアアアアア!!」ちい!」

どうやら作戦を立てる時間が無い。キメラの足音がこつちに近づいてきた。

「(けど…焦凍君には何か勝機があることは分かった!なら…)焦凍君…信じていい?」

私はそう聞くと、焦凍君は真剣な目で頷く。

「ああ。」

「…皆、何とかして焦凍君をキメラの懐に行かせよう!」

「藤丸くん…分かった!」

「これが最後のアタックだ!」

「ええ、分かったわ！」

私、飯田君、切島君、梅雨ちゃんは焦凍君の決断を信頼し頷き、各々動きだす。

「マシユ、憑依率上げるよ！」

——了解です！——

私はマシユとの憑依率を上げる。うす紫の髪、紫の瞳となり、そして大盾だけでなく、ゴーグル、ローラーのついた脚部装甲を身に纏う。

「飯田君！私らで惹きつけるよ！」

「心得た！これが最後のレシプロだああああ!!」

飯田君と私はキメラの前に姿を現し、左右に別れる。飯田君は『エンジン』で駆け、私は脚部のローラーで駆け巡る。

「ガア!!」

当然、視界に私達を捉えたキメラは口から『火球』を連発する。

「オオオオ!!」

飯田君は方向転換を繰り返し攻撃を避け続ける。私もまた、大盾で飛んでくる火球を弾きながら避ける。その隙にキメラの死角から焦凍君と切島君が『氷結』に乗って滑るように近づく。

「(二人の方に火球が行かないように…っ!)『アマルガムゴート』！」

スキル、ターゲツト集中。キメラを私に注目させ、二人がいる方向に放とうとした火球を無理やり私がいる方に放たせる。

「っ——」

正面から大盾で火球を受け、後方に吹き飛ばされるが、注意は惹きつけた！キメラと焦凍君達の距離が狭まる。

「！」

『安無嶺過武瑠』!!」

キメラが焦凍君達に気付き、『高火力の炎』を放った。それを切島君が全身を『超硬化』した体で受け止める

「切島！」

「絶対に…倒れねえ…っ!!」

高火力に戦闘衣装が燃えても、熱で皮膚が剥がれても、切島君は耐

え続けた。そして：エネルギー切れで炎が枯れた。

「行け…」

「っ…ああ!!」

切島君が膝から崩れ落ちる。けど切島君のおかげで焦凍君がキメラの懐に入る事が出来た!

「あれは…!」

キメラの肩に乗った焦凍君。右腕に纏わり始めた氷を見た私は気付く。

「(エンデヴァーの『炎』の溜め方に似てる!) 炎で出来たことを氷で…!!」

「くらえ…っ!」

「グルア…!!」

焦凍君が攻撃しようとした時、キメラが爪で掻き殺そうと腕を動かす。

「させない!」

「ケロッ!」

それを私と梅雨ちゃんで防ぐ。私が大盾で防ぎ、木の上から飛び降りた梅雨ちゃんが『舌』で拘束。

「グッ!」

「うおりゃあ!」

今度は太い尻尾で払い落とそうとしたがそれを飯田君が蹴りで防ぎ、そのまま尻尾に抱き着いて止める。

「轟君!」

「焦凍君!! 今!!」

「凍て尽くせ!!」

焦凍君は限界まで冷気を溜め、『氷結』した右腕をキメラの口へと突っ込む。体内からキメラを凍らせるつもりだ!

「グオ…ガア…アアアア…ッ!!」

キメラは吐き出そうと炎を放とうとするが口内で『氷結』がぶつかり合い水蒸気が噴き出し始める。

「ガッ!」

「ケロッー」

体の異変にもがき苦しむキメラ。梅雨ちゃんと飯田君が必死に押さえるが振り回され、反動で激突し、離れてしまう。

「（このままだと焦凍君が振り落とされる！）一か八か…っ『応急手当』！『瞬間強化』！」

「これは…っ！立香！」

咄嗟の判断だった。私の戦闘装束、『魔術礼装・カルデア』に備わっていた機能を発動させる。焦凍君に向けて『応急手当』でほんの少しだけ焦凍君の体に纏わりつき始めた霜を落とし、『瞬間強化』で口内で拮抗している『氷結』の温度を更に下げる！！

「いっけえええ！！」

「ああ…！！凍てつけええ！！」

拮抗していた『炎』と『氷結』。しかし氷結が上回るとキメラの体は一気に凍り始める。

「ガッ……………ア……………」

キメラの体表に霜が急速に広がり、空気さえも凍らせる。

「ー」

「し、しばらく……………冬眠してろ……………」

「焦凍君！！」

完全にキメラが凍結した…けどそれは焦凍君も同様だった。限界まで温度を下げた冷気は焦凍君の体も蝕んでいく。氷の上で焦凍君は倒れ、私は直ぐに駆け寄る。

「待ってて！今体を温めるから！」

「…立香……………お、俺の事は……………いい……………おま、え…は…早く……………みど、りや……………達のところ、ろに……………」

温めようとした時、最後の力を振り絞っているのか、焦凍君は私を止めてきた。

「けど…」

「せ……………責務は……………果たした……………行って……………くれ……………っ……………立香っ！」

それを最後に、焦凍君は気を失った。今大丈夫なのは私だけ…飯田

君と梅雨ちゃんはさつきの激突で気絶して、切島君もあの炎に耐えて
戦闘不能になった……

「…『降霊：ワルキューレ・オルトリンデ』っ！」
託された私はそれに応えるために、飛翔する。

side 三人称

ナインとの激しい猛攻が続く。既に瀬呂、麗日はナインの『爪弾』、
『使い魔』の攻撃により戦闘不能になってしまう。それでも緑谷と爆
豪はナインへの攻撃を止めない。

「無駄だ」

「っ——」

『使い魔』二体が二人を襲い、喰らいつこうとした時だった。

「う…うう…ううおおおおおお——ううう！」

突如として、ナインは頭を抱え苦しみます。その額にはひび割れの
ような傷が浮かんでいる。『使い魔』は姿が崩れる。

「こ、これは…来た！」

苦しみますナインを見た緑谷、爆豪は待ち望んだ瞬間だった。

「限界時間！」

個性の使用限界を超え苦しむナインに、二人は勝機を感じ、速攻で
飛び出す。

「さ、細胞活性さえ手に入れば…温存など……必要ない！」

ナインは激痛に身を悶えながら必死に考えを巡らす。そして服の
下に来ていた、全身を覆う『個性制御装置』を操作。顔の下半分を覆っ
ていたマスクが落ち、ひび割れた傷が小さくなる。白髪が乱れ、目は
狂気に見開かれる。

「っ——！！！！」

刹那、激情に天をあおぎ咆哮するナイン。突如として昼から夜に変
化したかのような大きな暗雲が広がる。

第11話

side 立希

「立希！」

「姉！」

飛翔し、上空から周囲の状況を見ていた時、オルトリンデと憑依して自分と同じように飛んでいる姉と会う。

「そっちも戦闘は終わったらしいね…傷だらけじゃん」

「そっちだって…火傷だらけじゃん…皆は？」

自分は訊くと、姉は少しだけ悲しそうな顔になったけど直ぐに真剣な顔に戻る

「キメラは倒した。けど私以外、皆離脱。」

「そっか…自分も姉と同じでスライスは倒せたけど…常闇君と三奈は怪我して安全なところで休ませてる…」

お互いの状況を確認し、最後の一人がいるであろう城跡の方へと向かっている時だった。

「！」

突如として大きな暗雲が発生。音を聞けば雷特有の轟音が鳴っていた。

「一旦地上に降りるよ！ここで雷撃なんて冗談じゃない！」

「確かに！」

自分達は直ぐに降り、英霊との憑依を解除し、走って向かう。少しでも魔力消費を減らす。

「後、魔力はどれくらい残ってる!？」

「憑依はあと…1, 2回ぐらいしか出来ない!そっちは!？」

「同じく!全くもってヤバイよ!」

これからどう戦うか走りながら考えてると、あの暗雲が唸り始め、紫色の光が暴れまわった。その直後、遠くで雷撃が落ちた。

「っく!!」

距離があるはずなのに、目の前で落ちたかのような衝撃が体中に響く。

「もしかして…敵の個性…!？」

「だとしたらまずいかも…急ぐよ！」

自分らは雷が落ちた場所に向かった。その場所は雷によって出来たであろう巨大なクレーター、周囲の木々は火で燃え尽くされ、地面は岩だらけ、城跡がさらに崩れていた。そして…

「!」

クレーターの中心で見たものは—

side 三人称

絶対絶命。突然の激しい落雷は容赦なく緑谷と爆豪目掛けて放たれた。その後、二人の姿が見えず。ナインはようやく邪魔者がいなくなった感じ、活真達がいるところへ進む。

「障子、活真君達を連れて脱出を」

「頼んだよ！」

城山に残ったのは尾白と耳郎、障子のみ。障子に活真と真幌を託し、耳郎と尾白はナインに立ち向かう。しかし、ナインの『使い魔』により喰らい付かれ、壁に叩きつけられる。

「ぐうっ!!」

障子もまた、二人を担ぎ脱出経路である祠に向かおうとすがナインに追いつかれ、『爪弾』に撃たれ、『空気の壁』の衝撃で弾き飛ばされる。

「に、逃げろ…! 走れ…!」

「二人とも、逃げて！」

「早く！」

少しでも、二人からナインを離すために、障子達はナインに立ち向かう。さきの攻撃で体はボロボロになるが、耳郎は『イヤホンジャック』を差した『小型スピーカー』で、尾白は『尾』を使った打撃、障子は『複製腕』で大量に複製した拳で攻撃する…が、ナインの強力な衝撃波で吹き飛ばされ、気絶する。

「活真、逃げて…」

「お姉ちゃん！」

「来るな！私の弟に手を出すな！…来るなって!!」

残された真幌と活真。真幌は弟を守るため、震える体を叱咤し、ナインの前になりふり構わず駆け出す。ナインはそんな真幌を掴み上げる。

「お姉ちゃん!」

「ぐ…うう…く…く…」

抵抗する真幌だが、ナインは首を絞める。

「こ…こいつの命が惜しければ、こちらに来て」

ナインは真幌の首元を掴みながら活真に言う。活真は恐怖で竦み、大粒の涙が流れる。

「ダメ逃げて…！…！逃げて…！」

更に真幌の首を絞めつけるナイン。

「叶えさせてくれ…！…！私の…願いを…！」

顔の傷が広がっていく。悪魔の懇願に活真の足が恐怖で震えた…がしかし、首を絞められ、意識が遠のいていく真幌の姿を見た活真はとつさに駆け出す

「いやだああ!!僕が守る!僕がお姉ちゃんを守るんだあ!!」

大切な家族を守りたい。その気持ちだけが活真の体を動かした。必死にナインの元へ駆ける活真。ナインは真幌を投げ捨て唯一の希望に手を伸ばす。渴望した“個性”がやつと自分の物になる。それは世界を手に入れることと同義だ。

活真の顔にナインの手が触れる―

『スマッシュ』!!」

「t r e n t e オオ!!」

「ッ―」

瞬間、ナインの顔面と体に強烈な蹴りを食らわす緑谷と立香が飛び込む。

side 立香

「遅れてごめん!」

「デク兄ちゃん…」

「やっと一撃…二撃入れれた…っ！」

私と緑谷君は活真君の前に着地。遠くでは爆豪君と立希が真幌ちゃんを救けていた。

「よく頑張ったね活真君。凄いよ」

「家族を守ろうとしたその行動。かつこよかったよ」
「っ！」

私と緑谷君で活真にさういうと、活真君の目が安堵と嬉しさに潤んでいた。そして隣に爆豪君と立希が真幌ちゃんを連れて合流する。

「バクゴ…生きて…」

「言っただろーが。俺はオールマイトを超えて、ナンバー1ヒーローになる男だっつてな」

「この程度で倒れる爆豪君じゃないしねー」

身構えながら不適に笑う爆豪君と安心させるように笑みを浮かべる立希。真幌ちゃんは爆豪君のそんな姿を見ていた。まるで、かつこいいヒーローを見ているようだった。

「真幌ちゃんと逃げて」

「うん！お姉ちゃん、行こー！」

緑谷君の指示に活真君は従い、真幌ちゃんの手を引いて後ろに行く。大分離れた時、奥から敵が現れる。

「！！！！」

私達は一気に敵へと向かい、私と緑谷君は蹴り、爆豪君は『爆破』、立希は拳を放つ。しかし既に『空気の壁』が展開され、防がれ、弾かれる。衝撃波で澱んでいた土煙が舞い、晴れる。

「…どうやって私の稲妻を!?!」

敵は苦しみながら憎々しげに言い放つ。

「アレは前に受けた！」

私達は散開する。そして緑谷君が渾身の蹴りを放ちながら答える。
『空気の壁』は耐えきれずに破壊され、敵は吹き飛ぶ。

「だから、使いもんになんねーアホを避雷針にした」

「(上鳴君…)」

爆豪君の言う通り。クレーターの中心を見た私と立希。そこには

…落雷を受け、固まっていた上鳴君がいた。

—「きよ…供給過多じゃね？」—

『帯電』で被害を喰いとめたとしても、あの電力に上鳴君は倒れてしまった。そして最初の緑谷君と私の蹴りは緑谷君と爆豪君、私と立希の各々のコンビネーション。

—「立希！合わせる！」—

—「オツケー！！せーの…！」—

立希は『パッションリップ』と憑依し、巨大な鍵爪の生えた両腕を纏い、その腕でカタパルトの様に、私は『メルトリリース』に憑依し、両足に剣を装備した私を矢のように撃ち放つ。

—「かつちゃん、頼む！」—

—「命令すんなっ！くたばれえ！！」—

爆豪君は『爆破式カタパルト』にて、緑谷君を掴んで投げ放つ。こうして私達は敵に蹴りをあたえることが出来、活真君達を救ける事が出来た！

「っ…ッ……こんのおおお…っ！！」

敵は悔しさと痛みに顔を歪めながら、私達に『爪弾』を飛ばしてくる。

「潰れる！！」

『徹甲弾』！！

けれどそれは立希の巨大鍵爪によって握り潰され、爆豪君の『徹甲弾』で全て打ち砕かれた。今度は『使い魔』が二体襲い掛かる。

「うおおおお！！」

「お生憎様！！」

緑谷君は蹴りで引き裂き、私は足に纏った剣で斬り刻む。

「くたばれ！」

「発射ア！！」

その間に爆豪君が一気に距離を詰める。連続『爆破』できりもみ回転しながら勢い付け迫り、更に、立希は両手を爆豪君めがけて射出し、威力を上乗せ。

「死ねやあ！！」

「」

爆豪君の掌が予兆で光る。敵は『空気の壁』を張ったが広場を大きくえぐるほどの大爆破、そして炎に飲み込まれる。爆弾が落とされた衝撃と炎に、私は吹き飛ばされそうになる

「威力えつぐ…っ」

「ひゃー…すっ…」

その威力に、私と立希は感嘆した。

「へっ」

確かな手ごたえを感じ、緑谷君の隣に着地する爆豪君。

「これで…」

緑谷君が何かに気付く、と同時に私達も反応。一面の炎中で、人影―敵の姿が確認できた。

「しぶとい…っ」

「お…終われない…！終われるはずがない…この程度で、終わってなるものかア!!」

『!!』

敵が再び動き出す。『個性』を発動させると同時、再び上空に巨大な暗雲が発生する…

第12話

side 三人称

ナインの咆哮と共に「個性」が発動。両肩のボトルが光り、一気に噴射。直後、緑谷達の目の前で炎の中に雷が走ると内側から爆発のような衝撃波が生まれる。

「っ……」

4人は爆風に必死に耐えてる中、ナインは上空へと浮上し、回転。『竜巻』を発生させる。炎を飲み込み巻き上がり、巨大な『炎の竜巻』となる。

「竜巻!?!」

「チッ! やっぱ『気象変動』か……!」

さきの雷撃、今度の竜巻を見て個性の正体を知る緑谷と爆豪。すさまじい熱風の中、4人はナインの操る悪魔の炎を前に焦りながらも思考を続ける。

「この島もろとも、ブツ壊す気か……!」

爆豪は改めて身構える。島中、至る所に雷が落ち、そこから火災が発生し、火柱が放たれる。

「(絶対に…止めるんだ!!) 藤丸君たちは活真君達を頼む!」

「緑谷君何する気!?!」

緑谷は藤丸姉弟に指示を飛ばし、竜巻の前に行く。

「この竜巻を止める! 後ろには…避難してる人達もいるんだ! ここで…止めるんだ!!」

「止めるって「いいから黙って守ってる! モブ共!!」爆豪君!」

緑谷と同様に、爆豪もまた前が出る。

「っ…活真君! 真幌ちゃん! 下がるよ!! ここは十分危ない!」

立希は顔を顰めるが、活真と真幌ちゃんを避難させる。

「デク兄ちゃん!」

「バクゴー!」

「二人は大丈夫…だから…っ!」

立香も二人を落ち着かせながら後方へと移動。緑谷と爆豪が竜巻

を止めることを信じて…

「ワン・フォー・オール100%っ！『デトロイトスマッシュ』ツツ!!!
オオオオ!!!」

「最大火力でフツ飛ばす!! 『榴弾砲着弾』オオオオオ!!」

緑谷は最大威力の拳を、爆豪は最大火力を、竜巻に撃ち放つ。激しくぶつかるエネルギーが気流を乱す。しかし、ナインの操る竜巻はより激しさを増した。

「ぐううう……くっ……」

「っ……ぐっ……」

緑谷と爆豪の威力が掻き消されていく…そしてついに…

「緑谷君!」

「デク兄ちゃん!!」

「爆豪君!」

「バクゴー!!」

緑谷と爆豪は炎の竜巻へと巻き込まれてしまった…

side 立香

「ぎゃあああ!!」

「っ!」

竜巻に破壊された岩々が気流から外れ、私達へと落ちてくる。活真君と真幌ちゃんに当たらないように、立希が巨大な鍵爪の手で覆い、私は脚の剣で切り刻み、落下してくる岩々から防ぐ。

「姉…緑谷君と爆豪君が……」

「っ」

竜巻が弱まり、見えた光景は…満身創痕で倒れている緑谷君と爆豪君の姿。そんな二人の前に敵が降りる。

「姉!」

「分かってる!行くしか…ないっ!!」

私は立希の手の上に乗る。そして

「発射ア!!」

再びカタパルトの様に、敵向かって真っすぐ飛ぶ。

「tren—「無駄だ」っあ!？」

蹴りが敵に届く前に、『爪弾』に襲われ、地面に不時着してしまう。脚から血が滲み出していた。

「潰っ…れろっ!!」

敵の頭上から立希が現れる。巨大な両手で敵を挟み込むように振るった…が『空気の壁』に阻まれる。

「無駄だと…言っているー!」

「ガア!？」

「立希!!」

『空気の壁』の衝撃波で立希は吹き飛ばされ、私がいるところまで不時着し、転がってきか

「あ…ぐう…ゲホッ!…」

「っ…」

絶対絶命。もう私達以外に、活真君達を守る存在、ヒーローはいない…緑谷君と爆豪君は虫の息。立希は…気絶している…私は脚に力が上手く入らない…

「ひゃ…100%でも…通じない…」

「く…クソが…自分曲げてデクと一緒に戦ってんのに…!!」

まだ二人は倒れてない…けどもう戦う力が無い。

「その程度の力では生きられない…私の作る新世界では…」

「新世界…「力を持つ者」っ」

「がっ」

二人に『爪弾』が襲う。

「強き者が弱き者を支配するユートピアだ」

そう言い、敵は『使い魔』を放ち、二人を襲う。

「敵もヒーローも関係無い。力の前では全てが平等。真の超人社会のあるべき形だ。」

「…ふざ…けるな…」

「立希!?!目が覚めて…」

いつの間にか、隣で気絶していた立希が目を覚まし、ふらつきながらも立ち上がって、敵にそういった。敵はこつちを向く。

「そんな世界…平等なんかじゃない…ただの…弱肉強食の世界だ…っ！」

「…そうだね…その通りだ…力でねじ伏せる。何が平等なんだか…」
私も立ち上がる。悪口吐きながら、立希に支えてもらいながら言う。こんな奴に、この世界は渡せない。私達が救った、この世界を、絶対に渡さない!!

「ほう…新世界を拒むか」

「誰がそんな世界受け入れるか!!!」

私達は吠え、最後の力を振り絞って構えた

「ならば消えろ」

「っ—」

視界が暗転する。

side 三人称

「(考えろ…!考えろ…!)」

「(負けたくねえ…!)」

ナインの『使い魔』にくわえられ、噛みちぎられそうになる緑谷と爆豪。激痛が体中に走るが思考は手放さず、諦めなかった。

「(考えろ!!)」

皆が命懸けで戦い、守るために、救うために、ヒーローとして諦める選択肢など端からない。しかし既にナインに対抗できる力は無い。救援もいつ来るかわからない。それでも活真の“個性”を渡す事はダメだ。

どこまでも黒く広がる空の下、蹂躪された島は若きヒーローたちの力の限界を示しているようだった…その時

「デク兄ちゃん!」

「バクゴー!!」

「負けないで!!」

活真と真幌の、勇気を振り絞る応援が、緑谷と爆豪は聞こえた。

side 立希

「……………」

ぼやける視界。

「……………」

焦土の匂い。

「……………」

土の感触。ここで、ようやく意識がはつきりする。敵に吠えた後、『空気の壁』で姉と一緒に吹き飛ばされた。

「姉……」

「……………」

視界を横に移動すれば、自分と同じように地に付している、傷だらけの姉。若干意識が戻りかけている。

「……………」

自分は目を閉じ、自問する。ここで倒れたままでいいのか、ここで気絶したままでいいのか、ここで諦めるのか……

「――否。」

自分……と姉が同時に起き上がる。どうやら姉も自分と同じ事をしていたっばいようだ。お互いボロボロな姿をみて、少し笑った。

「人理救出する時も、こんな感じだったけ？」

「ソロモン王と会った時もね……あ……体が痛い……」

「これからもっと痛くするけど？」

「確かに」

遠くを見れば、淡く光り輝く二つの人影と、怪しく光る蠢く敵の姿。よかった。まだ、終わっていない。

「最後の勝負だよ！姉！」

「分かっている！これが最後の力！」

自分達は目の前に手をかざし、令呪を輝かす。

「『投影……』」

「『降霊……』」

最大の憑依。

第13話

side 三人称

「か、かつちゃん」

「……デク……」

緑谷はボロボロで傷だらけの左腕を爆豪に伸ばし、爆豪もまた、傷だらけ右腕を伸ばす。ナインが活真達に近づく中、この状況を打破する方法を緑谷は見つける。緑谷は己の「個性」『ワン・フォー・オール』を爆豪に『譲渡』した。守って、勝つ。その唯一の方法だと信じ、二人は強く握り合う。刹那、力が沸き上がる。

「!？」

活真達の元へ向かうナインが強い光と爆発音に気付く。二人に喰らい付いていた『使い魔』は苦しそうな奇声とともに砂のように崩れ散る。

「なんだ……」

靄の中、緑谷と爆豪は着地し、ナインは突如起きた異変に警戒する。

「……こんな事して……テメーは使えんのかよ？」

「……分からない……でも、オールマイトは、『譲渡』した後も残り火で僕らを守ってくれた……」

爆豪の間に、緑谷は自分の中の残り火を確かめるように拳を握りながら答える。

「二つの……『ワン・フォー・オール』！」

全身に行き渡ったエネルギーで、二人の髪が逆立つ。

「なにをしたあ!!」

苛立つナインの怒号が響き渡る。ナインは二人に大量の『爪弾』を放った。緑谷と爆豪は迫りくる『爪弾』に身構えた時だった。

「!!」

二人の背後から現れた二つの影が、全ての『爪弾』を掻き消した。

『投影：アルトリア・ペンドラゴン』

『降霊：アルトリア・ペンドラゴン・オルタ』

その人物2人は立希と立香だった。

「藤丸君に藤丸さん……っ!?」

「んだその姿……!?!」

普段の姿とは全く違うことに二人は驚く。

「こっちのセリフなんだけど……」

立香は金髪金眼となり、黒く禍々しい甲冑を身に纏い、漆黒の聖剣『エクスカリバー』を装備し、

「自分達は……まあいつも以上に頑張った結果の姿かな……?」

立希は金髪翠眼となり、青いドレスに類似した、白銀の甲冑を纏い、聖剣『エクスカリバー』を装備する。結果的に言えば、二人は『投影』と『降霊』の『憑依率100%姿』だった。

「でも……これでまだ戦えるよ」

「二人だけだと不安だし……ね」

立希と立香は剣を構える。

「……うん。ありがとう。二人とも!」

「けっ……勝手に言ってる!」

緑谷と爆豪も拳を構える。

「この……死にぞこないがああああ!!」

4人のむき出しの鬨志にナインは咆哮する。怒りのまま再び『竜巻』を発生させる。あっいうまに巨大化し、周囲に嵐をまき散らし、暴風雨が吹き荒れ、木や崩れた岩山を吹き飛ばす。

「活真君!真幌ちゃん!コレをしっかりと持ってて!君たちを守ってくれる!」

「う、うん!」

「はいっ!」

立希は腰に付いていた『エクスカリバーの鞘』を活真達に投げ与える。活真と真幌が鞘を持ち支えると、二人の体が淡く輝く。光の粒子が纏い始め、二人の周囲が『簡易結界』で守られる。

「あれで……竜巻から二人を守れる……」

立香はそう言いながら今もなお巨大化し続ける竜巻を見上げる。既に落雷から火災が起こり続き、何本も火柱が踊り狂う。既に竜巻は那歩島本島まで及ぶほど巨大化する。瓦礫を巻き上げながら半壊の

「救けるんだあああつっ!!」

4人の力が1つとなる時、その波動で地面が舞い上がる。

「笑わせるなあああ!!」

ナインが感情のまま天に手を翳すと、膨れ上がった竜巻が山の頂上を覆うように降下してくる。4人は吹き荒れる暴風の中、踏ん張り、同時に全力で解き放つ

『約束された勝利の剣（エクスカリバー）』アアアア!!!」

『約束された勝利の剣（エクスカリバー・モルガン）』ツツツ!!!」

『デトロイトオオオスマアアアツシュ!!!」

凄まじい衝撃波が周囲の地面だけでなく、炎や雨を巻き込みながら上昇し、竜巻を波及する。一瞬で下部を消し差し、勢い衰えぬまま空を覆う雷雲へ、乱れまくる気流は天高く上る光と闇のエネルギーが螺旋を描き、押し返し、そして雷雲の中で暴れるように爆発四散。暗い空に大きな穴を開け、残ったのは螺旋を描く光と闇の輝く柱。

「――」

数秒で光の柱が消え、隠れていた光が差し込み、4人を照らす。これを見た活真と真幌は甦る希望に息をのむ。

「な……なんだ……なんだその力は……!?!」

ナインも同様だったが、見いだしたのは希望ではなく怒りと混乱だった。体に走る傷が憤怒と共に広がっていく。

「っ……」

緑谷と爆豪はスマッシュを放った腕に激痛を走るが、耐え、身構える。

「この……程度で……っ!」

「う……ぐっっ!」

立希と立香も同様、『宝具』を放った反動で全身に激痛が走り、魔力枯渇により少し魔術回路が浮き出るが堪え、再び剣を構えなおす。

「かっちゃん、藤丸君、藤丸さん、行こう!」

「ああ!?!俺に命令すんじゃねえ!」

「了……解っ!」

「ガラじゃないんだけど……ねっ!」

4人は一気にナインの元に駆ける。

「俺の道を…阻むな…!!…阻むなあ!!」

ナインは忌々しそうに叫び、無数の小さな『使い魔』を放つ。
「っ！」

爆豪は『爆破』で細かく軌道を変えて避けながら『爆破』で『使い魔』を焼き払い

「風王鉄槌（ストライク・エア）っ!!」

立希は風を纏う『エクスカリバー』で突きを放ち『使い魔』を斬り飛ばす。大量の『使い魔』が二人に襲いかかり、二人は爆破、斬り続けるが、体が悲鳴を上げる。

「ぐっ！」

「っ〜！」

「かつちゃん！」

「無理すんな！」

緑谷と立香が爆豪と立希に襲い掛かろうとする『使い魔』を、緑谷は蹴りで、立香は『エクスカリバー』で粉碎、斬り刻む。

「ふっ！」

「ヴォーティガーン…っ！」

そのまま二人はナインの元へ走り、手前で跳躍。蹴りと斬撃を放つ。

「うるあああ!!」

ナインは瞬時に避け、二人の死角からより強力な『爪弾』を連射。緑谷と立香は咄嗟に空中で身を捻り、避けながら着地。蹴りと斬撃で『爪弾』を断つ。

「がっ!!」

「コフツ…！」

ナインからの絶え間ない『爪弾』に追い込まれてしまい、緑谷と立香も体が悲鳴を上げ始める。

「死いねやああ!!」

「斬るっ!!」

その時、ナインの背後に回り込んだ爆豪と立希が『大爆破』と『輝

く斬撃』を放った。

「ぐうううおお!!」

ナインは咄嗟に『空気の壁』を張るが、爆破と斬撃の勢いに片腕が焼け爛れ、深めの一閃が刻まれる。爆豪と立希は『空気の壁』の反動で飛ばされ、城跡の上部クレーターの中へ滑り落ちてしまう。

「フル…カウル…ッ」

『魔力放出』…っ」

その間に、緑谷は体中に力を行き渡らせ、立香はスキルを発動させ、一度地面に『エクスカリバー』の先を突き、力を迸らせる。

「デクー！」

クレーターの底で爆豪が側面に手を押し付けながら叫ぶ。悲鳴を上げる体さえ忘れるほどのすさまじい熱い力で、強大なエネルギー波を放つ。城跡を溶かし、破壊し、そのままナインの元へ飛び出す。

「ぐうう！」「正面から…受けて立つ…っ！この道に…勝利を…っ！」
!!

ナインが爆豪に向けて最大の『空気の壁』を張った時、爆豪の後ろで『エクスカリバー』を構えた立希の姿があった。スキル『カリスマ』、『竜の炉心』を発動させ、爆豪と自身を強化。

「くたばれえっ!!」

「まだまだあ!!」

立希が『エクスカリバー』で斬り上げ、地を抉り、削る『輝く斬撃』と同時に、爆豪は強化された『大爆破』を放つ。二つの威力が合わさり、衝撃で地面が割れ、砕かれる。

「っがあ…っ！」

そして爆風に飛ばされる爆豪と入れ替わるように、緑谷と立香が現れる。緑谷は抉られた地面をとてつもない速さで滑走しながら、立香は強化した俊足で地面を蹴る度に加速し、二人は空中へ飛び出す。

「らあっ！」

「そっ…だっ！」

その勢いのまま緑谷は高速回転し、威力を高めた蹴りを、立香は『エクスカリバー』を黒く輝かせ、エネルギーを纏ったまま威力を底上げ

ナインが吹き飛ばされていく。

「」

爆豪はすでに力尽き…

「(さようなら…ワン・フォー・オール…ありがとう—)」

緑谷は遠のく意識の中で、小さくなって消えていく炎を感じ…

「ここ…まで…か…」

「まだ…まだ…未…熟…」

立香と立希も力を使い果たし、憑依が剥がれ、意識を手放す…

力尽きた4人が瓦礫とともに落下していく。戦いの終わりを告げるように、晴れていく雲の切れ間から祝福のような光が島へと差し込んできた。

第14話

side 立希

「――希君！目を覚ましてくれ！立希君!!」

温かい、何か…誰かに支えられていたのを感じた自分は、ゆっくり目を開ける。

「……………ロ…マニ……………」

「よかった…っ本当に良かった！君たちは一体何回僕らの心臓を飛び出させようとするんだい!？」

視界にロマニがの顔が映った。嬉しいと悲しいと怒りの混じったような表情と声。頭上には戦闘機が飛んでいた。

「あ…ね……………はあ…?」

「勿論無事だよ！全く、自分より他人を心配するあたり、君達らしいよ！…アスクレピオス含めたキャスター陣が精製した秘薬を飲ませて、今は寝かせてるよ。ほら、君も飲むんだ」

「っ……………く……………はあ……………」

ロマニが自分の口元に薬を運んでくる。少し動かすだけで激痛が走る体。何とか薬を飲み終わると、ロマニはゆっくり、自分をその場に寝かせた。横を見れば静かに寝息を立てている姉がいた。『憑依率100%』の代償はかなりのものだ。体が全く動かない。

「生命維持する魔力まで使って…魔力回路が顔にびっしりだ…帰ってきたら、僕を含めた英霊達全員から説教だよ。覚悟するといい!」

そう言い、ロマニは立ち上がると、淡く光始める。転移魔術だ。ここに来た事は内緒のようだ…

「だけど…ありがとう。また僕たちは、君たちに救ってもらったよ。」

そう微笑んで、消える。自分はゆっくり、上空を見る。とても、空が綺麗だった。

「いたぞー！要救助者2名!」

誰かが自分と姉を見つけたようだ。そう考えが浮かぶが、疲労困憊の眠気が襲い、自分は意識を手放した――

side 三人称

コスモスが咲き乱れる那歩島本島の端。

「やっぱり生きてた」

突然現れた黒い物質のような物から死柄木が現れる。

「……死柄木……」

その島には息絶え絶えのナインもいた。ナインは立ち上がる事さえ出来ない体で必至に可憐な花を押しつぶしながら這い上がっていく。そんなナインを死柄木は見下ろしていた

「安心しなよ。あんたの夢は俺が紡ぐ」

「支配者は一人でもいい……そう……一人でもいい……!」

ナインはなけなしの力で上体をわずかに起こすが、死柄木はナインの顔を掴む。

「おやすみ、ナインーお疲れ様……」

「――」

驚愕に見開かれたナインの顔が、瞬く間に変色し、砂のように崩れ去る。穏やかな海風がナインの痕跡を消して、海と空へと舞い散った……

side 立香

本島から救助が来て、一日が立った。ロマニからもらった薬のおかげで、私達は魔力も体力も回復。無事五体満足となる。

「カルデアに戻ったら、ロマニ含めた英霊達から説教だつてさ……」

「うーん……帰りたくないなあ……」

立香からそれを聞いてげんなりしたけど……で、後日談。製糖工場の地下に拘束した敵達は逮捕され、無事連行された。最後まで私達が戦ったあの敵は不明。海に落とされたけどあの致命傷ならそう遠くには行っていないはず……で、島の被害の大きさに、ヒーロー公安委員会はプログラムの中止を提示。だけど私達1年A組は期日まで続行したいと嘆願。この島に関わったヒーローとして、島の復興を手伝った。今日も私は『ワルキューレ・オルトリンデ』に『降霊』し、空を舞う。「おお……天女様……ワシを迎えに来てくれたのか……」

「いや、だから違いますよ!?そういう意味の迎えじゃないです!病院までです!」

「おお、そうじゃったそうじゃった。よろしくたのむのお」

「はい。いつでもお任せください」

私は老人を抱え、飛び立つ。

side 立希

ボロボロになった島。最初は皆落胆したけど、命が救かったからなんとでもなる。と島民全員が奮起。もちろん、自分達A組も島の復興を全力で手伝った。そしてあつという間に数週間が経ち、期日満了の日を迎えた。

「なにも黙って帰ることなくね?」

「ねえ」

朝早くから、船に荷物を積み終え、乗った自分達。隣で電気君が言いこぼして、三奈が同意する。

「復興の邪魔するわけにはいかないよ。それに…静かに去るのもかつこいいんじゃない?」

そう自分が言うのと、二人は納得したのか、微笑む。

「ま、黙って立ち去るのもヒーローっぽいか。」

汽笛が鳴り、船がゆつくりと出航していく。そんな時、港に一台の軽トラが来た。そして車から真幌ちゃんと活真君が出て、走ってくる。

「デク兄ちゃん!」

「バクゴー!」

「みんなー!」

『!』

デツキにいた自分達は笑顔で二人に手を振る。

「島の人たちを!」

「守ってくれて!」

「ありがとう!」

二人は走りながら、感謝の言葉を自分達に送ってくる。二人からの

感謝の気持ちに、笑顔が深くなる。自分達がヒーローとしてちゃんと活動できた証だった。

「…それにしても、緑谷から聞いたぜ立希！立香と一緒に大活躍だったんだろ!?あの敵相手にとんでもない一撃喰らわせたとか!!」

「いやいや、電気君だって凄かったじゃん。あの落雷で緑谷君と爆豪を守ったからこそ、この勝利があったと思うよ。MVPだよ。」

「立希ありがとね。ばっちり太腿治ったのは立希の応用処置のおかげだよ。」

「あの時はけっこういっぱいだったけどねえ…」

本島まで時間がある。自分達は今回の出来事について、自分達はどこで、どんな場所で活躍して、すごかったか盛り上がった。

雄英高校1年A組ヒーロー課。皆を乗せた船は差し込んだ。

WORLD HEROES MISSION

第1話

side 三人称

「昔、超常的異能…すなわち“個性”が人類にもたらされたのはなぜか…初めての異能者『光る赤子』が生まれたのはなぜか…」

薄暗く広いその空間―神殿のような場所。そこにローブを羽織り、顔全体を覆う灰色のマスクをした無数の人達がいた。その人達は高い壇上に立ち、語る一人の青い肌の男性―フレクト・ターンを見る。フレクトはその視線を一身に浴びながら、訥々と、けれど情感を煽るように語る。

「全ては悲劇である。“個性”は人類にとつての福音ではなく、終末への始まりだったのだ。この『個性終末論』に記されている…世代を経るにつれ、“個性”は混ざり深化し…やがて誰にも、その力をコントロールできなくなる…」

フレクトの声が熱を帯びていく。

「人類の八割が“個性”という病に冒された時代…残された二割の純粹な人類も“個性”保持者と交わり、その数を減らしていく。絶滅は目の前に迫っているのだ。」

純粹さは、狂気と紙一重…

「我々、『ヒューマライズ』は、今こそ立ち上がらなければならない。たとえ、大地に血に染めてでも…」

フレクトは本を胸に抱く。自身が守るべき未来―人類を救う救済主がヒューマライズであると…その意志を魅せる。ヒューマライズのシンボルを頭上に掲げたフレクトが大きく腕を振り上げ、声を張る。

「人類の救済を!!」

『人類の救済を!人類の救済を!―』

熱狂するローブを纏った者たちの歓声が上がる。熱狂が膨らんでいく空間はまるで破裂をまっつているようだ。その期待に応えるべく、

多数の被害者を出したガスによるテロは世界に衝撃を与えた。事件からまもなく犯行声明を出したヒューマライズ。世界二六ヶ所に施設を有している大きな団体。その団員は世界中にいる。再び無差別テロ悲劇を繰り返してはならないと、アメリカのニューヨークに統括司令部を設置し、世界規模の作戦が行われることになった。

「…ふうー…「いつまで座ってんの？そろそろ時間」ん。大丈夫。」

自分…と姉は今、軍用輸送ヘリで、夜のイギリスを飛行している。軽く精神統一をしてから立ち上がり、ヘリ内のモニターを見る。モニターには今回の作戦の概要を示した映像と共に司令部長官の声が流れている。

『先日の無差別テロの犯行声明を出したのは、『ヒューマライズ』。人類救済を標榜する指導者、フレクト・ターンによって設立された思想団体である。テロに使用された装置は、個性因子誘発物質、『イデオ・トリガー』を強化したものだと推測される。以後、この装置を『トリガー・ボム』と呼称する。』

このアナウンスは自分らのヘリだけでなく、世界中で作戦に向かうチームに流されている。

『我々、選抜ヒーロー・チームの任務は、世界二六ヶ所にあるヒューマライズの施設を一斉搜索。団員達を拘束したのち、一刻も早く保管されているトリガー・ボムを確実に回収することである。』

選抜ヒーロー・チーム。そのチームメンバーには、自分ら雄英高校1-A組の大半が参加している。日本、エジプト、フランス、アメリカ、オセオノン国、そして…自分らがいるイギリスだ。作戦の概要説明が終わると、最後にオールマイトから鼓舞が来る。

『ヒーロー諸君、この作戦の成否は君達の双肩にかかっている。テロの恐怖に怯える人々の、笑顔を取り戻そう。』

その声色には平和を願い、数々の修羅場を笑顔で乗り越えてきた力強さがあつた。同じヒーローである。自分ら、そしてプロヒーロー達を十分に士気を高めてくれる。

「…さあ、メイジ、マギ、仕事（ヒーロー）の時間だ。」

「はいー！」

自分らの担当のゴールドさんが、自分と姉の肩を叩いて来る。その期待に応えるべく、自分と姉は動く。

『各ヒーローチーム：スタートミッション!!』

その声を合図に、作戦が開始された。イギリス上空のヘリのハッチが開き、自分らは勢いよく飛び出す。

side 三人称

「我々のチームはトリガー・ボム回収チームの援護および団員達の拘束だ！」

「了解!!」

飛行の「個性」を持つヒーローに乗りながら、ゴールドは立香と立希に指示を出す。二人は急降下しながら激しい風圧のなかバランスを取りつつ、眼下に見えた大きな建物に注視する。一見、教会に類似する建物だが、その建物こそ、ヒューマライズの支部だ。

「姉、途中までお願い! 『投影：平景清』!!」

—景清が参る—

「分かってる。『降霊：謎の蘭丸X』」

—ランマニウム粒子、フルチャージ!—

地面が近づく時、二人は英霊と憑依。立希は狐面、烏帽子をかぶり、腰には二本の長刀を装備。立香は眼帯に軍帽。腰に大きな青いリボンを付け、背にあつた巨大な刀を抜き、そのまま乗って飛行する。

「そらっ、行つてこい!!」

「焰よ、此处に!」

刀に乗って飛行を始める立香は空中で立希の手を掴み、ある程度の高さまで減速してから手を離す。立希は地面に刀を突き刺すと同時に紫の爆炎を放ち着地し、走る。立香はそのまま低滑空で突き進む。

「と、止まれえ!!」

「許可なく立ち入りするものは…」

「身柄確保!!」

入口にいた団員達が制止しようと動くが、それよりも早く、ヒーロー達が「個性」を発動させ、各々の方法で団員達を伏せさせる。入口を

突破し、先に動くチームはトリガー・ボムを探索、回収するチームだ。
「ここで『個性』を使うなど…っ！」

「我らを冒瀆するのと同義!!」

団員達が黙って見ているはずもなく、団員達は武装し、抵抗し始める。機関銃を先導するヒーロー達に向ける。

「斬！」

「ランマニウム粒子、フルバースト！」

刹那、ヒーロー達を援護するべく動いた立希と立香。立希は一足で跳躍し、二刀からの斬撃、立香は腰に付いた短刀―不動行光を無限分離させ、投擲。

『ぐわあああああ?!?!』

団員達は斬撃で吹き飛び、飛んでくる短刀に翻弄される。

「今です!!」

「助かる!!」

団員達を気絶させ、その隙に大勢のヒーロー達が入り目的であるトリガー・ボムを回収…するはずだった。

side 立香

「どこにも無い?」

講堂。そこで抵抗してきた団員達捕らえて、集え終えた私達。けど肝心なトリガー・ボムは見つからなかった。近くにいるゴールドさんが通信機で応答している。

「トリガー・ボムは何処にある!?!」

「し、知ら…ない…そもそも…何だ…それは…?」

他のチームのヒーロー達は捕らえた団員達を『個性』を使って尋問するが、分からずじまい…

「姉…じゃなかった。メイジ。どうやら他の所もトリガー・ボムが無いらしいよ。それと指導者のフレクトもないって。」

「(突入する事が知られていた?内通者がいる…?)相手の動きが分からない…」

今ある情報で思考するが目途が立たない…

「…許さぬ…許さぬ許さぬ許さぬ!!」

そんな時、捕らえた団員の一人が吠えた。その声は怒りで満ちていた

「我らヒューマライズは人類の救済者!!英雄をこのような姿にして…許さぬううう!!」

『人類に救済を!』

『なっ!?!』

その場にいた私達、ヒーロー達は驚く。団員達を縛っていたロープが突如斬れ落ち、団員達が解放された。

「誰かがナイフを隠し持ってた!?!」

一瞬、光る何かが見え、私はそう考える。

「再度拘束しろ!!」

ヒーロー達が動く。前に、団員達が懐から管のような物を取り出し、ピンを抜いた。

『人類に救済を!!』

その言葉を言い、地面に投げつけると、深緑の煙が舞い始める。

「っ」

私、そして隣にいた立希は煙が出たと同時に動く。まだ英霊との憑依を解いてなくて良かった。直ぐに私は不動行光を無限分離させ、投擲。ゴールドさん含め、講堂にいたプロヒーロー達の衣類に突き刺し、後方に下がらせる。立希は長刀を振るい、その風圧で煙が来ないように吹き飛ばす。

「マギー・メイジー!」

ゴールドさんが私達を呼ぶ。直ぐに私達も煙から逃げようとしたが…もう遅い。

「ちよつと…煙の量が多いっ…」

紫の焰を放ち、守ろうとする立希だが、予想以上に煙の量が多く…私達はその煙に覆われ、吸ってしまう。

「くくく…一人だけ…だがいい…少しでも旧人類どもを取り除けば何も問題ない…」

最初に怒り散らした団員の笑い声が聞こえる。私達は咄嗟に口元

を覆うけど…

「くくくくくくつつつ」

煙―個性因子誘発物質の効果が効き始めた。ドクドクと鼓動が速くなる。そして体も熱くなる。体内にある多くの個性―魔力が噴き出し始める。立希の方を見れば私と同じように、膝を付いて、顔中に魔力回路を浮き出していた。そして―

「!!!」

私達の個性―『英霊召喚』が暴走する…

side 三人称

「くそつ…マギー・メイジ―」

「緊急事態―団員達が隠し持っていたイデオ・トリガーを暴発！ヒーロー2名がそれを浴びてしまった！」

講堂から脱したヒーロー達。立香と立希のおかげで無事だったが、肝心の二人に対し、ヒーロー達は動きたいが…今だ煙が舞い、講堂に入る事が出来なかった。そんな時、講堂から地響き、銃声音が鳴り響く。

「二人が危ない…っ！」

「どけ！俺が飛ばす!!」

プロヒーローの一人が肩からプロペラを生やす。個性”を使い、回転。その突風で煙を掻き消す。

「突入!!」

二人を助け、団員達を無力化するため、講堂に突入するプロヒーロー。

『!』

そこで見たものは…

「がっ……」

「…オイ、テメー…オレのマスターに何しようとしてんだ？ああ?!?!」

団員の一人の首を掴み、持ち上げている。甲冑姿の人物。

「この程度か…つまらん…」

双銃にて既に倒れた団員に銃口を向け終えていた褐色の男性。

「ふむ…いつそ、亡き者にしてやろうか？」

黒い鎖で団員達を縛り上げている女性。

「これ、流石にそれはやりすぎじゃぞ？マスターはそんな事は望んでおらん。」

杖を振るい、その周囲には紫の液体を滴らせている少女。

「ちよ、何コレ、どうゆう状況よ!!しっかりしなさいよ、マスター!」
「ありや…こりや完全に気絶しちやってるねー…」

十字架杖を持った女性と、白いフード付きローブをまとった男性が気絶している立香と立希の容態を見る…二人の周りには二人を守るように16人がいた。どうやらこの人物たちが団員達を蹂躪したと理解するプロヒーロー達。

「…皆さん。どうやら援軍が来たようですよ。」

一人が、ヒーロー達に近づく。ヒーロー達は一瞬たじろぐが、一人が前にでる。

「君達は？」

「我々は…マスター、藤丸立希。並びに、藤丸立希によって呼ばれた英霊達…そして、その一人である私…ジャンヌ・ダルク。ひとまず、息をつきます。先はまだまだ長いですけどね」

その女性―ジャンヌ・ダルクの言葉に、一瞬の静寂。からの…

『ええええええええええええ?!?!』

驚愕。かくして、立香と立希の個性が暴走し、16人の英霊達が強制召喚されたのだった…

一方、そんな世界規模の作戦が行われている中、オセオン国の深い森の中。ヒューマライズの施設から逃げ出すように走り抜ける者―アランという男性は必至に駆け抜けていた。その胸には布の包まれている何かが抱えられている。

「…届けなくては…このままでは…世界が滅亡してしまう…!」

まるで自分を鼓舞するように言葉がこぼれた。アランは世界の運命を握る。それを放すまいと強く抱きしめた。

第2話

side 立希

「うわあ、にぎやかだなあ。」

「オセオンで一番大きな都市だからな」

「ケツ、待機だかなんだか知らねーが、なんで俺が買い出ししなきゃなんねーんだあ!？」

スーパーでの買い物…を、終えた自分達。大きな紙袋を抱えながらオセオン国の街並みを見て緑谷君と焦凍君は感嘆の声を上げた。爆豪君はまあ…分かっていても性に合わない事をして緑谷君に逆ギレしてるけど…

「まあ、しょうがないでしょ。チームで一番下っ端なのは私らだし…」
「チームに入ったのもインターン中だったからって理由で…オマケだし…」

爆豪君の言い分に姉と自分はそう答えると、爆豪君はキレながらこつちを見てくる。

「つせえ！モブ姉弟共!!つか何でお前らもいんだよ!!」

「それは…」

爆豪君の言う通り。自分と姉はイギリスを離れ、隣国のオセオン国にいた。あの作戦後、個性が暴走した事で自分と姉は許容範囲外数の英霊を召喚してしまい、気絶。目が覚めると既にオセオン国の中央病院に搬送されていた。イギリスの病院には、先日のテロによって大勢の人が療養中で、どこも満員だったから近隣であるオセオン国に搬送されたのだった。そこにロマニがやって来て、診察。結果…

—「体には異常は無い。怪我も無し。五体満足で健康その物…なんだけど、個性因子誘発物質…イデオ・トリガーによつて、普段以上に流れた魔力により君達の魔術回路が多少損傷している。よつて、今現在、二人は“個性”を使えない。いや、使えるけど、普段使用している英霊召喚が出来ない。」—

そうロマニに言われた。一応、個性暴走で召喚された英霊の力は使えるらしい。一度出した者なら影響は無いと言われた。つまる所…

「あの作戦で召喚した8人しか『投影』が使えないって事なんだよなあ…』…はあ…」

自分が召喚したのは、モードレッド、エミヤ、ランサー・オルタ、マルタ、イリヤ、セミラミス、茶々、ジャンヌ。姉は斉藤一、ブリュンヒルデ、エミヤ・オルタ、マリーアントワネット、マーリン、武則天、ペンテシレイア、アストライヤ。既に皆は自分らの体内にいる。

「足引っ張りそう…」

姉も自分みたいに項垂れていた。

「だ、大丈夫だよ！8人も英霊の力が使える時点で十分だと思うよ！」「ああ。頼りにしている」

緑谷君と焦凍君に励まされる。ロマニの診断が終わった後、ゴールドさんにこれからのインターンでどうするか相談した結果、イギリスはゴールドさん含めたプロヒーロー達が対応する事になり、自分らは安静に…だとインターンで来た意味が無いと考え、何か出来ないかと再度相談し、結局、オセオン国に来ていた、緑谷君達をインターンで請け負ったヒーロー…エンデヴァー事務所にて、共同インターンとなった。そして今は次の行動まで待機となったから、食料仕入れをする為、こうして5人で買い物している途中だった。

「けど…チームに加わったからには、全力でテロから皆を守らないと…」

「そうだね。少しでも人々を危険から守らないと。」

それが一番の目的だと噛みしめる自分と緑谷君。

「思想団体、ヒューマライズ…」

焦凍君が視線を移し、同意するように呟いて…

「クソ妄想にとりつかれたクソ団体…何が『個性終末論』だ…なんの根拠もねえ、眉唾もんの御託を真に受けやがって…」

「勝手に言ってるのは別にいいけど…それを他人に被害押し付けるな…」

爆豪君と姉が辛辣に言う。そんな時だった。数メートル先にある宝石店が突然爆破した。

「宝石強盗だ！捕まえてくれ!!」

『!』

その言葉に自分らは直ぐに対応する。

side 三人称

「…おっせーなあ……」

とある場所の狭い路地裏。そこにはネクタイを締め、所々継ぎ当てのあるシャツの上にジャケットを羽織った少年―ロデイが壁を背にして何かを待っていた。彼はとある仕事をしていて。オセオン国の郊外にある飛行機のそばにあるスラム街。その中の小さなトレーラーハウスで、弟のロロ、妹のララと3人で生活していた。今日もロデイはそんなかわいい弟妹にいつもの言いつけを言い、かわいい弟妹を養う為にまっとうじゃない仕事を請け負っていた。

―「おっちゃん、仕事あるかい?」―

―「チツ…イースト三番通りの裏路地で受け取り、届け先はサウスグローブのチャイナレストランだ」―

ロデイはいつもの酒場に行き、その店主から依頼内容を聞く

―「ギャラはいくらくらい…」―

―「ケツ!おめえが交渉できる立場かよ。黙って良い値でやってりやいんだよ」―

「Pii!Pii!Pii!」

「…うおっと…まあ、落ち着けよ…」

先の出来事を思い出していた時、不意に顔の目の前まで現れたピンク色の小さな鳥―ピノが抗議するように鳴く。そんなピノをロデイは宥める。

「わあってるよ…けど、これは大事な事なんだ。ロロとララ…あの二人は俺にとってかけがえのない。守るって決めた…家族なんだから。家族の為なら。俺はなんだってやる…」

「Pii……」

ロデイは空を見る。そこには既に通り過ぎた飛行機雲。そんな雲をしらけた目で眺める。

「…にしてもおっせーなあ…ガセ情報だったらタダじゃ…」

そんな時、ロデイの耳に突然、驚いたような悲鳴が飛び込んできた。

side 立香

突如爆破した宝石店。その煙の中からケースを抱えた二人組が駆け出してくる。

「追うぞ！」

「命令すんじゃねえ!!」

「二人は警察に通報して!!」

緑谷君達が買物袋を手放し、宝石強盗に向かって駆け出す。

「了解！」

「後から追うから！」

私と立希は咄嗟に手放された買物袋を受け取り、行動に移る。私は宝石店の店主に駆け寄り、容態を調べ、立希は警察に連絡する。

「後数分で警察が来るよ！そっちは？」

「店主に怪我は無いよ！さっきの爆風で周囲の人たちにも怪我無し！追うよ!!」

私と立希は3人を追い始める。

『『投影：イリヤスファイール・フォン・アインツベルン』！』

『『降霊：ブリュンヒルデ』！』

私は大槍を携え飛翔。立希はルビーを手に持ち、背中に紫の羽を生やして飛翔する。

「いたー！」

上空から3人。そして敵2人を見つけ、滑空する。

「いつものところだ！」

「おう！」

敵二人が左右に別れた。

「テメーらは右行けっ！」

左に行った敵を爆豪君が追い始める。

「どけどけっ！どけっつってんだろ!!」

右に行った敵は風を身に纏う「個性」を使って逃走。風で近くにいた人々を吹き飛ばす。

「やばっ！緑谷君!!」

「藤丸君！うん!! 『黒鞭』!!」

立希の合図で、緑谷君は最近新たに発現した「個性」『黒鞭』で吹き飛ばされた人々をキャッチし、立希もまた飛ばされた子供達を受け止めていた。

「轟君は犯人を！」

「姉も行つて！」

二人にそう言われ、私と焦凍君は頷き、敵を追いかける。

「焦凍君！一般人に被害がでない場所に誘導して！」

「まかせろ！」

人混みを避けるように、焦凍君に横の建物の壁を『氷結』で流れるように放ち、敵のルートを絞ってもらおう。

「ちっ…」

案の定、敵は路地裏に行く。それを確認した私は低空飛行を止め上空へと行く。

「待ちやがれっ!!」

下を見れば、焦凍君が『氷』で滑りながら追いかけ、『炎』を強盗犯に放つ。が、敵を纏う風が炎から身を防ぐ。

「へ！他愛無いぜー！何が他愛無いって？」へぶっ!?!」

よそ見した瞬間を見逃さず、私は敵が進むルート先に大槍を投擲。地面に深く刺さった槍に思いつきりぶつかった敵はそのまま気絶する。

「立香。助かった…わりい、手間取っちゃまった…」

「ううん大丈夫。それより、盗まれた宝石を回収…」

着地して、気絶した強盗犯を見た時、気付いた。ケースが無かった。焦凍君もそれに気付いて、私達は辺りを見渡すが、何も無かった。

「轟君！藤丸さん！」

「やったね。捕まえたんだ！」

そこにやって来た緑谷君と立希。

「緑谷！立希！ケースがねえ！」

「そつちで見なかった!?!」

「投げ捨てた!? 「緑谷君!」!」

私達は二人にそう言い、探すようにした時、何かを見つけ、走り出した。

「仲間がいる!」

「追いかける!」

その言葉に、私と焦凍君は二人の後を追う。

第3話

side 三人称

突然驚いたような悲鳴が聞こえたロデイ。

「なんだ？」

声が聞こえた方を覗くと、向こうから風を纏った敵がやって来た。

「頼むー！」

「！」

敵はロデイの存在に気付くと、すれ違いざまにケースを渡される。

ロデイは驚き、少し身を引くと、氷結が這う。

「(やべ)」

勢いよく通り過ぎた轟―ヒーローに状況を把握したロデイは直ぐに駆ける。

side 立希

「緑谷！立希！ケースがねえ！」

「そつちで見なかった?!」

焦凍君と姉が追いかけていた敵を捕まえて終わりかと思ったら、肝心の宝石が入ったケースが無い。直ぐに周りを見回す

「投げ捨てた!?」「緑谷君！」！

敵が持っていたケースと同じケースを持って走る少年を見つけた。

緑谷君にそれを教える

「仲間がいる！」

「追いかける！」

それだけ言って、自分らは直ぐに追いかける。裏路地から大通りに出ると、見失ってしまった。人も車も多すぎる…

「何処に…」「あそこだ！」 本当だ！いた！」

車のクラクションが響いた。見ると赤信号で道路を横断しているケースを持った少年だった。道路を渡り、向こう側の路地へと入っていく。

「緑谷君は下から！自分は上から！挟み込んで捕らえよう！」

「分かった！」

自分は緑谷君に簡単な作戦を立て、動く。紫の翼を動かし上昇。緑谷君は『フルカウル』で噴水を足場に横断歩道を飛び越え、自分らは路地に向かう。

「彼は…いた…って動き速…」

少年を探すともう路地にいなく、アパートの非常階段を駆け上がった。けど問題無い。既に緑谷君も彼のことを見つけ、手すりを足場に跳躍して、接近している。そのタイミングで自分も滑空して押さえ込めば…！

「Piss！」

「ンゴッ!?~~~~っ!?」

「緑谷君!？」

その時、少年の髪の中からピンク色の鳥が出て、緑谷君の顔面に直撃。あろうことか、尻をかます。緑谷君の動きが止まり落下し始める。

「ちよ、大丈夫!？」

「だ、ダイジョウブ…」

直ぐに方向転換し、落下する緑谷君の両肩を掴んで落下を防ぎ着地。鼻を抑えて、若干涙目の緑谷君だったが大丈夫だった。自分らは見上げると彼は既に隣のアパートの屋上にいる所だった。

「もうあんなどこまで…っ」

「逃がさない…っ」

ちよつとコケにされた感があつて、ムキになる。何が何でも逃がさない…直ぐに自分は飛翔し、緑谷君と共に屋上へ行く。彼は…もう隣のビルに飛び移っていた。

「すぐ…パルクールって奴か?」

高い身体能力に感心しながら、自分らは追いかける。それに気付いたあの鳥が少年に教えてるのが見えた。

「しっけーな」

そんな言葉が彼から聞こえるや否や、彼はケースを投げ、少し距離のあるビルへと飛び移り、そして落ちて来たケースを受け取って駆け

出す。

『黒鞭』！』

「ルビー！最低出力！フオイア！」

緑谷君は『黒鞭』を伸ばし、自分は建物が壊れない威力の『魔力弾』を撃ち飛ばして動きを止める…が、彼はそれをすんなり躲し、逃げ続ける。

「うっそお…」

「それなら…」

自分達の追いかけてはまだまだ終わらない…

side 三人称

高速道路を走る車。運転しているのはアラン。どこかへ向かっていた。助手席には大事に持ってきた布に包まれた何かが置かれている。だがその後ろから、他の車を強引に追い抜いて一台のバイクが近づいてきた。

「！」

バックミラーでその異変に気付いたアランの見ている前で、バイクの乗り手が弓を構え、射ってきた。

「ぐっ!!」

煌めいた矢が瞬く間にアランが乗っていた車の窓を突き破る。咄嗟にアランは車を動かし回避するが頬を掠め、血しぶきを散らす。大きく車体がグラつくが、必死に立て直し、スピードを上げ逃げる。

「……………」

それを追うバイクに乗っている女性―ベロスは“個性”で左手を『弓』に変え、背負っていた矢をつがえ、アランが乗っている車に再度射る。放たれる三本の矢。そのうち一本が軌道を変え、タイヤに突き刺さる。

「!!」

バランスを失い曲がりきれずフェンスに激突する車。その衝撃でひしゃげ、割れた窓から布に包まれた何か―『ケース』が投げられた賽のように飛び出し、下の一般道路へと落ちる…

sideロディ

「へっ、この俺を捕まえようなんて100万年早いっつーの」

ようやくヒーローから逃げ切る事が出来た俺。路地裏は俺の庭だ。何処に何があるか知っている。どっかの誰かが飼っている犬。配線がやたら多い場所。あの時間帯には多くの服を干している。流石ヒーロー、市民を困らせない事はしないねえ。律儀に落ちる服を回収するなんて…その間に俺はトンずらするだけさ。

「Piss!」

ピノも俺に同意しているように鳴いている。後はこのケースを目的地、チャイナレストランに届けるだけ…

「!？」

そう、余裕だなと考えていた時だ。頭上にあつた高速道路から急にフェンスや瓦礫が落ちてきやがった。

「どわああーちよー待ってーギャアー!」

side立希

「くそう…何処行った…?」

「まだそう遠くに行っていないはず…」

少年を完全に見失ってしまう自分と緑谷君。この辺りは彼の独壇場だった。彼を見失った所を中心に少しずつ搜索範囲を広くする。今は緑谷君を掴んで上空から二人で探している。すると、近くでももの凄いい衝撃音が聞こえた。

「事故?」行ってみよう!」うん!」

事故現場に直ぐに向かうと、丁度そこに氷結で移動している焦凍君と飛翔して移動している姉と出会う。

「緑谷! あつちは俺達に任せろ!」

「さっさと追いかけて!」

事故の方は姉たちが向かう。

「お願い!」

「分かってる!」

姉たちに託した自分らは再び上空から少年を探す。

side 三人称

「P i P i P i !」

「だ、大丈夫……」

ロディは大慌てで瓦礫を避けた。何とか体を起こした時、手に何も持っていない事に気付く。さっきの回避でケースを落としてしまったのだ。直ぐに周囲を探すと、そう遠くない所に自身が運んでいたケースを見つめる。

「あぶね……」

ホツとしたロディはケースを拾い、その場を離れる。

「時間に遅れちまう……」「見つけた!!」「げ!」

近くの地下鉄の地上出入口に向かう時だった。ロディは追いかけて来た二人のヒーロー……緑谷と立希を見つけてしまう。

「待て!」

「そのケースを置いてけ!」

「やなこった!」

ロディは直ぐに地下鉄へと走る。

「待って、待って、待って」

出発直前の電車に飛び乗ったロディ。危機一髪のハプニングとしつこいヒーロー達から逃れたとホツと息を吐いた。

「……ろくでもない日だな……あ……せつかくの……一張羅が台無しじゃねーか。それもこれも、全部あのヒーロー達のせい……」

「P i」

ふと、ロディは気付いたように顔を上げピノに言った。

「あんなヒーロー達、……ここの管轄にいたっけ?」

「P i ?」

考え込むピノにロディは肩をすくめる

「ま、いつか。もう会う事もねー」「ひいひい!!」「し?」

そんな時、近くにいた車掌の焦った叫び声にロディは振り返る。するとそこには……

「~~~~~!!!」

外から運転席の窓に張り付いている緑谷がいた。線路を走って追いかけて、電車にしがみついていたのだ。ガラスに顔を押し付け、まるでホラーのようだ。更に…

「ウオオオオオオ!!!」

「マジかよ!?!」

緑谷だけでなく、立希も電車を追いかけていた。それも『馬に乗って』だ。

「ヒヒーン!!」

「ハイヨー!風の様に走れ!ラムレーイ!」

『イリヤスフィール・フォン・アインツベルン』から『アルトリア・ペンドラゴン・ランサー・オルタ』に憑依を変えた立希は、飛翔移動より速度と加速のある黒馬―『ラムレイ』を呼び出したのだった。

「……………はあ~~~~…」

流石にこれは無理だ。と、ロディは逃げきるのをあきらめるのだった…

side立希

何とか少年に追いついた自分と緑谷君。誰もいない駅のコンコーズに降りる。

「…何で追いかけてくんだよ?」

少年は自分らと顔を背けながら呟く。

「…そのケースに、盗まれた宝石があるからだ。」

「…はあ?そんなわけないだろ。」

自分がそう言う。が、彼は意味が分からない。と言った顔でとぼけた。

「じゃあどうして逃げたの?」

すると今度は緑谷君が彼の正面に立ち、訊く。

「…仕事で急いでたんだよ。」

少年は顔を反対に背けながら、言う。

「何の仕事?」

再度、緑谷君は彼の正面に回り込んで訊く。

「商談だよ。商談。こう見えてもやり手の営業マンなんだよ。仕事の邪魔しないでくれるかな?」

彼はわざとらしくスーツとケースをアピールし、歩きだそうとした。

「やり手?失礼だけど、そうには見えない。そんな継ぎ接ぎだらけの服で商談?ビジネスマンならもっと身だしなみを意識している。更に言えば、貴方は横断歩道を見ない。自身を軽視している。そんな人がやり手の営業マンだと言われても、肯定出来ない。」

逃がすわけにはいかない。自分は彼の肩を掴み、嘘だと主張する。

「…俺の一張羅に茶々入れないでくれる?次から歩道ある時は気を付けてからさあ…マジで急いでるの。」

自分の手を払いのけ、歩こうとする。

「ケースの中身、見せてもらえないかな?」

緑谷君が動いた。

「…いくらくれる?」

「へ?」

変わらぬ笑みで振り返った彼に緑谷君はぼかんとする。

「見たいなら金払うの、当然だろ」

「(んな馬鹿な…)」

「中身を確かめるだけだから」

内心イラっとする。あきらめずに近づく緑谷君。彼はゆっくりと振り返る。

「あんたら、この国のヒーローじゃないよな?よその国で勝手にヒーロー活動していいわけ?」

わざとらしく訊いてくる。

「…確かに、自分らはこの国のヒーローじゃない。けどちゃんと許可は取っている。」

「(藤丸君!?)」

ブラフ。一瞬ハツとなる緑谷君を彼に見せないよう、自分は割り込むように彼と緑谷君の間に入って言う。

「だとしてもさあ、俺を逮捕する権限なんてないだろう、命令しないでくれるかな？ それとも、一方的に追いかけて尋問されたって警察に通報するう？ しちやおつかかなあ？」

「…ブラフだと見抜かれてる感じだ…表情に出さないようにするのがやつと…こういう交渉とか話術は姉の方が得意なんだよ…：冷や汗が喉を伝う。緑谷君にいたっては困惑してるし…」

「わかってもらえて嬉しいよ。そんなにヒーロー活動したけりや自分の国でやりやあいい。そんじゃ♪」

自分らを言い負かした彼は満足げにウインクして歩きだす。

「待って」

が、それでも緑谷君は彼の腕を捕まえ、止める。

「…まだ何か？」

「ケースの中身を見るだけだから。」

正義を貫こうとする緑谷君に、少年もイラつき始めている。

「見たけりや金払え」

「払うから見せて」

「いくら？」

こうなるともう実力行使に移るしかない…：自分も彼の腕を捕まえ、彼を見る。睨まれても自分らは一向にひかない態度を取る。

「10万ユーロ！」

「高過ぎ——いくらでも払う。」…：

CDFの経費でいくらでも払ってやる。

「…やっぱダメだね!!」

急に交渉を止める少年。これは確定だ。自分と緑谷君はケースを引っ張る。

「ちよつとだけ！」

「やっぱり貴方か！」

「いいかげんにい!!」

お互いケースを引っ張り合う。

「P i ~ !」

「！」

そんな時、またピンク色の鳥が来た。また屁をかまされると思い、自分からは思わすのけぞる。

「「あー」」

だが、その拍子で手からケースが飛んでしまった。地面に叩きつけられ転がるケースに自分からは急いで駆け寄る。

「このー」

「どけー」

「嫌だー」

もみくちやになりながらケースにたどり着く。落ちた拍子でケースが開いていた。その中身は…

「「ーは？」」

書類と本だけだった。宝石は…ひとつも入って無かった。

「「え？」」

これには呆然となる。何故か少年もだ。

「…宝石は？」

自分と緑谷君は気まずそうに彼を見た。

第4話

side 立香

「ごくろうさまです」

私と焦凍君は事故現場に駆け付け、警官に事務手続きを済ませた所だった。運転手は意識不明。既に救急車で運ばれている。炎上していた車を焦凍君が素早く『氷結』で消化しなければ、命を落としていたかもしれない。たかもしれなかった。

「…ん？」

ふと、その車を見たとき、気になるものを見つけた。

「焦凍君。」

「どうした？」

私は焦凍君を呼び、見つけた所を指さす。

「コレ…」

「これは……」

その車体には、いくつかの小さなひし形の穴が空いていた。

side 三人称

「クソ…ッ」

事故現場から直ぐ近くの路地裏。そこでベロスはケースの中身を見て、苛立ち、近くのごみ箱を蹴り飛ばす。ケースの中身は『宝石』だった。そして思い出す。先の事故にて、ロデイが持ったケースこそ、ベロスが回収するケースだった事に…

「……！」

ベロスは携帯電話を取り出し、連絡する。通信先はヒューマライズのフレクトだ。

『…そうか、分かった…こちらでも手を打っておく…追跡を続けよ』

「ありがとうございます。」

先ほどの怒りは消え、打って変わった神妙な様子なベロス。

『忘れるな。ベロス。病魔に冒された者が唯一行える贖罪は…純粋な人類を救済することだけだということ…』

「わかっております」

敬虔な態度で胸に手を置き忠誠を誓うベロスは、通信を終えると直ぐに行動を起こす。目標は―ロデイだ。

side 立希

「本当くつにすみませんでしたああっ!!!」

駅。ケースの中身が違く、完全に勘違いした自分と緑谷君は少年に土下座して平謝りする。

「すつげえ、これがジャパニーズドゲザ……!!」

周囲の目がすごいけど、これは謝るしかない。圧倒的土下座をする。

「っ、まあ…疑いが晴れて良かった。なんてゆるーの、ヒーローだって間違いの一つ二つしちゃうこともあるっしょ…」

少年は自分らの土下座に引きつった笑みで応える。

「(けど肝心の宝石は何処!?どこかですり替えられた!?)」

自分は土下座しながら宝石が消えた理由を考える…ふと、少年を見ると…何故か少年は内股になって足をガクガクと震えさせていた。心なしか顔が青いように見える…

「…?」

「汗すごいよ?大丈夫?」

緑谷君もどうやら少年の異変に気付いた。

「じゃ、じゃあ、時間無いから俺はこれで…」

そう言つて少年はケースを閉じ、内股ガクガク早足で地上へと向かった。少年の姿が見えなくなり、自分と緑谷君は土下座を止めて、立ち上がる。

「…どうしたんだろ?あの少年…疑いが晴れた割には、なんか元気なかつたような…」

「…何かあつたのかもしれない…嫌な予感がする…行こう!」

緑谷君が少年が行った方に向かう。

「え!?ああもう…待ってよ!」

自分も直ぐに緑谷君の後を追う。

side 三人称

「(まずい…早くあの場所に戻んねーと…でも、ケースあるか?誰かに拾われて中身見られたら確実にネコババされっだろ。相手は敵だ。無くしましたじゃすまねーぞ…どうすんだ?どうすんだ、俺!!)」

ロディは内心焦りだす。心当たりはあった。あの事故の時、振って来た瓦礫を避けた時ケースを手放した。そして直ぐ近くにあったケースを中身を確認しないで持ってきてしまった事に…

「(完全に取り間違えたー…!…) や、やべえ…」

駅から出たロディは小声で呟いた時、誰かに肩をたたかれる。

「ヒイツ〜!」

「あ、あの…」

「だ、大丈夫…ですか?」

敵かと思ったロディだったが、振り向いていたのは緑谷と立希だった。二人は心配そうにロディに近づく。

「体、本当に大丈夫?」

「顔が真っ青ですよ?どこか怪我をしたんじや…」

「ああ!?!なんでもねえよ!」

ビビってしまったのを強がりで隠し、歩き出す。

「あ、でも…」

それでも心配な緑谷と立希がロディの後を追おうとした時、遠くからサイレンの音が聞こえた。

side 立希

「!?!」

何重にもサイレンの音が聞こえた。その正体は大量のパトカーだった。しかも猛スピードでこちらに向かってきて、自分達を取り囲むように急停止してきた。

「(…いや、自分達じゃない…この少年が標的になってる!?!)」

「……………」

驚き、青ざめている少年。そしてパトカーから大量の警官たちが銃

を構え降りてくる。最前列の警官が叫んだ。

「両手を上げて、その場に伏せろ！」

「なっ!？」

銃口はしつかりと少年を狙っていた。確かに彼はさつき信号無視した。けどそれだけでこれほどの警官から狙われるような事じゃない。

「ちよつと待つてください彼は……！」

緑谷君が事情を説明しようと彼の前に出た時だ。

「お……俺……俺は何もとつてねーからっ!!」

パニックになった少年は逃げ出してしまう。

「止まれ!!許可は出ている。撃てっ!!」

次の瞬間、警官たちが発砲した。

「限定インクルード!バーサーカー!」

あまりにも異様な光景に、自分は咄嗟に動く。『イリヤ』と憑依し、ルビーステッキをバーサーカーの『大剣』の変化。地面を抉り少年に銃弾が当たらないように防ぐ。

「緑谷君！」

「前、見て……歯を食いしばって!!」

「ああああああ!!」

パニックになる少年を緑谷君が抱えて跳躍。『黒鞭』を使ってその場から遠ざかる。勿論、自分も直ぐに飛翔して緑谷君と同行。後ろを見ればすぐさまパトカーが追いかけて来た。

「マジか……」

態と狭い通路を選んだのに、お構いなしにパトカーが追いかけてくる。そして狭い建物の間を抜けると、そこには道が無かった。丁度丁路地で、崖端。視界の先には電車が見えた。

「あまりやりたくないけど……シユナイデン!!」

緑谷君が電車に向けて『黒鞭』を伸ばすと同時、自分は後ろを向いてルビーのステッキを振りかぶる。桃色の斬撃をパトカーに放ち、パンクさせ、車体を真横に倒す。そして後続のパトカーをせき止めし、そのまま緑谷君と少年がいる、走る電車の屋根になんとか着地した。

「どうして…いきなり発砲を…」

「もう…わけが分からない…」

突然の事に困惑する。少年を見れば、顔面蒼白になって放心状態になっていた。

「死ぬかと…思った…」

そう呟いている。自分は少年を見ながら考える。

「警官たちはこの人を捕まえようとしていた…なぜ?…もしかして人じゃなく、彼が持っている荷物が原因?となると…ケース…」

電車が大きな鉄橋にさしかかった時だ。視界横で、遠くの方で何か光る物が見え—

side 三人称

ロデイの緊張の糸がゆるみかけたその時だった。

「っ—」

『投影：エミヤ』! 『燈天覆う七つの円環（ロー・アイアス）!!』

突如立希は『エミヤ』と憑依し、ロデイと緑谷を守るように正面に立ち、紫の円型の壁を展開する。刹那、煌めく矢がその壁に直撃するのだった。

「なっ!?!」

「走って!早く!!」

立希の言葉に緑谷は再びロデイを抱え、電車の屋根の上を走る。複数の矢が飛んできた。

「ちっ…『干将・莫邪』!!」

飛んでくる矢に対し、立希は白と黒のナイフを投げ、矢を落とそうとする。しかし矢はナイフに当たる直前、意思があるかのように軌道を変え避け、緑谷とロデイに向かっていく。

「緑谷君危ない!!」

「くっ—」

『フルカウル』で加速し、回避する。矢は電車の天井を貫通するが、再び緑谷達を追跡し始める。

「(おいかけて来た!?)」

唯の矢ではないと緑谷は気付く。鉄橋からかなり遠く離れた丘の上の塔：そこにベロスがいた。

「ちい…ヒーロー共が……」

彼女は『弓』で矢をつがえ、放つ。

「また来た!!」

襲いかかってくる矢に、立希は先のナイフを構え、斬り落とす。緑谷はロデイを抱えたまま矢から逃げる。電車から飛び降りながら『黒鞭』で体を支える。降りた電車と入れ替わるように反対側からやってくる電車が迫るなか、先ほど回避した矢が再びロデイを狙って戻ってくる。

「っー!」

それを『黒鞭』でギリギリ避けるなか、矢が頬を掠ったロデイは意識を取り戻す。

「?!?!」

「またしても危機一髪にパニック状態のロデイ。」

「また来るよ!!今度は3本!!」

立希の言う通り、ベロスが放った3本の矢がロデイに襲い掛かってくる。回避をする緑谷だが、鉄橋と電車の間で、暴れる矢が電車の窓ガラスを破壊し、車内から悲鳴が上がる。

「っー」

「(ここは巻き添えの危険が!)」

しまったと立希と緑谷が顔を歪める。

「来る!来る!矢が追っかけてくるく!!」

叫ぶロデイ。自分を狙ってくる矢に、目の前を猛スピードで過ぎる電車。おまけに高所で抱えられたまま揺さぶられ続けているは、叫ぶのは必然的だ。

「ああっーああ……」

限界を超えたロデイが気を失う。その間にも次々と矢が襲いかかってくる。

「くっ……緑谷君!ちよつとだけ矢を引き付けて!!」

「藤丸君!」

立希は『イリヤ』に憑依し、電車の屋根から飛び立つ。そして鉄橋の一番高い所まで急上昇。

「…あそこか!!」

そして直ぐに矢が放たれている場所を見つめる。と、同時に再び『エミヤ』に憑依。飛翔が解除され、重力に沿って落下し始める。そんな中、立希は弓を呼び出す。

『偽・螺旋剣（カラドボルグⅡ）』っ!!」

螺旋状の剣を矢の様に撃ち放つ。狙うは敵がいるであろう鉄橋から大分離れた丘の上の塔。

「…っ!」

ベロスは直ぐにその場から離れる。すると塔に『偽・螺旋剣』が着弾し、塔の一部を破壊する。

「(当たったか分からないけど…これでひとまず攻撃が止んだ!)後は…」

立希は再び『イリヤ』と憑依し、空中で静止して状況を確認。気絶し、落下しそうになったロディと、落としそうになったケースを『黒鞭』でキャッチしている緑谷。そして道路には既に大量のパトカーがやってきていた。

「(早くここから離れないと…)」

警察と戦うわけにはいかない。そう立希と緑谷は判断し、お互いアイコンタクトと取ると…そのまま眼下の川へと飛び込んだ。

「チツ……………」

ベロスはそのさまを丘から確認するや否や、停めていたバイクにまたがり、次の手を打つため走り去る。

第5話

side 立香

「バカモノ!!」

オセオンチームが臨時事務所として使用しているホテルのエレベーターホールに、エンデヴアーの怒号が響く。叱られているのは、焦凍君、爆豪君…そして私だ。

「今は重要任務中だぞ！それ以外の事件は、地元のヒーローに任せておけばいい！」

先の宝石強盗の件だ。クレームは無かったが、管轄というものがあ
る。けど…無視できないわけがない。私達はヒーローなんだから。

「いや…そこまで腐った性根じゃないので…」

「困っている人を救けるのがヒーローだろ」

「仕事に大小つけんのかよ。インターンで、んなこと習ってねえんだよ。」

各々そう言うと、エンデヴアーは尚眉間のしわが深くなる。

「反省せんか!!…それで、デクとマギはどうしてる!？」

エンデヴアーがそう訊くと、焦凍君と私が応える。

「宝石強盗の仲間を追跡している。だが、全然電話に出ねえ」

「こつちも、通信機に連絡無しです。」

「たるんどる！インターン中だからと連れてくるのではなかった
……」

そんな時、焦凍君のスマホが鳴る。

「！緑谷からだ…緑谷、犯人とケースは…」

皆に聞こえるようにスピーカー状態にして電話に出ると…

『警察にいきなり襲われた！』

緑谷君の慌てた声でそう言ってきた。

「!?…お前、何やった？」

『分かんないんだ！事情も話さずに、いきなり僕らを撃つて来て…あ
わてて逃げたら、今度は敵みたいにな奴に攻撃受けて…!』

慌てて次々言ってくる緑谷君。よほど混乱する出来事に出会って

しまった事がよく分かった

「ちよつと落ち着いて緑谷君。そこに立希はいるの？」

『う、うん…敵と警察に逃げる為に一緒に川に落ちて…今ようやく川岸にたどりついたんだよ…もう一体何がなにやら…』

「落ち着け、起きたことを順番に話せ」

『……………』

促すような焦凍君の声に、緑谷君は一旦冷静になったのか、静かになる。そして…

「えつと、ケースを持って逃げた少年を藤丸君と一緒に追いかけて捕まえたんだけど、その少年が持っていたケースの中に宝石は無く…」

緑谷君の応答を私達で聞いていた時だった。

「エンデヴァー！大変よ！デク…それとマジが…」

エンデヴァー事務所のサイドキッククレアさんがやって来た。動揺の隠せないクレアさんに私達は連れていかれた。会議室のモニターには、緊張ニュース番組が映っていた。その内容は…

『「情報提供を呼びかけています。繰り返しお伝えします。警察の発表によると、死者12名を出した殺人事件の犯人は、日本から来たヒーロー・デク。本名、イズク・ミドリヤ、同じくヒーロー・マジ。本名、リツキ・フジマルと断定。全国に指名手配しました。なお、容疑者には共犯者が一名いるとの情報もあり…』

緑谷君と立希の写真が大きく映しだされ、ニュースキャスターはそう話していた。

「……………はっ」

これには私、そしてその場にいた全員が動揺する。

『もしもし、もしもし轟君？』

「…緑谷、立希…お前ら本当に何やった？」

『何もしてないってば！』

飲み込めない状況。そんな中、焦凍君は緑谷君に伝える

「お前ら、大量殺人犯として指名手配されたぞ。」

side 立希

「はあ…はあ…ゲホツ…うげえ…」

川岸に泳ぎ着いた自分は大の字で倒れる。少し水を飲んで、むせる。それとかなり魔力消費した。何度も切り替えての憑依は疲労がかなり残る…傍らで自分と同じように少年と鳥も倒れていた。

「…え…ど、どういう…事…：…うん…うん…：…わか…った…」

先に川岸についた緑谷君は焦凍君に連絡を取っている…が、様子がおかしい。何かあったのだろうか…

「み、緑谷君？」

「お、おい…」

どこか危機感を持った表情の緑谷君。おそろおそろ自分と少年は呼びかけ、肩に触れる。

「うわあ！」

「うおっ！びつくりした！」

「ど、どうかしたの？焦凍君と連絡取れたんでしょ？」

何故か驚く緑谷君。連絡が取れたのか訊くと、緑谷君は思い出したようにスマホのバッテリーを抜いた。

「なんでバッテリー抜くんだよ？迎えはいつ来るって？」

少年は訝しげな顔になる。当然。自分もだ。

「そ、それが…」

顔を曇らす緑谷君は、話す。そして…自分達が大量殺人犯として指名手配されていた。

「……は？」

自分はただ呆然とするしかなかった。

side 立香

『立香ちゃん！何とかサーヴァント達を宥めてくれ！』

「どうゆう事…？」

弟が指名手配された。エンデヴァー事務所が騒がしくなる中、ロマニから連絡が来た。

『立希君が指名手配された事を知ったサーヴァント達…主に立希君が

契約したサーヴァント達が怒り狂ってるんだ！あのダ・ヴィンチも声
がいつもより低い!!」

「うわぁ…」

容易に想像できる…清姫とか静謐とか…というかダ・ヴィンチちゃ
んもお怒りとか珍しい…多分、サーヴァント達が使う食堂についてる
大型テレビで見て知って…

—『は?』—

って感じなんだろう…

「…流石に私の声で落ち着くわけないでしょ…というか立希が殺人犯
とかあり得ない。人類救ってんのに…絶対裏で何かある。」

『僕もそう言ってるんだけどまるで耳に入っていない!!頼む!声だけで
もいいから皆に落ち着くようお願いさせてくれ!!』

ロマニの懇願…無視は出来ない。しばらく私は席を外し、立希と契
約している同一サーヴァント達を説得する事にした…

side 立希

「どういう事なんだよ!?あんたらが人殺しで、俺がその共犯者!?いつ
の間に仲間になったんだよ!?説明しろよ!」

人気のないオリブ畑に移動した自分達。さっきの緑谷君の電話
の事を聞いた少年は困惑のあまり苛立ちながら詰め寄る。

「僕にも分からないんだ…どうしてこんな事に…」

「何がどうなってんだ…:はぁー……」

今までの経緯からなぜ殺人犯になる…頭が痛くなる気分だ。夢で
あつてほしいが、現実だ。

「(…くそ…落ち着け。思考を放棄するな…考えろ…まずは現状を把
握するしかない…つ)…警察は問答無用で発砲して来た…そして敵か
らの強襲…この事から分かる事は…」

「…僕らの生死を問わないという事…つまり、彼らの目的は僕らで
はなく…」

「…いつか!!」

自分らはケースに目を移す。何か手がかりがないかとケースの中

身を調べるが、事件性がありそうなものは何も無かった…

「手がかりが無い…って何をやる気？」

そんな時、彼がケースを取り上げ、持った。

「狙われるのはケースだろ!? だったらこいつを渡せば一件落着なんじゃね? そうだよ。簡単な事じゃないか」

現実逃避しようとしてる彼に。自分と緑谷君は言う。

「そんな簡単じゃないよ。相手が、ケースに隠されている秘密を知った僕らを見逃すわけない…」

「…仮に渡しても、口封じに…」

「待って待って待って! そうネガティブな方向に考えるなよ。そうだ! ケースを燃やそう! んで、燃えちやったくって言おう。」

焦る彼が悪だくみするような顔で提案するが、却下だ。

「結果が変わってないよ」

緑谷君が冷静につつ込む。

「ならいっそ、ケースに言おうぜ! 『ケースが欲しければ100万ユーロ持つてこーい』ってな!」

「悪化させてどうするの…: 本当の犯罪起こしたらそれこそ指名手配される。」

やけくそになってる少年に自分もつつ込む。

「なあ…: やっぱケース渡そうぜ。命まで取られないって…: 考えすぎだって…」

へなへなと座り込み、縋るような態度になる彼に、自分と緑谷君は眉を下げる。だけど…:

「…このケースが何かの犯罪に繋がっているなら、簡単に渡すわけにはいかない。」

「そうだね…: あそこまでしつこいぐらい追って来たんだ。何か危険な予感がする。」

これは、ヒーローとして、譲るわけにはいけなかった。

「あんたらの正義感に俺を巻き込むなよ!!」 「もう巻きこまれてる。命を狙われたんだ。真実が分からない限り…: 無暗に動くのは危険だよ」
「…: じゃあどうすんだよ…」

自分らの態度に怒る彼だが、緑谷君が冷静に告げると、彼は言葉に詰まる。これから自分らがする事は…

「逃げる。」

「そうだね。」

「はあ?」

自分が言った事に頷く緑谷君に、訝しげる少年。

side 三人称

それから、3人の行動は早い。まずは変装。緑谷と立希は指名手配された為、ロデイにお金を渡し、二人分の衣類とリュックを購入。店裏で私服に着替える。緑谷はバケツ帽子、立希は野球帽を深くかぶる。ケースと戦闘衣装をリュックにしまい、移動する。

「逃げるって…何処に行くんだよ…」

ロデイが訝しげに訊く

「どんな事情があるにせよ、警察と戦うわけにはいかない。僕らを追っているのはオセオン国の警察…なら国境を越えて、隣国に逃げ込めば、彼らは手出しが出来ない。」

「となると…近いのはクレイド国…どうにかして姉達に知らせないと…」

3人の横をパトカー通り過ぎる。気付かなかった事に安堵する3人。

「敵は? 敵が追いかけてきたらどうすんだよ?」

更にロデイは訊くと、緑谷と立希は立ち止まり、ロデイを見て答える。

「必ず、守るよ!」

真摯な顔をみて、ロデイは一瞬口をつぐんだ。会ったばかりの異国のヒーロー。暑苦しいほどの正義感で、しつこく追いかけてくる。なるべく関わりたくないし、薄っぺらいドラマで聞くような言葉を信じられないはずもない。それでも、二人の言葉は今まで誰にも言われた事のない言葉だった。

「…ああ、そうかい。わかったよ…いいさ。国境でもどこでも行つて

やるよ！」

ロディは仕方なさそうに頭を掻いた。今はそうするしかないと自分に言い聞かせる。

「…で、移動方法は どうする？ 徒歩は時間かかるし…自分が英霊と憑依して運ぶと目立つし…」

そう立希が言うと、ロディは物陰から身を隠しながら、停車中のバスを窺った。

「あのバスで国境方面に行ける。後ろにしがみつきやタダだ。」

「ダメだよ！ ちゃんとお金払わなきゃ…」

緑谷が否定するが、ロディは無視してバスが発車するタイミングで駆けだす。そして軽やかにバスの屋根に上がる。

「ああもう！」

「…しようがない…！」

離れるわけにもいかず、緑谷は『フルカウル』で駆け上がり、立希は『イリヤ』に憑依し飛翔して着地する。

「はい。無賃乗車。お仲間だね。ヒーロー」

ニヤリと笑うロディに、緑谷と立希はムツとする。

「はい。緑谷君。お金」

「ん。『デラウエアスマッシュ・エアフォース』…っ！」

立希は緑谷に小銭を渡し、緑谷は3枚の小銭を開いている窓から料金箱に投げ入れる。

「3人分。先払い」

頑固な緑谷と立希にロディは訊く

「屋根の上に乗るのはセーフ？」

二人の答えは…

「うーん…セウト？」

「ダメだね…」

苦笑気味の立希。申し訳なさそうな緑谷。したり顔のロディ。3人に乗せたバスは国境方面へと走っていく。

第6話

side 立香

「はあ…」

英霊達の説得を終えた後、私はオセオンの事務所で情報収集をしていた。が、あまりいい情報が入らない。どのニュースも緑谷君と立希の事でいっぱい。先ほどエンデヴァーが警察本部に行ったが…あまり期待は無い。

「(こうも警察を動かせるという事は…警察本部の上層部にいる…ヒューマライズ側の人間が…けどその証拠が無い…ああもう、ホームズ召喚すれば分かるのに…出来ないのが腹立つ!!)」

今だ体内の魔術回路が不調気味な事に苛立つ…つ…一度深呼吸し、落ち着くよう、言い聞かせながら、焦凍君がいるパソコン室に向かう。

「焦凍君」

「立香。丁度良かった。例のアレ、分かったぞ」

そこに、クレアさんもいた。直ぐに私は把握する。先日の事故の時見た、車の奇妙な穴について調べてもらっていた。

「知り合いの探偵から調査結果が来たわ。君達が見たという『個性』攻撃を受けた車。乗っていた人物はヒューマライズの団員だそうよ。」

「ヒューマライズ…そいつは今どこに？」

「意識不明の重体で…病院の集中治療室にいるわ。警察の護衛付きだね。」

奇妙なつながりに驚く。何か知っているかもしれないが…警察がいるとなると、情報収集は無理だ

「(英霊に憑依して治療…は無理か。そもそも現在、殺人犯の姉の私が動いたら余計悪化する…か…)」

「それともう一つ。事故現場近くに、盗まれた宝石がブチまかれていますよ…」

そういつて、クレアさんがタブレットで『道路にばらまかれた宝石』

の写真と『開かれたケース』の写真を見せてくる。これには私と焦凍君はハツとする。

「…まさか…」

「うん…あの二人が追っていた、強盗犯の仲間が持っていたケースが…」

点と店がつながった時、焦凍君のスマホにメールが届く。画面には…『緑谷』君からのメールだった。

「緑谷からメールです」

「なんて？」

そのメール内容は、意外なものだった。

『暗くなったら

冷蔵庫にある

イチゴを

どうぞ』

「…あいつ、俺達にイチゴを…?」「焦凍君違うよ…これ、暗号文…」
!「そうか」

ここで天然発言はいらぬよ…メールの文章をひらがなに換え、文面の頭文字を取って読む。そこには…

「く、れ、い、ど…」

その言葉に、私達は理解する。

「クレイドって…隣国のクレイドのことよね。」

クレアさんがそう言う。これで、私達がこれからの行動が決まった。焦凍君と顔を見合わせて頷く。

「緑谷達はそこに向かってる…」

「今から行ってきます…!」

「分かったわ。エンデヴァーには報告しておく」

私達は直ぐに向かう。

「あ?」

ちょうど爆豪君が戻って来た。私と焦凍君は爆豪君の両肩、両腕を掴んで、かまわず歩き出す。

「爆豪、行くぞ」

「なんだいきなり!?」「二人の場所が分かったの」ああ!?!」

突然の事に吠える爆豪君だが、直ぐに私達の様子から察知する。

「クソデクとモブがらみだな?」

「ああ。だが今は…」

事務所の外に出る私達。そんな私達を遠巻きに物陰からこちらを見ている警官に気付く。気付かないふりをして歩きだすと、警官が尾行してくる。

「まずあの見張りをまくぞ」

「了解」

「命令すんじゃねえ」

アイコンタクトと同時に、直ぐに走って建物と建物の中の細い道へに入る。数人の警官達が急いで私達を追いかけて来た。私達は物陰に身をひそめる。

「クソ、何処に……うつ……」

「!?どうし……っ!?!」

「こ、これ……は……」

急に警官達が倒れる。意識があるが、体が麻痺し、動けない状態となる。

「ふう……まずは安心かな?」

身をひそめる前に、私は『武則天』と憑依し、杖を使って警官の足元に『毒のみずたまり』を生成。バシャバシャと走って来た警官達は案の定その毒で痺れたのだった。

「これから先、警官達が待ち伏せしてる可能性があるかもな……」

「ちつ……めんどくせえ……」

冷静に判断する焦凍君に悪づく爆豪君。

「まずは目立たないように戦闘衣装から私服に着替えよう。うん……」
私達も移動を開始する。

side 立希

「……よし、警察はいないよ。」

周囲を確認してから、自分達はバスの屋根から降りる。あれから

ずっとバスの屋根に乗り、そのまま終点に到着。バス亭付近はうら寂しい田舎で、所々に店があるだけだ。

「流石にもう暗いし、どこか姿を隠せる場所で寝泊まりかな？」

「そうだね…轟君達がこのケースに隠された秘密を掴んでくれればいいけど…」

バス停の物陰で話し合う自分と緑谷君。道中、緑谷君が自分達の移動先を教えるメールを送った…今は託すことしか出来ない。

「…なあ、ちよつと電話してきてもいいだろ？」

ふいに、少年が公衆電話を指さし言う。たぶん大丈夫だろう。彼の情報は出てないはずだ。なるべく手短かに。と緑谷君が告げ、行かせる。

「はあ…ヒーロー活動してただけなのに指名手配されるなんて…絶対この事世界各地にいる皆に知らされてるよね…」

彼が電話してる間。自分は疲労感を見せる。ずっとひた隠しにしていたが、そろそろ魔力が枯渇してきた。今のうちに休んで少しでも回復に勤しみたい。

「うん。けど、僕たちは無実なんだ。このケースを得るための情報操作…」

「そうなんだけど…姉達が何とかしてくれるのを願うよ…うん…」

緑谷君に励まされ？自分は疲労した体を奮い立たせる。泣き言うのはここまでだ。

「……クソ……」

少年が戻って来た。電話を終えたようだが…何処か怒り気味だ。

「どうかしたの？」

「……いや、なんでもねーよ……」

心配する緑谷君だが、彼は取り繕う笑みで応えた…何かあるだろうが、深入りは止めたほうがいいかな…

「…それじゃあ、食料と寝床確保しないと…何度も悪いんだけど、またお金渡すから…」

「はいはい、わあってるよ…」

自分らは移動を始める。

side 立香

「…はあー…やつと一息つける……」

「大分警察から巻いたな……」

緑谷君と立希に追いつく為に、戦闘衣装が入ったりユツクを持つてクレイド国へ向かう山岳列車に乗り込む。少しだけ緊張が解れる。ここまでの道中、かなりの数の警察をまいた。

「あー…疲れた…」

「んなチマチマやつてから疲弊すんだよ。俺の『爆破』で一気に片づけりゃ突破出来る「そんな事したら余計に見つかって大事になるでしょ…」ちっ…」

性に合わないと分かっている爆豪君

「それにまあ、いざとなったら二人の「個性」が大いに役に立つし、温存しててよ。それまで私に対応するから…」

「いいのか…う…ここまでずっと立香を頼って動いていたが…」

焦凍君の言う通り、私は『武則天』と憑依し、追いかけてくる警察に毒を盛り続けた。麻痺で動けなくなったり、幻覚で誤認させたり、とにかく足がつかないように徹底的に動いた。

「(まあ…個性が制限されて魔力が枯渇気味だけど…)大丈夫。緑谷君たちと会うまで、二人をサポートするから…あ」

ガタンと、列車が急カーブした時、ちょうど疲弊で体の力が抜けてバランスが崩れる。

「っ！あぶねえ！やっぱ無理してんじゃねえか…」

「っ……」

倒れる…かと思っただけ思いっきり焦凍君に肩を掴まれ、引き寄せられ、支えてもらった。ちよ…か、カオガチカイデス……

「ダ、ダイジョウブデス…」

「本当か…？」

不安そうに私の顔を見てくる焦凍君。更にドアアップされ、鼓動が速くなる。多分顔が真っ赤だ今…

「ケツ…乳繰り合ってんじゃねえよ「乳繰り合ッテないヨ!？」」

爆豪君が言った事に否定するが声が上ずった…今私すごく恥ずかしい…

「さっさと本題にはいれや！こちとら何も言われてねえのに動いてんだよ！」

そう爆豪君がイラついて怒鳴ってくる。そういえば何も教えてないのにここまで来てくれたんだ…コホンと私は咳払いし、焦凍君と一緒に、私達が推理した事の真相を爆豪君に話す。

「警察がクソデク達を追いかけ回してるのも、そのせいかな？」

「おそろくな。そのケース。かなり重要な物なんだろ。そうじゃないとここまで大規模に警察は動かねえ」

「そして、同然、警察の中にもヒューマライズの団員がいる。かなり上層部。じゃないとここまで情報操作はできないし、何より対応が早い…」

頭の中でピースを合わせるように、冷静に考え、つなぎ合わせて答えを確信する。そしてやっぱり結論は…

「緑谷君と立希が持っている。あのケースが、今後の命運が握られている…世界のね…」

「だろうな」

「ああ…」

二人は同意する。窓を見ると、電車は猛スピードで都心を脱出していく…

第7話

side立希

夜。食料と飲み物を調達した自分らはバス停から離れた馬小屋のような廃屋で休憩を取っていた。干し草をクッションにして、パンや缶詰などを食べるように食べ、一息つく。そして今後の移動方針を決めるべく、買った地図を広げ緑谷君と話し合う。少年は近くで背を向けて横になって、ピンク色の鳥は自分らと彼の間のケースの上で止まっていた。

「ここに来るまで周囲を確認したけど…自分らが乗ったバス以外での交通機関が無い。国境までどう行くかが鬼門だね。」

自分がさういうと、緑谷君は頷く。

「乗り物を調達するか…けど車もバイクも…ましてやタクシーも無い…それなら歩くか…」

「歩くう？無理だろ。何キロあると思ってるんだよ!？」

彼が歩くという案に抗議する。

「自分が英霊と憑依して二人を運べばまあ徒歩より大分早いけど…目立つし、何より自分の疲弊がヤバイ。(今夜ゆっくり休んでも、完全に魔力は回復しないし、損傷してる魔術回路も治らない…)最悪、置いてもいいけどさ…」

苦笑気味にいうと、緑谷君は首を横に振る。

「ううん。置いていかないよ。それに、疲れたなら、僕が二人を担ぐよ。絶対。この3人で国境に行こう。」

「緑谷君…そっか。ならそうならないように、今のうちに休んでおくよ…」

「おいおい…」

自分はその場で横になる。足を引つ張らない為に少しでも自分は魔力回復に勤しむ。そんな自分を少年がジト目で見てくる。

「大丈夫。君も、何か困った事があるなら言ってほしい」

「あ？」

そう彼に向けて、緑谷君はガッツポーズ。聞いていた自分は横にな

りながらも拳を上にはばさず。

「困ってる人を救ける。そのための力だから。」

「ヒーローはいつだって、救いの手を伸ばすんだから。」

「……はいはい。流石、ご立派だよ……俺、もう困ってっから、とつとと救けてくんない?」

そういつて、彼は再び背を向け横になる。

「うん。絶対に救けるよ」

緑谷君が応え、今だどう動くべきか思考する。対して自分は魔力回復の為、寝る事にする……目を閉じる前に、緑谷君と自分をチラリと窺うように見るピンク色の鳥が見えた気がした……

sideロデイ

かつて俺は、裕福な家庭で育っていた……今よりは生活に困っていないかった。

——「お兄ちゃん!」——

——「おにいちゃん!」——

母親はいなかったが、弟、妹、そして……

——「ロデイ」——

大好きな父親がいた。美味しい料理を皆で食べて、いつもの習慣のパズルを解いて、弟妹たちの友達と楽しく遊んで……幸せな日々を送っていた……けど、それは長く続かなかった。魔法のように父親が消えた。

——あの家、父親が失踪したそうよ……

——しかも、ヒューマライズの団員になったんだと……

父親が無差別テロを起こした思想団体、『ヒューマライズ』の一員だったことから、周囲から気味悪がられ、友達はいなくなり、家も心無い世間の声に潰された……両親を無くした俺達は最終的に逃れるように今いるトレーラーハウスへ……

——「プレゼント。いつもロロたちの世話をしてくれてありがとな。ロデイ……」——

いつだったか、パズルを解いた時に入っていた、父親からもらったペンダント。俺はやり場のない怒りをそれにぶつける。理不尽な仕

打ち、心無い裏切り。地面に叩きつける。

—「お兄ちゃん…」—

今でも忘れられない。何故こんな事になっているのかわからず、ただ泣いている弟妹たちの顔…俺は抱きしめる事しか出来なかった…俺はその時に、誓う。

「兄ちゃんはずっと一緒にいるからな…たとえどんなことをしてでも…」

弟と妹を守るためなら……

side 三人称

「……………ん」

ロデイは目を覚ます。夢の中で弟妹たちの声を聴いた気がした。はつきりと覚えている弟妹たちの声がロデイを急かす。廃屋につく前に、公衆電話で仕事をもらいに行ってるバーの店主と連絡を取った。

—『!?ロデイか!』—

—「いきなりで悪いんだけど…俺の家に行つて、弟と妹にしばらく帰れないって、伝えてくんないかな?金は後で払うからさ…」—

ロデイは少しでも帰りを待っている弟と妹を安心させてやりたかったが…

—『馬鹿野郎!テメーにそんなことしてやる義理はねえ…!それよ、ブツが届いてねーってクレームがきたぞ…!』—

—「いや、それは…」—

—『死にたくなきゃ、とつととブツを届けろ!いいな!』—

返事は罵声だった。そういう反応をされるとわかっていても、それでも頼れる人などいなかった。現実なんてそんなもん。そう思っているのに、心がじくじくと熱くて、反吐が出る…

「……………(悪いな…ヒーロー…)」

それでも、弟と妹は何がなんでも守ると決めたロデイは、動く。

「すう……すう……」

「くう……………」

音を立てないように、隣で寝ている緑谷と立希を起こさないよう、二人の間にあるケースを手には伸ばす。

「んん…」

「…………ふ…………」

身じろぎする緑谷と立希にハツとして止まるロデイ。しかし二人が起きることはない。慎重にケースを二人の間から抜き取る。

—「…このケースが何かの犯罪に繋がっているなら、簡単に渡すわけにはいかない。」—

—「そうだね…あそこまでしつこいぐらい追って来たんだ。何か危険な予感がする。」—

昼間の二人の言葉がロデイはふと蘇る。無いも知らず眠り続ける幼さが残る寝顔に、蓋をしたはずの罪悪感が蘇りそうになる。

「……………」

それでも、ケースを元に戻そうとは思わなかった。出ていこうとした時

「Pii！」

「(しいくく!!)」

ピノがまるで止めるように鳴いた。ロデイが鳴き止むように口に指を当てても、鳴くのを止めない。

「つ……………」

ロデイはピノの鳴き声を背に、振り切るようにケースを持って廃屋から出る。何もない深夜の田舎道。夜がひどく暗くて、胸が痛かった。しばらく走ったところにある公衆電話に辿り着くと、ロデイはおもむろに電話をかけた。

「もしもし……………」

side 立希

「……………」

何処から何か聞こえる。けどはつきり聞こえない…

「…ii!PiiPiiPii!」

「ん、んん…煩い……………」

次は何か良く聞こえた…まるでアラーム音のような音だ。けど眠気が勝って、起きようにも気力が無い…

「Piiiiiiiiii~~~~~!!!」

「イダダダダ!?イダイ!?イダイ!?」

突然、耳たぶに激痛がはしる。これには流石に眠気が一気に掻き消え、意識がはつきりする。上半身を起こし、直ぐに耳たぶの近くに何かを掴む。それは…

「んん?少年が飼っている鳥…?」「P i P i P i!!」ああ、ごめん……っ!」

直ぐに手放す。と同時に気付く。自分と緑谷君の間にあつたケースが無く、更には少年の姿が無かった。

「み、緑谷君!緑谷君!!起きて!!」

「ん…ん…なに……」

自分は緑谷君をゆすつて起こす。

「ケースが無い!少年もいない!!」

「…え!!?」

自分の言葉に緑谷君も起き上がる。

「もしかして…」

「P i i」

呆然とする自分ら。そのとき、ピンク色の鳥が廃屋の出口へと飛んでいき、手招きしてきた。自分らは荷物を持ち、慌てて駆け出す。

side 三人称

「……………i」

電話をかけてしばらくして、一人ペンダントを見つめていたロデイの上空にヘリコプターがやってきた。眩しいライトに照らされながらロデイは手を振る。ヘリコプターはロデイの近くに降り、一人の男性が現れる。

「…警察の人かい?」

「ケースを渡せ」

ロデイの間を無視し、横柄に言う。ロデイは男性にケースを投げ

た。

「これで、俺は自由ってことでいいんだよな？」

ケースが全ての元凶なら、これを渡して万事解決。弟妹の元に一刻も早く戻れる。これがロデイの理屈だった。

「…仲間は何処だ」

が、不意に男性が訊いてくる。

「え」

「お前もそいつらも知ってるんだろう？…このケースの秘密をなあ！！」

男性の腕が棍棒に変形していく。腕だけではなく全身が巨大化し、まるで鬼のような容貌になった。

「し、知らない…な、何も知らないって…」

ロデイは本能的な恐怖に体を震えだす。男は警官ではなく、敵だった。

「お、弟と妹が待ってるんだ…頼むよ…帰らせてくれよお!!」

甘かった。一縷の望みにかけて考えが…ロデイは死ぬわけにはいかない、必死に訴える。

「フウウウウウ…」

しかし、棍棒の敵—ロゴンはそんなことは耳に入らない。ロデイに向かつて凶器と化した腕を大きく振り上げる。一撃でもくれば確実におしまいだ…ロデイは本能的にそう感じた。

「ひい…!!」

恐怖で腰をぬかし、動けなくなったロデイに棍棒が当たる瞬間—

「ッ!!」

「うわっ!!」

ロゴンに向かつて、激しい風圧と、一本の剣が襲い掛かった。

「ヌン!!!」

風圧でロデイは吹き飛ばされた。が、ロゴンは棍棒で防ぐ。剣も弾き、上空へと飛ばす。

「エアフォースを…っ」

「マジか…結構本気で投げたのに…」

上空から緑谷と立希が現れる。

side 立希

「Piiiiiiii!!!」

「いた！ってヤバイ!!」

「早く…救げなきや…!」

ピンク色の鳥の先導されると、視界の先に少年がいた…が、そこには少年以外にもいた。敵だ。鬼のような姿に、棍棒を振り上げていた。直ぐに自分と緑谷君は戦闘に入る。

『エアフォース』!!」

『投影：モードレッド』!!」

緑谷君は『フルカウル』で跳躍し、上空から空気弾を放ち、自分は『モードレッド』と憑依し、跳躍。剣を顕現し、そのまま敵に向けてまっすぐ投げ放つ。敵はそれらに気付き、防ぐが、少年から意識を外す事が出来た。

『スマッシュ』!!」

「チェストオオ!!」

「!」

そのまま落下する勢いで自分らは敵に一撃を与える。緑谷君は蹴りを、自分は空中で回収した剣でたたつ斬る。敵は吹き飛び、へりに激突する。

「よし…「!」緑谷君?!」

その時、緑谷君が何かに気付いた。ケースを拾い、少年に向かった。一体何が…と反応が遅れた刹那、背後から煌めく矢が通り過ぎた。

「っう!!」

「なっ…」

「緑谷君!!!」

少年を庇うように、少年の前に飛び出した緑谷君の胸に矢が突き刺さった。自分はへりの方を見る。そこには…もう一人、敵がいた。

「チッ…」

矢から、鉄橋の時襲って来た敵だと理解する。狙った少年を仕留め

られなかったのか舌打ちすると同時、手を『弓』に変え、4本の矢をつがえた。

「させるかああああ!!」

矢が放たれる前に、自分は剣―クラレントから赤雷を撃ち放ち、周囲の地面を抉り、土煙を巻き上げる。

「緑谷君…!」

「お、おい…しっかりしろ…!しっかりしてくれ…!」

自分は緑谷君と少年の方に走る。緑谷君の胸に矢が突き刺さり、ぐったりしている。少年は支えながら、必死に声を掛けていた。

「う…ぐ…」

「ここは危険だから急いで離れるよ!!」

『モードレッド』から『アルトリア・ペンドラゴン・ランサー・オルタ』に憑依を変え、『ラムレイ』を召喚。ラムレイの背中に緑谷君と少年を乗せ、直ぐに離れる。

「ラムレイ、重いけど少しだけ頑張って…!」

「ブルルルル…!!」

土煙が消える頃には、自分達はもう敵が見えないくらい、遠くへ移動し終える。数分ぐらいラムレイを走らせ、どこかの堀の陰に身を隠す。憑依を解除し、自分は緑谷君をその場に寝かせ、胸に刺さっている矢を握る。

「ぐ…「痛いけど…我慢してねっ!」があっ…!」

自分は勢いよく矢を抜く。矢じりには血がついていた。

「待ってろ!直ぐに薬を調達して…「大…丈夫。」…!」

少年が立ち上がるうとするが、緑谷君はそれを制する。

「傷は…そんなに深くない…スマホ…ダメにしちゃったけど…」

粉々になったスマホを見せながら緑谷君は話す。

「(奇跡的に胸ポケットに入ってたスマホが盾になって致命傷を避けたのか!)『投影…マルタ』…簡易的だけど治療する…!」

『マルタ』に憑依し、スキルを発動。完治は…魔力枯渇で出来ないけど…応急処置は出来る…!」

「…すまねえ…「大丈夫…リュックに医療キットがある…出してくれ

ない？」あ、ああ……」

治せなかつた傷は医療キットと治療。薬を塗り、上から包帯を巻く。

「あの敵、手強いよ……すぐに……離れないと……」

「分かっている。治療が終わり次第、移動するから」

それから、処置を終えたあと、自分と少年で緑谷君を担ぎ、ここから離れた洞窟を見つけ、そこに身を隠す事にした。

第8話

side 三人称

クレイド国付近の街の、安いホテル。そのホテルを取り囲むように、身を潜めている警察達がいた。

「そっちはどうだ?」

「異常なし。部屋から出てきておりません。」

警察達…全員、ヒューマライズの団員達だった。彼らが監視している部屋…そこには轟、爆豪、立香がいた。カーテンで部屋の様子は分からないが、室内の明かりにより、3人の陰があった。

「地球の癌共が…：奴らが眠り次第、突入。何処に向かうのか尋問。吐かないのなら、地に還すだけだ。」

「了解。」

そんな話をし、警察達は再び監視を再開した時だった。視界横に何か一瞬光る何かが映った

「ん—」

刹那、その警察の首に強い衝撃が走る。そのまま警察は気絶し、崩れ落ちる。

「なっ…誰だ!!」「誰が、尋問するって?」っ!?

仲間が倒れた事に気付いた警察。腰についていた銃を抜き、構えた瞬間、首に刀が添えられ、動けなくなる。警察は銃を落とし、両手を上げる。

「お仕事お疲れ様です。ですが…これ以上は、仕事しないほうがいいですよ…?」

「っ…緊急事態!直ぐに来てく—」お仲間さんなら、仲良く寝てます。っ!?

刀を持っている人物は…立香だった。『斉藤一』に憑依し、自分らが泊まっていたホテルの周囲にいる警察達全員を峰打ちで気絶させた。

「それじゃあ、おやすみなさい。」

「かっ—」

そのまま刀の峰で警察をたたっ斬り、気絶させる。

「ふう…さて、後は…『降霊：エミヤ・オルタ』」

立香は『斉藤一』から『エミヤ・オルタ』に憑依を変え、後方に銃を向け、発砲する。

「ガッ！」

「グッ！」

放たれた銃弾は、立香に銃を構えていた警察2人の脳天に着弾し、倒れる。

「ゴム弾だから安心して…まあ火薬で飛ばしてるから、脳天に当たれば気絶するけど…いいよ。二人とも」

「すげえな。」

「けっ…チマチマかったりいなあ…っ」

終えた立香が声を掛けると、直ぐ近くの物陰から関心した轟とつき纏ってくる警察にイラついた爆豪が現れる。ホテルにある3人の人影は、轟が『氷結』を生成し、爆豪の『爆破』と轟の『炎』で3人の形を象った氷の彫刻だった。それを窓側に配置し、警察達を惑わし、後は立香が闇夜に紛れ、瞬時に警察の意識を刈り取ったのだった。

「ここまで来るなんてな…やっぱヒューマライズの団員がいろんな所にいるんだな…」

「こんな奴ら、俺の『閃光弾』で一発で倒せんだよ…！」「だから、派手に動くと余計に見つかるでしょ。」ちっ

やはり性に合わない爆豪。

「それより…ホテルは止めよう…荷物はある。部屋はあのみままで、今日は野宿するしかねえ」

「そうだね。」

「だから命令すんじゃねえ！」

轟の案に、急ぎ町から離れる3人だった。

一方、洞窟内。立希達3人は木々を集め、火を起こす。

「ふう…一時的だけど、危機は去った…」

「うん。治療ありがとう藤丸君。これなら直ぐに治るよ。」

「……………」

一安心する立希。傷を負ったばかりなのに、地図を見てクレイド国

までのルートを考慮し始める緑谷。そして…ロディはそんな二人から目をそらし、目の前の焚火を見つめていた。

「…どうして庇ったんだよ…」

「うん？」

「?…どうしてって?」

緑谷と立希はロディを見る。ロディは二人から後ろめたくなり、息苦しくもなるも、口を開く。

「俺はケースを持ち出した…あんたらを裏切ったんだ…俺なんか庇わず、ケースを取り返して逃げりやよかったんだ…」

「そんな事、できないよ。」

「いやいや…流石にあそこに置いてくほど、酷い自分じゃないよ。」

しかし、ロディを庇う緑谷と立希。すると、ロディは二人に背を向け、ハッと鼻で笑う。

「昼間だって敵が盗んだ宝石を運んでたんだ。あんたらヒーローが嫌いな犯罪者だぜ!」

「困ってる人を放っておけないよ。」

平行線の会話。緑谷と立希の同じ発言に、ロディはわけがわからず怪訝そうな顔で振り返る。

「…それでケガしたら割に合わねえだろ?」

「あ、それは同意する。緑谷君無茶しすぎ。救う事は良いけど、もつと自分の体を大事にしてよ。」

「ふ、藤丸君には言われたくないよ!!確かにそうだけど…救けられれば、それで充分だよ。」

自分のなかの常識が二人には通じない。ロディは理解できない緑谷と立希に少し苛立ち、頭を掻き、その場に腰を下ろす。

「よくわかんねえ…」

わかったのは、緑谷と立希。全ての行動、発言が心かそう思っ、動いていたことだけだ。だからこそ理解しがたい…そんな時、緑谷が話す。

「…ずっと憧れてたんだ。笑顔で人々を救ける…そういうヒーローになりたくて…」

緑谷の顔が幸せそうに熱を帯びる。

「オールマイトのようになりたくて……」

「オールマイトって……世界的に有名な、あの!？」

「うん。僕の師匠なんだ」

「マジかよ……」

「え、そうなの!？」

初耳のロデイ……と、立希。緑谷はしまったと思い、慌てる。

「え、えと……こ、この事はクラスの皆に内緒にして!」

「ええ……(まあエキスポから色々一緒にいるし、内心そんな関係かなって思ってたし……) まあ、別に良いけどさあ……」

何となく緑谷とオールマイトに何か関係があると思っていた立希だった。

「……アンタも、そうなのか?」

「自分? うーん……まあ、そうだね。オールマイトじゃないけど、自分にはとても心強い、英雄達がいる。そんな英雄達のようにになりたいね。」

ロデイは緑谷と立希から目をそらし、うつむく。

「……あんたらはその夢を追いかけて、ヒーローになった……ハッ、俺とは大違いだな」

「え?」

「どういう事?」

ロデイは自虐的に笑い、夜空を見上げる。

「俺は先の事なんか、なんも考えられねえ。パイロットになりたいなんて寝言、言ってる余裕もねえ。幼い弟妹を養うだけで、いっぱいいっばいだ。」

「……………」

「ぼ、僕は……何も言うなよ。同情なんかされたくねえ!」……………」

何か言おうとした緑谷だったが、ロデイは声を荒げ遮る。そして短い沈黙後、ロデイは口を開く。

「ヒーローなんて……自立ちたがり屋で、人助けとか言いながら金儲けする奴等の集まりだと思ってた。現に、俺の住む町にヒーローは来て

くれねえ。金になんないからな。」

ロデイは今までを振り返る…両親がいなくなつて、世間から弾かれて、一番誰かに救けてほしかった時も、ヒーローは来てくれなかった。だから、自分で何とかしようと必死だった。

「…ヒーローなんて、いない。ずっとそう思っていた…でも、あんたらみたいなヒーローもいるんだな…あんたらに救けられれば、救けられるほど、俺は何やってんのかって思うよ…俺、カツコ悪い…」

ロデイは思う。今、隣にいるのは紛れもなく、ヒーローだと。出会った時から、緑谷と立希はずっと変わらずヒーローだった。

「僕も、カツコ悪いよ…」

ロデイの本音を聞いた緑谷と立希。緑谷は傷だらけの右手を見つめながら静かに続ける。

「幼いころからヒーローになりたいって思ってたけど…お前はダメだ。ヒーローなんかになれるわけないって、ずっと言われて…」

緑谷の脳裏、爆豪が思い浮かぶ。誰より辛辣だった幼馴染。道が見えなくて辛かった日々でも、夢だけはずっと握りしめていた。

「…自分もだなあ…全然ダメって感じ。」

立希も、手の甲に刻まれている令呪を見つめながら話す。

「まだ緑谷君達に会う前に、すごい大変な事が起きて、それを解決する為に、右も左も分からないで、何度も挫けそうになつて…今だって、もっとああしておけば、こうしておけばって、後悔ばかりしてるよ…」

立希の脳裏、人理を救出する為、ありとあらゆる特異点に行った旅の物語。何度も壁が立ちはだかった。でも希望だけはずっと信じて突き進んでいた。

「『個性』が上手く使えなくて、学校の落ちこぼれで…そんな僕はクラスメイトの皆に支えてばかりで…」

「いつも、英雄達に助けてもらつて、弱い自分を鍛えてくれて…そんな自分は、家族や皆に助けてもらつて…」

二人は各々の出来事を振り返る。片や己と平和の象徴との出会い。片や己と英雄達との出会い。自分達はずっと、誰かに救けられているのだと二人は思う。

「僕はカツコ悪いままだよ…だから…カツコよくなりたいたんだ…。笑顔で人々を救けられる、そんなヒーローに…！」

「自分は憧れている…だから強くなりたいたい…家族…仲間…皆を守れる。そんなヒーローになりたい…」

真摯な顔に、ロデイは魅入られる。本気の言葉。カツコ悪いと言う緑谷と立希が、カツコよくなりたいたい。強くなりたいたいという緑谷と立希が、ロデイはとてもカツコよく見えた。

「Pii！」

「わっ」

ピノが緑谷の頭に着地する。

「あ、さっきの鳥。もうちよつとマシンな起こし方にしてよ…なんか思いつくと耳痛くなってきた…」

「Pii！」

今度はピノは立希の肩まで飛び、頬ずりをする。

「そいつはピノっていうんだ。」

「ピノ」

「Pii！」

ピノは二人に懐いたのか、頭の上で嬉しそうに飛ぶ。そして、ロデイは二人に近づく。

「俺はロデイ。ロデイ・ソウル。あんたらの名前は？」

ロデイの柔らかい表情に、緑谷と立希は笑みを浮かべる。

「僕はイズク・ミドリヤ…ヒーロー名はデク」

「自分はリツキ・フジマル…ヒーロー名はマギ」

「デク…マギ…覚えやすいな。」

「うん。気に入ってる」

「でしょ？結構いい名だと思ってる」

今まで名前を知らなかったのが不思議に思え、ロデイは小さく笑う。緑谷と立希もそれにつられ笑い合う。

「少し寝ておこう。ロデイ」

「明日も早いしね。ロデイ」

「ああ、そうだな。デク、マギ。」

3人の横で、薪を燃やし尽くした焚火がゆっくりと消えていく。夜が優しく3人を包んだ。

3人が眠りについたその頃、ヒューマライズ本拠地の神殿ではフレクトがモニター越しに警察長官から報告を受けていた。

『申し訳ありません。寸前のとこで取り逃がしました：現在、警官を総動員して行方を追っております…』

この長官こそ、緑谷と立希を殺人犯と情報操作し、オセオン国の警察達を動かしている犯人だ。

「軍は動かせないのかね？」

フレクトの言葉に長官はわずかにうろたえる

『流石に、私の権限では…』

「搜索を続けよ」

『はっ、人類の救済を…』

冷静に通話を切ったフレクトが隣のモニターに視線を移す。そこに映っているのはケースを持っているロディだった。

第9話

side立希

朝、目が覚めると、既に緑谷君とロデイが起き、なにやら騒いでいた。自分も起き上がり、洞窟から出る。

「おはよー……ってえ!!この車どうしたの!?!」

そこにはジープがあった。驚いていると、エンジンをかけていたロデイがジープの窓を開け、顔をだす。

「おー、マジ。おはようさん。ちよつと借りて来たんだよ。ヒーロー協会名義の借用書書いてな。」

しれつと笑いながらロデイが応える。

「少し離れた所にあつた牧場から借りて来たんだって…アハハ…」

苦笑する緑谷君。この行為が良いのか悪いのかよく分からない表情だった。

「本当ならセスナを借りれば、速攻でクレイドまで行けるんだけどな…」

そうぼやくロデイに、緑谷君が訊く

「ロデイ、操縦できるの?」「冗談だつて…乗れよ」え、あ、うん!」

「それじゃあ、自分は後方監視で荷台に座るよ。」

ロデイに促され、車に乗る。運転手はロデイ。助手席に緑谷君。席は3つあるが、手狭になるし、いざという時動けるようにするため、自分は荷台部分に乗り込む。

「そんじゃ、行くぞ!」

慣れた様子で車を発進させるロデイ。日の出前のうっすらと白み始めた空。少し肌寒い風が心地よく、ただまっすぐ道を進んでいく。

「藤丸君大丈夫?」

「問題無いよ。このまま安全運転でよろしく。」

「オーケイ…なあデク、マジ」

振動に揺られながら、ロデイが訊いてきた

「何?」

「ケースの秘密がわかったら、俺、家に帰れるよな?」

「勿論だよ！」

肯定する緑谷君。自分は気になった事を訊く

「…家族がいるんだっけ？」

「ああ。弟と妹。俺の大事な家族だ。」

そういつて、ロデイは首元からペンダントを取り出し、蓋を開けて緑谷君に渡す。自分も緑谷君の背後から覗くように見る。その写真には笑みを浮かべるロデイと、小さな女の子と男の子が写っていた。「お袋は一番下の妹を生んだあと、すぐ逝っちまった。だから親父は、俺達を必死に育ててくれた…けど、いきなりいなくなった。」

さばさばと答えるロデイに、緑谷君が戸惑いながら訊く

「いなくなっただって？」

「ヒューマライズって知ってるか？」

「！…無差別テロを起こした団体…」

自分がそう答えるとロデイは頷き、話を続ける。ロデイの父親がこの団員であり、それが世間にバレ、友人達は離れ、学校、家を追い出され、働き口も見つからないと…

「そうだったんだ…」

自分らは昨夜の会話を思い出し、その事実胸が痛む。

「親父の事は恨んださ。恨んで恨んで…んで、どうでもよくなった。今は弟と妹の方が大事だ。まともな生活を送らせてやりたい。」

あっけらかんと笑うロデイ。けど笑うその声色には、強い決意が見えた。

「ロデイ…」

子供が背負うには重すぎる運命、恨みに飲み込まれないで、必死にあがくロデイが…なんだかとてもカッコよく見えた…多分、緑谷君も同じ感じだろう…改めて、自分はペンダントの写真を見る。苦しい環境の中でも、笑い合っている家族。とても幸せそうだ。

「いい…家族だね。」

「うん。かわいいね」

自分らがそういうと、ロデイは嬉しそうにペンダントを覗きこんだ。ちよ?!?運転!?

「弟は頭のデキがよくてさ、妹はかなりかわいい！将来、絶対美人になる！」

「前！前みてー！ロデイイイ〜!!」

覗きこんできたロデイ。そのせいで運転が雑になり、大きく蛇行するジープ。緑谷君は思わず叫んで：

「ちよ、あ、安全運転…自分けっこう車酔いするタイプ…っ」

自分は顔を青くする…少しでも酔いを無くすため空を見る。瞬く間に昇る太陽が自分らを照らしていた。

side 三人称

それからロデイ、緑谷、立希を乗せたジープはクレイド国へひた走る。幹線道路は警察がいるかもしれないと考え、3人は道なき道を行く事にした。今までずっと地図を見ていた緑谷が最短ルートを見つけ、その指示にロデイは運転し、立希はジープが走りやすいように邪魔な岩や木々を英霊に憑依して排除する。

「順当にいけば、明日の昼には国境にたどりつくよ！」

「了解！」

途中、別の道路に出てガソリンスタンドで給油と食料を仕入れる。緑谷と立希を怪しむ店主の目をロデイがそらしたり、川を渡ったり、雨の岩場に苦戦したりしながら、なんとか進む。

「いやー、デクとマギの『個性』便利だな！」

深夜になり、建物に車を隠して休憩を取る3人。ロデイは緑谷の包帯を取り換えながらしみじみ言う。

「そうかな？」

「いやーそれほども」

雨に降られた岩場で、ジープが動けなくなった時、緑谷は『黒鞭』でジープを引っ張り上げていた。立希もまた、『セミラミス』と憑依し、呼び出した鎖でジープを引っ張り上げるほか、通りやすいようにその鎖を何本も展開し道なき道を簡易的に舗装し、更には崖わたりで何本も鎖を束状にし、橋を掛けジープを進ませている。

「…ねえ、ロデイ。君の『個性』はどんな『個性』なの？」

「あ、それ気になった。」

緑谷はふと思いついたように訊き、立希もそれに便乗する。

「言いたくねえ」

ロデイは即否定。これには緑谷は言いたくない事を訊いてしまったと思いついて、うつむいてしまう。立希も踏み込みすぎたかな…と思いついて、口を閉ざす。

「…笑わねーなら…」

しかし、妙な沈黙に耐え切れず、ロデイは口を開く。その言葉に緑谷と立希はロデイを見る。

「笑わない。」

「絶対だな。」

「絶対笑わない。」

念を押す緑谷と立希は真剣な顔のまま首を横に振る。ロデイは恥ずかしそうに顔をしかめた。

「俺の『個性』は—…」

ロデイの『個性』を聞いた二人は、ロデイの『個性』を褒めたたえる—

side 立希

ジープでの移動開始から一日が立ち、時刻は大体昼頃。ようやくゴールが見えた。オセオン国とクレイド国の国境は広大な溪谷の底にあった。

「…うわあ…やっぱいるよ…警官達…」

自分は岩陰に身を隠しながら、双眼鏡で覗く。見えたのは国境に一番近い鉄道の駅。そこには警官隊が配備され、停車している列車から自分らを捜索していた。

「ものすごい警備だ…戦わずに正面突破は出来そうにない…」

緑谷君はそびえる崖を見上げる。

「ここを越えていくしかないね」

「マジか…まあ、仕方ないか…」

崖は高くそびえているが、英霊と憑依し、飛翔すればいいだけだし、

緑谷君も『フルカウル』で登れば苦じゃない。早速自分らは登る準備をする。ジープはガス欠になってしまったため、ここに置いて行くしかないが、後でしつかり返すとしよう…

「ロデイ、乗って。早くしないとー」デク、これを持ってけ」…ロデイ？」

ロデイを背負おうとする緑谷君だったが、何故かロデイはケースを緑谷君に突き出す。

「その怪我で俺を抱えて登んのしんどいだろう？俺はここまでだ。」

そう冷静にロデイは言ってきた。

「嫌だめだ。車はガス欠だし、こんな所で一人にはできない。緑谷君が無理なら自分がロデイを崖の上まで運ぶー」今、大事なものはケースの中身を持つてオセオンから脱出する事だ。敵や警察が来て、足手まといの俺が人質になったら今までの事が全てパーだ。」いや…でも…」自分が意見を言うが、ロデイは頑なに拒否してくる。

「頼んだぜ。ヒーローー！」

心配になる自分と緑谷君にロデイは笑ってみせた。心意気を感じたのか、緑谷君はケースを受け取ろうとした時だった。急激に何か近づいてくる音が聞こえた

「一…二」

爆音と共にヘリコプターが上空に現れた。そして、ヘリから自分達を狙う弓の敵がいた。

side 三人称

「あいつ！」

「しつこ過ぎる!!」

「うわあ!!」

緑谷はとつさにロデイを抱え、『フルカウル』で崖を跳躍で登る。襲い掛かってくる矢は立希が『イリヤ』に憑依し、飛翔しながらルビーから放つ魔力弾で弾き壊す。

「これ以上の失敗は…！」「使え！」！

素早い動きで移動する緑谷と立希に苛立ちをみせるベロス。する

とへりに同乗していた敵―シデロが拳から出した小さな『鉄球』をベロスに差し出す。ベロスはそれを矢の代わりに放った。

「っ!？」

「マジか!!」

放たれた『鉄球』は崖に当たる直前、突如『巨大化』。鉄球は緑谷達の頭上の崖に直撃し、崩れ始める。その様子は駅から目視出来た

「うわああああ!!くそっ、なんなんだよ、あいつらー!」

「っ!」

ロデイが思わず叫ぶ。落石が迫りくる。刹那、立希はそこから急上昇。そして緑谷達に向けて腕を伸ばす。

「緑谷君!!」

「!『黒鞭』!!」

立希の意図に気付いた緑谷は『黒鞭』を伸ばし、立希の腕に絡ませる。立希は一瞬、2人分の重さで高度が落ちるが立て直し、持ち上げる。

「んぐぐ…っ!」

「ロデイ!しっかり捕まってる!!『エアフォース』!!」

「っくくく!!」

『黒鞭』を巻き上げ、立希のいる高さまで行こうとする緑谷達に、『鉄球』が襲い掛かる。緑谷はロデイにしがみついてもらい、ロデイを抱えていた片腕を自由にする。そして鉄球に向けて『エアフォース』を撃ち、落としていく。

「行け!緑谷君!!」

「『デラウエアスマツシュ・エアフォース』!!」

立希は二人を持ち上げ、そして緑谷はタイミングよく『黒鞭』を解き、一気に上昇。そしてそのままへりに向かって強烈な蹴りを放つ。

「くっ!!」

その蹴りの風圧で、へりが大きく回転し、離れる。体勢を整えようと、立希が空中に放りだされた緑谷とロデイを受け止めようとした時、へりのほうから一発の『矢』が飛んできた。

「つう!!?」「藤丸君!」「マギ!」おぐっ!!」

「ちい…!!」

執念。不安定なヘリからベロスは立希に向けて矢を射つたのだ。不意な攻撃に、矢は立希の肩を抉る。

それが原因で落ちてくる二人を上手く受け止めれず、激突。3人はそのまま崖の頂上に転がるように不時着した。

「ぐ…ロデイ！藤丸君！大丈夫!？」

「いてて…ああ、なんとか…」

「刺さったわけじゃないから…何とか大丈夫…!」

立希がクツションになったのか、ロデイは無事。立希は肩から出血し、服に滲ませてるが、まだ動けた。すると、ロデイはハツとする。

「ケースが…!」

先の拍子でケースを落とした事を思い出す。周囲を見渡すと、少し離れたところにケースがあった。走りだしたその時、再び3人の頭上にヘリが現れた。

「ロデイ!!」

「うわあああ!!」

落ちてくる『鉄球』で地面がめくれ上がる。不安定な足下にもかかわらず、ロデイは弾かれたケースに反応して思わず飛び出した。

「ぐううう…!!」

落ちる寸前でなんとかキャッチしたが、かろうじて片手で崖にしがみついている。

「ロデイ!!」

「今助けに…っ!」

直ぐに駆け付けようとする緑谷と立希。だが、緑谷には『鉄球』が邪魔をし、立希には、複数の敵が立ちほだかる。

「くっ…!」

「ま…!」

両手を『刃物』にする『個性』、口から『炎』を吐く『個性』、そして自身を『獣』に変化する『個性』が立希に襲い掛かる。その隙にヘリから飛び降りたシデロがロデイの頭上に着地した。

「ぬうううう!」

そしてロディめがけて、ケースごと潰そうと巨大化した鉄球を持ち上げる。

「っ…受け取れ！デク！マギ！」

ロディは精いっぱい力を込めて、緑谷と立希のいる方へとケースをブン投げる。

「ロディ！」

直ぐにでも駆け付けたい緑谷と立希。しかし立ちほだかる敵達に、なかなか近づくことができない。

「人類の救済を!!」

シデロがそう叫び、かろうじて崖にすがり着いているロディめがけて大きな鉄球を投げ落とそうとした時だった。

「っ!?!」

突如、シデロが持ち上げていた鉄球が白くなり、そして『大量の花』へと変貌。その花々は風で舞い散り、鉄球を掻き消したのだった。

「なっ—」

「あの白い花…まさか…「やつつと見つけた!!」 ああ!!」

突然の出来事に驚いている敵達。そこに、誰かが崖へ降りて来た。花々に心当たりがあった立希。そして聞いた事のある声に、見た事のある姿に、心から安心できた。

「それじゃあ…行くよ!!」

降りて来た人物―白いフード付きローブを纏い、杖を持った立希だった。

第10話

side 立香

国境に一番近い駅についた私達。警官隊が配備される前に、何とか駅から脱し、崖裏に身を隠す。

「…で、緑谷達は何処にいるんだ…?」

「知るか。」

「何とか連絡を…:あ、場所分かるかも…!」

緑谷君と立希が何処にいるか、正確に知る方法を思い出す。私は戦闘衣装の手袋をはめ、内蔵しているスイッチを押し起動。空中に私中心とした方角を示す画像が映る。その画像に赤い点が反応していた。

「それ…まさか『GPS』か…!?!」

「んな便利なモン何で今まで出さなかったんだよ!!」

驚く焦凍君に、怒る爆豪君。

「い、いや、そこまでハイテクじゃないし、精々5キロ圏内だし…(すっかり忘れたなんて言えない…)」

林間合宿で攫われた経験から、私と立希の戦闘衣装には互いの位置を知らせるGPSが内蔵されていた。反応があるという事は、もう既に立希達が近くいる。

「…で、どこにいる?」

「えっと…あつちの方向…」

と、指をさした時、その方向にある崖が崩れた。

「襲われてんじゃねえか!!」

「行くぞ!!」

「うん!!」

爆豪君を先頭に、直ぐに私達は動く。敵が来ていた。爆豪君は『爆破』で跳躍。焦凍君は『氷結』で上昇。私は『ブリュンヒルデ』と憑依し、飛翔する。

反応があつた所に直ぐに向かうと、案の定、そこには立希と緑谷君がいた。そして…敵の一人が崖際で何かしていた。おそらくあそこにもう一人いると予測する。

「行くぞ！」

「命令すんな！」

「うん！『降霊：マーリン』!!」

焦凍君の号令に、私達は動く。まずは崖際にいる敵。私は『ブリュンヒルデ』から『マーリン』に憑依を変え、杖先を敵が持ち上げている鉄球に向け、唱える。

「そらっ！」

刹那、鉄球は花卉へと変貌し、掻き消す。

「あの白い花…まさか…「やつつと見つけた!!」 ああ!!」

突然の出来事に驚いている敵達。その間に私は崖を降り、遂に緑谷と立希と再会する。立希にいたっては心から安心している表情だった。

「それじゃあ…行くよ!!」

「っ！」

立希を襲い掛かっている敵の一人に私は特攻。杖を持ってないほうの手で『剣』を顕現。両腕とも剣の敵に斬り掛かる。

「柄じゃないんだけど…ねっ！」

その敵は腕をクロスし、私が振るった剣を受け止める。大した事のない攻撃だと思ったのか、マスク越しでほくそ笑んでいた。そんな敵に私は…

「ほいっ！」

「ガア!？」

持っていた杖から桃色の砲撃を浴びせ、敵を地に伏せさせる。

「うわあ…」

「立希も騙された戦法だよ…！」

以前、マーリンに教えられ、そしていつだったか模擬戦で立希にやった戦法だ。近くで立希のうんざりしてる声が聞こえたけど無視する。

「…！ そうだ、ロデイ…！」「大丈夫だから。私一人だけじゃないし。」

「う…！ わあ…！ …！」

多分、崖際にいた人の名前を呼ぶ立希に、私は大丈夫だと促す。そこに『氷結』が生き物の様に這いより、瞬く間に伸び、落下しそうになった少年を受け止め、頂上へと戻す。

「これは……轟君！」

緑谷君がそう言うのと、少し高い所に立っていた焦凍君が姿を現す。「保須の時といい、お前の通信はわかりにくい……っ！」

そう言った直後、焦凍君の背後から煌めく矢が襲い掛かって来た。

「！」

「させるか……！」

焦凍君がその矢に気付くと同時、私は再び杖で唱え、焦凍君に矢が当たる瞬間、花びらに変え、散らせる。上空のへりに敵が一人いるようだ。けど既に対策は出来ている。

「どこ見てんだあ!？」

「爆豪君!!」

爆破を散らしながら現れる爆豪君。へりめがけて飛び、そして『徹甲弾』を撃ち込んでいく。

「さて……立希は下がって。ここは私がやるから……『降霊・アストライヤ』」

「う、うん……」

私は怪我してる弟を下がらせ、残り2人の敵と対峙する。今度は『アストライヤ』と憑依。と同時に宝石を敵2人に目掛けて撃ち放つ。

「光よ!!」

「！」

『宝石魔術』により、宝石を爆発させる。けどこれは敵に当てず、周囲の地面を爆破し、土煙を起こす。私はそのまま土煙が舞う中を走る。そして敵の背後から拳を放つ。

「！ゴ」「そらっ!!」「ア!？」

私に気付き、口から炎を吐こうとする敵だったが、炎が放たれるよりも前に、敵の顔面を殴る。と、同時に敵の口に宝石を入れ、塞ぐ。『宝石魔術』と敵の口内の『炎』が反応し暴発。敵は口から黒煙を吐いて倒れる。

「オオオオオオ!!!」

「!」

最後の一人。鋭いキバと全身に剛毛を生やした獣のような敵。雄叫びをあげながら大振りの巨大な拳を放ってくるが、遅い。確実に避けてから、敵の背後に回り、敵の腰を掴む。そして――

「覚悟は良い……ふんっ!!!」

「!」

勢いよく、巨体を持ちあげ、そのまま敵の後頭部を地面に叩きつける。所謂、バックドロップをかます。勢いよく地面に敵の顔が埋まり、ピクリとも動かなくなる。

「カウントは……必要ないか……」

「す、すごい……」

圧倒的な動きに、傍にいた緑谷君が唾然としていた。そんな彼に、私はグッドサインを送る。

side 三人称

立香が敵と対峙している間に、轟はシデロを頭だけ残し『氷結』する。

「た、助けてくれ、なんでもする……」なら訊きてえことに答えてもらう。「わ、わかった……」

直ぐに降伏するシデロ。その時、シデロめがけて矢が撃ち込まれる。

「!」

氷結が碎け、シデロは崖下へと落下していく。

「裏切り者め……!!」

シデロを攻撃したのはベロスだった。彼女は傭兵だがフレクトの考えを信奉していた為、裏切りは許せるものではなかった。

「くそっ!爆豪!確保しろ!!」

「だから命令すんじゃねえ!!」

貴重な証人を救えなかった轟が爆豪に叫ぶ。爆豪は『爆速ターボ』でへりに向かう。

「このお……！」

ベロスは向かってくる爆豪に矢を放ちまくる……が、直ぐに射尽くしてしまふ。そして遂に、先の『徹甲弾』により被弾していたヘリが炎上し、暴れ始める。

「せ、制御不能!!」

団員のパイロットが焦りながら言う。ベロスは無言で顔をしかめる。

「大人しく捕まれや………?」

爆破で近づいた爆豪。しかし顔を訝しげに歪む。ベロスが「個性」の『弓』を消し、そっと胸に手を当てていたからだ。

「人類の救済を………」

そう言つて、目を閉じ、静かに自ら飛び降りた。ベロスは信念と共にその命を散らす――

「あつっつぶない!!」

「なっ……!?!」

――寸前。それを立香が止めた。『ブリュンヒルデ』と憑依し、ベロスを空中で受け止める。これにはベロスも驚愕する。

「そう簡単に命散らすな。貴女には罪を償う義務がある。」

「っ……ふざけ「てないよ。お休み」あ……」

暴れようとしたベロスに、立香は彼女の首に強い衝撃――当て身をして気絶させる。その時、操縦不能になったヘリが崖に激突。パイロットは寸前で脱出していた。あまりの騒ぎに、駅にいた警官隊があわただしく動きはじめていた。

side 立希

姉達が助けに来てくれた。敵も倒し、緊張が解れる……前に、まずはロデイの事だ!

「ロデイ。大丈夫!」

自分と緑谷君は倒れているロデイに駆け寄る

「あ、ああ……なんとかか……」

所々かすり傷はあるけどロデイは無事だった。安心してっていると、今

度はロデイが慌てる。

「ケースは…!?」「これだろ?」

ケースと自分らの戦闘衣装が入ったバッグを手に、焦凍君と姉がやって来た。

「ありがとう轟君。でもどうやってここに?」

「ああ。最初は立香が、立希の戦闘衣装についてるGPSで何処にいるか確認して行こうとしたんだが…派手なドンパチのおかげで、みつけられた。」

緑谷君の問にそう焦凍君が答えてくれる…うん?

「(…というか姉、ここに来るまでGPSの事…)」

「……………」

チラリと姉を見ると…姉はそっぽを向いた。あ、コレ完全に忘れて感じた。自分は小さくため息を吐く。

「と、ところで!…この人が、電話で言ってた人?」

あ、ごまかした。

「…うん。自分と緑谷君と一緒に犯罪者にされた…彼はロデイ。」

取り敢えず、その事は置いておいて、ロデイを紹介する。

「さつきはありがとう」

「Piss!」

ロデイは焦凍君を見て、危機一髪の所を救けてもらった相手だと気づき、笑顔を浮かべる。ピノもロデイの髪から出てお礼のように鳴く。

「んなことよりケースだ!ヒューマライズがらみなんだろ!」

そこに、勢いよく爆豪君が着地してきた。そしてとんでもない事を言ってきた。

「え、ヒューマライズがらみ!」

「どういう事?」

自分と緑谷君は驚いて、3人を見る。

「緑谷君たちが持ってきたケースに有力な情報がある可能性があるの。」

「ああ。だから俺達はここに来た。」

姉と焦凍君がいい、ケースを持ち上げる…すると、ケースの底のゴムの一つが取れかかっていた。

「…あ！」

自分と緑谷君はそれを見て気付く。何か仕掛けのようなものが見えたのだった。

第11話

side 立香

ゴムを外し、中から取り出したそれは、掌サイズの立体パズルだった。私達は岩陰に隠れ、そのパズルを解こうとするが…

「ん〜…なんだ、何がどうなって…」

わざわざケースの底に隠していた立体パズル…重要な手がかりがあるに違いないが、上手く解けない。

「こうじゃないのか？」

「それだと元に戻って…」

「それじゃあここを動かす！」

「いやあ、無理でしょ…」

緑谷君が動かし、それを焦凍君、立希、私が指示するけど、一向に解けない。その様子をイライラしながら爆豪が見ていた。

「貸せ！こんなの俺の爆破でブツ壊してやんよ！」

「ダメだよかつちゃん！」

強引に開けようとする爆豪君に緑谷君が阻止する。そんな中、少年…ロデイが立体パズルを見て、ハツとした。

「ちよつと貸してくれ！」

そう言い、ロデイが立体パズルを緑谷君から渡され、弄ると、スイと動かす。慣れた手つきに私達は驚く。

「やった事あるの？」

「似たようなパズルを、ガキの頃やった事がある…」

そしてあつという間に解き明かし、最後にカチつという音が鳴る。

「解けた！」

「よし、これで…」

ロデイが立体パズルを開く。すると中から何か小さい物が落ちる。それを緑谷君が受け止める。

「これは…」

入っていたのは、何かの鍵のような物と、SDカードだった。

side 三人称

ヒューマライズ本拠地の神殿。フレクトは警察長官から報告を受けていた

『目標が、隣国のクレイドへ…私の権限でこれ状の搜索…』

「かまわん」

フレクトは無表情に言う

「クレイドならば、計画遂行中にここへ来ることもできまい。計画を実行に移す時は来た」

フレクトは通信を切り、神殿に控えていた大勢の団員達の方を向き、手に持つ機械を掲げる。

『人類の救済を！人類の救済を！人類の救済を！』

団員達はそれを見て、呼応する。その声を聞きながら、フレクトが神妙に宣言する。

「人類の…救済を……！」

再び機械が作動し、神殿内のモニターが世界各地を映しだす。

「緊急事態！」

ヒーローチーム司令部。オペレーターの一人がコンソールを操作しながら叫ぶ。

「ヒューマライズが、インターネットを通じて放送を始めました！」

直ぐにメインモニターに映す。そこにはヒューマライズのシンボルマークが表れ、フレクトの音声流れる。

『我々、ヒューマライズは決起する。』

その放送は全世界へと放送される。

『“個性”という名の病に冒された者たちから、“無個性”と呼ばれる『純粋なる人類』を守るために、我々が開発した『人類救済装置』は世界26ヶ国に配置され、既に動き始めた。』

その言葉に世界各地のヒーロー達が息をのむ。

『人類救済までのタイムリミットは今から2時間。だが、我々も無慈悲ではない。この計画を阻止したいと願うなら『人類救済装置』を設置した地域をお教えしよう。我々と異なる考え方をしようとも、チャンスは平等にあるべきだ…』

ヒーローチーム司令部内のモニターに爆弾がある箇所が表示される世界地図が映し出される。

「全てヒューマライズの支部がある区域と一致しています!」

「また罠の可能性が…」

危惧するオペレーター達。同じ事を考えていたオールマイトは、決意を固めた表示で口を開いた。

「…たとえば、そうだとしても…」

助けを求める人がいる限り、動かないという選択肢はない。ヒーローの気持ちは誰よりもヒーローが分かっている。司令部長官も同意し、直ぐに支持を飛ばす

「待機中のヒーローチームに出動要請を!!」

モニターに次々と緊張アラームが表示される。映像には先のヒューマライズの放送を見た人々がパニックになり、逃げ惑う。それが原因により、事故や渋滞が起こっていた。

そんな人々を救う為、人類救済装置―トリガー・ボムを搜索・回収するべくヒーロー達が動き出す。

side 立香

私達はクレイド国のホテルにいた。そして立体パズルの中に入っていたSDカードをパソコンに差し込み、調べると、大量のファイルが表示された。

「うわーすごい数…どこから調べれば…」どけ!タイムスタンプの最新…この動画ファイルだ。」

困惑する緑谷君を押しつけ、爆豪君がサツと操作し、動画ファイルを再生する。それは音声データだった。

『…私の名は『アラン・ケイ』。ヒューマライズに拉致された科学者の一人だ。』

「拉致…?」

予想外の言葉に、私達は驚く。そのままアランの声が続く

『ヒューマライズは、多くの科学者たちの家族を人質に取り、個性因子誘発爆弾の製造を強要した…それを使った最初の無差別テロは、優秀

なヒーロー達をヒューマライズの支部がある場所に集めるための布石…そのうえで、個性因子誘発爆弾を使い、ヒーロー達を根絶やしにしようと考えている…』

その言葉に息を呑む。私達、ヒーロー達の行動は全て、フレクトの手のひらの上だった。

『私のこの声が、ヒーローに届くことを望む。そして、私と同じく拉致された『エディ・ソウル』が命にかえて作ってくれた爆弾の解除キーで…どうか世界を救ってほしい…』

そこで音声途切れた。机に置いていた解除キーを緑谷君が手に取る。

「…こんな事になるなんて…」

立希が緑谷君の隣で呟く。あまり非現実的で、無謀な計画。個性社会を根本から崩し、リセットしようしているなんて…

「キヤアアア!!!」

『!』

その時、女性の悲鳴が上がった。私達は振り返ると、大勢の人々が逃げていく。原因はテレビに映っている緊急ニュースだった。

『繰り返しお伝えします。人類救済を標榜する団体、ヒューマライズが世界各地に爆弾を設置。二時間後…リアルタイムで一時間五二分後、爆発するという犯行予告を出しました。』

「っ」

私達は目を見開く。まさに先の動画ファイルで言っていた事が既に始まっていた。焦りが全身に駆け巡る。時間が無いこの時に、事実を知っているのは私達この6人だけなのに…

『ヒューマライズが公表した爆弾設置区域はパニックが発生しており、ヒーロー達が避難誘導及び爆弾回収作業にあたっております。爆弾の該当地域は次の通りです。』

切り替わった画面が、該当地域を表示した世界地図になる。

「ウソだろ…オセオンの被害地域…俺ん家も入ってやがる…!!!」

「そんな…!!!」

「っ…!!!」

それを見たロデイが愕然する。緑谷君と立希が苦い表情をする。すると、焦凍君がパソコンを動かし始める。

「統括本部にこの情報を送って、ヒーローチームの撤収を―「するわけねーだろ」!」

操作する焦凍君に、わずかに悔しそうに眉を寄せた爆豪君が言う。私も同意する。

「…ヒーローはトリガー・ボムを探し続ける…爆弾の標的が私達だったとしても…毘でも…一般人を置いて逃げる事は絶対しないよ…だって、私達はヒーローなんだから…:…っ」

「…そこまで考えての作戦なんだ…」

怒りが湧き上がってるのか、拳を握る緑谷君…それは私達もだ。ヒーローは常に命懸けで命を救うために動いている。いくら対価がかかろうと生半可な覚悟で出来るものじゃない…

「(自分の理想を現実にするために、そんな誰かを救いたいという想いを利用するなんて…フレクト・ターソン…絶対許せない…っ!)…なら、その解除キーで止めるしかないよね。」

「ああ。立希の言う通りだ。トリガー・ボムを俺達で止めるまでだ。」

私と焦凍君は言う。その言葉に緑谷君、爆豪君、立希がハツとする。「でも、どうやって…」

緑谷君は改めて解除キーを見る。重要なものと分かったが、使い方が分からない。

「さっきのSDカードにヒントがあるんじゃない!?!」

「どけー!こん中にあるに決まってるだろーが!鍵作っておいてドアの位置を知らせないアホがいるか!」

立希が言い、再び爆豪君がパソコンを操作し始める。テレビに映っているのと同じ、爆弾該当地区を表示した地図を出し、見比べる。

「犯行声明にないポイント…:…ここがクソどもの本拠地!!」

二つの世界地図を重ね映す。すると、1ヶ所だけテレビ画面の地図にないポイントがあった。

「オセオン国のある山岳地帯だ!」

立希が言う。その地域を拡大する。目的地が分かった。更にトリ

ガー・ボムの制御システムを調べ、ヒューマライズの本拠地らしき建物のデータを出す。結果、解除キーを使う機械は、その最下層にあると分かった。

「…場所が分かったが、ここから直線距離で400キロ以上ある…」

焦凍君の言葉に、私達は考える。場所が分かったが、そこに行く方法が無い。

「…自分と姉が皆を担いで飛ぶ?」

「でき…無くはない。けど、目的地まで飛べるかどうか…」

立希が提案し、私は思考するが、この方法はダメだ。多分、魔力が足りなくて途中で不時着してしまう…仮に行けたとしても…動けなくなつて足手まといになってしまう…

「間に合う」

そんな時、ロデイが言った。隣のパソコンを操作し、この街の地図を出し、指さす。

「俺に考えがある。」

そう私達に言う彼の顔には、固い決意が表れていた。彼が見つけたのは、ここから少し離れた飛行場だった。

side 三人称

ロデイが見つけた飛行場。そこから中型のプロペラ機を無断で借り、ヒューマライズの本拠地に向かっていた。運転しているのはロデイ。なんでもパイロットになりたいと言った彼に、父親が買ってくれた飛行機操縦の本を暗記するほど読み返していたらしい。そんな後ろで、緑谷達は戦闘衣装に着替えていた。気が引き締まるヒーローの正装だ。

「(必ず、トリガー・ボムを止める。)」

轟は決意し

「(イカれたクソどもをブツ潰す!)」

爆豪は定め、

「(絶対に守るんだ。ヒーロー達を…世界を!)」

緑谷は覚悟する。

「(また：世界を救うんだ：！)」

「(そう簡単に世界を壊させない：)」

立希と立香も、気を引き締める。

この5人に、世界の命運が手にかかっている。

第12話

side 立希

「近いぞー!」

降り出した雨の中、プロペラ機はヒューマライズの本拠地付近まで近づいていた。携帯に表示されている施設の位置を確認しながらロデイが叫ぶ。

「あそこが…」

「ヒューマライズの本拠地…」

岩肌を抜けると、遠くに本拠地らしき建物が見えた。大きな柱に支えられた屋根に、奥が入口になっている。重要な施設は地下に隠されているような建物だった。

「着陸するからつかまってる。ロデイはそのまま引き返して」何でだよ!?!」

着陸体勢に入ろうと操縦するロデイに、緑谷君は言う。そのまま自分達はハッチを開ける

「パンピーは大人しくしてろ。」

「一応、貴方は一般人なんだから。ここまで送ってくれてありがとう。」

爆豪君と姉がそう言い、

「ここから先は…」

『ヒーローの仕事だ!』

自分達はプロペラ機からダイブする。目指すは眼下にあるヒューマライズの本拠地。そして一刻でも早く、トリガー・ボムの爆破を阻止し、世界を守る…!

side 三人称

「オセオン派遣チームのヒーロー、ショートからデータが送られてきました!トリガー・ボムの解除キーを入手したとのこと!!」

ヒーローチームの司令部で、オペレーターから轟のメールの報告を聞いた長官達が驚く。

「現在地は?」

「トリガー・ボムのメインシステムがあるヒューマライズの隠し施設へ：オセオン派遣チーム、イギリス派遣チームが向かっているようです！」

オペレーターはヒューマライズの本拠地がある地点と、本拠地へ向かっているメンバーを映す。

「(藤丸少年：藤丸少女：轟少年：爆豪少年……緑谷少年……!)」

この情報はすぐさま世界中のヒーローチームへと伝達される。ヒーロー達はそれぞれトリガー・ボムを見つける。がしかし、そのトリガー・ボムの周りには「個性」を所持したヒューマライズの団員達が待ち構えていた。

「各チーム、トリガー・ボムを発見していますが、ヒューマライズの抵抗を受けて回収できません！」

モニターに各地で苦戦しているヒーローチームが映しだされていた。更に、タイムリミットまで迫ってくる。

「リミットまで三十分を切りました!!」

「っ…」

固唾を飲んで見守っているオールマイト。左脇腹の古傷を押さえる。実践的な力になれない事が、一緒に戦えない事が歯がゆくして仕方なかった。

「(ヒーロー達も必死に闘っている…頼むぞ……未来のヒーロー達よ!)」

それでも、ヒーロー達の力を信じて託す。そして、世界の命運を握る。緑谷達5人に希望を…

一方、ヒューマライズの本拠地では、緑谷達5人が近づいている事は知っていた。神殿のモニターに、プロペラ機が映しだされている。招かれざる客の登場に団員が騒めくなか、フレクトは背後に控えていた団員に告げる。

「重病者どもを粛清せよ」

団員―敵達は動き出す。

眼下にあるヒューマライズの本拠地に私達はダイブすると、私達に気付いた団員達がライフルで撃つて来た

『投影：エミヤ』！『燈天覆う七つの円環』！」

無数の銃弾を、立希が私達を守ってくれる。地上に近づくと同時に、私達は空中で散開。緑谷君は『エアフォース』、焦凍君は『炎』、爆豪君は『爆破』、そして私は『ブリュンヒルデ』の飛翔で対応する。

「ザコどもは引っ込んでろー！」

「どいてろっ！」

『うわあああ!!』

爆豪君は降下しながら団員達に向けてマシンガンのように爆破を放ち、そして先に着地した立希が地上から弓で一度に矢を大量に射出し、団員達を蹴散らしていく。

「！危ない!!」

「っ！」

その時、大きな『砲弾』が爆豪君めがけて撃ち込まれた。私は直ぐに持っていた大槍を投げ、その砲弾を空中で爆破し、直撃を回避させる。下を見れば、腕を『大砲』にした敵がいた

「団員の中にも『個性』持ちが…!？」

「傭兵だけじゃねーのか…！」

着地した焦凍君が『炎』を放ち、その大砲の敵を倒す。しかし今度は『超音波』を放つ敵が爆豪君を襲う。

「っ!!」

「させない!!」

超音波で耳を塞ぐ爆豪君を銃弾が襲うが、直ぐにそれを私が爆豪君の前に移動し、大槍を回転させ防ぎ、その隙に緑谷君が飛び降りながら超音波の敵とマシンガンを撃つ団員を『エアフォース』で吹き飛ばす。

「かっちゃん！」

「立希！」

「わーっでああ!!」

「了解！『投影：茶々』！それでもって今必殺の！超絶茶々爆炎斬！」

緑谷君が爆豪君に、私は立希を呼ぶと同時に、爆豪君は強烈は『爆破』を撃ち込み、立希は『茶々』に憑依を変え、手にした太刀で爆破する斬撃を放ち、団体達を無力化。前進し建物に近づく。

「行くぞー！」

「うん！『降霊：マリー・アントワネット』!!」

その間に焦凍君は『氷結』で、私は『マリー・アントワネット』に憑依を変え、『ガラスの馬』を呼び出し騎乗。建物前の屋根の中に行く。そこにも大勢の団員達がいて、マシンガンと“個性”で抵抗してくる。

「邪魔をするな!!」

「いっけえ!!」

それでも、私達は止まらない。私はガラスの馬で団体達を吹き飛ばし、焦凍君は細かな『氷結』で氷柱を乱れ撃ちし、二人で薙ぎ払う。

「一気に行くー！」

緑谷君も飛び込んで、空中から衝撃波で団員達を吹き飛ばす。そして着地寸前に焦凍君が緑谷君を受け止め、氷の上に乗せて私達は移動する。

「撃てー！これ以上中に入らせるなっ!!」

建物の入り口にはまだ団員達がいた。ライフルを撃ち込んでくる。

「せいやああああ!!」

「くたばれえ!!」

そんな団員達を、爆豪君と立希の二人の『爆破』で吹き飛ばす。

「さっすがバーサーカー…姉！二人のフォローお願い！」任された！

「爆豪！ここは任せた！指図すんじゃねえ!!」

「っ…行くこう！二人とも!!」

私達はここを爆豪君と立希に任せ、そのまま建物内へと突入している。後ろを見れば攻撃してくる団員達に特大の『爆破』を放っている二人が見えた…

「ふうー…少しは収まったかな？」

「へっ、ザコばっかかよー！」

団員達を爆破で蹴散らした自分と爆豪君。その時だった。

「！」

細かな刃が蛇のように連なった、鞭のようにしなる二本の剣が襲い掛かって来た。すんでで爆豪君は『爆破』で回避し、自分は太刀で受け流し、防御する。

「キヒヒヒヒー！」

笑い声が聞こえた方を見ると、その剣を自在に自分の腕に戻す敵がいた。腕そのものが変化する剣だった。

「…どうやら、他の団員達とは違うっぽいね…そもそも『個性』持ちだし…！」

他の団員とは違う雰囲気敵に、自分は息を呑む。対して爆豪君は少しは手応えのある相手かと思いついて笑っていた。

「なんでクソ敵がヒューマライズに加担してんだ？あ？」

そう挑発するように言うと、敵は蛇のように裂けた口を開く。

「我々はヒューマライズに選ばれし者…！」

「！」

我々。その言葉に引つかかった時、敵の後ろからそっくりのもう一人の敵が現れる。双子だった。そして同じように、腕を鞭のようになる剣に変えた。

「彼らに協力し、我々は新たな世界を生きる…！」

「双子だから同じ『個性』…自分と姉みたいだ…チツ、自分だけ助かろうって腹か？さもしいんだよ！このクソ敵が！」爆豪君！いきなり近づくのは危ない！！」

自分は爆豪君を止めようと声を張るが、止まらない。

「死ねえええ！！」

『爆破』で一気に距離をつめ、爆破をマシンガンのようにお見舞いする。

「キヒヒヒヒ！！」

しかし、敵二人は素早く左右に分かれ、不気味な笑みを浮かべながら

ら華麗に回避した。

「速い！」

「っ——」

その素早さに、眉をひそめながらも爆豪君は間髪入れずに攻撃を繰り出す。

「キヒー！」

しかし爆破の炎を蛇のような動きで剣が切り裂き、更に爆豪君を襲う。咄嗟に腕の籠手で受け止めるが、別方向からもう一人の敵が襲い掛かる。

「させるかああああ!!」

「藤丸……！」

目を見開く爆豪君を背に、自分は襲い掛かってくる剣の前に立ちはだかる。手に煉獄を溜め、撃ち放ち、爆豪君を守る。

「キヤハハハ！」

刹那、敵が距離を詰めて来た。

「ヤバ——「にしてみんだ死ぬ気か!!」 うぐお!?!」

斬られると思い、防御しようとした時、不意に首根っこをひっぱられ後退。敵の攻撃を回避出来た。どうやら爆豪君に助けられたようだ。自分達は一旦、敵二人と距離を置く。

「「キヤハハハハ!!」」

敵二人は狂気的な笑みで自分と爆豪君を見てくる。

「んの野郎ども……おい、藤丸……癩だが手えかせ……！」

「いいけど……ちゃんと息合わせれるの?」

バチバチと掌で小さい爆破を起こし、闘争心をむき出す爆豪君。自分はその見ながら訊く。

「テメーが俺に合わせんだよ……！」

「だと思った……何とかするけどさ……『投影：ジャンヌ・ダルク』！」
当然だと体現する爆豪君。自分はそんな彼をサポートするように、『ジャンヌ・ダルク』へと憑依を変え、旗を持ち構える。

「あいつら、勝手にしやがって…！」

その頃、ロデイは本拠地から少し離れた場所に、木々をなぎ倒しながらもなんとかプロペラ機を着地させていた。すぐにドアから出て、緑谷達がいるであろう本拠地に向かおうとする。ヒーローじゃない自分だが、それでもできる事はあるはずだと考える。なにより、本拠地にいかなければならない理由があった。

「！」

その時、ロデイの前に人影が立ちはだかる。

「ロデイ・ソウル君…だね？」

「!?」

いつのまにか数人の男がやってきていた。

第13話

side 立香

「この突き当りを右だよ！」

「よし！」

「わかった！」

本拠地に入った私達は、襲い掛かってくる団員達を蹴散らしながら、頭の中の地図を頼りに建物内を進んでいく。

「止まれえ!!!」

団員達はあとからあとから湧いて、マシンガンを撃ち込んでくる。

「邪魔！」

一刻も惜しい。私はガラスの馬で突撃し、団員達を吹き飛ばし、壁に叩きつける。更に奥へ行こうとした時、前方の壁の一部がわずかに浮き上がった。

「!!!」

刹那、そこからレーザーが発車される。

「ぐっ！」

「ちい!!」

「緑谷君！焦凍君!!このっ！」

咄嗟に私は馬を跳躍させ、回避するが、『氷結』が粉碎され、移動していた緑谷君と焦凍君が落下する。再度レーザーが撃たれる前に、私は掌に魔力を溜め、弾を放ち、レーザー機器を破壊する。他にもレーザー機器があつたが、それは落下して直ぐに起き上がった焦凍君が指先から『炎』を放ち、灼熱のレーザーで焼き切る。

「先に行け！時間がねえ！」

「轟君!?」解除キー持つてんの緑谷君なんだから!!行って！藤丸さん……！ありがとう!!」

時間がもうない。3人立て直すより、解除キーを持つている緑谷君を先に行かせ、私達で足止めするほうが最善策。既に緑谷君は『フルカウル』で駆けだしている。

「一気に決める！」

「うん！」

現れた大勢の団員達に私達は向き合う。私は魔力弾を展開し、団員達に撃ち放つ。直撃もあるし、地面に着弾させ、団員達の動きを止める。その隙に隣で構えていた焦凍君が周囲を瞬く間に『氷結』する。

『膨冷熱波』！」

そして圧縮した『炎』を撃ち放つ。急激な温度変化で膨張した空気がとてつもない爆発を巻き起こす。

『うああああああ!!』

多くの団員達が吹き飛ばされる。壁にあるレーザー機器もその爆発で破壊される。

「やったね。」

「ふうー…ああ。先を急ぐー」GRUUUA!」!!」

突然、舞う煙の中から常軌を逸した敵が現れる。ねじれた水流のような角と指先を持った巨体な姿だった。咆哮を上げながら私達に向かってくる

『降霊：アストライヤ』!!」

「っ!!」

私は『アストライヤ』に憑依を変え『宝石魔術』を、焦凍君は『炎』を敵に向かって放つ。

「AAAAAAAAA!!!」

「何!?!」

「嘘…!」

しかし、その敵は私達の攻撃など目に入っていないかのように正面から飛び込み、襲い掛かって来た。

「効いてない…!?!」「下がれ!立香!」焦凍君!」

焦凍君の声で私達は後退。その時焦凍君が『氷壁』を展開し、ガードする。

「AAAAAAAAA!!!」

しかし、それは敵の角が触手のように動き暴れ、直ぐに破壊されてしまう

「自我が無いみたい…まるで…っ」

「トリガーをキメてんのか…!」

トリガー・ボムを使って自身を狂暴化していた。もう人の言葉も発せてない敵に、私達は顔を歪める。

side 立希

「はあ!!」

「うぜえんだよ!!」

本拠地の入り口。そこで自分と爆豪君で双子の敵と対峙する。何とか自分は旗を振るいまくり剣を防ぎ、隙をつけては、爆豪君が圧縮した『爆破』を撃ち放つ。

「キヤハハハハ!!」

しかしそれを双子の敵は乱舞する剣で切り裂く。

「(爆発そのもの切り裂くとかどれだけ鋭いんだ!!)っ!!」

「チい!!」

鞭のようにしなる剣が絶え間なく襲い掛かってくる。何度も旗で防ぎ、致命傷を避けているが、少しずつ肌や服に掠り、切り傷が増えてくる。爆豪君も同様だった。このままだと防戦一方になってしま
う…!!

「キヤハハハハハハハ!!」

「何とかしないと…「余裕ぶっこいてんじゃねえぞ!!」!!」

自分達の歪む顔をみておかしそうに笑った双子の敵に、プライドの高い爆豪君の顔が怒りにそまる。激高し、一気に上昇。自分はそれを見て、直ぐに爆豪君のフォローに入る。

「!!」

双子の一人が爆豪君を追い、剣をせよせ上昇。もう一人は自分に向けて剣をせよせ攻撃してくる。

「死ねええええ!!」

空中で縦横無尽な爆破と剣の乱打戦。対して自分は斬撃の嵐を掻い潜るよう、駆け巡る

「っ…っ…っ…っだああ!!」

「!」

敵の剣が止まると同時、しなる部分を踏み、跳び箱のジャンプ台の様に跳躍。そのまま一気に爆豪君の元へ行き、旗を振るう。

「っー！」

自分が旗を振るった所——そこは爆豪君の死角から襲い掛かって来ていた敵の剣があった。地上で自分と対峙していた方の剣だ。敵の狙いが爆豪君だった事に自分はいち早く気づき、何とか防ぐ。

「なるっ!!」

「切り替え（スイッチ）!!」

自分は爆豪君から『ある物』を貰い、そのまま本拠地を支えている柱の方に『爆破式カタパルト』で投げられる。旗の槍先を柱に突き刺し、自分は壁の上に立つ。

「チヨコマカウゼーんだよ!!」

爆豪君が双子の敵に『爆速ターボ』で一気に下降しながら『徹甲弾』を放つ。爆豪君がひきつけているその間に自分は準備する。

「よしーこれで——ぐああああ!!」爆豪君!!」

準備が完了した時、爆豪君の悲痛な声が聞こえた。そこでは双子の敵が爆豪君の背後を剣で斬り刻んでいた。

「キヤハハハハハハハハ!!」

致命傷を与えたと笑う双子の敵。そして今度は自分を標的に変え、一気に上昇してきた。

「っ…来い!!」

「キヤハハ!!」

自分は柱に突き刺していた旗を抜き、下へと一気に柱の上を駆ける。そして上昇してきた双子の敵と対峙する。自分を挟み、剣をしならせ攻撃してくる。さつきより激しい攻撃が襲いかかってくる——

「—主よ、力をお貸しください…!」

「っ!?!」

—瞬間、自分はジャンヌのスキルを発動させる。双子のうち、片方の敵の動きを止める。そして止まって伸びた腕の部分を掴み、勢いよくもう一人の敵にぶつける。

「ギイツ!?!」

完全に予期せぬ事だったのか、そのまま双子の敵は勢いよく柱にぶつかる。自分はまだ動けない敵の腕を掴んでおり、そのまま柱に雁字搦めに括り付ける。

「今だあ!!」

自分は名いっばい声を出し、後方に跳躍。雨が降る外で、この声に反応する人物は：一人いる。

「オセーんだよ!!」

爆豪君だ。致命傷を受けたがまだ戦闘不能じゃない。そのまま爆豪君はニトロのような汗を溜めこんだ籠手で柱に向けて撃ち放つ。

「!!」

最大火力の爆破が柱へ。上部の爆発でヒビが走り、次々と爆発が連鎖していく。柱には空中で爆豪君に渡され、自分が埋め込めた『手榴弾』が次々と爆発が連鎖していく。そのまま瓦礫となった柱が双子の敵に降り注ぎ、あっという間に瓦礫の山に埋められていった。

「ザコにはわかんねえよなあ：戦いながら手榴弾仕込んでたなんてよお…」

「激高した時はどうなるかと思っただけど：上手く行ってよかった…」

爆豪君が激高し、上昇する際、自分に『サイン』を送っていた。自身の腰にしていた『手榴弾』に触れ、『柱』を見ていた。

「：で、治療するから！致命傷なんですよ!?!」

「たく：いちいちうるせえんだよ：この程度の傷で俺が倒れるとでも思っって—」

戦闘が終わったと思い、自分は爆豪君を治療しようとした時だ。突如、瓦礫の一部から土煙が上がった。

「!」

見れば、そこには瓦礫の山から飛び出したうねる剣。そして：双子の敵が現れる。

「どうやってこの瓦礫から抜け出して：もうそんな力は残ってるわけが…」

「カカカカカカ!!」

自分が疑問を持った時、双子の敵の体が不自然に波打った。刹那、

体からまるで噴き上がるようにそれぞれ6本の剣が生えだす。声も顔もさつきとは不気味に変化していた。

「本物のイカレになりやがったか……!」

「まさか……!」

その異様な変化に、自分と爆豪君は気付く。トリガー・ボムを使つたのだと……

「っ……」

自分らは心底軽蔑するように双子の敵を睨みつける。

side 立香

「G A A A A A A A!!」

化け物染みた敵が指先を触手のように伸ばし、そしてドリルのように回転しながら私達に迫った。

「!」

私達はその触手を必死で避け続け、『宝石魔術』で爆破し防ぐ。が、攻撃が止まない。

「がつー」

「焦凍君!!」

その時、焦凍君が宙に舞う。いつの間にか移動していた敵が死角から焦凍君に殴りこんでいた。そのまま鷲掴み、通路に叩きつけた。その衝撃で床が放射状に崩れて穴が空く。

「G U G A A A A A!!」その手を放せ!!「G A!!」

その穴に焦凍君と共に敵が落下する直前。私は敵に迫り、敵の顔面を渾身の力で殴り、焦凍君を掴んでいた手を緩ませ、そのまま敵は落下する。

「っ!」

「立香!!」

落ちる寸前、私は焦凍君の手を握り、もう片方の手で崩れかけた床にしがみつく。下を見れば、大量の水―地下水脈が流れていた。

「立香、無茶し過ぎだ……!」

「こんなの、どうってことないよ……!」

敵は地下水脈の激しい水流で流されただろう…それよりも早く緑谷君を追いかけないと…焦凍君を掴んでいたほうの腕を持ち上げ、焦凍君を崩れかけた床に掴ませようとした時だった。

「なっ…！」

はるか下の川から、不自然な波が動き上がって来た。水流が生き物のように動き、瞬く間に私達を飲み込んできた。

「息が…っ）」

川の水は激しくうねる。気付けば掴んでいた焦凍君の腕を放していた。泳ぐにも水流が激しく、身動きが取れない…っ

「G A A A A A A A A A!!!」

「！」

水の中、どうか目を開くと、そこにはさつき落下した敵がいた。よく見れば指先と角が水流とつながり、回転させ、自在に動かしていた。

「まさか…あれが…敵の『個性』…っ）」

水流とつながった触手は、私…っそして焦凍君の体に巻き付き、拘束する。何とか逃れようと動きたい…けど予想以上に敵の『個性』が私達の体を蝕んでいく…っ

「(このままじゃ…っヤバイ…っ)」

水中で、私達は顔を歪める中…敵は迫って来る…

side 三人称

「(ここが…一番奥の部屋…！)」

緑谷は一人洞窟の中を進み、奥の部屋へと入る。そこはまるで神殿だった。見渡すと、奥に通じる扉を見つける。あの先にトリガー・ボムの制御システムがあると思われ、駆け出そうとした瞬間、柱からレーザー機器がせり出し、緑谷の行く手を阻む。

「失せよ…お前のような重病者が立ち入っていい場所ではない。」

「(団体指導者…フレクト・ターン！)」

そして、神殿の壇上にフレクトが現れる。緑谷は身構える。

「(ここは人類を救済する神聖なる場所だ。)」

フレクトは蔑みの視線を緑谷に送りながら言う。緑谷はフレクトを睨み、叫ぶ

「何が人類の救済だ！『個性終末論』は科学的に実証されていない！ただの俗説じゃないか！そんなあやふやな主張を鵜呑みにして、なぜこんな恐ろしいことをする!?!」

「純粹なる人々は“個性”という病魔、その脅威にさらされている。それは時と共に混ざり、深化し、コントロールを失って人類を滅亡させる。」

「そんなことはない!! “個性”も “無個性”も病気でもなんでもない！皆生きてる。同じ人間だ!!」

壇上から降りてくるフレクトの身勝手な反論に、緑谷は否定する。フレクトは哀れみ、あきれたように顔が歪む。

「…重病者は度し難い…やはり私がやらねばならぬ」
「絶対にトリガー・ボムは止める!!」

緑谷は心からの叫びをぶつけ、身構えもしないフレクトに向かい、拳を放った。

第14話

side 立希

「はあー…はあー…」「カカカカカカ!!」「っ!!」

「ちい…っ!」

激しい攻防。何度も襲い掛かってくる12本のしなる剣。トリガーにより大きく俊敏さを増し、より強力になった剣が一太刀で太い建物の柱を両断するほどの威力で縦横無尽に自分と爆豪君を追い詰める。何度も双子の敵に攻撃を必死で間髪入れずに放つが、凶悪に舞い踊る剣にことごとく防がれてしまう。

「ガッ!!」

「っ!!」

今は双子の敵を分断し、何とか1対1で戦闘してるが、だんだんこっちの戦闘が綻び始まっていた。遠くで爆豪君の頬が剣で切り裂かれ、鮮血が吹き出す。それを見てしまった自分は一目散に爆豪君の右側に移動する。

「クソツ…右側の反応が…」「づう!!」藤丸…!!」

爆豪君の右側は死角となり、その隙を狙われた。けどそれは自分が必死に庇い、何とか爆豪君を守り抜けた…が、代わりに自分が攻撃を受けてしまう。左肩から右脇腹にかけて切りつられた。

「デメエー!」「大…丈夫っ!!咄嗟に旗で守ったから…っ!」

「カカカカカカ!!」

致命傷は避けたがその直後、双子の敵が不規則な動きで一気に迫って来た。

「―爆豪君…最後は頼むよ…!!」

「!」

戦闘衣装に備わっている『浄化回復』と『予測回避』を発動。そのまま双子の敵に向かった自分は走り出す。今ここで爆豪君が戦闘不能にでもなったら、勝てる敵じゃない。なら数秒でも時間を稼ぎ、爆豪君を休ませる。その後は…―

「カカカカカカカカカカカカ!!」

「!」

—思考してる場合じゃない。嵐のように激しく乱舞する剣が自分に襲い掛かって来た。それをすべて自分はギリギリで回避し、防ぐ。旗で一本の剣を弾いた時だった。

「マズー」

瞬く間に数本の剣が襲い掛かって来た。スキルの効果が切れ、防御暇もなく、剣が突き刺さる…

「—何勝手に犠牲になろうとしてんだアア?!」

「爆豪…君…!?!」

爆豪君の体のだ。まるで自分を庇ったかのように、剣が爆豪君の体に深く抉る。地面に血が滴る。

「俺アナあ…勝手に動いて、勝手に犠牲になろうとしてる奴があ…嫌えなんだよ!!この俺サマがくたばるわけねえだろうがあああ!!」

爆豪君は体に剣を突き刺したまま、その場で『爆破』を推進力にして回転する。数本の剣が集まり束のようになった。

「ぐうおおおお!!」

「!?!」

爆豪君は束になった剣を掴むと、血が噴き出すのもかまわず渾身の力で振り回す。遠心力に引っ張られた双子の敵は剣の腕を柱に巻き付ける。

「やっど…大人しくなりやがった…!」

「まさか…!」

そう言い、爆豪君は体から剣を抜き、腕に装着していた籠手を発射する。

「シヤア!!」

腕を拘束されている双子の敵は舌を剣に変化させ迎え撃つ。籠手は簡単に斬れ火花が散る。刹那、中にはたつぷり溜めていた二ト口のような物質に引火し爆発を双子の敵に喰らわせる。

「今度こそブチこんだらああ!!」

その間に、爆豪君は再び『爆破』で回転し、今度は巨大な竜巻を作りながら上昇する。そしてそのまま竜巻事雖もみ回転しながら、柱に

めりこんだ双子の敵に突っ込んでいく。

『榴弾砲着弾』オオオ!!』

「ヤバ……イイ!？」

爆豪君の最大火力の大爆発が双子の敵を飲み込む。着弾する直前、自分はその場から離れるが、爆風で本拠地内に入るように吹き飛ばされる…

side 三人称

周囲の柱ごと、一瞬にして破壊した爆豪。双子の敵―エナ&ディオは瓦礫のなかでただ呻くだけの力しか残されていない。

「けっ……この……タコども……」

よろけながら着地した爆豪。苦戦させられたエナ&ディオに向け、サムズダウンをしてから、眠るように倒れる。

「クソが……後は……藤……丸……テメーが……何とか……し……や………が………れ………」

そのまま爆豪はゆつくりと気絶した。

side 立香

「(ヤバ……イ……意識……が……つ……)」

水中で私はもがく。けど敵の強い力で掴まれ、？がす事が出来ない。そろそろ酸欠で意識が消えかけてくる…

「(………あ……れ……は……)」

そんな時、水流の変化と微かな光を感じた。何とか前方を見ると、流れの奥が明るくなっているのが見えた。

「(………滝……!……)」

何とか遠のくなりかけた意識を戻す。

「(………つ………立香……!……)」

「(焦凍……君……!……)」

焦凍君も、どうやら私と同じ考えだ。千載一遇のチャンス!

「(『降霊……ペンテシレイア』!……うらああああ!!)」

このチャンスを逃さない為、私は動く。ペンテシレイアと憑依し、

そしてスキルで肉体を強化して強引に敵から逃れ、そのまま両手でモーニングスターを取り出し、敵に向けて投げる。

「G A A A A!!」

敵は水流を操り、モーニングスターをそらす。が、私は当てる為に投げたわけじゃない!!

「(捕ら…えたああ!!)」

「GU!!」

水流を読み、モーニングスターの鎖で敵の巨体を雁字搦めで拘束し、敵の背に乗る。当然、敵は逃れようと暴れ始めるが…

「(間に…合え!!)」

焦凍君がいち早く、敵を触手事『氷結』で完全凍結する。と、同時に私達は滝から放り出されるように飛び出した。氷結で水しぶきが一瞬で凍っていく

「ぶはあ!!」

水中が脱した私達は一気に酸欠だった肺に空気を送る。落下しながらも、焦凍君は『糸状の炎』で凍った敵の触手を四散させる。

「G U R A A A A A!!」うる…っさい!!」 A A A A A!!!」

しかし完全に崩しきる前に、触手を再生させながら迫って来た。私はまだ拘束して持っている鎖を両手で引き、更に束縛を強める。

「焦凍君!」

「っ…ああ!」

しつこい敵に私は顔をしかめる。そして動きを止める為に焦凍が再び半身の温度を急低下させていく。

「緑谷の邪魔はさせねえ!!」

再度、周囲の水を凍結し、鳥籠のように氷の檻に敵を封じ込めた。

「G U A A A!!」

「うわっ!」

「ちい!」

腕と上半身を氷漬けにされた敵。けど頭の角を伸ばして回転。ドリルの様に氷を粉碎しながら私達に襲い掛かる。私は敵の背から降り、焦凍君は氷の檻を滑りながら避ける。

「G…U…A…A…」

そして遂に、敵の限界が訪れた。そしてトリガーの効果は切れたのか、意識を落とす。

「っ…あ…」

「や…ば…い…」

だけどそれは私達もだ。限界が来る。焦凍君は急激に下がる半身の熱が瞬く間に零度を下回り、冷気が一気に噴き出す。灼熱と極寒を身に纏う。私は元々枯渴気味だった魔力を大量に消費したための疲労にて、全身に魔術回路が浮かび上がる。私達は敵と共に二人は落下し始める。

「(緑谷…止める…必ず…)」

「ま…だ…『降…』」

滝壺に飲み込まれ…

side 三人称

「―愚かな」

「ぐっうう…」

フレクトと戦闘。緑谷は彼に一度も攻撃を当てる事が出来なかった。フレクトの「個性」「反射」により、緑谷の放つ攻撃は全て跳ね返されてしまい、何度も周囲の壁に激突する。

「すべてを反射する私は、自ら死を選ぶこともできない。コントロールできない「個性」は苦しみをうむだけ…。そして、人類は体も心も深化する。「個性」に押しつぶされる…!」

「っ」

フレクトは指一本動かさずに緑谷を排除にかかる。部屋の柱に備わっているレーザー砲を起動させ、緑谷に狙いを定める。

「私は私を否定する。「個性」という病を、この世から消し去る」

「!!」

放たれるレーザーを回避する緑谷だが、今度はフレクトが装着していた装置、反射鏡のようなものが周囲に展開。レーザー砲はその反射鏡に放たれ、反射。レーザーが乱舞する。

「そして純粹なる人類を滅亡から救うのだ……！」
「がっ!!」

避けきれない緑谷の体をレーザーが無残に貫いた。緑谷は力なく倒れる。溢れ出す血が床に広がっていく。

「哀れな……あと七分……」

フレクトはそう呟き、モニターを起動。トリガー・ボムが起動するまで七分を切った。後少しでフレクトが望む世界へとなる……その事に愉悦の笑みを浮かべた。

「……させ……ない……!」

緑谷は何とか体を必死に起こそうとした時だった。

「む……」

「!」

フレクトに向かって一本の剣が飛んでくる。その剣をフレクトは『反射』にて防ぐ。

「Take That, You Fiend!」

「!!」

剣が反射にて吹き飛ばされる瞬間、その剣を掴み、フレクトに再度剣で斬撃を浴びせる存在——立希が吹っ飛んで来た

「藤丸……君……!!」

「ツツツツ!!」「無駄だ」ぐう!!」

それでもフレクトには効かない。『反射』で立希は後方に吹き飛ばす。何とか剣を壁に突き刺し、激突を防ぐが、疲弊で膝を付く。

「ヒーロー……か……しかし、その傷に疲弊。来たところで何も意味が無い」

「勝手に……決めつけて……欲しくない……んだけど……!」

『モードレッド』と憑依した立希は剣を杖替わりにし、体を奮い立たせて立ち上がる。剣を構えながら緑谷の容態を見る

「(緑谷君……っ床に流れてる血の量からまだ大丈夫だろうけど……もう動けるのが自分しかない……時間ももう無い……なら……)速攻で倒す……っ!!」

立希はフレクトに向かって走り出す。

第15話

side立希

爆豪君の爆破を利用し、一気に建物内を駆け抜ける。そして視界先の奥の部屋に首謀者、そして床に伏している緑谷君が見えると同時、自分は『モードレッド』に憑依し、クラレントを投げ放った。そして斬撃も浴びせたけどまるで効果が無く、むしろ反撃された。早く制御システムに行くためには敵を倒すしか無い。！

「藤丸君：フレクトは：攻撃を跳ね返す：」

「了解っ!!」

床に伏している緑谷君に敵、フレクト・ターンの個性を覚えてもらう。

「(と言っても、もう魔力が無い：この一撃で決めるしかない：！)」

「貴様も、その少年の様に無様に倒れてもらおう。」

フレクトがそう言うと同時に、部屋の周囲にある柱からレーザーが射出された。

「っ！邪魔だあ!!」

自分は持っていたクラレントから広範囲に赤雷を撃ち放ち防御。回避してる暇は無い！

「ほう…」

「(敵は自分らが満身創痍だと思って油断している：そこを突く!!)くたばり：やがれえ!!」

踏み込み、加速。そして肩から腕にかけて魔力集中。モードレッドの鎧を部位装備。クラレントに赤雷を纏わせフレクトにめがけて薙ぎ払う。

「愚かな—」

身構えもしないフレクトに直撃。確実に捕らえる！

「まだ：まだあああああああ!!」

「ここで終われない！更に自分は『幻想強化』を発動！クラレントの威力を底上げ。この一撃に：全てを!!」

「……！」

「藤丸君…その体で戦うのは…」

「ゲホッ…何言ってるの…それは…緑谷君だって…そうでしょ…それに…今ここで倒れちゃ…人類を…皆を救けられないでしょ…!」
「…そう…だけど…! (考えろ…考えろ…!)」

二人はもはや気力だけで動いていた。想像以上にフレクトの『反射』による攻撃が効いていた。気を抜けば今にも倒れてしまいそうな体で、二人は必至に頭を回転させる。

「(どんな攻撃も…反撃に変わってしまう…!)」

「(攻撃すればするほど…自滅していく事になってしまう…!)」
迫る時間の中、解決策が見つからない。

「(考えろ…何か…方法があるはず何だ!!)」

あきらめず一歩一歩フレクトに近づく二人だが、足がもつれ、転びかける

「—」

限界を超えた緑谷と立希が意識を失いかけた時だった。その二人を支える誰かが来た。その人物は…

「もう大丈夫だ。デク、マギ」

「ロ、ロディ…!」

「どう…して…!」

ロディだった。思わぬ登場に二人は意識を取り戻す。しかしロディはどこか悟ったような、少し寂しそうな顔で笑っていたのだった…

side 立希

なんでここにロディが!?

「あ、あぶない…ここから離れて…」

「緑谷君の言う通りだよ…ここは危険…」ああ、コイツをヤツに渡したらな…!」

自分と緑谷君を床に横たえさせるロディ。そしてその手には緑谷君が持っていたはずのトリガー・ボムの解除キーを持っていた。

「ロディ…!」

「…言われたんだよ…こうすりゃ、オセオンの爆弾だけは止めてくれるってさ…」

ロデイの行動に呆然とする自分ら。ロデイはそのままフレクトの方に向かう。

「ロデイ…ダメだ…僕たちが、絶対に、止めてみせるから…う、うう…」

「そうだよ…自分達が何とかする…だから…づう…！」

何とか制しようと立ち上がろうとしたが、体に激痛が走る。横を見れば緑谷君も自分と同じように激痛を堪えていた

「そんな体で、どうやって止めるんだよ。もう時間もねえ。爆弾は爆発…ゲームオーバーだ…だから、弟と妹だけは、俺が守る。」

「ロデイ…」

ロデイの覚悟を決めた表情。

「デク、マジ、俺はしがないチンピラだ…全部守る、全部背負うなんてことはできねえ…世界と家族…どっちか取るしかねえんだよ…俺の父親も、そうだったんだろ？」

ロデイはフレクトに訊く。すると今まで黙って見ていたフレクトが満足げに微笑んでいた。

「そう、君の父親であるエディ・ソウルは、人類救済爆弾の開発に協力してくれた」

—『『エディ・ソウル』が命にかえて作ってくれた爆弾の解除キーで…どうか世界を救ってほしい…』—

「っ！やっぱり…アレは…！」

自分は理解する。ここに来る前に聞いた音声。それを聞いた時のロデイの表情…父親の真実を！

「なにが…何が協力だ…！ロデイを…ロデイの家族を人質にして言う事を聞かせただけじゃないか…!!」

自分は怒り、吠え、フレクトを睨む。ロデイも自分と同じ様に睨んでいた。

「おかげで彼は正しい選択ができた。そして、君も父親と同じだ。愛するものを守るために正しい選択をした。私も同じ。私は人類を愛

したからこそ、この計画を選択した」

フレクトは淡々と話す。己がした事に全くの罪悪感が無かった。自分は益々怒りが込み上がってくる。今すぐにも立ち上がりたかった。けど…もう体に力が…魔力が…！

「ロデイ…ダメだ…ロデイ…！ロデイ…！」

「ダメだ…それを…渡すのは…！」

諦めるわけにはいかない。自分と緑谷君で必死にロデイを呼ぶ。けど…ロデイは首を横に振る。

「諦めどきだぜ、ヒーロー…人は、こうやって裏切られていくんだ…俺もそうだ。いつものことさ。嘆くことねーだろ…」

遂に、フレクトの目の前に、ロデイは辿り着いてしまった…

side 三人称

「…ロデイ…」

もう、ダメなのか…ロデイの行動に言葉を失う緑谷と立希…その時だった。二人はふと気付く

「(Pi)」

フレクトに解除キーを渡そうとしているロデイのパーカーのフードの中に、ピノがいた。ピノは二人に向かって首を横に振っていた。「……………」

その仕草に、二人は思い出す。それは、国境に向かう途中の、夜の出来事…

—「…ねえ、ロデイ。君の“個性”はどんな“個性”なの？」—

—「…笑わねーなら…」—

—「笑わない。」—

—「絶対笑わない。」—

—「俺の“個性”は…」—

「(Pi…)」

ピノがまるで合図を送るようなポーズを取る。それを見た緑谷と立希は床についていた手足に力を込める

「では、渡してもらおうか…」

「ああ……」

そして、ロデイがフレクトの差し出した手に、解除キーを置こうとした直前だった

「……受け取りな！」

「！」

ロデイは解除キーを指で弾き、空中に跳ね上げた。思わずフレクトは見上げた瞬間

「P.i!!!」

「っ!!!」

ピノの合図に、緑谷は『フルカウル』で蹴り、立希は『投影：モードレッド』で剣をフレクトに繰り出した。

sideロデイ

俺が諦めるわけねーだろ!!

「ピノ！」

「P.i~~~~!!!」

俺が指で弾いた解除キーを空中でピノがキャッチ。そのまま俺の方に戻ってくる。

「よっしゃ！狙い通り!!」

初めからデクとマギを裏切る事なんて考えてねえ!!アイツらに捕まったのを逆手にとって虎視眈々とこの時を狙ったんだ!!俺の「個性」でこの事はデクとマギに伝わってるはずだ!!

「後はこれを奥の部屋に……!」

奥の部屋に行こうとした時だ、後ろから衝撃音。振り返ると、壁に激突するデクとマギの姿だった。

「ガッ！」

「デク！マギ！「愚か者め！」っ!!」

敵が怒りの表情で俺に攻撃してきた!

「ぐっ!!」

俺は持ち前の運動神経で何とか避ける。何としても奥にある扉に行く!!

「させない!!」

「!」

デクとマギが動いてくれた。俺を狙ってくるレーザー装置をデクは空気の弾、マギは赤い雷を放って破壊してくれる。流石ヒーロー…感謝するぜ!!

「(けど…これは…ヤバ…) つづう!!」

けど…レーザーの数が多かった。駆け上っていた階段が破壊され、それでバランスを崩された。次の瞬間、体の一部に激痛が走った。

「ロディイイイ!!」

「づう……」

どうやら…レーザーが俺を撃つたらしい…イテエ…こんなのアイツらは喰らってたのかよ…!

「小賢しい!!」

「っ!」

声が聞こえる方を見れば、敵がデクとマギに向けて両手を振り上げ、掴み、床にたたきつけていた。そのまま敵は床が割れる程の力で二人の頭を掴み押しつぶし始める。絶体絶命。ピンチだ…!俺ができる事…それは…!!

「デク! マギ!! そのクソ野郎をブツ倒せ! 爆弾は俺が止める! いけ!!」

「!」

二人が敵と対峙してる間にも、俺は体に走る激痛を堪え、何とか奥の部屋に通じる扉にたどり着いていた。俺ができる事はただ一つ…! 爆弾を止める事だ!! そして世界を…家族を守る!!

「いくんだヒーロー!! いけえええ!!」

俺は解除キーを二人に見せ、そして大声を出して奥に行く…

side 立希

ロディの「個性」で意図が分かった自分と緑谷君はフレクトを阻止する。けどレーザーで傷を負ったロディを見たことで隙を生んでしまい、フレクトの攻撃でまた倒れそうになった…でも…

「いくんだヒーロー!! いけえええ!!」
「!」

ロデイの声に、再び自分、そして緑谷君に力が湧かせる。叫びながら奥へ行くロデイを見た自分達は直ぐに立ち上がり、ロデイを追いかけてようとしたフレクトに立ち向かう。

「!」

「おお…!」

「らあ…!!」

緑谷君は拳、自分はクラレントで渾身の力を叩き込む。直ぐに敵の『反射』で吹っ飛ばされるけど、直ぐに着地し、立ち塞がる。

「行かせない! ここから先は…絶対!!」

「邪魔だ!」

再び自分達とフレクトは激突する。

side 三人称

「!!」

緑谷の拳、立希の剣が再びフレクトの拳と真っ向からぶつかる。

「っ」

直ぐにフレクトの『反射』が二人を襲う。激痛にのけぞりそうになりながらも、それでも二人は必至で立ち向かい続ける。

「っっっっおおっ!!」

立希は剣から『赤雷』を放つ。しかしそれはフレクトに向けてではなく、フレクトの周囲に放ち、大量の煙を巻き上げ、自身と緑谷の姿を隠す。

「無駄な事を…」

フレクトは煙を手で払い、周囲を見る。そして、フレクトの目の前に勢いよくクラレントが投げられる。

「!」

直ぐに『反射』で剣は弾かれ、地面に突き刺さる。が、肝心の二人の姿が見えなかった。まさか奥の部屋に行ったのかと、フレクトはロデイが走っていった方を向いた時

『スマッシュ!!』

「オラア!!」

フレクトの死角から緑谷と立希の二人の拳が放たれる。

「ぬう…小癩なっ!!」

「ぐっ!!」

それでも、フレクトに攻撃が届かない。『反射』で吹き飛ばされる。二人は空中で体勢を整え着地。と、同時に緑谷は再び『フルカウル』で速攻し、立希もまた、剣を回収してから突撃する。

「絶対…倒す!!」

血反吐を出しながら、フレクトと対峙する緑谷と立希。それは同じ空の下で戦っている仲間の為に、そして、嘘の付けない友達の為に。
「っ…っ…っ…」

壁にもたれながら、ロデイは体を引きずるように階段をゆっくり下りていく。背中の痛みを失いそうになりながら、国境を目指していた夜の事を思い出していた。

—「…こいつが、俺の『個性』だ…こいつの、『ピノ』の行動は…『俺の本心』を示す」—

—「へえ〜!」—

—「おお〜!」—

ロデイの『個性』に興味を持つ緑谷と立希。ロデイの頭に乗っていたピノは恥ずかしそうにモジモジしていた。

—「いくら俺が嘘ついてても、ピノを見られると…本音がバレちゃう…。本当、大したことない『個性』だろ…」—

すごい『個性』と比べてしまえば、なんの役にも立たない『個性』だと思おうロデイ。しかし、そんな彼に緑谷と立希は否定する。

—「そんな事ないよ、ロデイ…嘘を付けないなんて…とつても素敵
な『個性』じゃないか…」—

目を輝かして言う緑谷

—「そうだね。人つてやっぱ嘘付く生き物だし、いつも正直な事はとても大事。誇れる『個性』だよ。」—

「…だから…言いたくなかったんだよ…この…お人好しヒーロー

共……っ）」

ロディは掌の上で動けなくなっているピノを撫で、力を振り絞り、ゆっくりと世界の命運を握る地下へと降りていく。

「……この『個性』も……捨てたもんじゃねえな……」

sideロディ

デクとマジが必死に敵を止めている間に、なんとか地下の制御システム室へとたどり着く。

「っ……ぐっ……」

体に来る痛みと出血は止まらねえ……意識が朦朧としてくる……っ……それでも前に進もうと足に力を込めた時、自分の血で滑り、倒れてしまう。その拍子でピノと首にかけていたペンダントが転がる。

「う……」

落ちたペンダント。笑っている弟と妹の写真。ここで諦めてしまえば、二人を失う……！俺は最後の力を振り絞る。

「お、俺も……オヤジ……みてえに……！」

捨てられたと思った。けど違った。守ってくれていた。だから……俺も、守りたい。弟と妹が、いつまでも笑っていられるように、その全部を……

「……デクや……マジ……みてえに……！」

こんな俺を、ここまで変えるなんてな……俺は解除キーを持って、目の前のシステムに手を伸ばす……

「っ……」

けど、届かねえ……！どうしても……後……少しだったのに……っ！！

「……クソ……」

限界まで伸ばしていた震える手が、落ちる。その直ぐ傍で、ピノがゆっくり消え始めていた……

第16話

side 立希

甲高い音が部屋に鳴り響く。モニターに映っている時間を見れば、残り1分を切っていた。

「っ…」

何度もフレクトに弾かれ、壁に激突する体を無理やり起こす。

「ロデイー！」

別のモニターに、倒れているロデイーが映されていた。

「ガッ!!」

「緑谷君！」

そして、フレクトに蹴り飛ばされる緑谷君。フレクトは嫌悪の表情を浮かべてモニターのロデイーを見る。

「親子そろって無駄死にとは…クズは救いようがない」

「違う！」

自分と緑谷君で否定する。自分達は立ち上がり、フレクトを睨む。

「ロデイーは…僕の友達はクズなんかじゃない!!」

「ああ、そうだ!ロデイーは家族の為に、皆の為に戦っている!!」

再度、フレクトに向かう。緑谷君は蹴りを。自分はクラレントを繰り出す。

「まだわからぬのか」

けど、直ぐにすさまじい『反射』の衝撃に襲われる。

「ぐううう…:…諦めてたまるか…!」

「僕は…ロデイーを信じる…!」

衝撃に耐え、自分達は一步も引かない。フレクトをまっすぐ睨み、叫ぶ。

「ヒーローを信じる!!」

フレクトの顔に奇妙な波紋のようなものが現れた。

side 三人称

「ヒーローは諦めない!諦めたりするもんか!」

「自分達は勝つんだ！そして世界を救うんだ！」

世界各地でトリガー・ボムを対処すべく、全ヒーローが動いている。ヒーローであろうとする人を、仲間たちを、心の底から信じている。離れていても、一緒に戦っている。

「おおおお!!」

「っ……っ」

緑谷君と立希はフレクトに向かって駆け出す。正面から迎え撃つフレクトに緑谷の拳、立希の剣が叩き込まれる。瞬間、フレクトの反射鏡のようなものが揺らいだ。しかし直ぐに『反射』が二人を襲う。

「っぐ……!!まだあ!!」

「っ……っ!!おおお!!」

戦闘衣装が碎かれ、壊れる。気を失いそうな全身の痛みには貫かれながら、それでも緑谷と立希はいつさいの躊躇なく再び力を込める。

『SMASH!!』

「くたばりやがれ!!」

その力に、再びフレクトの顔に奇妙な波紋が現れる。さつきより顕著になったその変化を知らせるように、今まで微動だにしなかったフレクトが力に押されたように後退した。

「!？」

フレクトはその異変に感じながらも、緑谷と立希を『反射』で天井へと吹き飛ばし、激突させる。

「ぐっ……い……(さつきのフレクトが後退した……まさか……!) 緑谷……君……!」

「!……うん……!!」

立希が先のフレクトの異変に気付く。そして緑谷とアイコンタクトを取り、再びフレクトに向けて攻撃を放つ。天井の崩れ落ちてくる瓦礫とともに、緑谷は真つ逆さまにフレクトめがけて蹴りを落とし、立希は剣の切先をフレクトにめがけて突き刺すように放つ。

「っ?!ぬう……!!」

その威力にフレクトの足元が一瞬で大きく円状に割れ込み、波立つように破壊される。

「(パワーが上がっただと…? いや…違う! これは…!) まさか……」
フレクトは自身に不安定にあらわれる奇妙な波紋を感じた。フレクトは初めは緑谷と立希のパワーが上がったと考えたが、その結論に違和感を覚えた。直ぐに二人を『反射』で吹き飛ばす。フレクトの様子を見た二人は気付き、直ぐに動き出す。

「(やっぱり威力が落ちてきてる!)」

「(アイツの『反射』の『個性』には限界点があるんだ!)」

「(なら…その限界を超える!!)」

二人の思考は同じ。先に緑谷が動く。フェイクを入れながらフレクトに蹴りをお見舞いする。

「うくううううう!!」

「無駄…だ!!」

『反射』が緑谷の足を襲うが、構わず力を押し込んだ。『反射』に耐え、渾身の力を出し続ける。

「(これで…決着をつける!)」

その間に、立希は腰のポーチからサポートアイテム―『活性アンプル』を取り出し、自身の腕に思いつき刺し、薬剤投入。枯渴だった魔力が一時的に回復する。そして…

「(これ使ったらしばらく動けなくなるけど……!) さあ行こう…

『モードレッド』!!」

―行くぜ! マスター!!―

立希は『モードレッド』との憑依率を上げる。今まで剣しか装備していなかったが、今度は違う。羊を思わせる角の生えた白銀の鎧を身に纏う。兜で見えないが、髪と瞳はモードレッドと同じ色へと変貌していた。

「ぬう…!!!」

「藤丸君!!」

「うううおおおお!!!」

『反射』で弾かれる緑谷と同時に、フレクトも反対方向に弾かれていた。そこに間髪入れずに立希がフレクトに剣を叩き込む。力が、力を超える。

「っ—」

とつさに身構えたフレクト。衝撃で更に後退した。その時、フレクトの体に一闪。切り傷が入っていた。この事にフレクトは啞然とした。

「まさか…『個性』の限界…!?そ、そんなことが…」

初めての感覚に困惑するフレクト。それを見た緑谷は言う。

「お前は諦めたんだ。諦めなければ…何度もぶつかっていけば、人と触れ合えたかもしれないのに…！病気だとか言って勝手に勝手にあきらめて、絶望して、お前はぶつかるところを止めたんだ！」

「黙れ…」

フレクトの手が怒りで震える。自分を否定すると言いながら、フレクト自身は否定されることを拒んで来た。現実を押し付けてくる緑谷を、フレクトは憎悪した。

「自分達は、諦めない。諦めない言葉を、自分達は知って、そして今でも続けている…！」

「…黙れ…！…」

続けて立希も言う。そして剣を構える。

「いつも自分達に、言い聞かせている…！…」

身構える緑谷の体に『フルカウル』のプラズマが走る。フレクトが殺気を込めて緑谷と立希を睨んだ。

「黙れ…！」

「更に向こうへ！プルスウルトラアア!!」

「黙れええええ!!」

緑谷と立希の、全力を込める攻撃に、フレクトは拳で迎え撃つ。激突した三人の周囲に衝撃が広がる。

「っ!!」

弾かれるフレクト。しかし反射力が弱まっただけで、フレクト自身にはダメージは無い。依然、緑谷と立希に『反射』のダメージが蓄積し続けている。

「おとおお!!」

それでも、二人はかまわず間髪入れず攻撃を繰り返していく。

「ぬん!!」

「オラア!!」

フレクトが放つ拳を正面で剣で受け止める立希。その隙に緑谷は跳躍。

「っ!!」

「小賢しい!!」

そのまま高く上げた踵をフレクトの脳天めがけて振り落とす。だがそれは『反射』で防がれ、反射力を利用し威力を増した蹴りを喰らってしまう。

「貴様もだ!!」

「舐めんじゃねえぞー!」

フレクトは立希に狙う。立希はクラレントを手放し、拳と拳の乱打戦へと入る。拳がぶつかり合う度、部屋全体に衝撃が走る。フレクトは『反射』を発動する事に拳の威力を上げる。対する立希は『反射』されようが、正面からフレクトの拳を己の拳でぶつけ、撃ち続ける。鎧に亀裂が入ろうがかまわず、殴り続ける。

「カツハー」

しかしそれも数秒。フレクトの拳が懐に入り、奥へと吹っ飛ばすと、同時に復活した緑谷が壁を駆け、再びフレクトへ激突。

「っ!!」

二人はそのまま跳躍。地面が抉れ、柱の上部に衝突する。『反射』で反発しながら向かい合う。拮抗する強力な力と力。波動が渦を巻く。

「!」

ここでフレクトが装着していた装置が服と共に碎け、本能的に危機を察知。抵抗する緑谷の力に対する反射力を高める。ぶつかりスパークしたエネルギーが爆発し、柱を破壊。

「ツ~~~~」

落下する緑谷にフレクトは追撃しようと拳を振るう。

「させないっ!!」

「!」

その追撃を防ぐように立希が特攻。クラレントを下から上へと斬

り上げるようにフレクトに放ち、拳を弾いた。

『デトロイト・スマッシュ!!』

鬼気迫る緑谷が半身を翻し、渾身の力で拳を繰り出す。

「カッ—」

腹部に撃ち込まれた衝撃に唾然とするフレクトが吹き飛ばされ、天井へと激突する。

「ぬううううっ!!」

フレクトがめりこんだ天井から、向かってくる緑谷と立希に怒りのまま飛び出す。正面から直接激突する力と力。遂に、緑谷と立希が『反射』の力を越えた。

「ニッ—!!!」

激しい戦闘。息もつけぬ程の拳と蹴りと剣の攻防。間髪入れぬ、本能とプライドの激突。

「まだ—」

「—まだあ!!」

緑谷と立希は弾かれながらも、満身創痕の体で攻撃を続ける。弱ったとはいえ、返ってくる『反射』は一撃一撃が重い超パワーの衝撃だ。それでも、二人は攻撃の手を止めない。

「!!!」

「ニ—」

形勢が傾いたのは一瞬。フレクトの蹴りが二人に直撃。かろうじて残っていた反射鏡のようなサポートアイテムの反射力を乗せた衝撃に、二人は床に叩きつけられるように落下した。意識が遠のきそうになる。体中の細胞が悲鳴を上げている。それでも、二人は—

「ニ—負けられない!!」

—諦めない。

「!!」

再び立ち上がる二人に、フレクトは僅かに動揺した。

「うおおおおお!!!」

満身創痕の体に、緑谷は『100%フルカウル』を纏う。

「有象無象らしく…薙ぎ払う…!!!」

立希は纏っていた鎧を全て脱ぎ払い、紅色の服へと変貌。守りを捨て、全てを攻撃へと移す。

「オオオオオオオオ!!!」

対するフレクトも全力で向かう。腕の反射鏡のようなサポートアイテムを全て右肘に集める。緑谷と立希が渾身の力を込めた拳と剣を繰り出す。真正面から向かうフレクトの拳から何重もの『反射』が起き、二人の腕ごと破壊するように弾き飛ばす。それでも二人はかまいません、全身全霊の力を込めた。

「?!?!」

フレクトの上半身に途轍もない衝撃と斬撃が襲う。前のめりで吐血しながら吹き飛ばされ、壁に激突する。

「!!」

ハツと顔を上げるフレクトに緑谷は片足を大きく振り上げ、立希は剣を正面に掲げる。

「是こそは、わが父を滅ぼし邪剣―我が麗しき父への叛逆(クラレント・ブラッドアーサー)』アアアアアア!!!」

真名解放によって剣から赤い雷撃を放つて一直線に放たれる斬撃。

「『ユナイテッド・ステイツ・オブ・ワールドスマッシュ』ツツツ!!!」

凄まじいスピードを乗せ、力強く振り抜かれる獰猛な蹴り。

「」

この二つがフレクトに直撃する。激しく歪んだ顔のまま吹き飛ばされる。檀上に掲げられていた大きなヒューマライズのマークに激突。かろうじて形を保っていた建物が、遂に崩れ始める。その土煙の中、決した勝負に緑谷と立希は最後の力を振り絞って地下へと駆け出す。タイムリミットまで時間が無い。遠ざかる足音を聞きながら、瓦礫の中で倒れるフレクト。現実に抵抗する力ももう残っていない虚無の目で呟く…

「もう……手遅れだ……」

side 立希

「ハァー…ハァー…」

「ガフ……ゴフ……ッ」

痛む体に鞭うち、地下の制御システム室に辿り着いた。その時、危険を知らせる甲高い音が無情に鳴り響く。

「！」

自分達が見た光景。それは――

第17話

side 三人称

世界中に配置されたトリガー・ボム。遂に爆破時間の二時間を経過。しかし…

「…タイムリミットを過ぎたのに……」

「爆発しない……」

エジプト、フランス、アメリカ、シンガポール、日本、イギリス、オセオン：26個のトリガーボムは静寂を保ったままだった。この事にヒーロー達はその沈黙の意味を理解する。

「機能が停止している……」

「解除したのか!!」

ヒーロー達は笑みを浮かべる。遂に、世界がテロの恐怖から解放された。その事実を噛みしめ、司令部にいた職員たちが歓喜の雄叫びをあげる。

「(よくやってくれた…皆…)」

オールマイトは各地のヒーロー達の喜ぶ様子を笑顔で誇らしそうに眺めた。そして、オセオンにいる緑谷達に想いを馳せる。

side 立希

制御システムに辿り着いた自分と緑谷君。そこで見たものは…

「ピノ……」

ピノが、解除キーを突き刺していた。

「やった……解除……出来たんだ…!!」

「あ……ああ……」

ようやく、全てが終わった。安堵と共に一気に体が脱力する。隣にいた緑谷君も安堵でやわらかく崩れる。

「(残り…1秒切ってるって……本当にギリギリだった……)」

「Pi……」

カウントダウンの数字の前でキーにぐったりともたれていたピノが自分達に気付くと何とか体を起こし、震える羽でグッドサインを

送って来た。そして――

「よお……ヒーロー……」

「ありがとう、ロデイ……」

ロデイもだ。緑谷君は震えるロデイの指を優しく握り、そつと抱き起す。

「少し我慢して、すぐ病院に……」デク、マギ……？？」

「お、俺は……オヤジみたいに、家族を守れたんだよな……？」

震える声でそう訊いてきたロデイ。自分と緑谷君は一瞬、目が合う。そしてロデイに向けて笑顔で頷く。

「うん。」

「爆弾、止められたよな……？」

「うん。」

「デクとマギみてーに、全部取れたとな……？」

その言葉に自分達は大きく頷く。どんな思いでロデイが必死で動いてくれたのかがじんわりと染み込むように伝わって、胸がいつぱいになる。

「うん。取れた……すごいよロデイ……！」

「すごいどころじゃないよ……ロデイは家族も……世界も救ったんだよ……！」

「……へへへ、俺、カッケー……」

体中が痛んで立ち上がれないのに、胸の奥が熱くなる。やっと解けた緊張が涙腺を緩ませる。

「Piss！」

そんな自分らの前でピノが胸を張って来た。

「……プツ……ククク……」

「フ……フフフ……」

「ハハハ……ハハ……アハハハハ！」

「……アハハハハ！」

ピノの仕草に安打した自分と緑谷君が笑うと、ロデイも釣られるように笑いだす。

side ロディ

「アハハハハ！」

笑いたくて、笑った。泣きながら、笑った。父親を恨んだことも、亡くした悲しみも。犯罪に加担した後悔も、自分の夢から目をそらしたことも。

「(ああ…やつとだ…やつと…)」

全部、やつと今、受け入れられた気がした。

side 立希

それから、思想団体ヒューマライズ指導者のフレクトにより企てられた無差別テロは、私達ヒーローチームの活躍により未然に防ぐことに成功したと全世界にいつせいに報道された。フレクトはじめ、団員は勿論、密かに私達を追っていた団員だったオセオン警察の長官含め警察官たちも逮捕。そして重傷を負ったロディ、緑谷君、爆豪君、焦凍君、立希、そして私は一命を取りとめ、病院に運ばれ入院。わざわざオセオンまで来てくれたリカバリーガールに“個性”で治療してもらい、無事完治する。

「はあ…これにて、大団円…かな」

数日後、私達は帰国する為、荷物を持って空港へと向かう。

side 立希

空港。搭乗口へ向かおうとした時だ。

「Piss！」

「え、何でピノがここに!?!…って事は…!」

「よっ!」

「ロディ!? 退院は明後日じゃあ?」

聞き慣れた鳴き声が見れば、自分の顔めがけて飛んできたピノと、松葉杖をついて笑いながらロディがやって来た。これには自分と緑谷君は驚く。

「もう大丈夫だってよ」

「よかった…」

「五体満足で本当に良かったよ…」

なんとか歩けるようになった友達の様子に自分達はホッとすると姉達の方を見れば、自分達を気遣ってくれたのか、搭乗口へと向かっていた。

「あのままクタバってたら伝説になれたかもしれねーのにな」

「いやいや、なっちゃダメでしょ!？」

「縁起でもないこと言わないで」

からかうように言うロデイに自分と緑谷君は苦笑する。ロデイはイタズラが見つかった子供のようにニヤリと笑う。そして一息つき、緑谷君は真剣な顔でロデイを見る

「これからどうするの？」

「いつもの生活に戻るだけさ」

「それって…」

「勿論、どっちかじゃなく、どっちも手に入れてやる」

「Pii！」

一瞬、不安がよぎった自分だった。けどそれは杞憂だった。たぶん、簡単な事じゃない。でもそれはロデイ自身が一番わかっている。でも軽い口調のなかにしっかりとした覚悟があった。だから…

「……うん」

「…ロデイらしいね」

緑谷君と自分はロデイを尊重する。その時、空港内にアナウンスが響く。

「そろそろ行かなきゃ…」

「そうだね…短いようで、長い、オセオンでのヒーロー活動だった…」
「もう二度とオセオンに来んなよ。デクとマギといるとロクなことがねえ」

ロデイが肩をすくめ皮肉る。

「Pii………」

けど…ロデイの肩にいるピノは必死に涙を我慢していた。

「日本で勝手にヒーローしてる」

「………ロデイー！」

そんなロデイに自分達は肩を組む。3人で輪を作るように

「また、会いに来るから…」

「日本に来たら、色々観光しようね」

「……二度と来るな…」

そう言いながら、ロデイは緑谷君と自分に強く抱きしめて来る。さよならの代わりに、自分を変えてくれたヒーローに変わらない友情を込めて。

飛行機内。荷物置いて、席に座る。

「さよならは言えた？」

隣に座っている姉に訊かれる

「ううん。また会おうって言った。楽しみだね。次は夢を叶った友達
の姿を見たいね」

「気が早過ぎでしょ」

「そうかな？」

姉とそんな会話している間に、離陸する。段々とオセオン国が遠くなり、そして見えなくなる

「ふうー…さてきて、また実家(カルデア)が騒がしくなる…帰ったら
メデイカルチェックかねえ…」

「かもね…一応、オセオンの病院でロマニが軽く診察して、もうトリ
ガーの効果が無くなって「個性」が戻ったけど…精密検査は逃れら
れないかも…後は英霊達(家族)との話し合い?」

「…今は寝て、休もう…うん…」

side 三人称

飛行機が飛んでいく。友と別れたロデイはいつものバーへと向かう。

「おつちゃん。仕事無い?できれば、まっとうなヤツで」

「……店員が一人辞めやがった。手伝え」

グラスを拭いている店主はロデイをチラリとみて、そう言う。

「う〜ん…どうすっかなあ〜…」

ロデイは大きさに困ったように顔をしかめる。しかし…

「P i s s !」

髪から飛び出したピノは満面の笑顔だった。弟と妹のためだけでなく、自分を大切に想ってくれている人達の為に、自分の人生を生きていく。ロデイが見え上げた空、昨日より近い。

いつか飛べるその空は、世界中、つながっている。